

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第471集

たかぎ なかだて 高木中館遺跡・したどおり 下通遺跡発掘調査報告書

国道4号花巻東バイパス建設関連遺跡発掘調査

2006

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

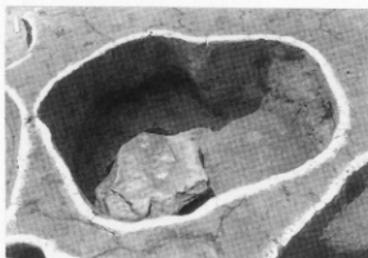
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第471集  
高木中館遺跡・下通遺跡発掘調査報告書 正誤表

頁	写真図版番号	誤	正
236	57	番号なし	174
239	60	290	240

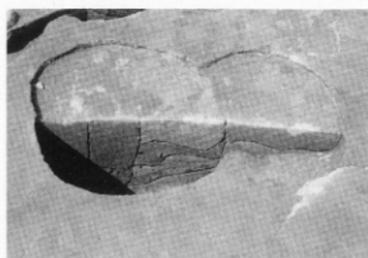
お 知 ら せ

当センター平成18年3月刊の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書代471集『高木中館遺跡・下通遺跡発掘調査報告書』の写真図版に不備がありましたので写真の差し替えをお願いします。

頁	誤	正
200	199頁と同じ写真	同封の写真と差し替え



PP73断面 (北から)



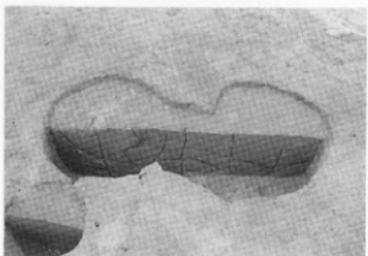
PP68 (南東から)



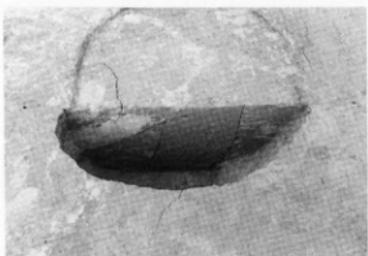
PP76~79 (南西から)



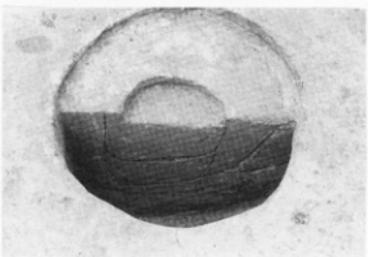
PP70 (東から)



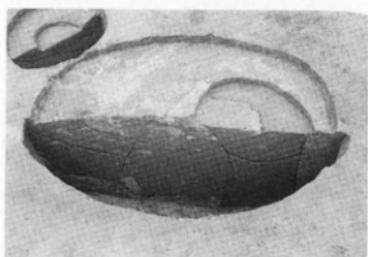
PP83・84 (南から)



PP57 (南から)



PP58 (東から)



PP61 (南東から)

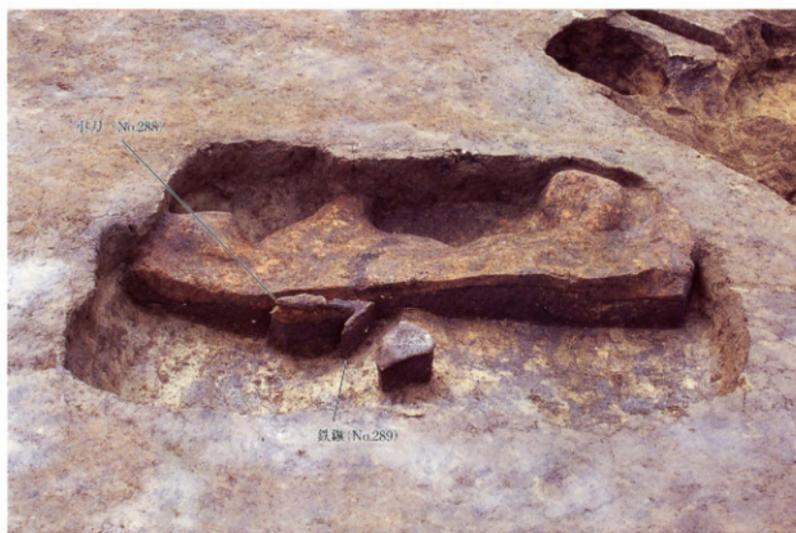
写真図版21 SB05~07掘立柱建物跡 (3)

# 高木中館遺跡・下通遺跡発掘調査報告書

国道4号花巻東バイパス建設関連遺跡発掘調査



S104 竪穴住居跡遺物出土状況



SK02 土坑焼土断面及び遺物出土状況

此図の時期は不明であるが、描かれた手法から江戸期のもつと推測される。図中下方を流れるのは北上川、上方は築ヶ石川  
その間の河原段丘および低地に河原段丘が位置する。図中には田・畑などの表記がみえる。(図左が北)



安俣高木通図 (部分) (盛岡市中央公民館蔵)

## 序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする、数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、現代社会を豊かにし快適な生活を送るための地域開発も、県民の切実な願いであります。発掘により遺構が消滅することはまことに惜しいことではありますが、反面それまで闇に包まれていた先人の営みに光明があたるのも事実であり、埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、国道4号花巻東バイパス建設工事に関して、平成15年度から16年度にかけて発掘調査をおこなった岩手県花巻市高木中館遺跡、および下通遺跡の調査結果をまとめたものであります。

調査によって、高木中館遺跡は縄文時代の狩猟域、平安時代の居住域、下通遺跡は近世の生産域であったことが明らかとなり、該期の貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に関する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書の作成にあたりご協力とご支援を賜りました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、花巻市教育委員会を始めとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成18年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 合 田 武

## 例 言

- 1 本報告書は、岩手県花巻市高木第22地割ほかに所在する高木中館遺跡と、同東十二丁目第27地割ほかに所在する下通遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 遺跡の調査は、国道4号花巻東バイパス建設工事に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団歴史文化財センターが実施した。
- 3 遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡番号、遺跡略号は次の通りである。

高木中館遺跡 …… (遺跡番号) ME36-0218、(遺跡略号) TGND-03・04  
下通遺跡 …… (遺跡番号) ME36-0225、(遺跡略号) STD-04
- 4 野外調査の期間と面積、調査担当者は以下の通りである。

(高木中館遺跡) 調査期間 平成15年8月18日～10月31日 調査面積：8,342m<sup>2</sup>  
平成16年4月13日～7月30日 調査面積：13,668m<sup>2</sup>  
調査担当者 平成15年 丸山直美・惣岩伸吾・吉田充・野中貞隆・阿部徳幸・藤原大輔  
平成16年 丸山直美・惣岩伸吾・阿部徳幸・小針大志

(下通遺跡) 調査期間 平成16年7月16日～10月1日 調査面積：11,400m<sup>2</sup>  
調査担当者 惣岩伸吾・丸山直美・阿部徳幸
- 5 室内整理期間と整理担当者は次の通りである。

(高木中館遺跡) (下通遺跡)  
整理期間 平成15年12月1日～平成16年3月31日 整理期間 平成16年11月1日～平成17年3月31日  
平成16年11月1日～平成17年3月31日 整理担当者 惣岩伸吾・丸山直美  
整理担当者：丸山直美・惣岩伸吾
- 6 報告書の執筆は、調査に至る経道を国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、そのほかを丸山直美・惣岩伸吾が担当し、文末に名前を付した。
- 7 各遺物の鑑定・分析は次の機関に委託した。

石質鑑定 …… 花崗岩研究所 (代表：矢内桂三)  
鉄製品保存処理 …… 岩手県立博物館  
AMS年代測定 …… 株式会社古環境研究所 株式会社加達器分析研究所  
土壌水洗・炭化種子抽出・炭化種子同定 …… 古代の森研究会
- 8 座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に委託した。

座標原点の測量 …… (高木中館遺跡) 慶長測量設計株式会社 (下通遺跡) 株式会社南部測量設計  
空中写真撮影 …… 東邦航空株式会社
- 9 野外調査および報告書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言をいただいた(50音順、敬称略)。

赤沼実男、伊藤博幸、稲野彰子、稲野裕介、井上雅孝、宇部潤保、小島敦子、小島朋反、高瀬克範、佐藤良和、杉本 良、柴田陽 一郎、岡 俊明、高橋千晶、高橋直樹、高橋 学、津野 仁、中嶋友文、能登 健、吉川純子
- 10 発掘調査資料は、すべて岩手県立歴史文化財センターに保管している。
- 11 調査成果は現地説明会資料ほかに表示してきたが、本書の内容が優先するものである。

# 目 次

## I 序 論

1 調査に至る経過	1
2 立地と環境	3
(1) 遺跡の位置	3
(2) 遺跡周辺の地形と地質	3
(3) 基本層序	5
(4) 周辺の遺跡	5
3 調査の方法と室内整理	7
(1) 野外調査	7
(2) 室内整理	9

## II 高木中館遺跡

1 検出した遺構と遺物	
平安時代の遺構	
(1) 竪穴住居跡	13
(2) 竪穴住居状遺構	49
(3) 土坑	50
近世の遺構	
(1) 掘立柱建物跡	73
(2) 溝跡	75
(3) カマド状遺構	87
(4) 墓坑	87
(5) 獣骨出土土坑	91

時期不明の遺構	
(1) 土坑	93
(2) 柱穴状小ピット	121
2 遺構外の出土遺物	131
3 分析・鑑定	
(1) 土壌洗浄・炭化種子同定	147
(2) AMS年代測定	154
(3) 鉄器の組成分類	157
4 考察	165

## III 下通遺跡

1 基本層序	253
2 検出された遺構と遺物	
近世以降	
(1) 畑跡	254
(2) 溝跡	256
3 遺構外の出土遺物	265
4 分析・鑑定	
(1) AMS年代測定	270
(2) 植物珪酸体分析	271
(3) 花粉分析	273
5 まとめ	279

## (高木中館遺跡)

### 表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧	3
第2表 遺物観察表(土師器・須恵器)	133
第3表 遺物観察表(石器・石製品)	141
第4表 遺物観察表(縄文土器・弥生土器)	143
第5表 遺物観察表(土製品)	144
第6表 遺物観察表(金属製品・その他)	144
第7表 遺物観察表(鉄製品)	145
第8表 遺物観察表(陶磁器)	145

### 図 版 目 次

第1図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図	
第2図 岩手県全図	1
第3図 花巻東バイパス関連遺跡位置図	2
第4図 基本土層柱状図	5
第5図 段丘崖メンテナンス①～③	6
第6図 高木中館・下通遺跡グリッド配置図	8
第7図 SI01竪穴住居跡	14
第8図 SI01竪穴住居跡出土遺物	15
第9図 SI02竪穴住居跡	16
第10図 SI02竪穴住居跡出土遺物	18
第11図 SI03竪穴住居跡(1)	20
第12図 SI03竪穴住居跡(2)	
出土遺物(1)	21
第13図 SI03竪穴住居跡出土遺物(2)	22
第14図 SI04竪穴住居跡(1)	24
第15図 SI04竪穴住居跡(2)	
出土遺物(1)	25
第16図 SI04竪穴住居跡出土遺物(2)	26
第17図 SI04竪穴住居跡出土遺物(3)	27
第18図 SI04竪穴住居跡出土遺物(4)	28
第19図 SI04竪穴住居跡出土遺物(5)	29
第20図 SI04竪穴住居跡出土遺物(6)	30
第21図 SI04竪穴住居跡出土遺物(7)	31
第22図 SI04竪穴住居跡出土遺物(8)	32
第23図 SI05竪穴住居跡	33
第24図 SI05竪穴住居跡出土遺物	34
第25図 SI06竪穴住居跡	35
第26図 SI06竪穴住居跡出土遺物	
SI07竪穴住居跡	36
第27図 SI08竪穴住居跡	38
第28図 SI08竪穴住居跡出土遺物(1)	39
第29図 SI08竪穴住居跡出土遺物(2)	40

第30回	SI09竪穴住居跡	42	第60回	SD09溝跡(2)	82
第31回	SI09竪穴住居跡出土遺物(1)	43	第61回	SD10溝跡	84
第32回	SI09竪穴住居跡出土遺物(2)	44	第62回	SD11溝跡	85
	SI10竪穴住居跡出土遺物	44	第63回	SD12溝跡	86
第33回	SI10竪穴住居跡	45	第64回	SX02カマド状遺構	88
第34回	SX01竪穴住居状遺構	46	第65回	SZ01・02竪坑	89
第35回	SX01竪穴住居状遺構出土遺物	48	第66回	SX03・04獸骨出土土坑	90
第36回	SK01土坑	50	第67回	SK03~05土坑	92
第37回	SK01土坑出土遺物(1)	51	第68回	SK06~12土坑	94
第38回	SK01土坑出土遺物(2)	52	第69回	SK13~16土坑	96
第39回	SK01土坑出土遺物(3)	53	第70回	SK17~20土坑	98
第40回	SK02土坑	54	第71回	SK21~23土坑	100
第41回	SK02土坑出土遺物	55	第72回	SK24~27土坑	102
第42回	SB01掘立柱建物跡(1)	56	第73回	SK28~31土坑	104
第43回	SB01掘立柱建物跡(2)	57	第74回	SK32~35土坑	106
第44回	SB02掘立柱建物跡(1)	58	第75回	SK36~40土坑	108
第45回	SB02掘立柱建物跡(2)	59	第76回	SK41~42土坑	110
第46回	SB03掘立柱建物跡(1)	60	第77回	SK43~44土坑	112
第47回	SB03掘立柱建物跡(2)	61	第78回	SK45~47土坑	114
第48回	SB04掘立柱建物跡	63	第79回	SK48~50土坑	116
第49回	SB05~07掘立柱建物跡(1)	64	第80回	SK51~54土坑	118
第50回	SB05~07掘立柱建物跡(2)	65	第81回	SK55~57土坑	120
第51回	SB05~07掘立柱建物跡(3)	66	第82回	II C区A柱穴状小ピット群	122
第52回	SB05~07掘立柱建物跡(4)	67	第83回	II C区B・III C区柱穴状小ピット群	123
第53回	SB05掘立柱建物跡	69	第84回	その他の遺構内出土遺物	124
第54回	SB06掘立柱建物跡	70	第85回	遺構外出土遺物(1)	125
第55回	SB07掘立柱建物跡	71	第86回	遺構外出土遺物(2)	126
第56回	SD01溝跡	76	第87回	遺構外出土遺物(3)	127
第57回	SD02・03溝跡	78	第88回	遺構外出土遺物(4)	128
第58回	SD04~07溝跡	80	第89回	遺構外出土遺物(5)	129
第59回	SD08・09溝跡(1)	81	第90回	遺構外出土遺物(6)	130

## 写真図版目次

写真図版1	遺跡遠景・調査区全景	180	写真図版23	SD02~06溝跡	202
写真図版2	調査前風景・基本土層	181	写真図版24	SD01~07溝跡	203
写真図版3	SI01竪穴住居跡	182	写真図版25	SD08~09溝跡	204
写真図版4	SI02竪穴住居跡	183	写真図版26	SD10~11溝跡	205
写真図版5	SI03竪穴住居跡	184	写真図版27	SD12溝跡・SX02カマド状遺構	206
写真図版6	SI04竪穴住居跡	185	写真図版28	SZ01~02竪坑	
写真図版7	SI05竪穴住居跡	186		SX03・04獸骨出土土坑	207
写真図版8	SI06竪穴住居跡	187	写真図版29	SK03~06土坑	208
写真図版9	SI07・08竪穴住居跡	188	写真図版30	SK07~10土坑	209
写真図版10	SI09竪穴住居跡	189	写真図版31	SK11~14土坑	210
写真図版11	SI10竪穴住居跡	190	写真図版32	SK15~18土坑	211
写真図版12	SX01竪穴住居状遺構(1)	191	写真図版33	SK19~22土坑	212
写真図版13	SX01竪穴住居状遺構(2)	192	写真図版34	SK23~26土坑	213
写真図版14	SK01~02土坑	193	写真図版35	SK27~30土坑	214
写真図版15	SB01掘立柱建物跡	194	写真図版36	SK31~34土坑	215
写真図版16	SB02掘立柱建物跡	195	写真図版37	SK35~38土坑	216
写真図版17	SB03掘立柱建物跡	196	写真図版38	SK39~42土坑	217
写真図版18	SB04掘立柱建物跡(1)	197	写真図版39	SK43~46土坑	218
写真図版19	SB05~07掘立柱建物跡(1)	198	写真図版40	SK47~50土坑	219
写真図版20	SB05~07掘立柱建物跡(2)	199	写真図版41	SK51~54土坑	220
写真図版21	SB05~07掘立柱建物跡(3)	200	写真図版42	SK55~57土坑	221
写真図版22	SD01~03溝跡	201	写真図版43	II C区柱穴状小ピット群	

	段丘崖セクション・現地説明会	222
写真図版44	SI01竪穴住居跡出土遺物	223
写真図版45	SI02竪穴住居跡出土遺物	
	SI03竪穴住居跡出土遺物(1)	224
写真図版46	SI03竪穴住居跡出土遺物(2)	225
写真図版47	SI03竪穴住居跡出土遺物	
	SI04竪穴住居跡出土遺物(1)	226
写真図版48	SI04竪穴住居跡出土遺物(2)	227
写真図版49	SI04竪穴住居跡出土遺物(3)	228
写真図版50	SI04竪穴住居跡出土遺物(4)	229
写真図版51	SI04竪穴住居跡出土遺物(5)	230
写真図版52	SI04竪穴住居跡出土遺物(6)	231
写真図版53	SI04竪穴住居跡出土遺物(7)	232
写真図版54	SI04竪穴住居跡出土遺物(8)	233
写真図版55	SI04・05竪穴住居跡出土遺物	234
写真図版56	SI05・06竪穴住居跡出土遺物	235
写真図版57	SI08竪穴住居跡出土遺物	236
写真図版58	SI08・09竪穴住居跡出土遺物	237

写真図版59	SI09～10竪穴住居跡	
	SX01竪穴住居跡状遺構出土遺物	238
写真図版60	SX01竪穴住居跡状遺構	
	SK01土坑出土遺物(1)	239
写真図版61	SK01土坑出土遺物(2)	240
写真図版62	SK02土坑出土遺物	241
写真図版63	SB05掘立柱建物跡	
	SZ01～02竊坑	
	SK27～30土坑出土遺物	242
写真図版64	SK31～38土坑・PP20柱穴状小ピット	
	川土遺物遺構外出土遺物(1)	243
写真図版65	遺構外出土遺物(2)	244
写真図版66	遺構外出土遺物(3)	245
写真図版67	遺構外出土遺物(4)	246
写真図版68	遺構外出土遺物(5)	247
写真図版69	遺構外出土遺物(6)	248
写真図版70	遺構外出土遺物(7)	249
写真図版71	遺構外出土遺物(8)	250

## (下通遺跡) 表 目 次

第1表	畑跡計測値一覧	260
第2表	遺構内遺物観察表(鉄製品・陶磁器)	269
第3表	遺構外遺物観察表(土器・石器・陶磁器・鉄製品他)	269

## 図 版 目 次

第1図	基本土層柱状図	253
第2図	C区第1～3検出面検出遺構(SX01～04・09)	258
第3図	A・B区第4検出面検出遺構	259
第4図	C区第4検出面検出遺構	260
第5図	畑計測部位模式図	260
第6図	C区第1～3検出面検出遺構	261
第7図	A～C区第4検出面検出遺構(SX05～08)	262
第8図	C区西側メインセクション	263
第9図	C区中央部メインセクション	264
第10図	SD01～02溝跡	265
第11図	遺構内・遺構外出土遺物	266
第12図	遺構配置図	267

## 写真図版目次

写真図版1	基本土層・トレンチ掘削状況	282
写真図版2	SX01～03畑跡(C区第1検出面)	283
写真図版3	SX04・09・05畑跡(第2～4検出面)	284
写真図版4	SX07・08・06畑跡(第4検出面)	285
写真図版5	SX06・10畑跡(第4検出面)	286
写真図版6	SX04・06畑跡、サンプリング風景	287
写真図版7	SD01～02溝跡	288
写真図版8	遺構内出土遺物・遺構外出土遺物1	289
写真図版9	遺構外出土遺物2	290



1:50,000 花巻

第1図 遺跡位置図及び周辺道路分布図

# I 序 論

## 1 調査に至る経過

「高木中館遺跡」・「下通遺跡」は、花巻東バイパス改築工事の施行に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。一般国道4号は、東京都中央区を起点として青森県青森市に至る延長約858mのわが国最長の国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。花巻東バイパスは、花巻市山の神と同市西宮野目の間約8.3km（インター取付500m含む）の区間で計画されている。現国道はほぼ市街地の中心を南北に縦貫し全幅員10～12mと狭く、近年の自動車交通の増大と車両の大型化により、交通混雑、沿道環境悪化が顕著になってきている。このため市内を通過する国道4号の交通混雑解消と東北自動車道、東北新幹線新花巻駅への交通アクセス機能を高めるため、昭和62年度に事業着手し、平成元年度に用地着手、平成4年度に工事着手し平成14年度に国道283号から終点側約4.2km（インター取付500m含む）を暫定供用している。平成14年度からは、起点から国道283号の間約4.1kmについて工事着手した。この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が平成12年度に分布調査を実施し、「高木中館遺跡」が確認された。「高木中館遺跡」については平成15年度に試掘調査を実施し、その結果に基づいて岩手県教育委員会は岩手県河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。これにより、平成15年8月18日付けで岩手河川国道事務所長と、岩手県文化振興事業団理事長と受託契約を締結し、「高木中館遺跡」の発掘調査に着手した。その結果、上層部の遺跡精査および下層部の確認がなされ、加えて「下通遺跡」の所在も確認された。

高木中館遺跡の下層部調査および本調査未了範囲については、平成16年4月1日付けで再度受託契約を締結した。また「下通遺跡」については平成16年度に試掘調査を実施し、同様に発掘調査を同センターの受託事業とすることとした。これにより平成16年7月16日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長と受託契約を締結し、両遺跡の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第2図 岩手県全図



## 2 立地と環境

### (1) 遺跡の位置

高木中館遺跡は、岩手県花巻市高木第22地割ほかに所在し、東日本旅客鉄道東北本線花巻駅の南東方4kmの地点、北上川左（東）岸の河岸段丘縁辺部付近に立地する。標高は72m前後で、遺跡の西方約90mを南流する北上川との比高は約10mである。一方、下通遺跡は高木中館遺跡の立地する段丘岸の西方に接続する沖積平野の微高地上に立地する。標高は67m前後で、北上川との比高は約4.5mである。両遺跡は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「十沢」(NJ-54-13-16-2)、5万分の1地形図「花巻」(NJ-54-13-16)の図幅に含まれ、その地点は北緯39度22分58秒、東経141度8分15秒付近（高木中館遺跡）、北緯39度22分36秒、東経141度8分22秒付近（下通遺跡）である。

### (2) 遺跡周辺の地形と地質

花巻市は、岩手県の南半部中央に位置し、北は石鳥谷町、東は東和町、南は北上市、西は雫石町・沢内村に接する。北上川は主流部の全長249km、流域面積10,250km<sup>2</sup>、支流数216を有する東北地方最大の大河で、西側に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山地の間の低地帯を滋養し、宮城県石巻湾に注いでいる。この流域は盛岡市北部の四十四田溪谷と一関市狐塚寺溪谷を境にして上・中・下流に分けられており、花巻市は中流域にあたっている。中流域の地形は東側と西側で対照的な様相を呈しており、北上川西岸地域では急峻で起伏の大きな奥羽山脈が位置し、グリーンタフ、安山岩、頁岩、砂岩などから構成されている。奥羽山脈の東麓には扇状地が発達し、西方山地から発する豊沢川、瀬川などの河川は砂礫の堆積をもたらし、扇状地性の台地（段丘）を形成している。これら小規模な台地および河川沿いには沖積低地が分布する。

一方、北上川東岸地域は古生層などを基岩とする北上山地の西側地域にあたり、山地・丘陵地が複雑に入り組む様相を呈する。

第1表 周辺の遺跡一覧

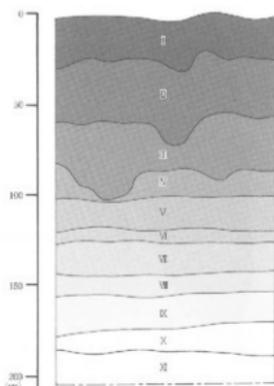
No	遺跡名	種別	時代
1	大西Ⅱ	散布地	縄文
2	磐船場	渡し場跡	近世
3	中村	散布地	縄文
4	馬場田Ⅱ	散布地	縄文
5	馬場田	散布地	縄文
6	細野	集落跡	縄文
7	大西橋Ⅱ	散布地	縄文
8	大西橋	散布地	縄文
9	宿館（八重畑館）	城館跡	中世
10	宿	集落跡	縄文・古代
11	絶無組（ジャのめり）	散布地	平安
12	高瀬Ⅱ	散布地	縄文
13	安棟里Ⅱ	散布地	縄文
14	安棟里Ⅰ	散布地	縄文・古代
15	光勝寺礎礎	寺院跡	中世
16	長沢Ⅰ	散布地	縄文
17	方八丁	城館跡	古代
18	上ノ山館	城館跡・散布地	縄文・古代～中世
19	上ノ山	散布地	縄文・古代
20	山の神	散布地	縄文
21	源明Ⅰ	散布地	平安
22	苧	散布地	縄文・古代
23	源明Ⅱ	散布地	古代
24	馬立Ⅰ	散布地	古代
25	馬立Ⅱ	散布地	古代
26	磐船城	散布地・城館跡	近世
27	田力中野	散布地	縄文・古代
28	摩理	集落跡	縄文・古代
29	添市古墳群	古墳群	古墳
30	添市館	城館跡	中世
31	東野袋	散布地	古代
32	矢沢古堂	集落跡	古代
33	上野々	散布地	縄文
34	跡ヶ森	城館跡	中世
35	下福	集落跡	縄文・古代
36	下福	集落跡	古代
37	熊沢Ⅰ	散布地	古代
38	樽ノ目	城館跡	中世
39	熊沢Ⅱ	集落跡	縄文
40	津沢	包蔵地	古代
41	下二層	包蔵地	弥生
42	鹿子	包蔵地	縄文
43	新原	包蔵地	縄文・古代
44	西宮野目	集落跡	縄文
45	先足	散布地・建物跡	縄文・近世
46	西中	集落跡	縄文・古代・近世
47	三梧	散布地	古代
48	石持Ⅱ	散布地	古代
49	石持Ⅰ	散布地	古代
50	我生	集落跡	古代
51	矢沢館Ⅰ	城館跡	中世

No	遺跡名	種別	時代
52	矢沢八幡(古跡・夫沢跡)	集落跡・城跡跡	古代・近世
53	小松原	散布地	古代
54	天下田Ⅰ	城跡跡	中世
55	天下田Ⅱ	城跡跡	縄文
56	小畑	包蔵地	中世・縄文
57	小畑Ⅰ	集落跡・城跡跡	縄文・中世
58	小畑Ⅱ	集落跡	縄文
59	沢田	集落跡	縄文・弥生
60	飯内	集落跡	古代・縄文
61	下西	散布地	古代
62	下原	散布地	古代
63	下原内	散布地	古代
64	上原内	集落跡・包蔵地	古代
65	久沢館Ⅱ	城跡跡	中世
66	藤塚森	塚	古代
67	寺跡	集落跡	古代
68	高松寺跡	塚寺跡	中世
69	瀬ノ木Ⅱ	散布地	縄文
70	瀬ノ木Ⅲ	散布地	縄文・古代
71	河原土山館	城跡跡・集落跡	古代・中世
72	瀬ノ木Ⅱ	散布地	縄文・古代
73	瀬ノ木Ⅳ	包蔵地	縄文・古代
74	十八・城跡	城跡跡	中世～近世
75	八幡寺跡	塚寺跡	古代
76	花巻城(奥平ヶ崎城)	城跡跡	中～近世
77	下小路Ⅱ	包蔵地	古代
78	下小路Ⅰ	包蔵地	古代
79	塚袋Ⅱ	集落跡	古代
80	高松Ⅰ	散布地	縄文
81	高松Ⅱ	集落跡	縄文・弥生・古代
82	高松Ⅲ	集落跡	縄文・弥生
83	明ヶ沢	散布地	縄文
84	高松山塚	塚塚・塚寺跡	平安・近世・古代・中世
85	洞森	塚	不明
86	南力丁日蓮	散布地	古代
87	石神	集落跡	縄文・古代
88	藤沢	散布地	縄文・古代
89	菅前堂	散布地	縄文
90	上台Ⅰ	散布地	縄文・古代
91	上台Ⅱ	散布地	縄文
92	サノノ神	散布地	縄文
93	上台Ⅲ	散布地	縄文・古代
94	高木四神社	塚塚	不明
95	高木古館	城跡跡	中世～近世
96	塚袋Ⅰ	散布地	縄文・古代
97	久田野Ⅰ	集落跡	縄文
98	久田野Ⅱ	集落跡	縄文
99	安野Ⅰ	集落跡	縄文
100	安野Ⅱ	集落跡	弥生
101	安野Ⅲ	散布地	縄文・古代
102	中野Ⅱ	散布地	縄文
103	中野Ⅰ・塚塚	一塚塚	近世
104	中野C	集落跡	縄文・古代
105	中野D	散布地	縄文～古代
106	中野A	散布地	縄文・古代
107	拾田原	包蔵地	縄文
108	下館	城跡跡・集落跡	古代・中世
109	上原ⅡⅠ	集落跡	古代・縄文
110	上原ⅡⅡ	散布地	縄文・古代
111	不動Ⅰ	集落跡	縄文・古代
112	不動Ⅱ	集落跡・城跡跡	古代・縄文・中世
113	坂町Ⅱ	集落跡	縄文・古代
114	坂町Ⅰ	集落跡	縄文・古代
115	坂町築跡	築跡	近世
116	坂町Ⅱ	集落跡	縄文・古代
117	権津水神社	集落跡	縄文
118	上館	城跡跡	中～近世
119	外台川原	散布地	古代
120	長根Ⅱ	散布地	古代
121	長根Ⅲ	散布地	古代
122	長根Ⅰ	散布地	古代
123	下通	散布地(耕地)	古代
124	小袋	集落跡	古代
125	中道	集落跡・包蔵地	縄文・古代
126	荒原ⅡⅡ	包蔵地	古代
127	荒原ⅡⅠ	集落跡	古代
128	大沢Ⅱ	散布地	縄文・古代
129	大沢Ⅰ	集落跡	古代
130	長根坂	散布地	縄文
131	中	散布地	古代
132	明戸Ⅰ	集落跡	縄文
133	平直水館	城跡跡?	
134	明戸Ⅱ	集落跡	縄文・古代
135	明戸Ⅲ	散布地	縄文・古代
136	明戸Ⅳ	散布地	縄文・古代
137	大谷地Ⅲ	集落跡	縄文・古代
138	諏訪Ⅰ	散布地	縄文
139	実徳寺Ⅰ	包蔵地	縄文・古代
140	諏訪Ⅱ	集落跡	縄文・古代
141	実徳寺Ⅱ	包蔵地	縄文
142	大谷地Ⅱ	包蔵地	古代
143	富士大学グラウンド	包蔵地	縄文
144	山ノ神Ⅱ	散布地	縄文
145	山ノ神Ⅰ	散布地	縄文
146	宿内	散布地	縄文・旧石器
147	十二丁目中村	散布地	古代
148	沖Ⅰ	散布地	古代
149	沖Ⅱ	集落跡	古代
150	小中野	包蔵地	縄文
151	十二丁日城跡	城跡跡	縄文・中世
152	成田Ⅱ	包蔵地	古代
153	成田Ⅰ	散布地	古代
154	穂積田	集落跡	古代
155	兼勝館	城跡跡	中世
156	大木	包蔵地	縄文・古代
157	長志田	散布地	縄文
158	北成島下西Ⅰ	散布地	縄文?平安
159	北成島下西Ⅱ	散布地	縄文?平安
160	吉沢Ⅰ	散布地	縄文?
161	臥牛	散布地	縄文
162	臥馬館(横間館)	城跡跡	中世
163	長根	散布地	縄文
164	横欠	散布地	縄文
165	横戸ⅢⅢ	散布地	平安
166	横戸ⅢⅡ	散布地	縄文
167	横戸ⅢⅠ	散布地	縄文
168	飯盛	散布地	縄文
169	向	散布地	縄文
170	月館	散布地	平安
171	下成田	散布地	平安
172	成田	散布地	古代
173	八尋館	散布地	古代
174	二子城	城跡跡	中世
175	魁ノ内	散布地	平安
176	中宿	散布地	縄文
177	大竹佛寺	寺院跡	平安
178	飯山	散布地	中世
179	高雄	集落跡	縄文
180	坊主	散布地	縄文
181	外山(そでやま)	散布地	縄文
182	竊木中館	集落跡	縄文・古代

### (3) 基本層序

調査区内の標高は72m前後で、ほぼ平坦である。調査区西側には近年の土地改変が加えられており、一部遺構検出面が残存していない。また、調査区全域で民家解体時に伴うと見られる乱乱跡が多数認められる。調査区域内では以下のような層序が観察された。なお、SI01堅穴住居跡の埋土中で十和II a降下火山灰（肉眼観察による）の堆積を確認している。

- I 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR8/8 黄橙粘土ブロックの混合土 粘性中・しまり中
- II 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中・しまり中
- III 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中・しまり中
- IV 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中
- V 10YR4/3 鈍い黄褐シルト 粘性・しまり共にやや強
- VI 10YR5/3 鈍い黄褐粘土質シルト 粘性・しまり共にやや強
- VII 10YR3/4 暗褐粘土質シルト 粘性・しまり共に強
- VIII 10YR4/4 暗褐砂質シルト 粘性中・しまりやや弱
- IX 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性中・しまりやや弱  
(層層より粒度細かい)
- X 10YR5/4 鈍い黄褐色粘土 粘性強・しまり弱
- XI 10YR5/6 黄褐色砂 粘性・しまり共に弱
- XII 10YR5/6 黄褐色礫層 粘性・しまり共に弱



第4図 基本土層柱状図

### (4) 周辺の遺跡

花巻市には古い時代から人々の生活の痕跡が残っており、岩手県教育委員会生涯学習文化課遺跡台帳によると計310箇所の遺跡が登録されている。このうち図版内に載る遺跡は142遺跡である。時代別では縄文177、弥生7、古墳3、古代（奈良・平安）169、中世37、その他25である（なお、複合遺跡は別個として捉えた）。

以下では時代ごとにこれまで調査が行われた遺跡を中心に概観する。

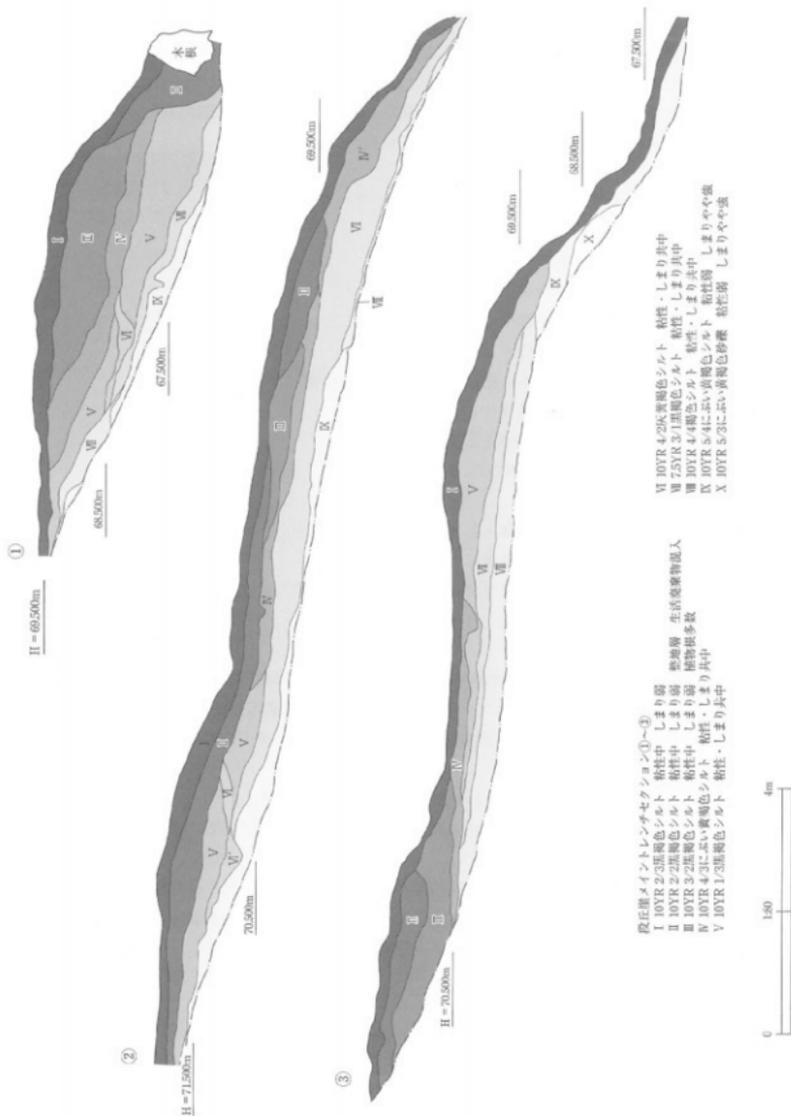
<旧石器時代> 旧石器時代の遺跡は宿内遺跡（146）のみ確認されている。宿内遺跡からは縄文時代の陥し穴から縦長剥片が出土している。

<縄文時代> 縄文時代の遺跡は177箇所が確認された。山の神遺跡（20）は縄文前期末～中期初頭の集落区域外の廃棄物遺跡であることが確認されている。また、晩期の集落跡としては石器製作段階に生じる小型の剥片や石器の未製品が出土した本館Ⅱ遺跡（58）が知られる。

<弥生時代> 弥生時代の遺跡は7遺跡が確認されている。高松Ⅱ遺跡（81）からは中期の土器片が出土している。

<古墳時代> 古墳時代の遺跡としては3遺跡が確認された。添市古墳群（29）は山林・原野の一部に墳丘と思われる遺構の存在が確認されている。また、図版外ではあるが高木中館遺跡より西方5 km地点に位置する熊堂古墳からは、河原石積み構造を有する石室部が発見されている。

<古代> 古代の遺跡は165遺跡が確認された。北上川西岸、宮野目地区に位置する車庫遺跡（28）では、全国的にも珍しい水鳥を線刻した土師器の置きカマドが出土している。狼沢Ⅱ遺跡（39）では



第5図 段丘崖マイントレンチ①～③

東側壁南寄りにカマドを持つ大形竪穴住居跡が2棟確認された。また、石持I遺跡(49)からは平安時代の竪穴住居跡20棟が確認され、9世紀後半から10世紀初頭にかけたの集落跡であることが明らかとなった。

<中世> 37遺跡が確認された。花巻城跡(76)では、屋敷が13世紀～19世紀まで連続して利用されていたことが確認された。

<近世> 14遺跡が確認されている。柏葉城(26)や、中野一里塚(103)などがある。中野一里塚は花巻城下を起点とし、幕末の古絵図にその存在が明記されている。明治時代になって釜石街道と称されるようになった公道であり、現在は市の史跡に指定されている。

(窓岩伸吾)

### 3 調査の方法と室内整理

#### (1) 野外調査

##### ① グリッドの設定

グリッドの設定は、河遺跡共通のものとし、世界測地系に合わせそれぞれ基準点1、基準点2を設定し、これらの点を通るような形で西から東に100m間隔でA～Dとアルファベットの英文字を、北から南にI～VIIと昇順するローマ数字をあてて区画した。小グリッドは大グリッドを4×4mの間隔で細分し、西から東にa～yの小文字アルファベットを、北から南に向かって1～25の算用数字をあてて区画した。グリッドの基点は北西隅に置き、調査区の名称は大グリッドと小グリッドの組み合わせでⅡB11x、ⅢC1mというように呼称している。

基準点、補点の座標値は次页第6図に示した。

##### ② 粗掘・遺構検出

調査は雑物の除去後に表土の厚さや遺構の有無、遺物の上出状況を確認する目的で、調査区全体に人力による試掘トレンチをいれ、その後第Ⅱ層まで重機を使用して表土除去を行った。次に試掘結果に基づき、人手によって遺構の有無を確認しながら地山まで掘り下げた。

##### ③ 遺構の命名

検出された遺構は、検出順、種別ごとにSI01竪穴住居跡、SB02掘立柱建物跡というように命名した。基本土層の層位はローマ数字、遺構埋土の上層は算用数字で表した。

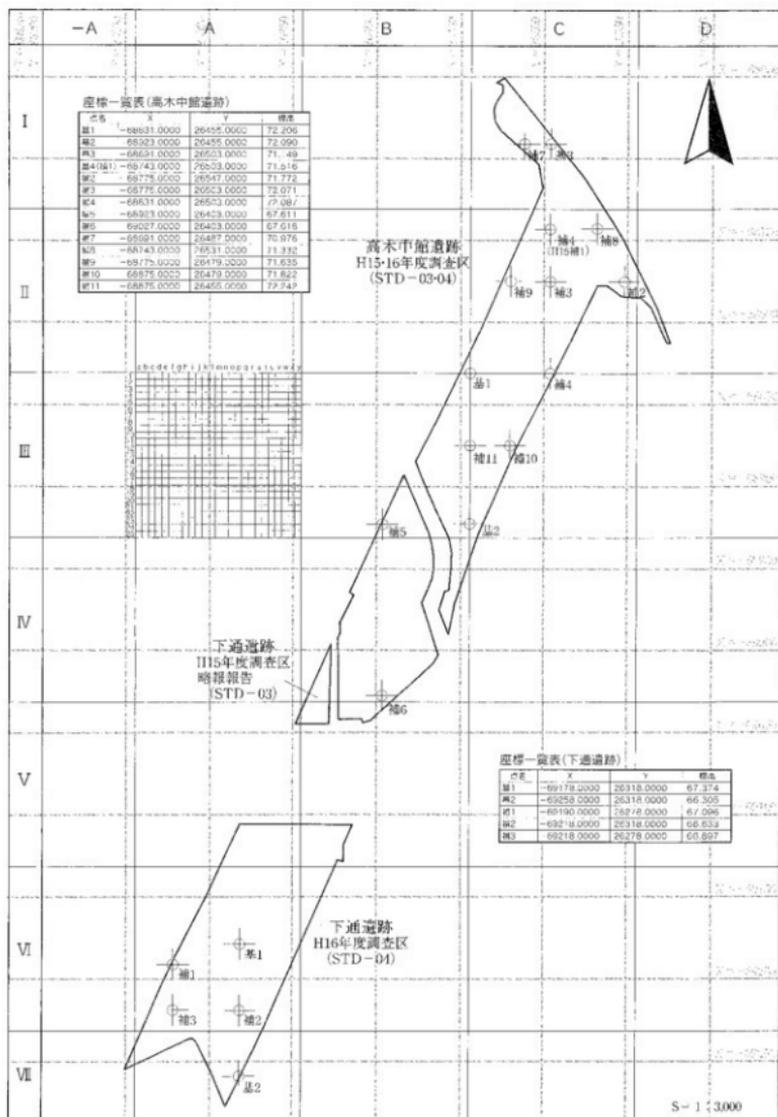
遺構の精査は4分法を原則として十層を観察しながら進めたが、必要に応じて他の方法も併用した。精査の各段階において必要図面の作成や写真の撮影も適宜行っている。

遺物の取り上げにあたっては遺構内では埋土上位・中位・下位・床面等で取り上げ、遺構外遺物についてはグリッド名と基本層序で取り上げた。

##### ④ 実測・写真撮影

各遺構とも平面実測はグリッド軸に合わせた1mのメッシュを基準として、断面実測では水平水糸を張り、これを基準として行った。原則として1/20の縮尺を用い、必要に応じて1/10、1/40、1/50で作成した。

野外調査における写真撮影は、35mm判2台(モノクローム・カラーリバーサル各1台ずつ)と6×9cm版モノクローム1台を使用し、遺構・遺物の検出状況や出土状況を中心に撮影した。この他デジタルカメラ1台をメモ的に使用している。



(座標値は世界測地系による)

第6図 高木中館遺跡・下通遺跡グリッド配置図

## (2) 室内整理

図面の点検・合成・遺物の洗浄・写真の整理は原則として野外調査と併行して行った。

### ① 遺物の処理

遺物は水洗後に、全出土遺物を点検し、実測や拓本の必要なものを選択した後、遺構内外にわけて登録し、註記、接合、復元の順に進めた。その後、実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。

### ② 遺構図面

遺構図面は平面図・断面図の照合、土層註記、レベル等の確認後に第二原図を作成し、その後、トレース・遺構図版組みの順に作業を進めた。

### ③ 遺構図の用例は下記の通りである

(ア) 遺構実測図の縮尺は基本的に堅穴住居跡・堅穴住居状遺構1/60、掘立柱建物跡1/80、1/100、1/120、土坑・墓坑1/20、1/40、溝跡1/40、1/120、1/300、獣骨出土土坑・カマド状遺構1/25である。ただし遺構規模の関係上これに合わない図面もあるため、その都度スケールおよび縮尺を付した。

(イ) 推定線は原則として破線で表記した。これに沿わない場合は添図中に示した。

(ウ) 土器の観察にあたっては、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。

(エ) 図面中の土器は「P」、礫は「S」の略号で表記した。

(オ) 挿入図中で使用したスクリーントーンの用例は下図の通りである。それ以外のものについてはその都度挿入図中に記した。

### ④ 遺物実測図の用例は下記の通りである。

(ア) 縮尺は土器・礫石器が1/3（大形の土器1/4、1/6）、古銭が1/1、その他が1/2である。なお、同一図版上に異なる縮尺の遺物が混在する場合は、その都度スケールおよび縮尺を付した。

(イ) 土器の実測にあたり、L線部が1/5以上残存する場合は努めて図上復元を試みた。

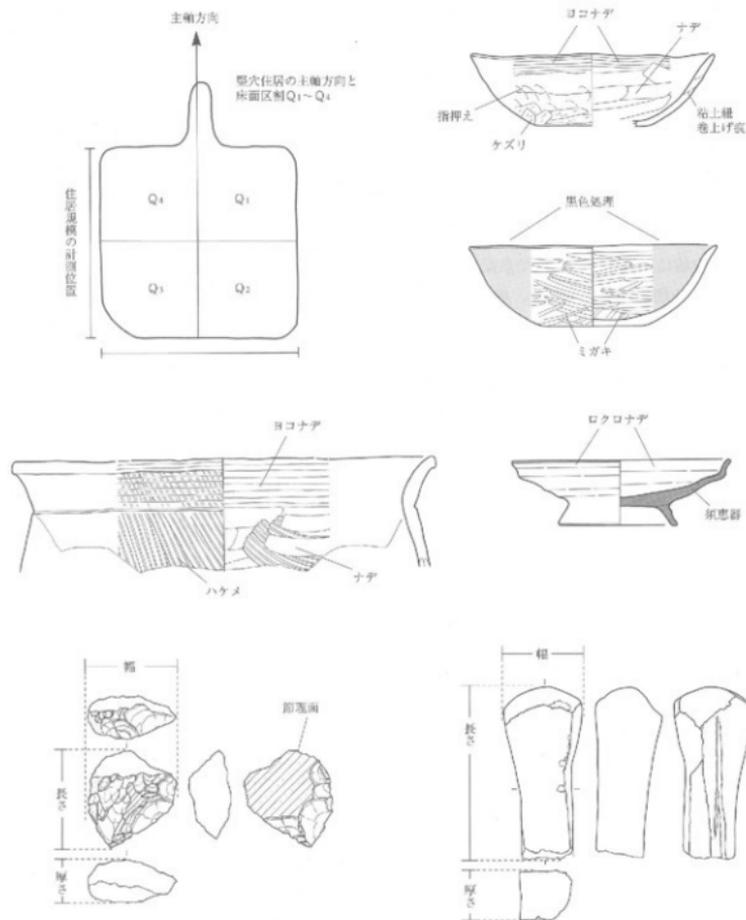
(ウ) 本文および遺物観察表の数値に冠した（ ）は推定値を、－は残存値を示している。

(エ) 国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。

### ⑥ 引用・参考文献は各章末に記した。

## 参考文献

- 岩手県花巻市教育委員会 1992 『花巻遺跡群～平成3年度発掘調査概報』  
 岩手県花巻市教育委員会 2001 『南遺跡平成7年度発掘調査報告書』  
 岩手県花巻市教育委員会 2003 『平成14年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1978 『花巻市山の神遺跡(昭和52年度)』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第3集  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『麻理遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第309集  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『猿沢Ⅱ・高松寺・上板遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第319集  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 『石狩Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第341集  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2005 『上台Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第459集



図版凡例

# 高木中館遺跡



## Ⅱ 高木中館遺跡

### 1 検出した遺構と遺物

2ヶ年の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡10棟、竪穴住居状遺構1棟、土坑2基（以上、平安時代）、掘立柱建物跡7棟、溝跡12基、カマド状遺構1基、墓坑2基、獣骨出土土坑1基（以上、近世以降）、土坑55基、柱穴状小ピット54個、柱穴列2列（以上、時期不明）である。

#### 平安時代の遺構

##### (1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区全域から10棟を検出した。北半部で3棟、南半部で7棟が確認され段丘の縁辺部付近では分布が密になる傾向が認められる。うち北側に位置する1棟においてのみ、埋土中位に十和田a降下火山灰の帯状二次堆積が認められた。これらはテフラの堆積状況、遺物の様相などにより平安時代の遺構と推測される。

##### S101竪穴住居跡

###### 遺構（第7図、写真図版3）

[位置・重複関係] 調査区北東部ⅡC4 r グリッドに位置している。検出面はⅢ層で、焼土ブロックを含む黒褐色のプランとして確認した。北端部隅は擾乱を受け一部が消失している。北半部でSB01掘立柱建物跡と重複し、これにより切られる。

[規模・平面形] 北東辺(406)cm、北西辺(312)cm、南西辺416cm、南東辺335cmの隅丸長方形を呈する。北東辺と北西辺は推定値である。

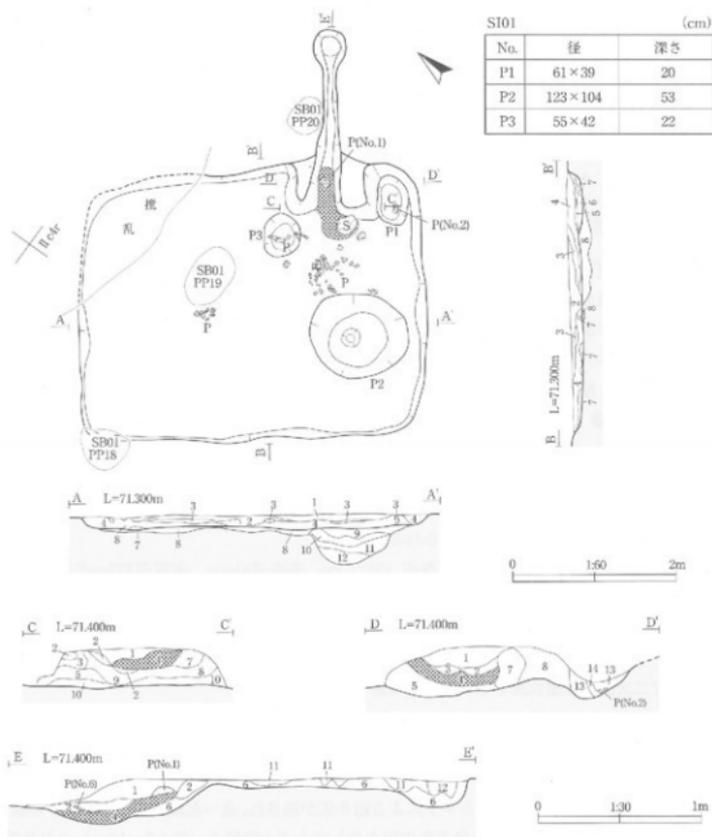
[埋土] 8層に細分され、黒褐色シルト主体で構成される。上位に橙色焼上の小ブロックと炭化物を少量含む。第3層に鈍い黄褐色を呈する十和田a降下火山灰が不連続な帯状に堆積する。堆積状況から判断して二次的な堆積状況を示すものと判断される。

[壁] 壁高の残存値は北西から南東側14cm、北東側18cm、南西側8cmである。いずれも外傾しながら立ち上がるが、上部構造は不明である。南西壁の立ち上がりはやや不明瞭である。

[床面] Ⅲ層中に形成されている。ほぼ平坦で締まりは特に認められない。南西を除くほぼ全域に明黄褐色ブロックを微量含む黒褐色シルトによる貼り床が施され、北～北東側では特に厚く形成される。またカマド前方(Q1)の十和田a降下火山灰を介して上下の堆積土(床上3～10cm)より比較的多くの遺物が出土している。

[カマド] 北東壁の南東寄り1/4のところに構築される。カマド本体は黒褐色～明褐色シルト主体で構築され、右袖には23×25cmの垂角礫が芯材として用いられる。火床面は58×68cmの楕円形で、明赤褐色焼土が11cmにわたって形成されている。燃焼部中央には上師器環(1)が倒立した状態で検出された。状況から判断して支脚として転用されたものとみられる。煙道部は残存部で幅30cm、長さ150cmの溝状を呈し、煙出し部へ向かいほぼ平坦な角度をもって延びる。煙出し部は径40cm前後の土坑状に掘り込まれ、確認面からの深さは16cmを測る。上部構造については、削平により不明である。

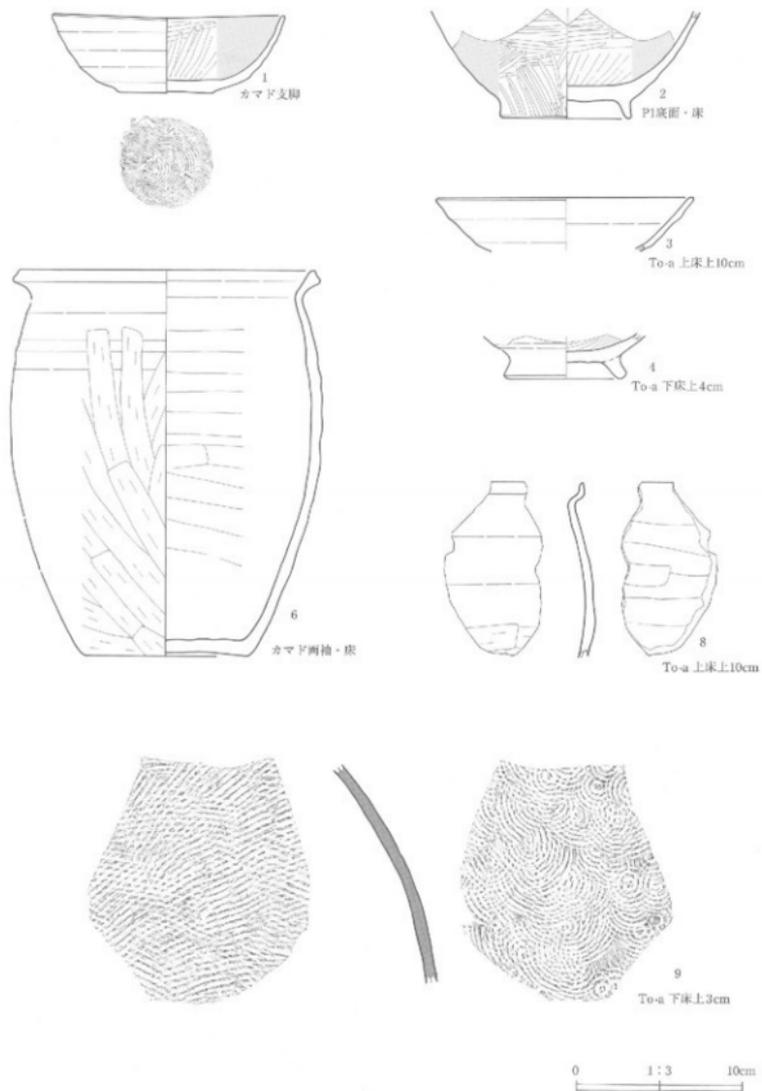
[柱穴・ピット] P1～P3の3基が確認された。規模は径39～123cm、深さ20～53cmを測る。P1はカマド右脇から検出された。底面からは高台環1点(2)が出土している。P2はQ2床面で確認された。ピット上面では貼り床が未確認であったことから、開口した状態で使用されていたものと推測



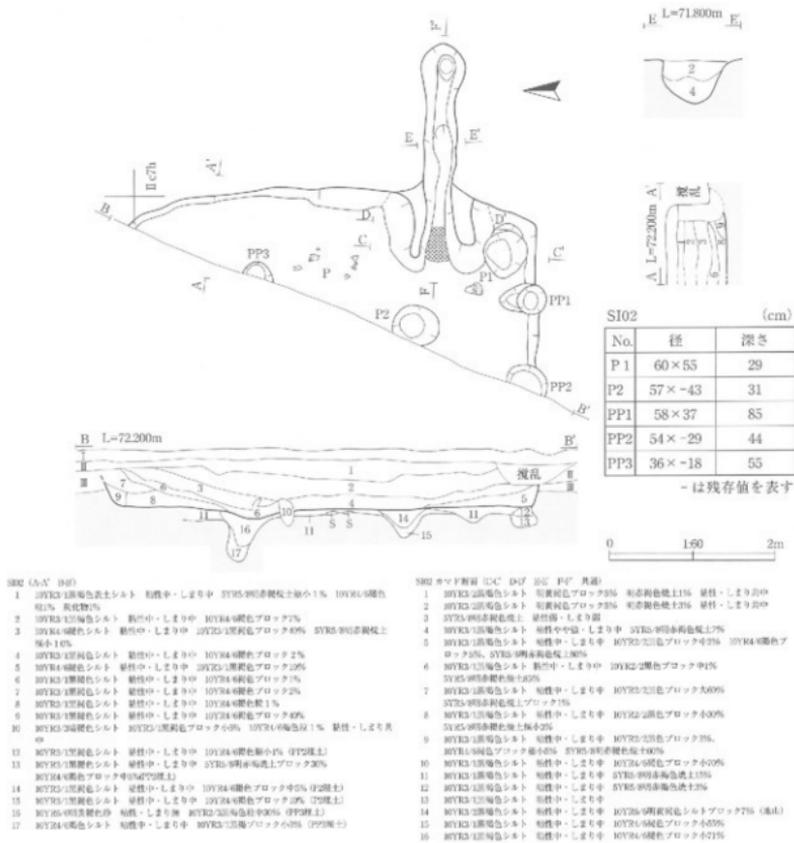
- S101 (A-A' B-B')
- 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまりやや弱 5YR6/8棕色土10%
  - 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 炭化物1%以下
  - 10YR7/4.6い・黄褐色チツラ 粘性・しまり中 (Toa) 堆らな縁肉に含む
  - 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 10YR6/6明黄褐色シルト2%
  - 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中・しまり中 10YR6/6明黄褐色シルトを包括に含む (2%)
  - 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中・しまり中
  - 10YR3/1暗褐色シルト 粘性強・しまり中やや強
  - 10YR3/1暗褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR5/6明黄褐色ブロック1%
  - 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR5/6明黄褐色ブロック30%
  - 10YR3/2黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR5/6明黄褐色ブロック2%
  - 10YR3/2黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR4/4褐色ブロック3%
  - 10YR3/2黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR4/4褐色ブロック10%

- S101 女マド断面 (C-C' D-D' E-E' 共断)
- 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR5/4.6い・黄褐色シルト2% 5YR5/8明赤褐色土1%以下
  - 10YR2/3黒褐色シルト 粘性・しまり共中 5YR5/8明赤褐色土ブロック30%
  - 10YR3/4明褐色シルト 10YR2/3黒褐色ブロック2% 5YR5/8明赤褐色土ブロック2%
  - 5YR5/8明赤褐色土1.80% 10YR3/4明褐色シルト
  - 10YR3/4明褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR2/3黒褐色ブロック5%
  - 10YR3/4明赤褐色土
  - 10YR3/1高褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR5/4.6い・黄褐色土3%
  - 5YR5/8明赤褐色土2%
  - 10YR3/4明褐色シルト 10YR2/3黒褐色ブロック15% 5YR5/8明赤褐色土ブロック30% 粘性・しまり共中
  - 10YR3/4明褐色シルト 10YR2/3黒褐色ブロック20% 5YR5/8明赤褐色土ブロック1% 粘性・しまり共中
  - 10YR3/4明褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR3/4明褐色土30%
  - 10YR2/3黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR3/4明褐色土1%
  - 10YR6/4.6い・黄褐色シルト 粘性強・しまり中
  - 10YR6/4.6い・黄褐色シルト 粘性強・しまり中 10YR3/1黒褐色ブロック2%
  - 10YR17/1黒色シルト 粘性・しまり共中 10YR2/3黒褐色ブロック1% (P1層上)
  - 10YR4/4褐色シルト 10YR2/3黒褐色ブロック30% (P1層上) 粘性・しまり共中

第7図 S101 竪穴住居跡



第8図 SIO1 竪穴住居跡出土遺物



第9図 SI02 竅穴住居跡

される。P3は左袖部前方に位置するものである。これらは構築位置や、出土遺物などから判断して貯蔵穴といった用途で使用されていたものと考えられる。

#### 遺物（第8図、写真図版44）

9点が出土した。カマド燃焼部から支脚に転用された土師器坏1点、カマド両袖および床面から土師器の甕片1点、P1底面より土師器高台坏片1点、十和田a降下火山灰より上位の層より土師器坏片1点、高台坏片1点、甕片2点、下位の層より土師器高台坏片1点、須恵器大甕片1点が出土している。器種は土師器坏2点、高台坏3点、甕3点、須恵器大甕1点で構成され、土師器の製作に際してはいずれもロクロが使用される。

### S102竪穴住居跡

#### 遺構（第9図、写真図版4）

[位置・重複関係] 調査区北西部、II C6 hグリッドに位置している。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。西半部は調査区域外にかかるため、全体の調査は行っていない。煙道基部から東壁面の立ち上がり付近にかけて塩化ビニール管敷設時の攪乱を受けている。

[規模・平面形] 東辺493cm、南辺208cmを測る。南辺の値は残存値、北辺、西辺の値は調査区域外にかかるため不明である。

[埋土] 17層に細分され、黄褐色シルトブロックを含む黒褐色シルトを主体として構成される。第3層埋土中位には黄褐色粘土質シルト層が堆積する。南壁際の崩落土中には明赤褐色焼土粒、炭化物粒がごく少量含まれる。

[壁] 壁高の残存値は北側47cm、東側50cm、南側45cmを測る。

[床面] Ⅲ層を掘り込んで構築される。おおむね平坦で若干のしまりを持つものであるが、明瞭な硬化面は認められない。ほぼ全域に黒褐色シルトによる貼り床が施される。

[カマド] 東壁の南寄り1/4のところに構築される。カマド本体は黒褐色シルト主体で造られている。火床面は41×50cm・厚さ7～15cmの楕円形を呈する。煙道部は残存部で幅40cm、長さ192cmの溝状を呈し、煙出部へ向かい徐々に深くなり、一旦立ち上がって平坦に推移し、煙出部に至って再び深く掘り込まれる。確認面からの深さは36cm、上部の構造は削平により不明である。

[柱穴・ビット] 柱穴3基とビット2基を検出した。P1～P2の規模は径43～60cm、深さ30cm前後を測る。PP1～PP3の規模は径18～58cm、深さ44～85cmを測る。

#### 遺物（第10図、写真図版45）

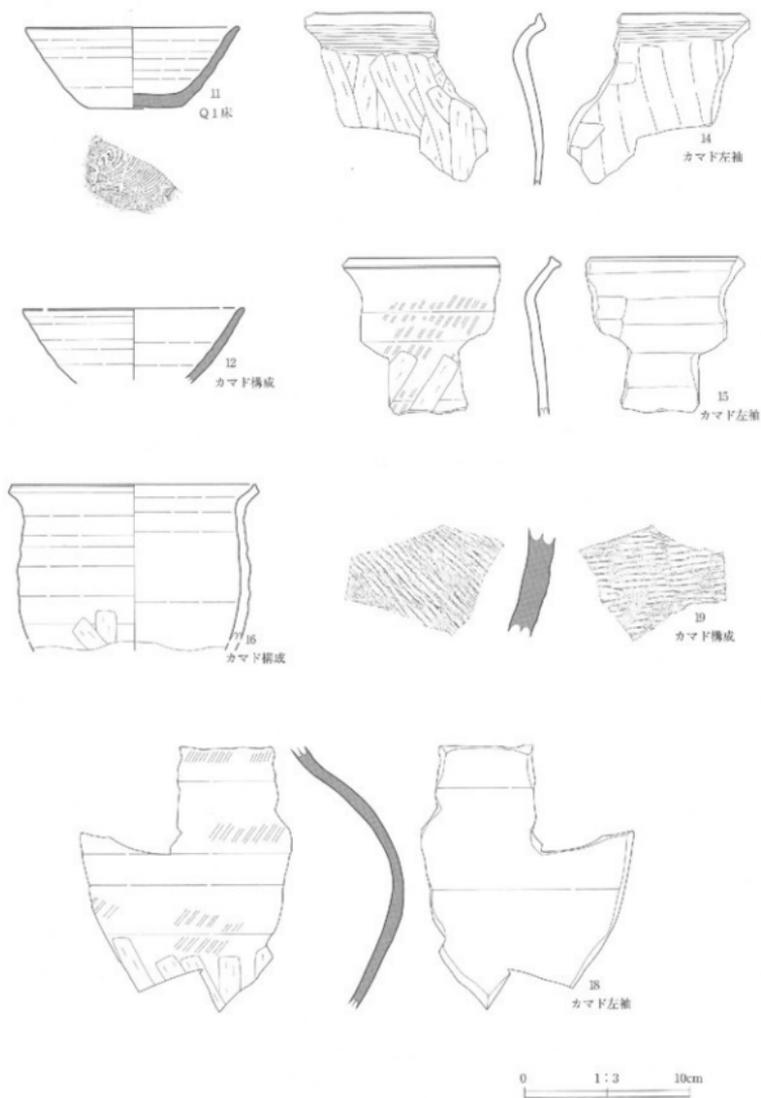
12点が出土した。カマド構成材として土師器甕片4点、須恵器坏片2点・甕壺片1点・大甕片1点、煙出埋土から須恵器大甕片1点、床面から土師器坏片1点、須恵器坏片1点、埋土中より須恵器大甕片1点が出土している。器種は土師器坏1点、甕4点、須恵器坏3点、甕壺類1点、大甕3点で構成され、土師器の製作に際してはいずれもロクロが使用される。

### S103竪穴住居跡

#### 遺構（第11・12図、写真図版5）

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C24mグリッドに位置している。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。南東側から南側は現代の攪乱により破壊されている。

[規模・平面形] 東辺(498)cm、西辺434cm、南辺(390)cm、北辺427cmのほぼ隅丸方形を呈する。東辺と南辺の値は推定値である。



第10図 S102 竪穴住居跡出土遺物

[埋土] 黒褐色シルトを主体として構成され、7層に細分される。全体に赤褐色焼土と炭化物粒を含み、壁際には黒褐色シルトと褐色シルトの混合土が堆積する。

[壁] 壁高の残存値は東側38cm、西側31cm、南側27cm、北側21cmである。

[床面] IV層を掘り込んで構築される。ほぼ平坦で、若干のしまりを持つものであるが明瞭な硬化面は認められない。ほぼ全域に褐色シルトと黒褐色シルトの混合土による貼り床が構築されている。

[カマド] 東壁の1/3のところに構築される。カマド本体は黒褐色シルト主体で造られ、左袖部には須恵器の大甕1点(40)が芯材として用いられる。火床面には102×57cm・厚さ12cmの範囲で明赤褐色焼土が形成されている。燃焼部中央には垂角礫26×13cmが設置されており、出土状況から判断して支脚として使用されたものと見られる。煙道は残存部で幅44cm、長さ145cmの溝状を呈し、一旦緩やかに立ち上がった後、下降しながら煙出し部へ至る。煙出し部は径55cm程度の土坑状に掘り込まれ、確認面からの深さは21cmを測る。上部の構造は削平により不明である。

[柱穴・ピット] 床面から2基のピットと6基の柱穴が検出された。PP1~PP6は平面形が隅丸方形を呈するもので規模は径20~42cm、深さ7~76cmを測る。P1~P2は平面形が楕円~隅丸長方形を呈するもので、規模は径35~152cm、深さ15~76cmを測る。

#### 遺物(第12・13図、写真図版45~47)

21点が出土した。カマド構成材として土師器坏片2点・甕片3点、須恵器坏片1点・甕壺片1点・大甕片1点、床面より須恵器蓋片1点、甕壺類片1点、埋土中より土師器坏片3点・鉢?片1点・甕片2点、須恵器坏片2点・甕壺類片1点・大甕片1点が出土している。器種は土師器坏5点・鉢?1点・甕5点、須恵器坏3点、蓋1点、甕壺類3点、大甕2点で構成され、土師器の製作に際してはいずれもロクロが使用される。42はカマドから出土した土製品で、器面に瓶状の穿孔を持つものである。

### S104竪穴住居跡

#### 遺構(第14・15図、写真図版6)

[位置・重複関係] 調査区中央部、ⅢC1gグリッドに位置している。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。北側隅でSK01土坑と重複し、これにより切られる。

[規模・平面形] 北東辺513cm、北西辺455cm、南西辺514cm、南東辺487cmの隅丸方形を呈する。

[埋土] 6層に細分され、黒褐色シルトを主体として構成される。全体に褐色粒と明赤褐色焼土を含む。第6層は貼床埋土で、橙色焼土ブロックが少量混入する。

[壁] 壁高の残存値は北西側23cm、南東側20cm、北東側18cm、南西側16cmを測る。

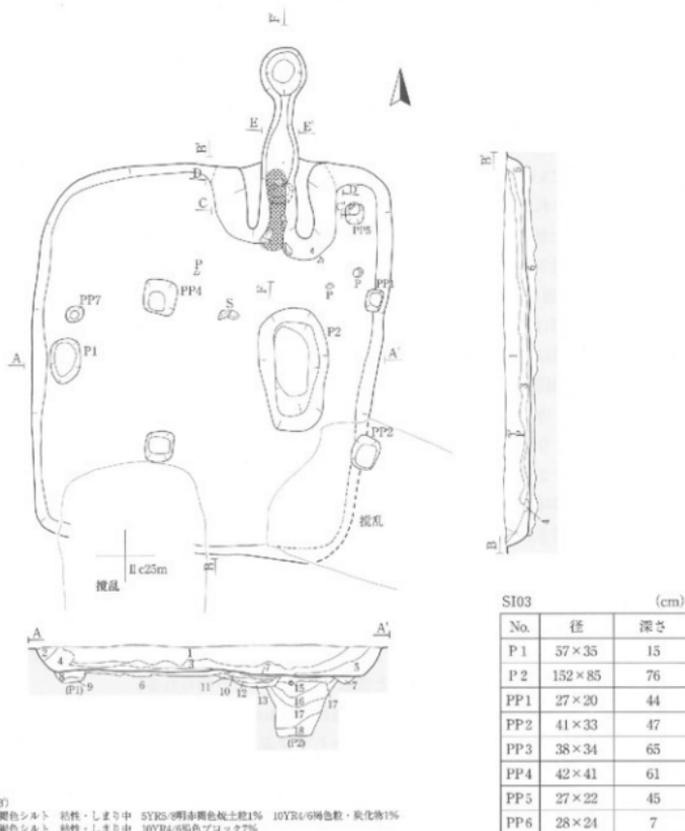
[床面] IV層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、若干のしまりを持つものであるが明瞭な硬化面は認められない。ほぼ全域に黒褐色シルトによる貼り床が施される。

[カマド] 南東壁の北西寄り1/3のところに構築される。カマド本体は暗褐色シルトと黒褐色シルトで造られ、左袖には25×13cmの垂角礫が芯材として用いられている。火床面は77×79cm・厚さ13cmのほぼ円形を呈する。煙道部は残存値で幅40cm、長さ182cmの溝状を呈する。煙道部は煙出しへ向かいほぼ平坦な角度をもって延び、徐々に深く掘り込まれる。煙出し部の確認面からの深さは14cmである。煙道の構造などは削平により不明である。

[柱穴・ピット] 床面からP1~P7の、7基のピットが確認された。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径30~83cm、深さ12~45cmを測る。

#### 遺物(第15~22図、写真図版47~55)

122点の遺物が出土した。カマド構成材として5点、床面より14点、床面~P3埋土上位より8点、

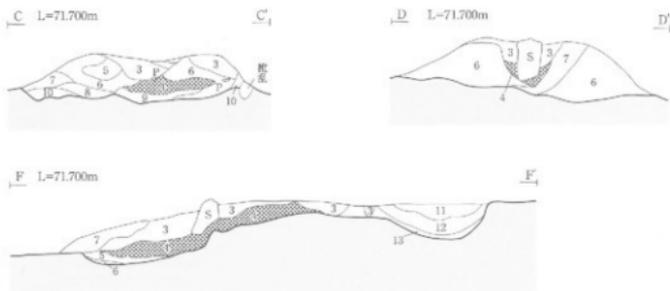


## SI03 (A-A' B-B')

- 1 10YR2-1黒褐色シルト 粘性・しまり中 5YR5-6明赤褐色土粒1% 10YR4-6褐色粒・炭化物1%
- 2 10YR2-1黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4-6褐色ブロック7%
- 3 10YR2-1黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4-6褐色ブロック2%
- 4 10YR4-6褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3-4黒褐ブロック40% 5YR5-6明赤褐色土粒10%
- 5 10YR4-6褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3-4黒褐ブロック30% 5YR5-6明赤褐色土粒1%
- 6 10YR2-1黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4-6褐色ブロック2%
- 7 10YR2-2黒褐色シルト 粘性中・しまり弱 10YR2-3黒褐色ブロック大20%
- 8 10YR2-1黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4-6褐色土粒1% (P1埋土)
- 9 10YR2-1黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4-6褐色土粒1% (P1埋土)
- 10 10YR2-2黒褐色シルト 粘性・しまり弱 10YR2-3黒褐色ブロック60%
- 11 10YR2-3黒褐色シルト 粘性中・しまり弱 10YR2-3黒褐色土粒2%
- 12 10YR2-3黒褐色シルト 粘性中・しまり弱 10YR2-3黒褐色土粒1% 5YR5-6明赤褐色土粒12%
- 13 5YR5-6明赤褐色土 10YR2-3黒褐色土小30%炭化物少2% 粘性中・しまり弱
- 14 10YR6-6明赤褐色砂 粘性・しまりなし 10YR2-3黒褐色土中30% (P2埋土)
- 15 10YR2-2黒褐色シルト 粘性中・しまり弱 10YR6-6明赤褐色砂中40% 5YR5-6明赤褐色土ブロック中10% (P2埋土)
- 16 10YR2-3黒褐色シルト 粘性中・しまり弱 10YR2-3黒褐色ブロック中30% (P2埋土)
- 17 10YR2-3黒褐色シルト 粘性中・しまり弱 10YR5-6黄褐色ブロック中30% (P2埋土)
- 18 10YR2-3黒褐色シルト 粘性中・しまり弱 10YR2-3黒褐色ブロック中60% (P2埋土)

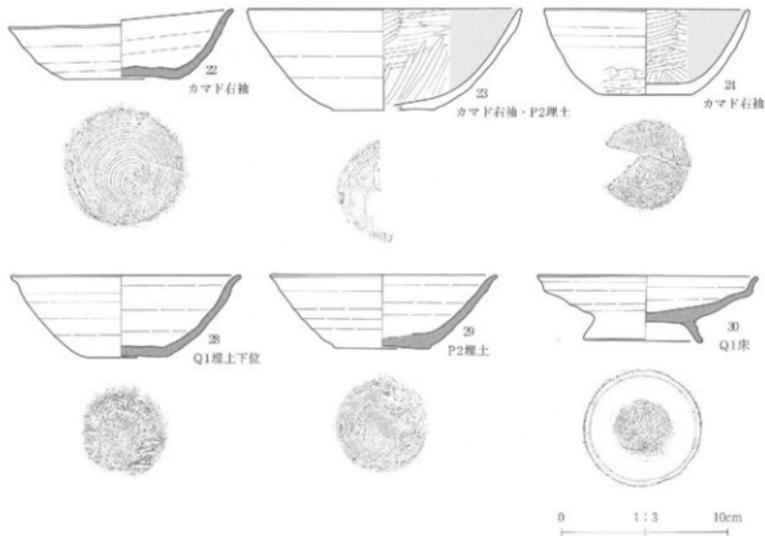
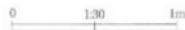
0 1:60 2m

第11図 SI03 壁穴住居跡(1)

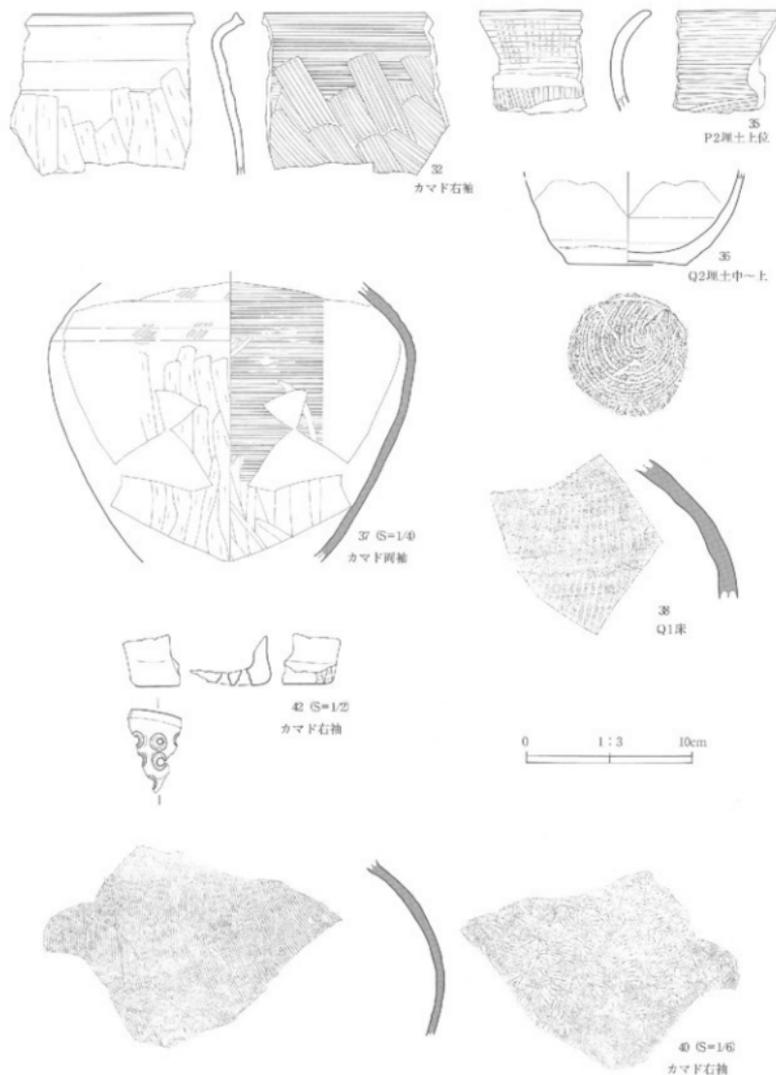


SI3 カマド断面 (C-C' D-D' E-E' F-F' 共通)

- 1 10YR4/1 黒灰色シルト 粘性中・しまり中 5YR5/8 明赤褐色土 1.2%
- 2 10YR4/1 黒灰色シルト 粘性中・しまり中 5YR7/4 黄褐色シルト 50%
- 3 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR6/4C 濃い黄褐色ブロック 3% 5YR5/8 明赤褐色土 2% 炭化物 1%
- 4 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり中 5YR5/8 明赤褐色土ブロック 30%
- 5 10YR2/2 黒色シルト 粘性・しまり中
- 6 10YR2/2 黒色シルト 粘性中・しまり中 10YR3/4 明褐色土 小 30% 5YR5/8 明赤褐色土 1.1%
- 7 10YR2/2 黒色シルト 粘性中・しまり中 10YR3/4 明褐色土 小 30% 5YR5/8 明赤褐色土 30%
- 8 10YR2/2 黒色シルト 粘性中・しまり中 10YR6/4C 濃い黄褐色ブロック 50%
- 9 10YR2/2 黒色シルト 粘性中・しまり中 10YR3/4 明褐色土 小 30% 5YR5/8 明赤褐色土 1% 炭化物 2%
- 10 10YR2/2 黒色シルト 粘性中・しまり中
- 11 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性中・しまり中 10YR5/4C 濃い黄褐色シルト 1% 5YR5/8 明赤褐色土 1.2%
- 12 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性中・弱・しまり中 10YR6/4C 濃い黄褐色ブロック 10% 5YR5/8 明赤褐色土 1% 炭化物 1%
- 13 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性中・しまり中



第12図 SI03 竪穴住居跡(2)、出土遺物(1)



第13図 SI03 竪穴住居跡出土遺物(2)

P3埋土より20点、P4埋土より1点、P5埋土より1点、P6埋土より1点、P7埋土より1点、埋土より71点が出土している。内訳は土師器坏片54点・高台坏片8点・耳皿片1点・鉢?片1点・壺片2点・甕片26点・鍋片2点、須恵器甕壺類片2点・大甕片3点、土製品1点、鉄製品6点、石製品15点である。土師器坏の製作にあたってはロクロを使用するもの(10点)としないもの(45点)が混在している。このうちロクロを使用せずに製作されるものは、粘土練巻き上げ後、ユビ押さえにより成形され(91・93)、体部はヘラケズリにより上位まで調整される。このとき縁部はヘラ削りを行わずヨコナデ調整を残す。更にその後ミガキ調整が行われるものもある。これらは底部に繊維状痕(いわゆるムシロ痕:以下、ムシロ痕)を持つという点で特徴的である。底部にムシロ痕を持つ土師器の器種としては坏・高台坏・鉢?・壺・甕があり、底部のムシロ痕は甕など一部の器種を除いては縁部がヘラケズリされるものが多い。体部に同様の調整技法を持つもので底部全面が削られるものでも、本来はムシロ痕を有する可能性が高いと考えられる。尚、149~152の鉄製品は埋土中位~ベルト埋土より出土したものであるが、明確に遺構に伴うものであるか断定できない。

### S105竈穴住居跡

#### 遺構(第23図、写真図版7)

[位置・重複関係] 調査区南東部、ⅢC14eグリッドに位置している。検出面はⅢ層で、暗褐色のプランとして確認した。SB02掘立柱建物跡と北西部で重複し、これにより切られる。

[規模・平面形] 東辺294cm、西辺311cm、南辺308cm、北辺295cmの隅丸方形を呈する。

[埋土] 7層に細分され、黒褐色シルトを主体として構成される。全体に褐色粒と暗褐色粒を含む。第5層は壁溝埋土で、赤褐色焼土と炭化物をごく微量含む。

[壁] 壁高の残存値は北側9cm、南側10cm、東側11cm、西側11cmを測る。

[床面] Ⅳ層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、若干のしまりを持つものであるが明瞭な硬化面は認められない。ほぼ全域に暗褐色シルトによる貼り床が施される。また、壁溝がほぼ全周し、北壁部分では局所的に小ピット状に掘り込まれる。

[カマド] 東壁の南寄り1/3のところに構築される。カマド本体は褐色シルトと黒褐色シルトで造られる。火床面は71×96cm・厚さ6cmの範囲で明赤褐色の焼土が形成されている。燃焼部中央には12×8cmの直角礫が設置されており支脚として使用されていたものと推測される。煙道部は残存値で幅32cm、長さ138cmの溝状を呈する。煙道部はほぼ平坦な角度をもって外方に延び、煙出しに至って緩やかに掘り込まれる。確認面からの深さは18cmである。煙道の構造などは削平により不明である。

[柱穴・ピット] 床面から3基の柱穴が確認された。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径33~76cm前後、深さ19~29cm前後を測る。

#### 遺物(第24図、写真図版55・56)

16点の遺物が出土した。カマド構成材として土師器甕片1点、須恵器坏片1点・甕壺類片1点、床面より土師器甕片1点、須恵器坏片2点、P1底面より須恵器坏2点、貼り床埋土より須恵器甕壺類片1点が出土している。その他土製品1点、石器6点が出土している。石器については、下位面に位置する縄文時代の遺物が混入したものと考えられ、本遺構に伴伴するものではない。

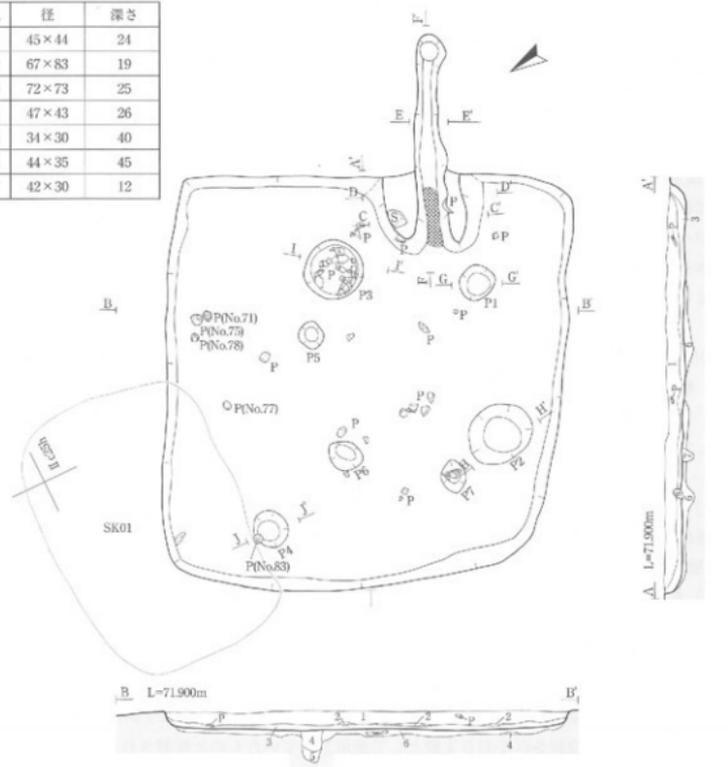
### S106竈穴住居跡

#### 遺構(第25図、写真図版8)

[位置・重複関係] 調査区中央部、ⅡC22kグリッドに位置している。検出面はⅢ層上位面で、鈍い

SI04 (cm)

No.	径	深さ
P 1	45×44	24
P 2	67×83	19
P 3	72×73	25
P 4	47×43	26
P 5	34×30	40
P 6	44×35	45
P 7	42×30	12



P1  
L=71.800m

G<sub>1</sub> G<sub>2</sub>



P3  
L=71.600m



P2  
L=71.800m

H<sub>1</sub> H<sub>2</sub>



P4  
L=71.600m



SI04 (A-A' B-B')

- 1 10YR2-2黒褐色シルト 粘性やや弱・しまり中 10YR4-4褐色段1%
- 2 10YR2-2黒褐色シルト 粘性やや弱・しまり中 10YR4-4褐色段3%
- 3 10YR2-2黒褐色シルト 粘性やや弱・しまり中 10YR4-4褐色段10%
- 4 10YR2-2黒褐色シルト 粘性・しまり中
- 5 10YR2-2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4-4褐色段5%
- 6 10YR2-2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3-4黒褐色ブロック10%5YR2/8褐色段土ブロック20%

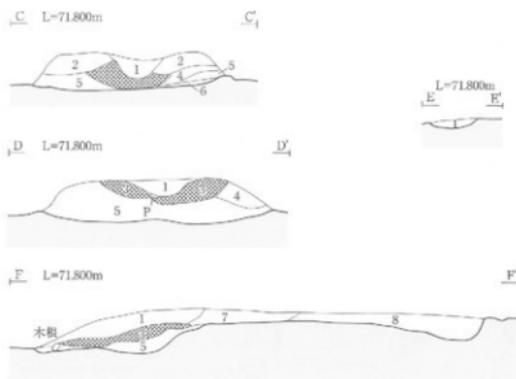
PI-4 ①G ②H ③I ④J (共通)

- 1 10YR3-1黒褐色シルト 粘性・しまり中
- 2 10YR3-2黒褐色シルト 粘性・しまり中
- 3 10YR2-2黒褐色シルト 粘性・しまり中
- 4 10YR3-3暗褐色シルト 粘性・しまり中

0 1:50 2m

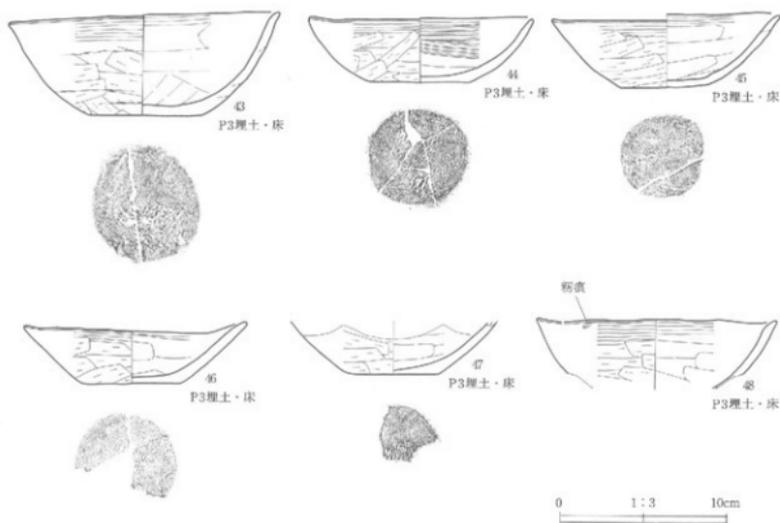
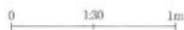
0 1:30 1m

第14図 SI04 壁穴住居跡(1)

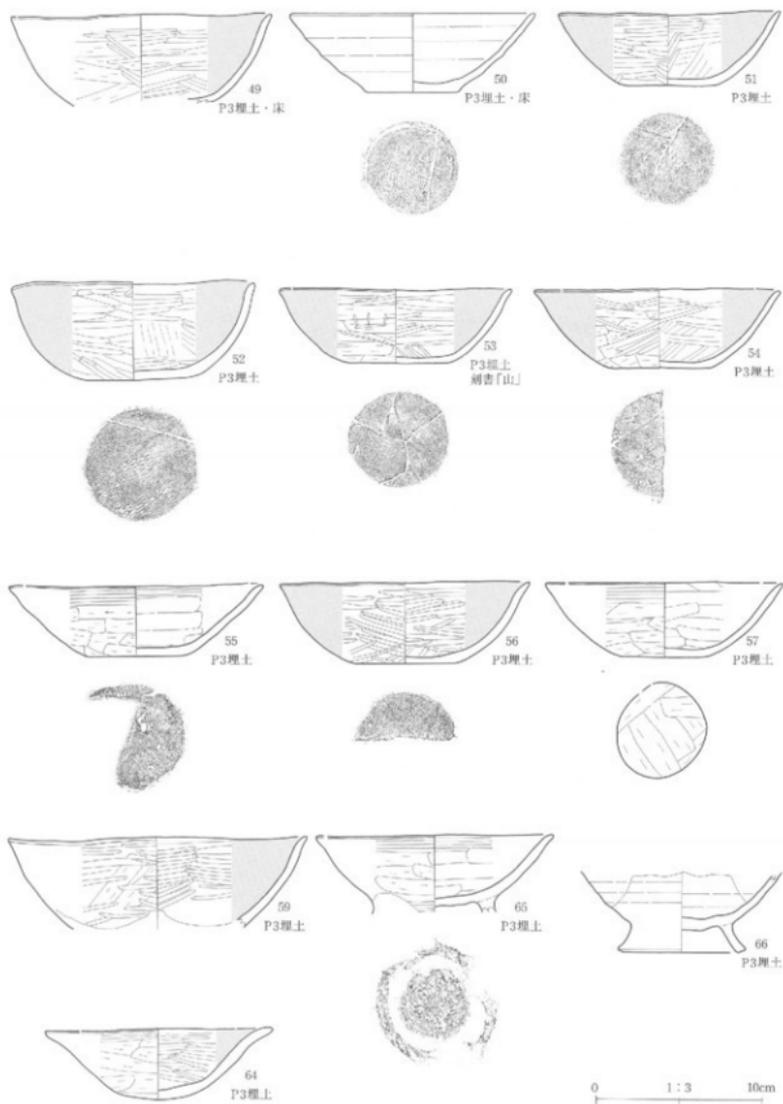


S84 キヤド断面 (C・D び F び F び 決通)

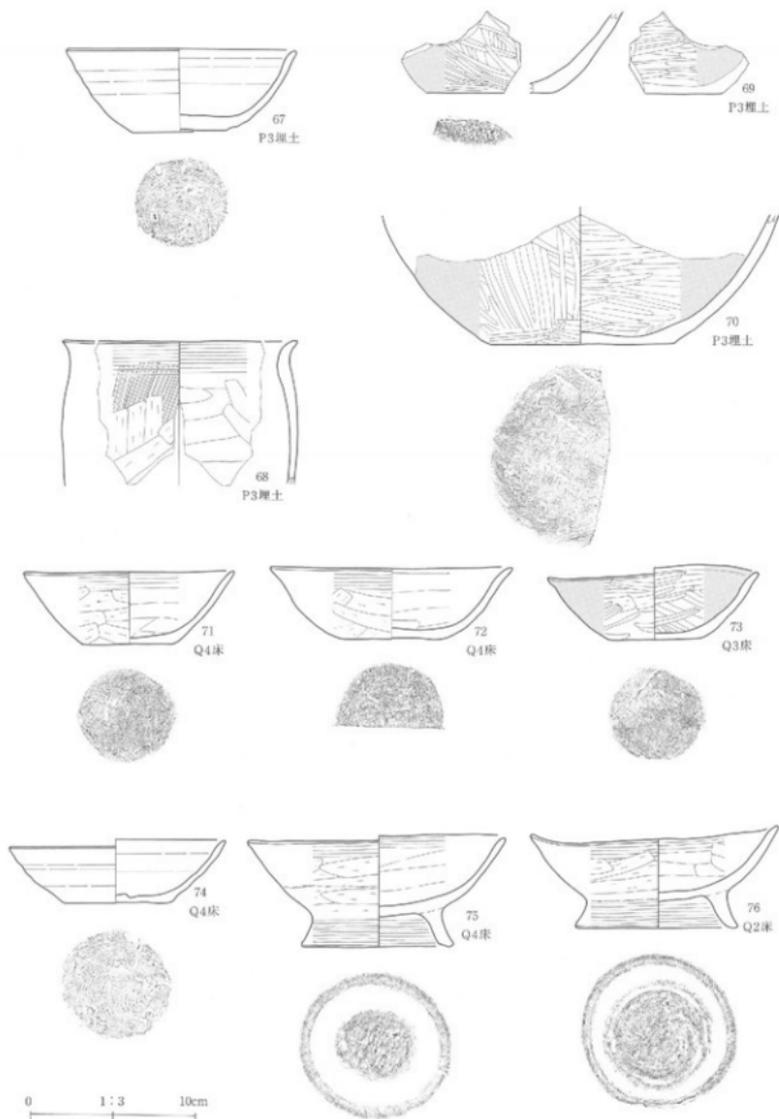
- 1 SYR5-8明赤褐色焼土とIYR3-3暗褐色シルトの混合土
- 2 IYR3-3暗褐色シルト 粘性中・しまり中 SYR5-8明赤褐色焼土ブロック小2%
- 3 IYR3-3暗褐色シルト 粘性中・しまり中 SYR5-8明赤褐色焼土ブロック小30%
- 4 IYR3-3暗褐色シルト 粘性中・しまり中 SYR5-8明赤褐色焼土ブロック10%
- 5 IYR3-3暗褐色シルト 粘性中・しまり中 SYR5-8明赤褐色焼土ブロック1%
- 6 IYR3-3暗褐色シルト 粘性中・しまり中
- 7 IYR2-2暗褐色シルト 粘性中・しまり中強 SYR5-8明赤褐色焼土ブロック1%混合
- 8 IYR3-1黒褐色シルト 粘性中・しまり中強 SYR5-8明赤褐色焼土ブロック1%以下



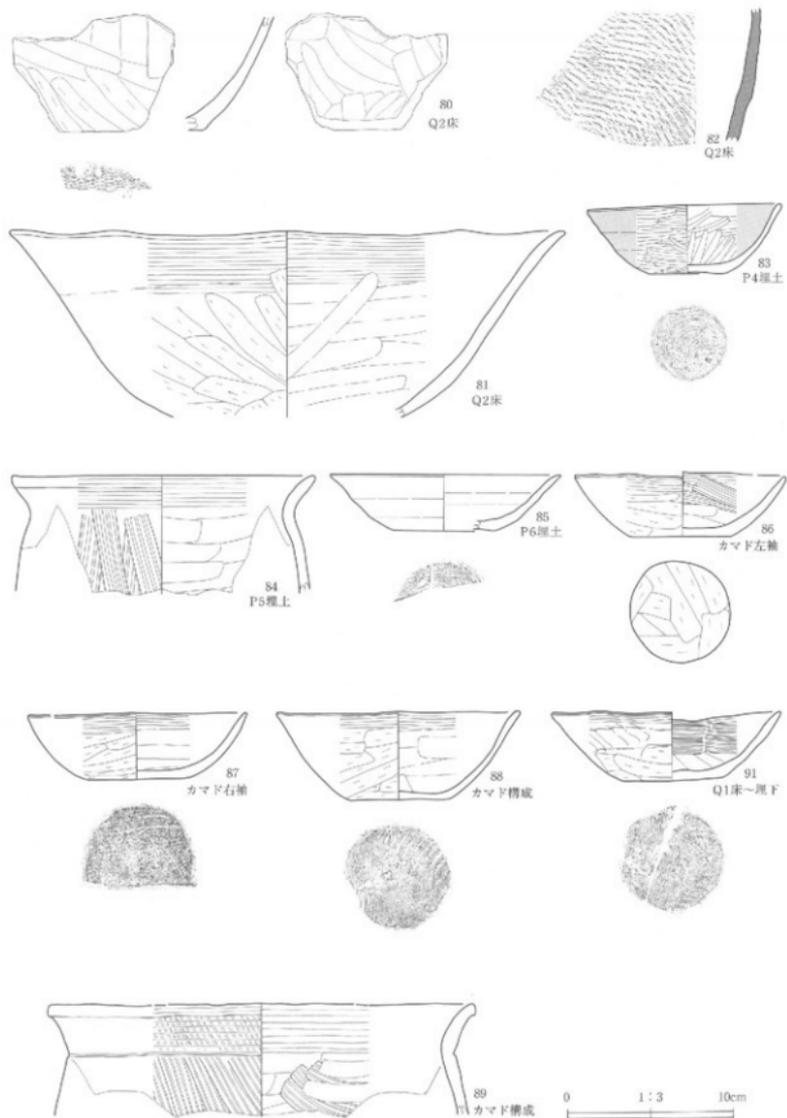
第15図 SI04 竪穴住居跡(2)、出土遺物(1)



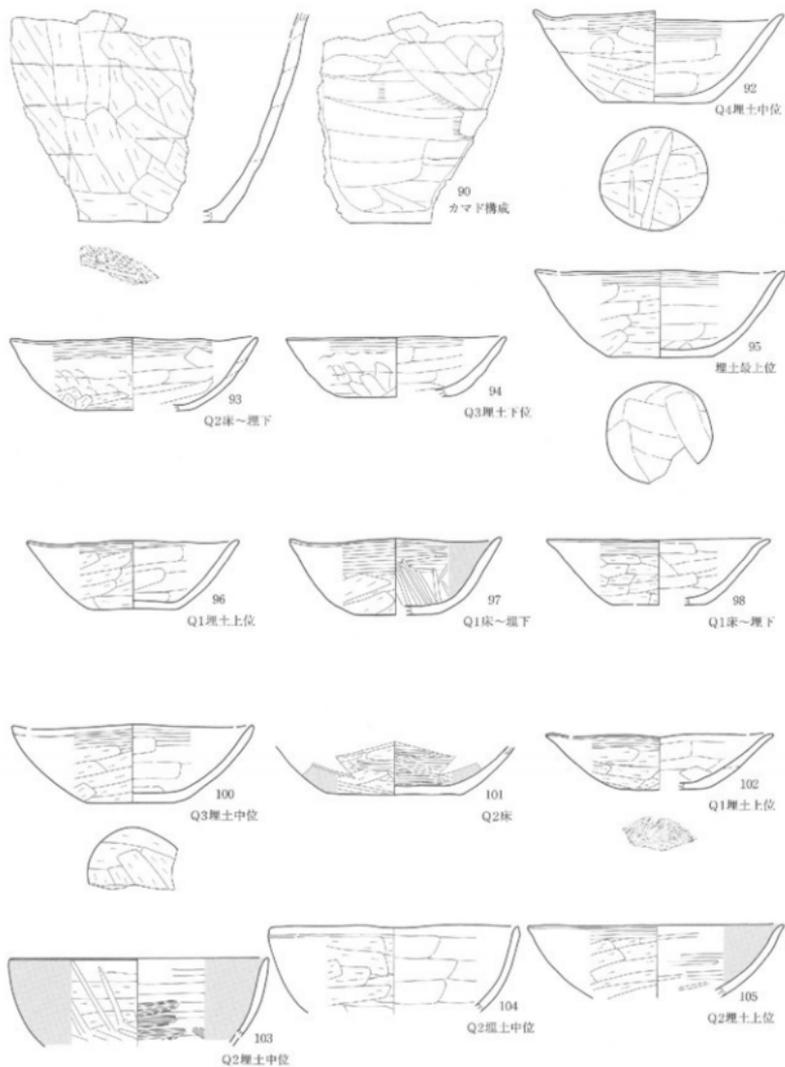
第16図 S104 竪穴住居跡出土遺物(2)



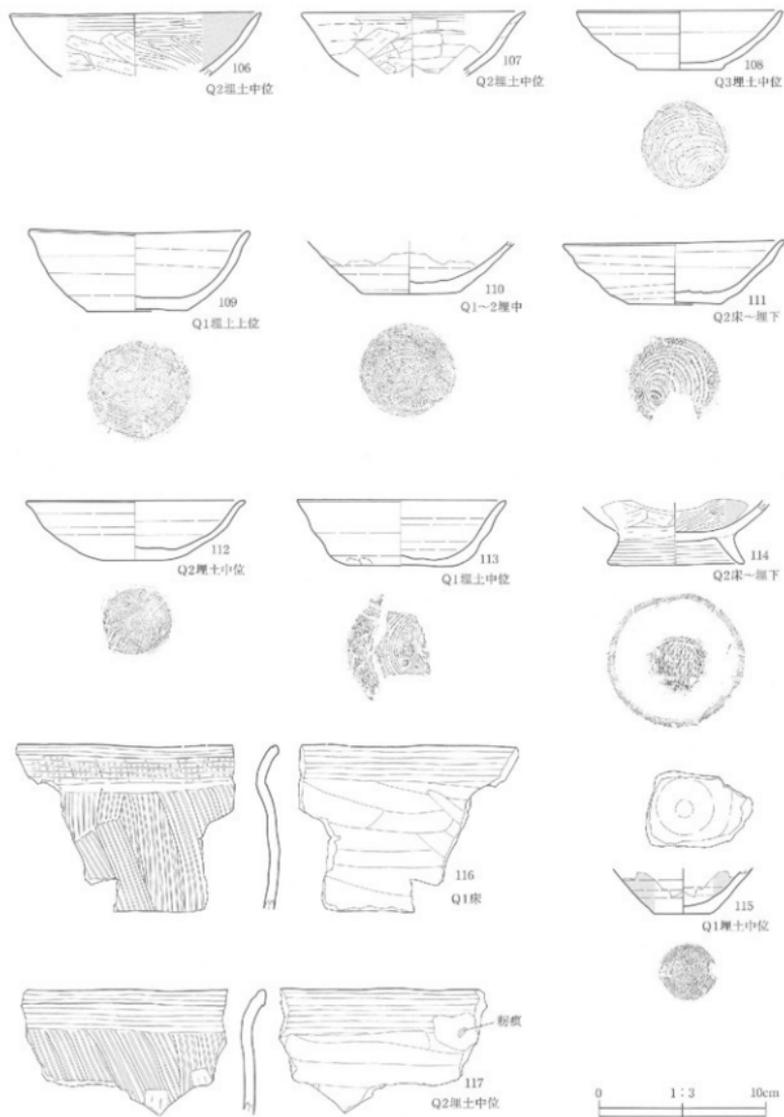
第17圖 SIO4 竪穴住居跡出土遺物(3)



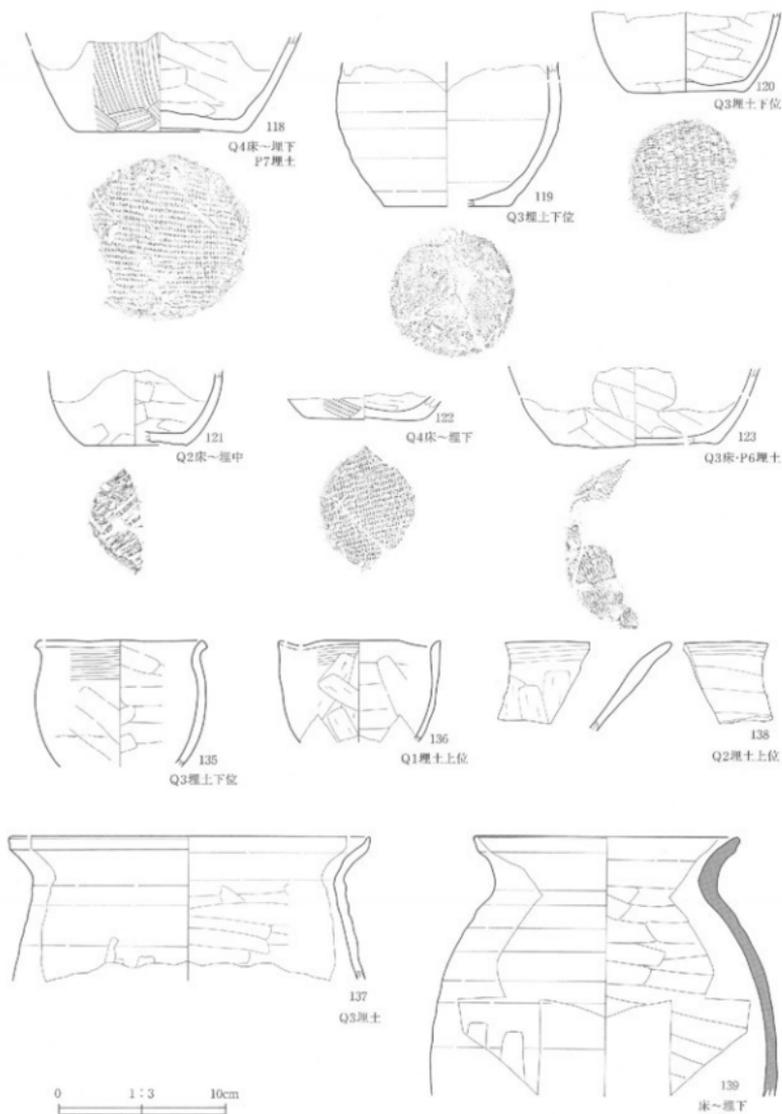
第18図 S104 竪穴住居跡出土遺物(4)



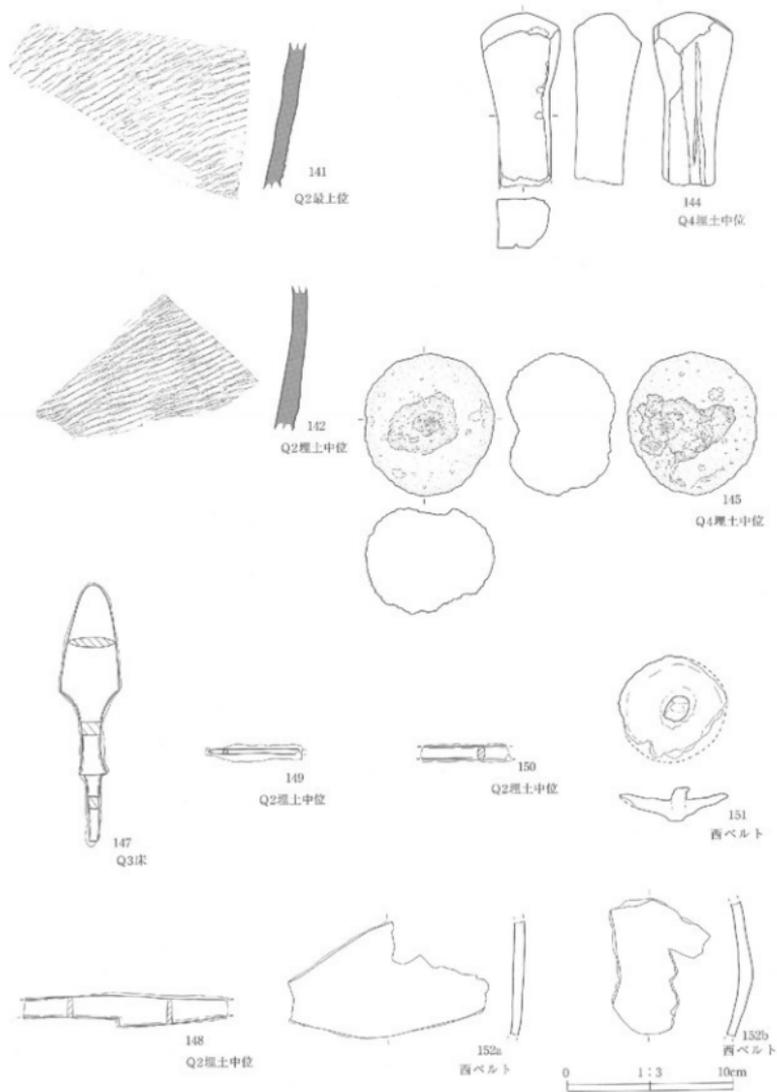
第19図 S104 竪穴住居跡出土遺物(5)



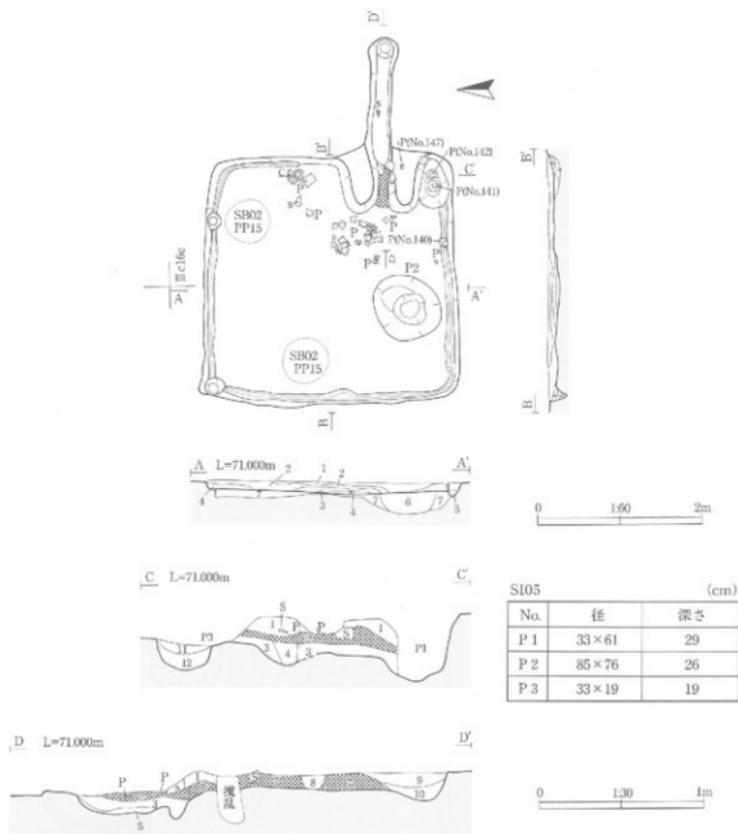
第20図 SI04 竪穴住居跡出土遺物(6)



第21圖 SIO4 竪穴住居跡出土遺物(7)



第22図 S104 竪穴住居跡出土遺物(8)



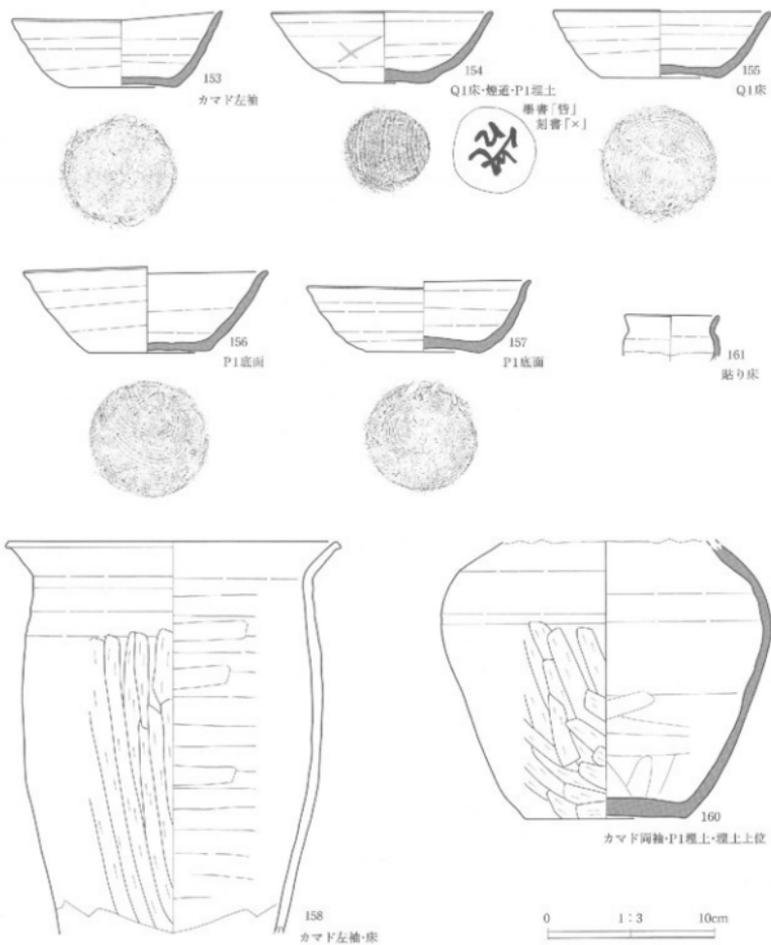
## SI05 (A-A' B-B')

- 1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性・しまり中 10YR2/3黒褐色ブロック15%  
10YR5/6黄褐色ブロック1% 25YR6/8灰緑土1%
- 2 10YR2/3黄褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色径小10%
- 3 10YR5/6黄褐色シルト 粘性・しまり中 10YR2/3黄褐色ブロック30%
- 4 10YR2/3黄褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色径小2%
- 5 10YR2/3黄褐色シルト 粘性・しまり中 25YR6/8灰緑色土1%炭化物1%含
- 6 10YR2/3黄褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色ブロック30%
- 7 10YR3/4暗褐色シルト 粘性・しまり中 10YR2/3黄褐色ブロック50%

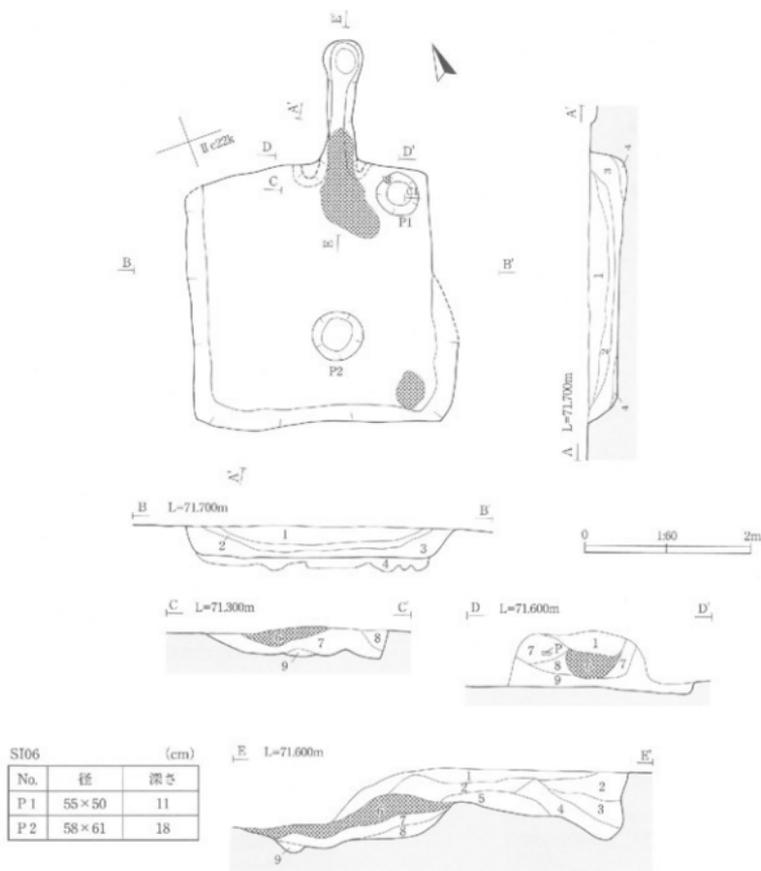
## SI05 カマド断面 (C-C' D-D')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 10YR4/6褐色ブロック小20%  
5YR5/8明赤褐色焼土 炭化物10%
- 2 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 10YR4/6褐色ブロック10%  
5YR5/8明赤褐色焼土15%
- 3 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 10YR4/6褐色ブロック10%
- 4 10YR4/6褐色シルト 粘性・しまり共中
- 5 10YR3/1黄褐色シルト 粘性中・しまり中
- 6 10YR2/3黄褐色シルト 25YR6/8灰緑色焼土ブロック60%
- 7 10YR2/3黄褐色シルト 10YR5/4暗褐色径小10% 25YR6/8灰緑色焼土ブロック30%
- 8 10YR2/3黄褐色シルト 10YR3/4暗褐色ブロック15%
- 9 10YR2/3黄褐色シルト 10YR3/4暗褐色ブロック15%
- 10 10YR2/3黄褐色シルト 10YR3/4暗褐色ブロック15%
- 11 10YR3/4暗褐色シルト 粘性中・しまり中 10YR4/6褐色小ブロック小11%
- 12 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱・しまり中 10YR4/6褐色ブロック20%

第23図 SI05 竪穴住居跡



第24図 S105 竪穴住居跡出土遺物



## SI06 (A-A' B-E)

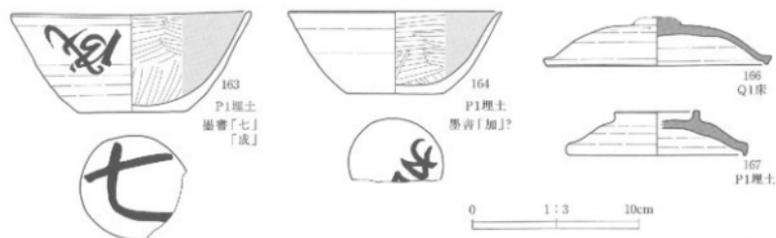
- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中 6YR5/3に灰い黄褐色シルトブロック5%
- 2 10YR5/6明赤褐色粘質シルト 粘性强・しまり中 10YR3/1黒色シルトブロック2%焼土説・炭化物1%以下
- 3 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり強 焼土説・炭化物1%
- 4 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中強 5YR5/6明赤褐色焼土40% 炭化物1%以下
- 5 10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4(2R)黄褐色シルトの混合土 粘性中・弱・しまり中

## SI06 カマド断面 (C-C' D-E' E-E' 共通)

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり強 5YR5/6明赤褐色焼土・炭化物各1%
- 2 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり強 5YR5/6明赤褐色焼土40% 炭化物1%以下
- 3 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中強 6YR5/6明赤褐色焼土10%
- 4 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 5YR5/6明赤褐色焼土15%
- 5 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 6YR5/6明赤褐色焼土20%

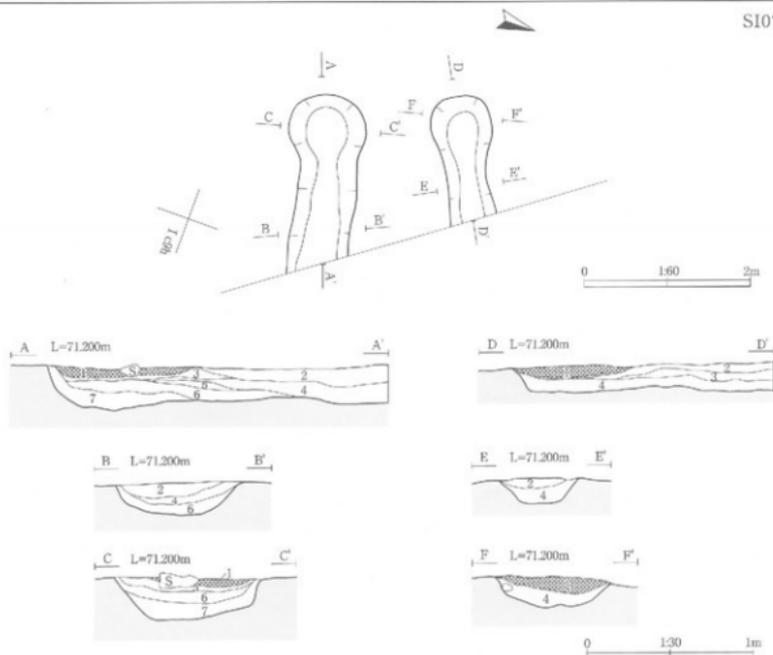
0 1.50 1m

第25図 SI06 竈穴住居跡



SI06

SI07



SI07 東カマド断面 (A-A' B-B' C-C' 共通)

- 1 10YR2/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 5YR5-8明赤褐色土粒10%
- 2 10YR2/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 5YR5-8明赤褐色土粒1%未満
- 3 10YR2/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 5YR5-8明赤褐色土粒5% 炭化物粒1%
- 4 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中・しまり中 5YR5-8明赤褐色土粒2% 炭化物粒1%
- 5 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中・しまり中 炭化物粒3%
- 6 10YR2/2黒褐色シルト 粘性中・しまり中 10YR4/3に多い黄褐色ブロック30%
- 7 10YR3/3暗褐色シルト 粘性中・しまり中

SI07 北カマド断面 (D-D' E-E' F-F' 共通)

- 1 10YR3/3黒褐色シルト 粘性中・しまり中 5YR5-8明赤褐色土粒40% 炭化物粒下に含む
- 2 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 5YR5-8明赤褐色土粒7% 炭化物粒1%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性中・しまり中 5YR5-8明赤褐色土粒1%未満
- 4 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中・しまり中

第26図 SI06 竈穴住居跡出土遺物・SI07 竈穴住居跡

黄褐色シルトブロックを含む黒褐色シルトのごく微かな色調の違いとして確認した。

[規模・平面形] 北東辺-296cm、北西辺-301cm、南西辺317cm、南東辺-310cmの隅丸方形を呈する。北東～南東壁にかけてはプランの把握が遅れたため、残存値である。

[埋土] 5層に細分され、黒褐色シルトを主体として構成される。全体に鈍い黄褐色シルト、明暗褐色焼土、炭化物粒を含む。

[壁] 壁高の残存値は北西側35cm、南東側38cm、北東側44cm、南西側36cmを測る。

[床面] IV層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦で、若干のしまりを持つものであるが明瞭な硬化面は認められない。ほぼ全域に黒褐色シルトによる貼り床が施される。南東隅で33×48cm・厚さ10cm前後の焼十楕円形を呈する焼土が形成されている。

[カマド] 北東壁の南東寄り1/3のところに構築される。カマド本体は黒褐色シルトで造られる。火床面は126×53cmの範囲で形成される。煙道部は残存値で幅45cm、長さ145cmの溝状を呈する。煙道部は煙出し孔へ向かい約9cmの角度で掘り込まれる。確認面からの深さは84cmである。煙道の構造などは削平により不明である。

[柱穴・ピット] 床面から2基の柱穴が確認された。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径50～61cm前後、深さ11～18cm前後を測る。

#### 遺物 (第26図、写真版56)

5点の遺物が出土した。床面から須恵器蓋1点、P1埋土から土師器坏3点、須恵器蓋1点が出土している。163は体部に「成」、底部に「七」の墨書を持つ。164は底部に墨書「加」?を持つ。166・167の須恵器蓋は、いずれも甕として転用されている。土師器の製作に際してはロクロが使用されている。

### S107竈穴住居跡

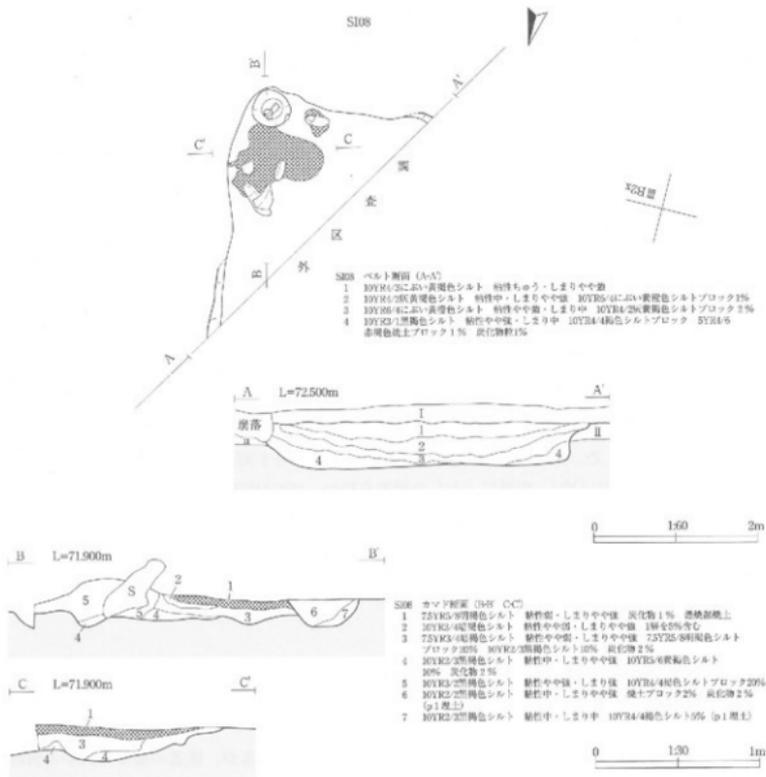
#### 遺構 (第26図、写真版9)

[位置・重複関係] 調査区北側IC8gグリッドに位置している。検出面はJ層で、焼土ブロックを含む黒褐色の長楕円形プランとして確認した。北東側の大部分は調査区域外にかかっており、調査できたのは煙出～煙道の一部である。

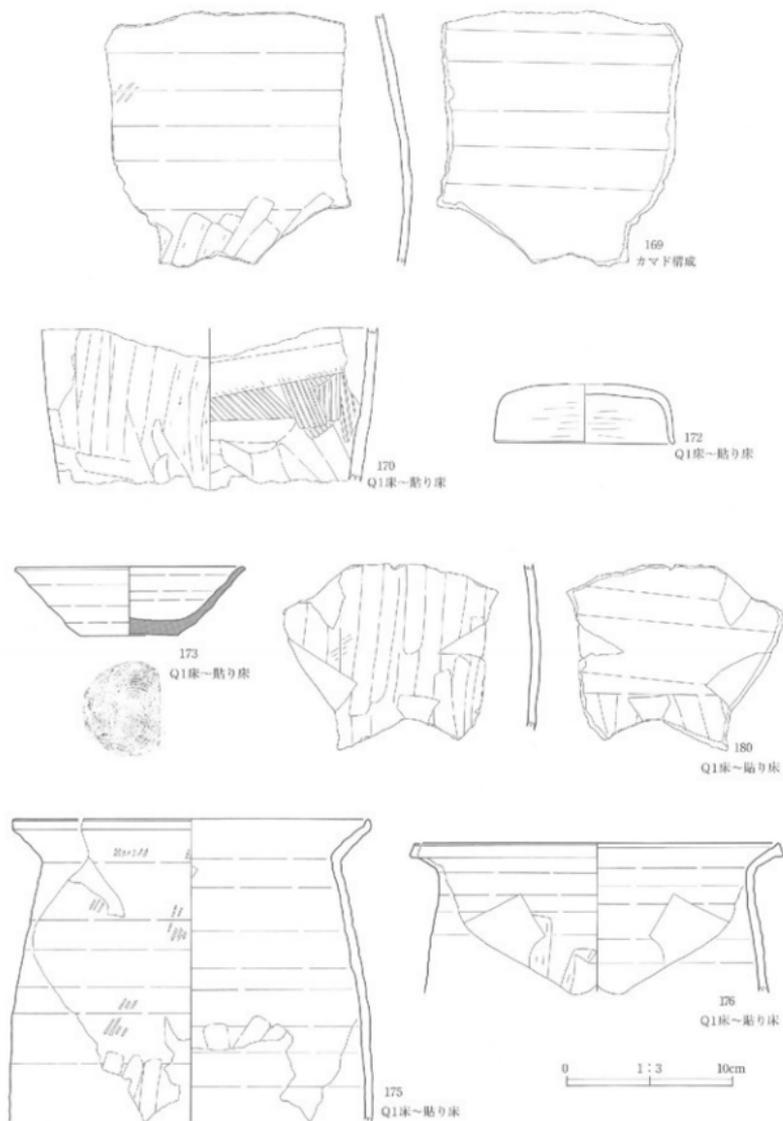
[カマド・煙道] カマド本体は調査区域外にかかり全容は不明であるが、煙道の構築方向から判断して南西壁側に構築されると推測される。壁側には煙道が2基並行して設けられている。煙道の新旧関係など詳細については主体部が未調査であることから不明である。北側に位置する煙道は、残存部で幅48×長さ152cm、深さ15cmの溝状を呈し、煙出し部へ向かいほぼ平坦な角度をもって延びる。埋土は黒褐色シルト主体で構築され、最上位に明赤褐色焼土粒を40%ほど含む。1層下位～2層上位の間には炭化物の薄い帯状堆積が認められる。煙出し部は幅74cm前後の土坑状に掘り込まれ、確認面からの深さは16cmを測る。上部構造については、削平により不明である。南側に位置する煙道は、残存部で幅72×長さ205cm、深さ20cmの溝状を呈し、煙出し部へ向かいほぼ平坦な角度をもって延びる。埋土は黒褐色シルト主体で構成され、最上位に明赤褐色焼土粒を10%ほど含む。中位にあたる3～5層には細かい炭化物粒の混入が認められる。煙出し部は径90cm前後の土坑状に掘り込まれ、確認面からの深さは24cmを測る。上部構造については、削平により不明である。

#### 遺物

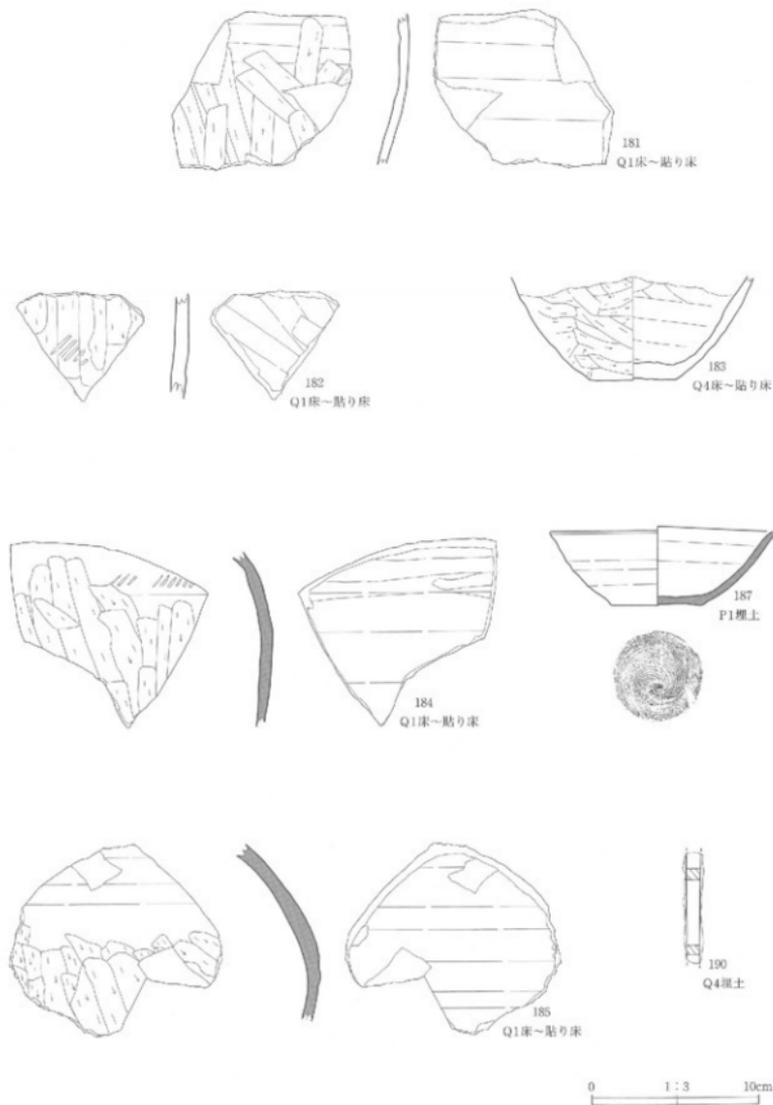
出土しておらず、時期は不明であるが周囲の遺構の年代から推測して平安時代の遺構であると考えられる。



第27図 SI08 竪穴住居跡



第28図 SI08 竪穴住居跡出土遺物 (1)



第29図 S108 竪穴住居跡出土遺物(2)

## S108竪穴住居跡

## 遺構(第27図、写真図版9)

[位置・重複関係] 調査区中央部西側ⅢB1γグリッドに位置している。検出面はⅢ層で、焼土ブロックを含む黒褐色のプランとして確認した。西側の大部分は調査区域外にかかっており、調査できたのは北東隅の一部分のみである。

[規模・平面形] 東辺-310cm、南辺-224cmの隅丸方形基調と思われる。東辺と南辺は残存値である。[埋土] 4層に細分され、にぶい黄褐色～灰黄褐色シルト主体で構成される。このうち、第3層には粘性のやや強い黄橙色シルトがレンズ状に堆積する。最下層に焼土ブロックと炭化物粒を1%程度含む黒褐色シルトの堆積が見られる。

[壁] 調査区際土層断面によれば、壁高の残存値は南側57cm、東側49cmである。いずれも外傾しながら立ち上がるものと思われるが、断面が主軸に対して斜方向にかかるため本来の形状は不明である。

[床面] Ⅲ層中に形成されている。ほぼ平坦で締まりは特に認められない。検出範囲はほぼ全域に明黄褐色ブロックを微量含む黒褐色シルトによる貼り床が施される。

[カマド] 南東隅に構築される。カマド本体は褐色シルトを10%ほど含む黒褐色シルト主体で構築され、左袖には20×47cmの楕円礫が芯材として用いられる。焼上の範囲は70×104cmの不整形で、最も厚いところで5cmを測る。煙道部は検出した範囲では確認できず、削平により消失した可能性が高い。

[柱穴・ビット] カマド右脇から1基確認された(P1)。規模は径45～47cm、深さ16cmを測る。底面からは坏1点(187)が出土している。構築位置や、出土遺物などから判断して貯蔵穴であったと推測される。

## 遺物(第28、29図・写真図版57・58)

23点が出土した。カマド構成土より土師器甕2点、Q1床～貼り床より土師器坏2点・甕10点・須恵器坏1点・蓋1点・甕壺類2点・大甕1点、P1埋土より須恵器坏が1点、埋土中より土師器の坏片1点・甕片1点・棒状鉄製品1点が出土している。器種は土師器坏3点、甕13点、須恵器坏1点・蓋1点・甕壺類2点・大甕1点で構成され、土師器の製作に際してはいずれもロクロが使用される。

## S109竪穴住居跡

## 遺構(第30図、写真図版10)

[位置・重複関係] 調査区北東部ⅢB6uグリッドに位置している。検出面は、層で、土師器片を含む黒褐色のプランとして確認した。北西隅は調査区域外にかかり未調査である。検出時既に削平によって埋土の大半は失われており、ほぼ床面を残すのみであった。

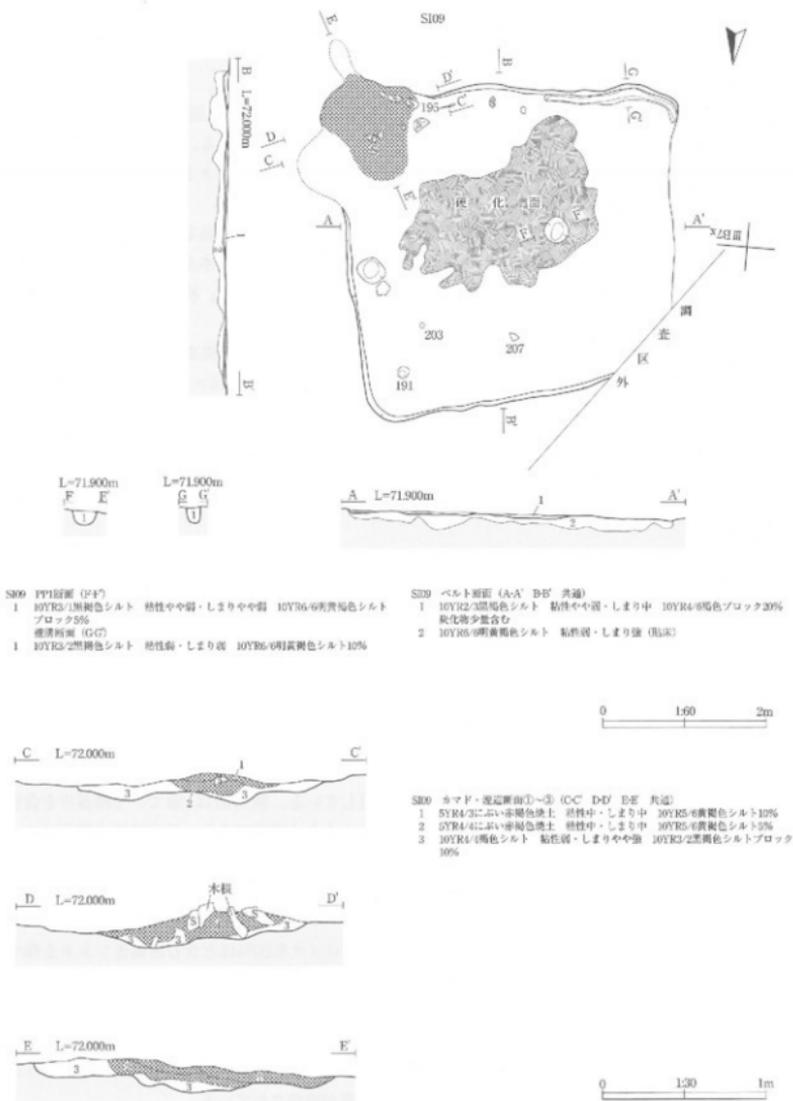
[規模・平面形] 東辺425cm、西辺(356)cm、南辺427cm、北辺(374)cmの隅丸長方形を呈する。西辺と北辺は推定値である。

[埋土] 残存していたのは1層のみである。全体に褐色ブロックを20%ほど含む黒褐色シルト主体で構成される。また、ごく少量の炭化物が混入する。

[壁] 壁高の残存値は北西から東側3cm、西側2cm、南側7cm、北側3cmである。

[床面] IV層中に形成されており、ほぼ平坦である。ほぼ全域に明黄褐色シルトによって貼り床が施されるが、中央部は160×250cmの範囲で硬化面が認められ特にガリガリと堅く締まる。床面より18点の遺物が出土した。また、南壁ぎわ西半部において壁溝が確認されている。

[カマド] 南東隅に構築される。カマド本体は黒褐色～明褐色シルト主体で構築され、右袖には23×

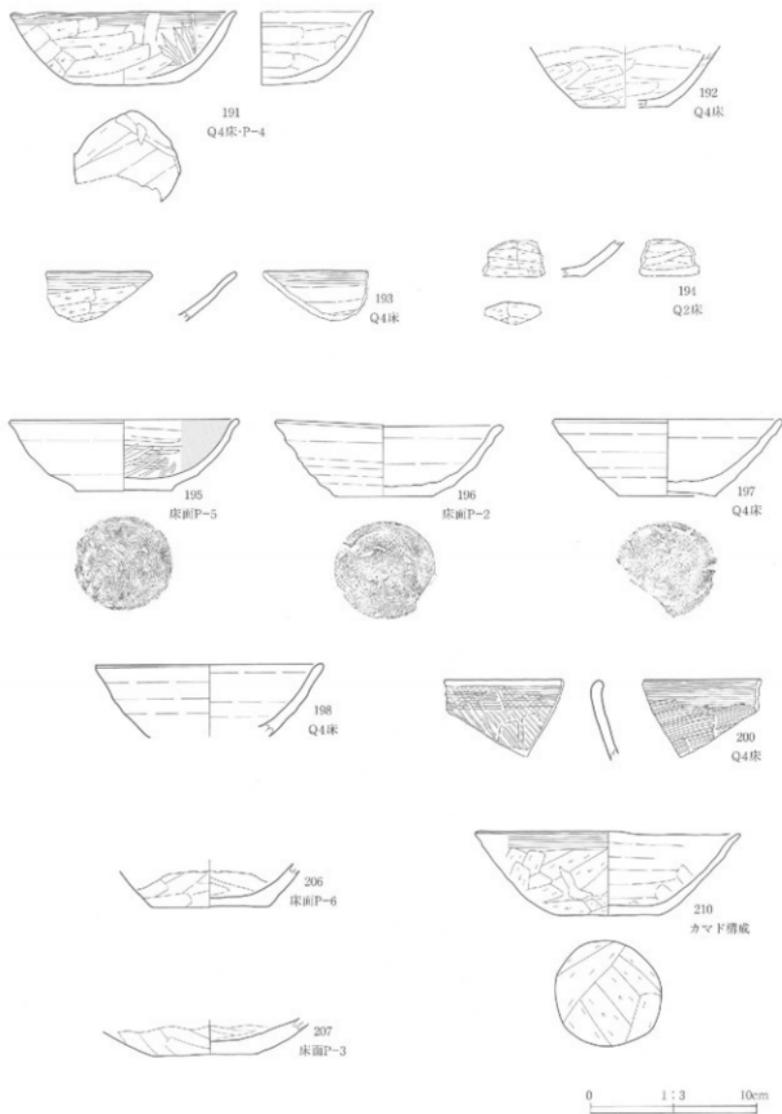


- SI09 内堀面 (D4)
- 1 10YR3/1黒褐色シルトブロック5%
- 2 10YR3/2黒褐色シルト 粘性弱・しまり強 10YR6/0明黄褐色シルト10%

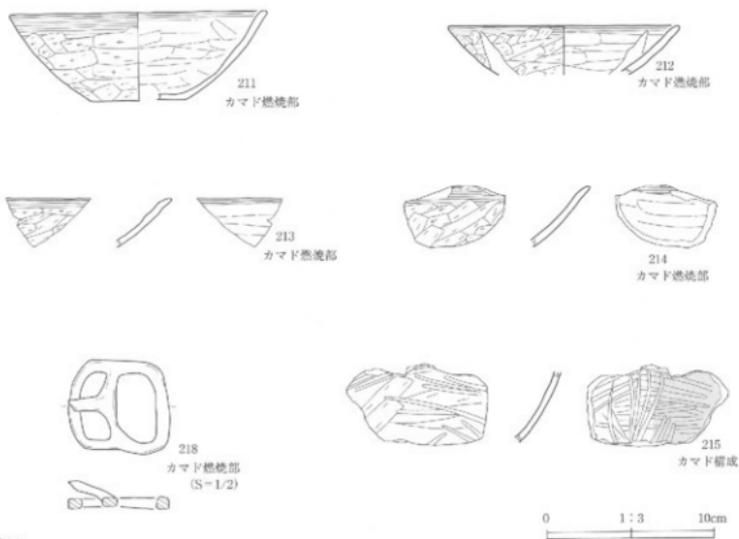
- SI09 ベルト断面 (A-A' B-B' 共通)
- 1 10YR2/3暗褐色シルト 粘性やや弱・しまり中 10YR4/0褐色ブロック30% 炭化物少量含む
- 2 10YR5/0明黄褐色シルト 粘性弱・しまり強 (陥床)

- SI09 カマド・竈断面①~③ (C-C' D-D' E-E' 共通)
- 1 5YR4/3こぶい赤褐色粘土 粘性中・しまり中 10YR5/0黄褐色シルト10%
- 2 5YR4/4こぶい赤褐色粘土 粘性中・しまり中 10YR5/0黄褐色シルト5%
- 3 10YR4/0褐色シルト 粘性弱・しまりや強 10YR3/2黒褐色シルトブロック10%

第30図 SI09 竪穴住居跡

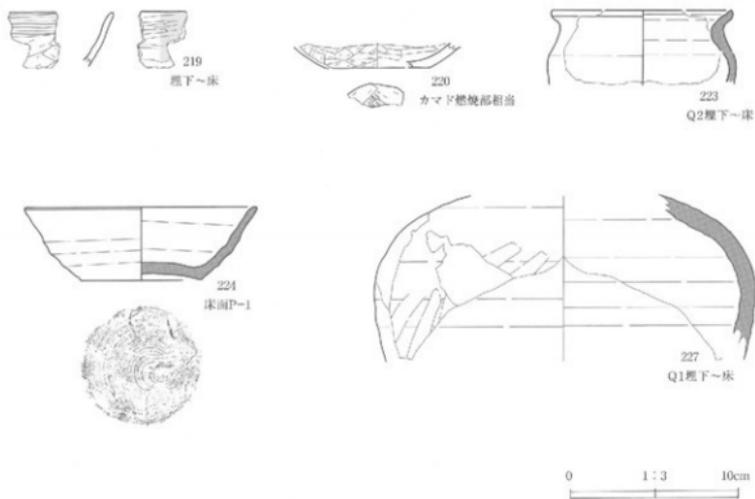


第31図 SIO9 竪穴住居跡出土遺物 (1)



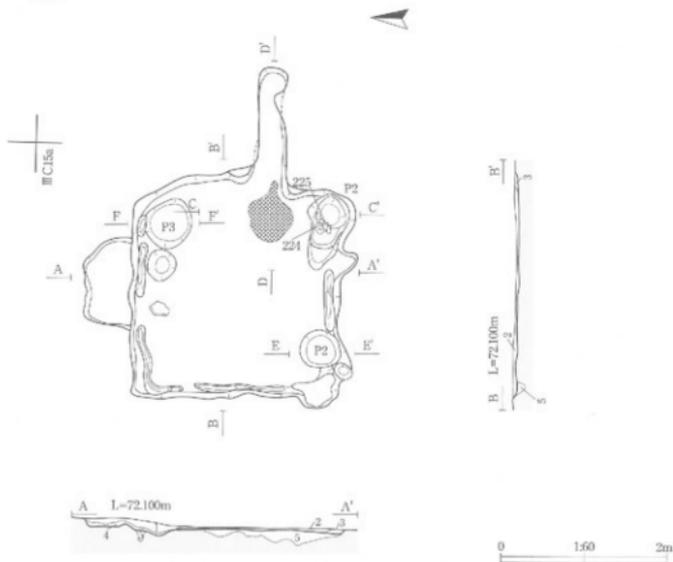
SI09

SI10



第32図 SI09 竪穴住居跡出土遺物(2)・SI10 竪穴住居跡出土遺物

SI10



SI10 ベルト断面 (A-A' B-B' 共通)

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘液中・しまりやや強
- 2 10YR2/1黒褐色シルト 粘液中・しまり中 10YR5/8黄褐色シルトブロック1%
- 3 10YR2/1黒褐色シルト 粘液中・しまり中 5YR5/8暗赤褐色シルトブロック3%
- 4 10YR2/1黒褐色シルト 粘液中やや弱・しまりやや弱
- 5 10YR2/1黒褐色シルト 粘液中やや弱・しまりやや弱 10YR5/8黄褐色シルト10%



SI10 P2断面 (E-E')

- 1 10YR2/1黒褐色シルト 粘液中・しまり中
- 2 10YR2/3黒褐色シルト 粘液中・しまり中
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘液中・しまり中



SI10 P3断面 (F-F')

- 1 10YR2/1黒褐色シルトと10YR5/8黄褐色シルトの混合土 粘液中やや弱・しまりやや弱



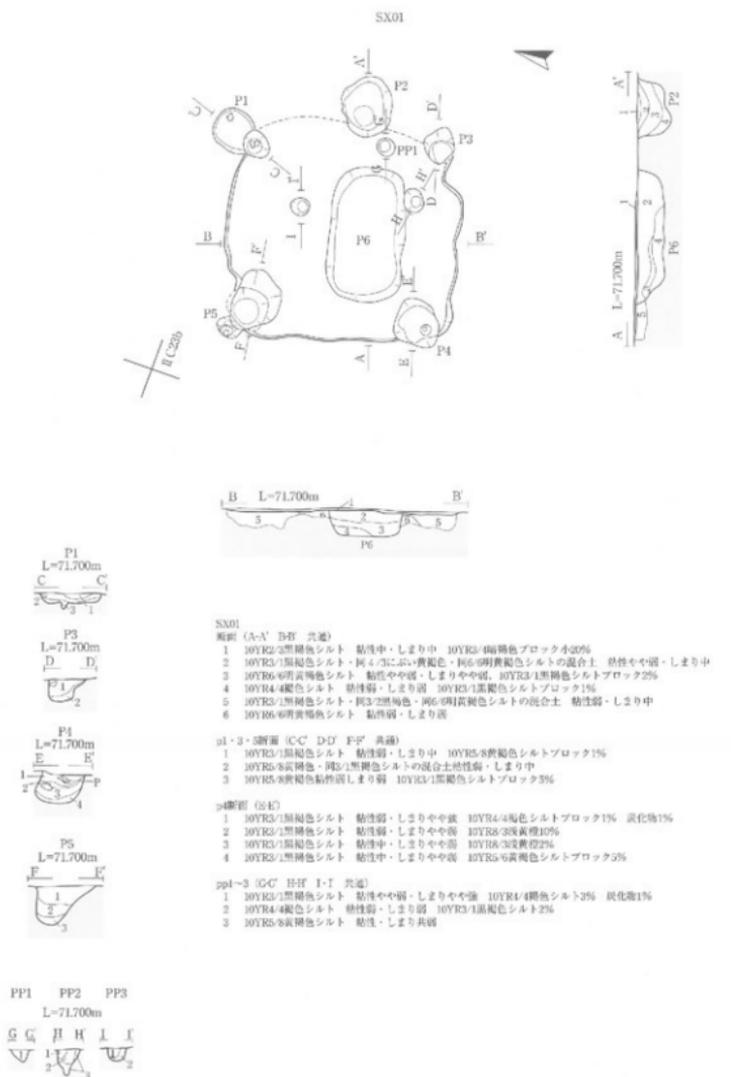
SI10 カマド・煙道断面 (C-C' D-D' 共通)

- 1 10YR2/3黒褐色シルト 粘液中やや弱・しまりやや強 10YR3/3暗褐色シルトブロック2%
- 2 10YR2/3黒褐色シルト 粘液中やや弱・しまりやや強 10YR4/6褐色シルトブロック50%
- 3 10YR2/3黒褐色シルト 粘液中やや弱・しまりやや強 10YR4/6褐色シルトブロック10%
- 4 10YR4/6褐色シルト 粘液中・しまり中
- 5 10YR2/3暗褐色シルト 粘液中・しまり中 10YR2/3暗褐色シルトブロック1%
- 6 10YR4/6褐色シルト 粘液中・しまり中 10YR3/1黒褐色シルトブロック2%
- 7 10YR2/1黒褐色シルト 粘液中・しまり中 10YR2/3暗褐色シルトブロック10%
- 8 10YR4/6褐色シルト 粘液中やや弱・しまりやや強 10YR2/1黒褐色シルトブロック3% (P2埋土)
- 9 10YR2/1黒褐色シルト 粘液中・しまり中 10YR4/6褐色シルトブロック6% (P2埋土)



0 1:30 1m

第33図 SI10 竪穴住居跡



第34図 SX01 竪穴住居跡状遺構

25cmの垂角礫が芯材として用いられる。火床面は58×68cmの楕円形で、明赤褐色焼土が11cmにわたって形成されている。燃焼部中央からは鋭具(218)が検出されている。検出状況から判断して何らかの意図をもってカマド内に残されたものと推測される。煙道部は残存部で幅23cm、長さ45cm、深さ11cm程の溝状を呈し、煙出し部へ向かい短く突出するような形状を呈する。上部構造は削平により不明である。

〔柱穴・ピット〕柱穴が1基確認された(PP1)。規模は径30～33cm、深さ18cmを測る。ピット上面では貼り床が未確認であったことから、開口した状態で使用されていたものと推測される。

#### 遺物(第31～32図、写真図版58～59)

28点が出土した。床面より土師器環9点・甕7点・壺1点・須恵器大甕2点、カマド中より土師器環7点・高台環1点、カマド燃焼部より鋭具1点が出土している。器種は土師器環16点、高台環1点、甕7点、壺1点、須恵器大甕2点で構成され、土師器の製作に際してロクロが使用されるもの(5点)と、使用されないもの(13点)とが混在する。後者は粘土紐巻き上げ、ユビ押さえによる成形を経て、体部はヘラケズリ調整される。これらは底部にムシロの圧痕を持つもので、器種には環・甕がみられる。内、191・192・194・210～215は調整技法等の特徴から、本来はムシロ痕を有する可能性が高いと考えられるが、底部を欠くため詳細は不明である。

### S110竪穴住居跡

#### 遺構(第33図、写真図版11)

〔位置・重複関係〕調査区北東部ⅢB16zグリッドに位置している。検出面はⅢ層下位～Ⅳ層で、黒褐色のプランとして確認した。検出時既に削平によって埋土の大半は失われており、ほぼ床面を残すのみであった。

〔規模・平面形〕東辺267cm、西辺267cm、南辺241cm、北辺255cmの隅丸長方形を呈する。

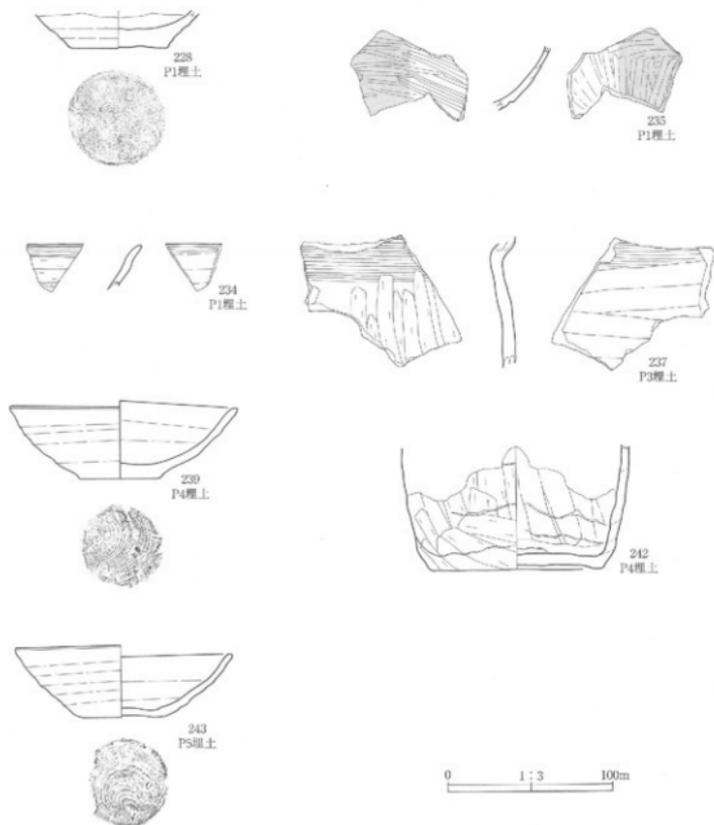
〔埋土〕4層に細分され、黒褐色シルト主体で構成される。上位に橙色焼土の小ブロックと炭化物を少量含む。

〔壁〕壁高の残存値は東側4cm、西側6cm、南側6cm、北側10cmである。

〔床面〕Ⅳ層中に形成されている。ほぼ平坦で縮まりは特に認められない。南側に黄褐色シルトブロックを10%程含む黒褐色シルトによる貼り床が施される。北壁ほぼ中央部において48×113cmほどの不整な長方形基調を呈する張り出し状のプランを確認した。埋土は黒褐色シルト主体で構成され、縮まりはやや強い。構築部位、形状などから出入り口であった可能性がある。また、東辺を除く壁ぎわには壁溝が途切れながら全周する。

〔カマド〕東壁の中央やや南寄りに構築される。カマド本体の残存状態は、削平と風倒木による攪乱のためきわめて不良である。このため残存するのは火床面の一部にすぎない。形成された焼土の範囲は51×75cmの楕円形で、明赤褐色焼土が7cmにわたって形成されている。煙道部は残存部で幅34cm、長さ132cmの溝状を呈し、煙出し部へ向かいほぼ平坦な角度をもって延びる。煙出し部は径34cm前後の土坑状に掘り込まれ、確認面からの深さは4cmを測る。上部構造は、削平により不明である。

〔柱穴・ピット〕P1～P3の3基が確認された。規模は径39～123cm、深さ20～53cmを測る。P1はカマド右脇から検出された土坑で、規模は50×95cm、深さ33cmを測る。埋土からは須恵器環1点(243)が出土している。P2はQ2床面で確認された。ピット上面では貼り床が未確認であったことから、開口した状態で使用されていたものと推測される。P3は左袖部前方に位置するものである。これらは構築位置や、出土遺物などから判断して貯蔵穴といった用途で使用されていたものと考えられる。



第35図 SX01 竪穴住居跡状遺構出土遺物

**遺物** (第32図、写真図版59)

9点が出土した。カマド燃焼部相当から土師器坏片1点・甕片2点、埋土下位～床から土師器坏片1点・須恵器壺甕2点、P1埋土より須恵器坏片2点が出土している。器種は土師器坏片3点、甕2点、須恵器坏片2点、甕壺類2点で構成され、土師器の製作に際してはロクロが使用されるものと、使用されないものが混在する。後者は体部調整がヨコナデ→ヘラケズリ、もしくはナデ調整され、底面にはムシロ痕を有する(220)。

**(2) 竪穴住居状遺構****SX01竪穴住居状遺構****遺構** (第34図、写真図版12～13)

[位置・重複関係] 調査区中央部西側II C23aグリッドに位置している。検出面はⅢ下～Ⅳ層で、黒褐色の隅丸方形プランとして確認した。残存状態は不良で、検出した時点でほぼ床面であった。東壁はプランが消失しているため、南辺・北辺は残存値である。

[規模・平面形] 東辺283cm、西辺274cm、南辺(261)cm、北辺(280)cmの隅丸長方形を呈する。南辺と北辺は残存値である。

[埋土] 検出時点で床面近く、黒褐色シルトの堆積が確認されるにすぎない。

[壁] 壁高の残存値は東側0cm、西側2cm、南側3cm、北側3cmである。

[床面] Ⅲ層中に形成されている。ほぼ平坦で締まりは特に認められない。東側を除くほぼ全域に明黄褐色シルトと黒褐色シルトの混合土による貼り床が施され、北側と南側に特に厚く形成される。

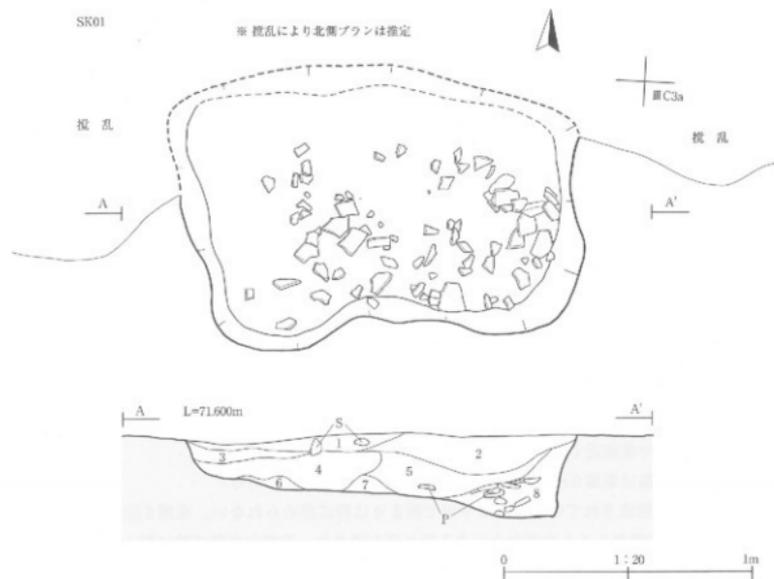
[カマド] 確認できなかった。

[柱穴・ビット] P1～P6の6基が確認された。規模は径45～72cm、深さ12～46cmを測る。P1～P5は円形～楕円形プランを呈し、それぞれ北東隅、東壁中央、南東隅、南西隅、北西隅に構築される。P6は長方形プランを呈し床面はほぼ中央部に位置している。うち、北東隅に位置するP1と東壁中央に位置するP2は壁面から突出するような様相を呈するが、本来突出する形態であったか否かは、建物東側プランが不明確であるため判断できかねた。中央部から東側にかけて径22～27cmを測る小穴が3基検出され(pp1～pp3)、配置から主柱穴を構成すると思われる。

[フローテーション・炭化種子同定の実施] 本遺構の床面に掘削された土坑と柱穴(P1～5、pp1～3)を対象とした堆積土のフローテーションと、その結果得られた試料の同定までの一連の作業を古代の森研宄舎に委託している。その結果、穀類としてイネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエ、キビ近似種、利用植物としてオニグルミ、クリ、ブナ科、ウメ、マタタビ、トチノキ、ミズキ、アサ、ササゲ属、マメ科、ウルシ属その他多種にわたる炭化植物試料が得られている。(分析鑑定の詳細参照)。

**遺物** (第35図、写真図版59・60)

19点が出土した。床面から土師器の坏片2点、甕片1点、P1埋土より土師器坏片5点、P2埋土より土師器坏片1点、P3埋土より土師器甕片2点、P4埋土より土師器坏片2点、甕片2点、P5埋土より土師器坏片2点、甕片1点、pp2埋土より土師器坏片1点が出土している。器種は土師器坏片13点、甕片6点で構成され、坏の製作に際してはいずれもロクロが使用される。このほか炭化種子が出土している。



SK01

- |   |                |         |                     |                    |            |
|---|----------------|---------|---------------------|--------------------|------------|
| 1 | 10YR2/2 褐色シルト  | 粘中・しまり中 | 10YR4/6 褐色シルトブロック2% | 7.5YR4/8 赤褐色焼土粒小1% | 炭化物粒小1%    |
| 2 | 10YR2/2 黒褐色シルト | 粘中・しまり中 | 4.5シルトブロック小30%      |                    |            |
| 3 | 10YR2/2 黒褐色シルト | 粘中・しまり中 | 4.5シルトブロック中40%      | 4.8焼土粒30%          | 炭化物小1%     |
| 4 | 10YR2/2 黒褐色シルト | 粘中・しまり中 | 4.5シルトブロック中40%      | 炭化物小5%             |            |
| 5 | 10YR2/2 黒褐色シルト | 粘中・しまり中 | 4.8焼土ブロック小30%       | 2.2シルトブロック5%       | 炭化物ブロック小1% |
| 6 | 10YR4/6 褐色シルト  | 粘中・しまり中 | 2.2シルトブロック40%       | 4.8焼土粒25%          |            |
| 7 | 10YR4/6 褐色シルト  | 粘中・しまり中 | 4.8焼土ブロック30%        | 土器片多数含む            |            |
| 8 | 10YR4/6 褐色シルト  | 粘中・しまり中 |                     |                    |            |

第36図 SK01 土坑

### (3) 土 坑

#### SK01土坑

##### 遺 構 (第36図、写真図版14)

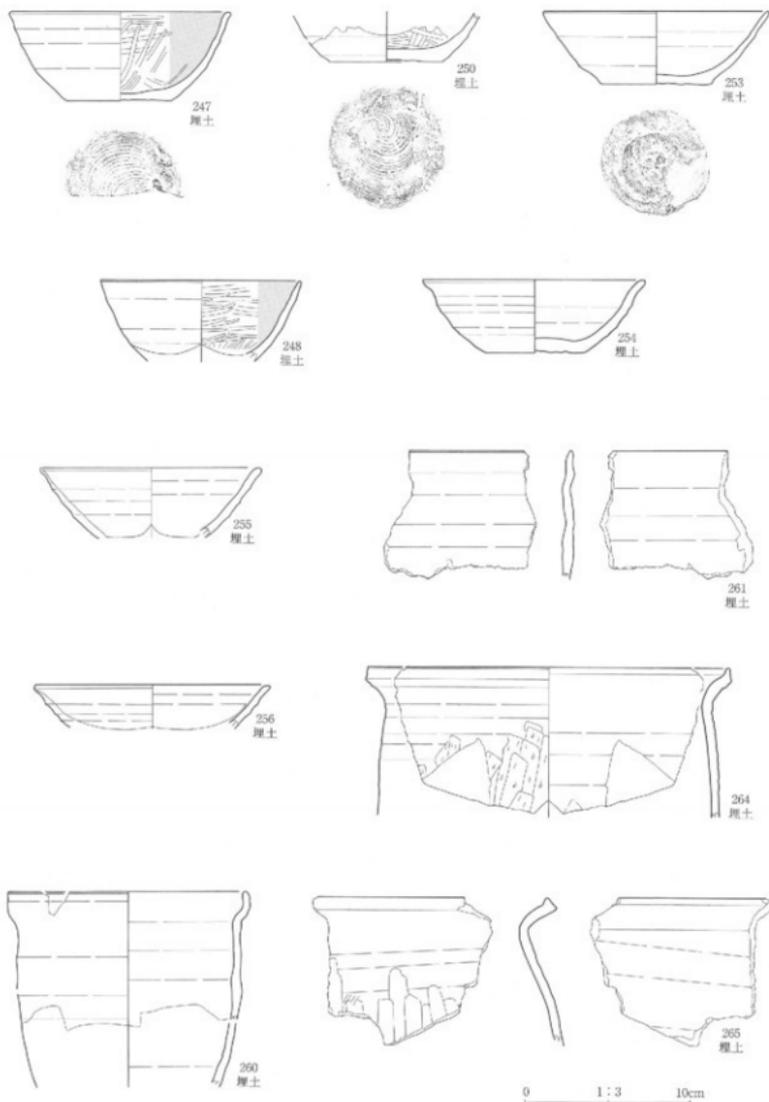
[位置・重複関係] 調査区中央部南寄り、III C 3 c グリッドに位置する。検出面はⅢ層で赤褐色焼土と炭化物粒、褐色シルトブロックを僅かに含む黒褐色のプランとして確認した。北半部が後世の擾乱による破壊を受けており、短径の値は推定値である。

[規模・形状] 開口部径(105)×158cm、底部径(100)×142cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で35cmを測る。

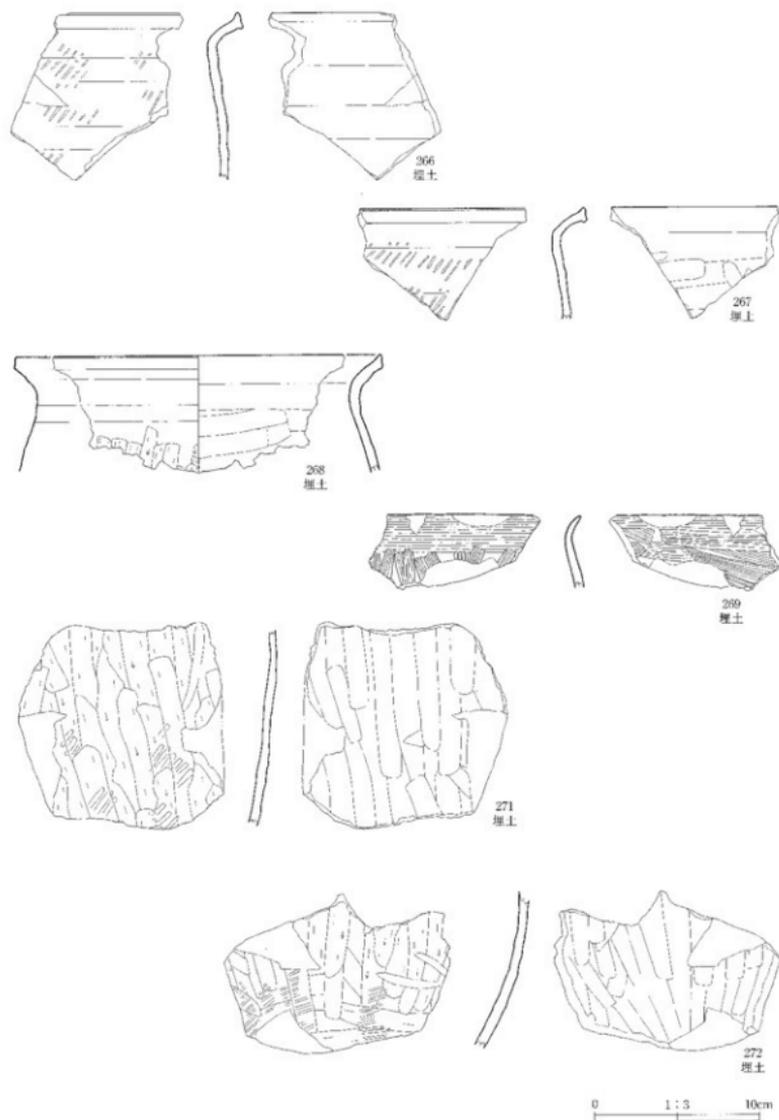
[埋土] 8層に細分される。上位は黒褐色シルト主体、下位は褐色シルト主体で構成され、4・6層に赤褐色焼土を粒～ブロック状に少量含む。8層褐色シルト中に遺物片を多量に含む。

##### 遺 物 (第37～39図、写真図版60・61)

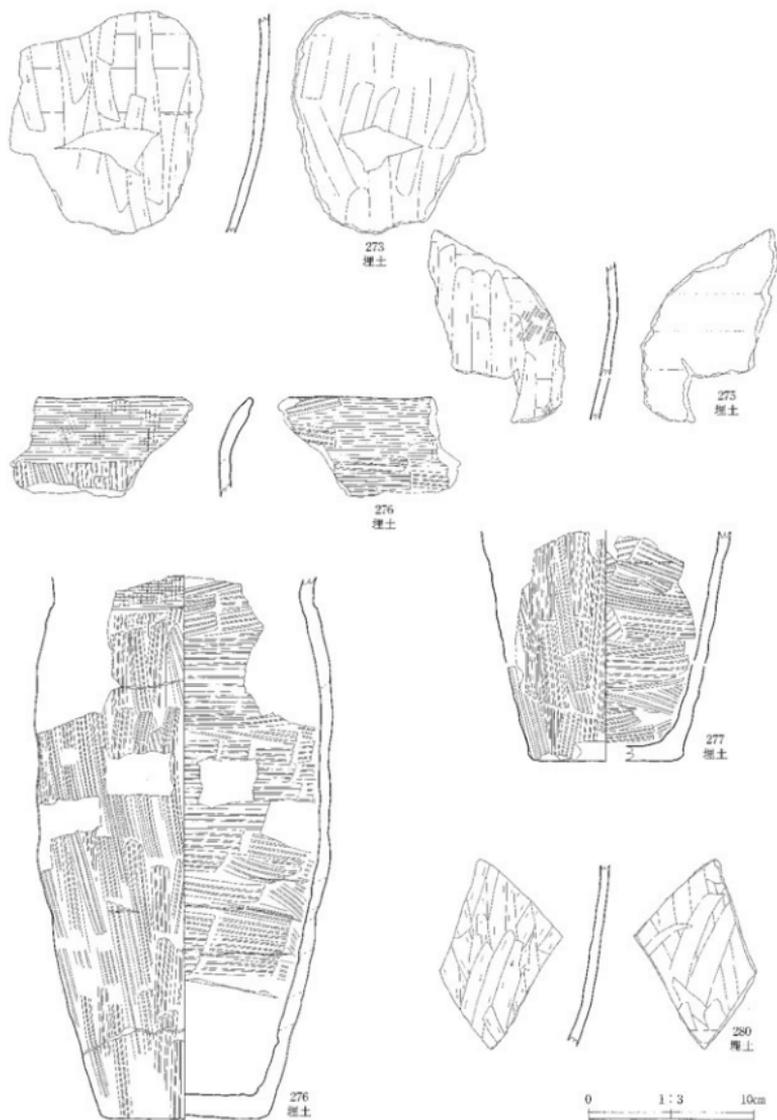
8層～床面にかけて34点の遺物が出土している。内訳は土師器坏片7点、麦片19点、須恵器坏片7点、粟室類片1点である。時期は出土遺物の特徴から判断して平安時代と思われる。



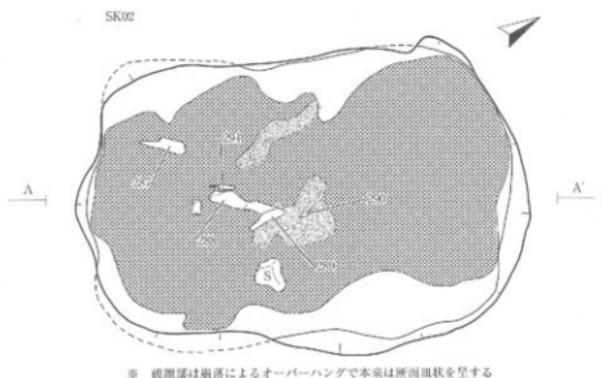
第37图 SK01 土坑出土遺物 (1)



第38図 SK01 土坑出土遺物 (2)



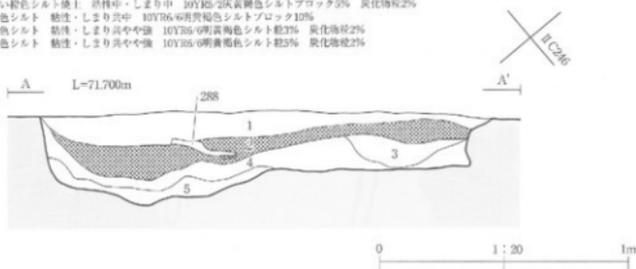
第39図 SK01 土坑出土遺物 (3)



※ 破線部は崩落によるオーバーハングで本来は断面形状を呈する

SK02

- 1 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘土中・しまり中 5YR5/6橙色シルト焼土ブロック25% 炭化物粒3%
- 2 5YR5/4紅褐色シルト強土 炭粒中・しまり中 10YR2/2灰黄褐色シルトブロック3% 炭化物粒2%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘土・しまり中 10YR6/6明黄褐色シルトブロック10%
- 4 10YR2/2黒褐色シルト 粘土・しまり中や強 10YR5/6明黄褐色シルト粒3% 炭化物粒2%
- 5 10YR2/2黒褐色シルト 粘土・しまり中や強 10YR5/6明黄褐色シルト粒5% 炭化物粒2%



第40図 SK02 土坑

SK02土坑

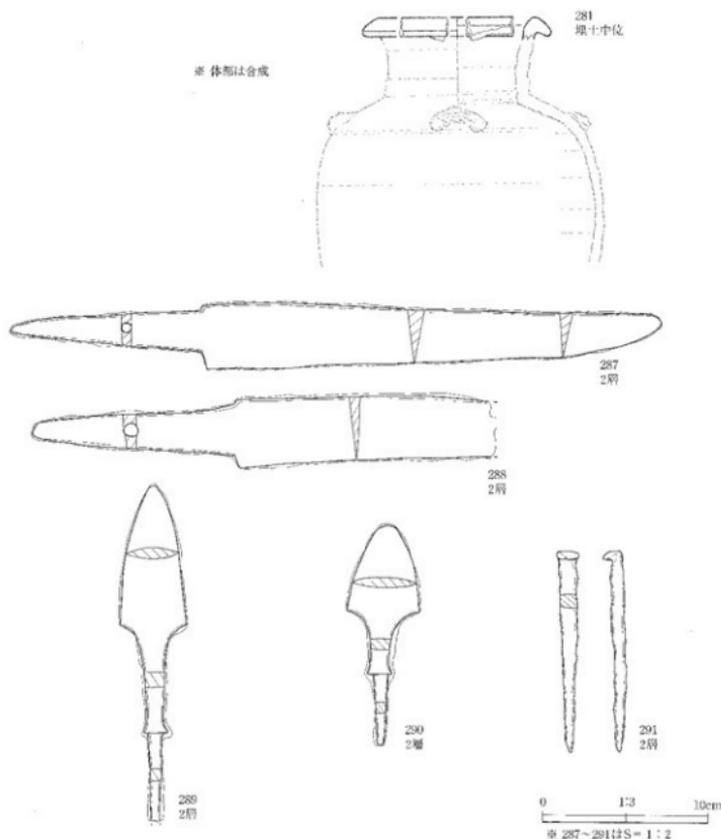
遺 構 (第40図、写真図版14)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C24aグリッドに位置する。検出面はⅢ層でブロック状の橙色焼土による隅丸長方形のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径125×181cm、底部径116×170cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で37cmを測る。

[埋土] 5層に細分される。上半部は橙色～にぶい橙色のブロック状の焼土主体、下半部は明黄褐～にぶい黄褐色シルトを主体として構成される。2層の焼土層中より多数の遺物が出土している。

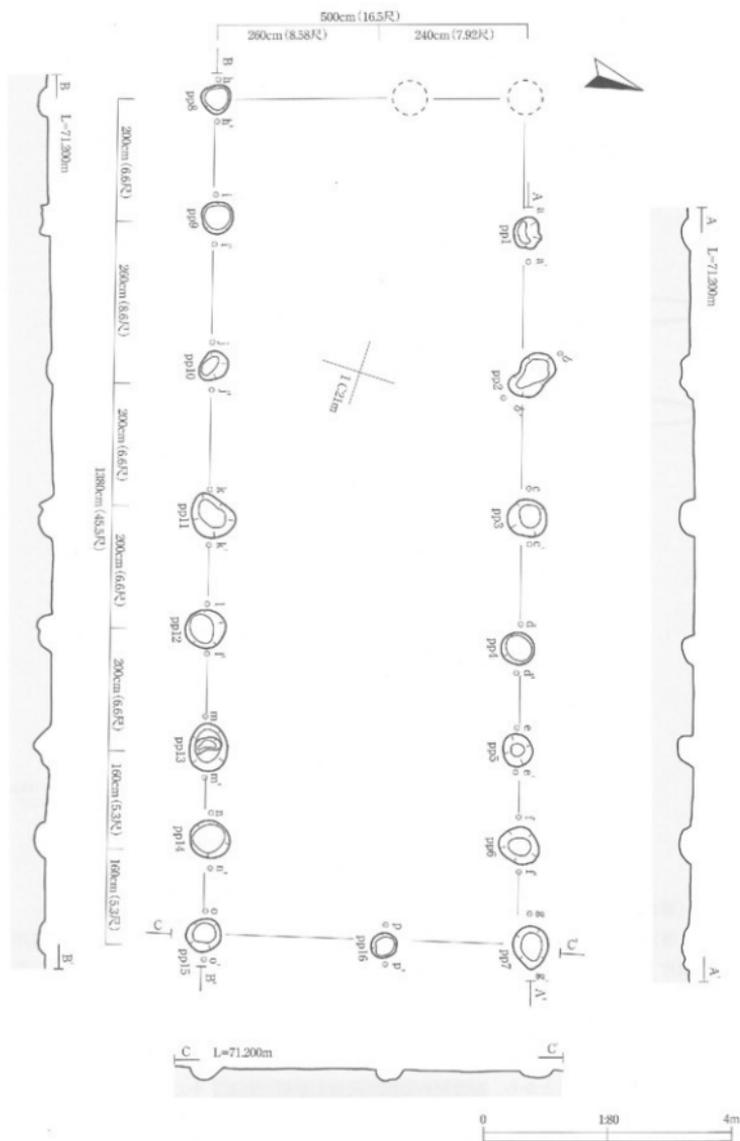
[フローテーション、炭化種子同定、炭化物AMS年代測定の実施] 5層の黒褐色土を対象にフローテーションを実施し、得られた炭化種子の同定を、古代の森研研究舎に委託した。また、同層から得られた炭化物片については加速器研究所にAMS法による年代測定を委託している(結果については分析・鑑定の項参照)。



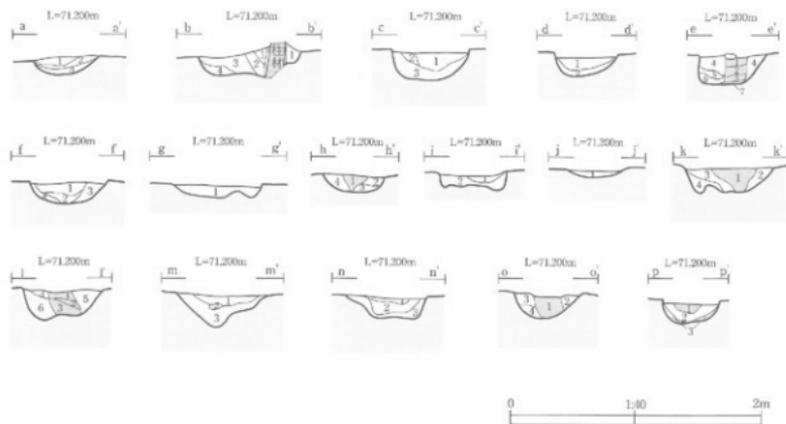
第41図 SK02 土坑出土遺物

## 遺物 (第41図、写真図版62)

2層～5層にかけて18点の遺物が出土している。内訳は白磁四耳壺の口縁部片1点、土師器坏片3点、菱壺類片1点、焼成粘土塊1点、鉄製品(小刀2点、鉄鎌2点、釘1点)、焼礫片4点、炭化種子(イネ1、オオムギ2)である。白磁四耳壺片(281)は2層焼土内から出土している。口縁部片しか残存せず、全体の形状は不明である。県内の類例としては、平泉町柳之御所跡、江刺市豊田館擬定地(豊田城)出土の白磁四耳壺などが挙げられ、本遺跡出土の破片もこれらと口縁部の形態的な特徴、および胎土の特徴が似ることから、11～12世紀代の所屬と推測される。小刀は形式学的特徴から11世紀上限とする特徴を持つ。その他、5層中より焼骨片が少量得られている。遺構の時期は、白磁片、鉄製武具の形式学的年代と年代測定の結果から11世紀～12世紀にかけての所屬と考えられる。



第42図 SB01 掘立柱建物跡 (1)



SB01

P1 (a-a')

- 1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色粒中10%
- 2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色ブロック30%
- 3 10YR3/3暗褐色粘性・しまり中 10YR3/3黒褐色ブロック10%

P2 (b-b')

- 1 10YR 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色粒5%
- 2 10YR 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色粒40% L7/1粒1% 3/3暗褐色ブロック10%
- 3 10YR4/6褐色シルト 3/3暗褐色ブロック大40% 10YR3/1黒褐色ブロック小5%
- 4 10YR4/6褐色シルト 3/3暗褐色ブロック40% 10YR3/1黒褐色ブロック10%

P3 (c-c')

- 1 10YR 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色粒5%
- 2 10YR 10YR3/3暗褐色シルト 10YR4/6褐色粒小1%
- 3 10YR4/6褐色シルト 3/3暗褐色ブロック10% 10YR3/1黒褐色板状30%

P4 (d-d')

- 1 10YR 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色ブロック中20% 3/3暗褐色ブロック大20% L7/1粒5%
- 2 10YR4/6褐色シルト 10YR3/1黒褐色ブロック大5%

P5 (e-e')

- 1 10YR 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色ブロック小10%
- 2 10YR 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色粒1%
- 3 10YR 10YR3/1暗褐色シルト 10YR4/6褐色ブロック中40%
- 4 10YR4/6褐色シルト 10YR3/1黒褐色ブロック30%
- 5 10YR 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色ブロック20%
- 6 10YR4/6褐色シルト 10YR3/1黒褐色ブロック20%
- 7 10YR 10YR3/1黒褐色シルト 3/3暗褐色ブロック1%

P6 (f-f')

- 1 10YR 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色粒5% L7/1ブロック5%
- 2 10YR 10YR3/1黒褐色シルト 3/3暗褐色ブロック小40%
- 3 10YR4/6褐色シルト 10YR3/1黒褐色ブロック小30%
- 4 10YR3/3暗褐色シルト 10YR4/6褐色ブロック20% 10YR3/1黒褐色ブロック10%

P7 (g-g')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色ブロック中5% 3/3暗褐色ブロック5%

P8 (h-h')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色粒中10%
- 2 10YR3/3暗褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色粒中10%
- 3 10YR4/2灰黄褐色シルト 10YR3/3暗褐色ブロック中20%、10YR3/1黒褐色粒中5%
- 4 10YR3/3暗褐色シルト4/2 10YR4/2灰黄褐色ブロック中40%、10YR3/1黒褐色小ブロック5%

P9 (i-i')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色ブロック5%
- 2 10YR3/3暗褐色シルト 4/2 10YR4/2灰黄褐色ブロック中40%、10YR3/1黒褐色ブロック10%

P10 (j-j')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色板状中5%

P11 (k-k')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 10YR3/3暗褐色粒小20%、10YR4/2灰黄褐色粒小2%、10YR1/7粒極小1%
- 2 10YR3/3暗褐色シルト 10YR3/1黒褐色ブロック小20% 10YR4/2灰黄褐色ブロック小5% 10YR1/7/1ブロック小1%
- 3 10YR3/3暗褐色シルト 10YR3/1黒褐色ブロック40% 10YR4/2灰黄褐色ブロック小3%
- 4 10YR3/3暗褐色シルト 10YR3/1黒褐色ブロック40% 10YR4/2灰黄褐色ブロック10%

P12 (l-l')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色ブロック小3%
- 2 10YR3/3暗褐色シルト 10YR3/1黒褐色ブロック小1% 10YR4/2灰黄褐色ブロック小5%
- 3 10YR3/3暗褐色シルト 10YR3/1黒褐色ブロック30% 10YR4/2灰黄褐色ブロック小10%
- 4 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色ブロック中40%
- 5 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色ブロック小1%
- 6 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色ブロック中30%

P13 (m-m')

- 1 10YR3/3暗褐色シルト 10YR3/1黒褐色ブロック小3%
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルト 10YR3/3暗褐色ブロック10%
- 3 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色ブロック大40%、10YR3/3暗褐色ブロック大10%

P14 (n-n')

- 1 10YR3/3暗褐色シルト 10YR1/7/1ブロック小10%
- 2 10YR3/3暗褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色粒極小1%
- 3 10YR3/3暗褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色ブロック小20% 10YR1/7/1ブロック2%

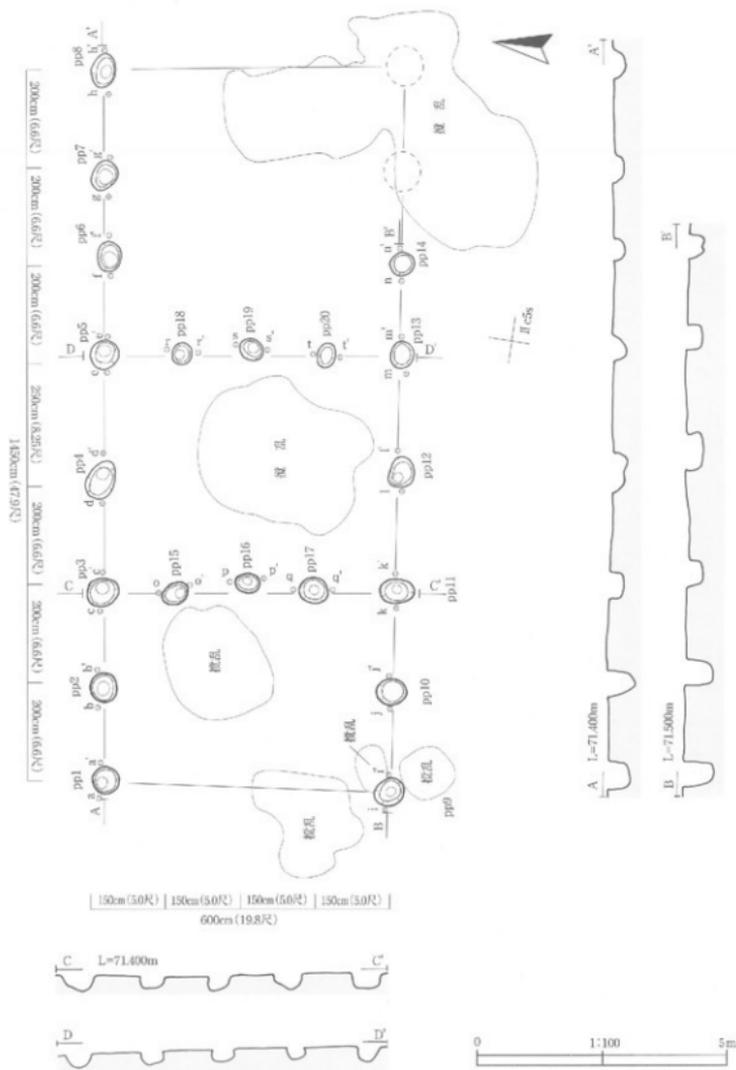
P15 (o-o')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色粒極小2%
- 2 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色ブロック小1%
- 3 10YR3/1黒褐色シルト
- 4 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/2灰黄褐色ブロック中10%

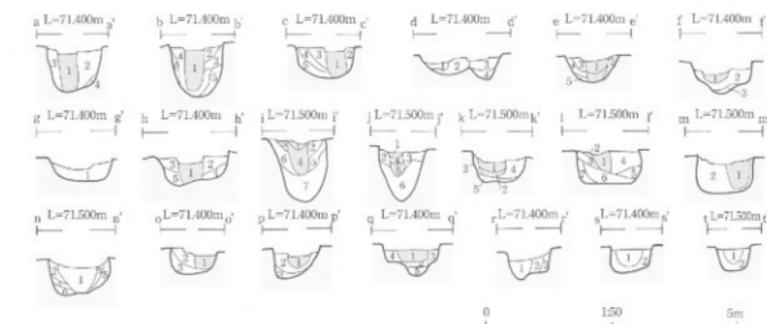
P16 (p-p')

- 1 10YR10YR3/1暗褐色シルト 10YR4/6褐色ブロック小10%
- 2 10YR10YR3/1暗褐色シルト 10YR4/6褐色ブロック小40%
- 3 10YR4/6褐色シルト 10YR3/1暗褐色ブロック20%

第43図 SB01 掘立柱建物跡 (2)



第44図 SBO2 掘立柱建物跡 (1)



PP1 (a-a')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4-6褐色 1%
- 2 10YR3-2黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中 10YR4-6褐色ブロック2%
- 3 7.5YR3-2黄褐色シルト 10YR4-6褐色ブロック2%
- 4 7.5YR3-2黄褐色シルト 10YR4-6褐色ブロック2%

PP2 (b-b')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱
- 2 10YR3-2黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中
- 4 10YR2-3黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中
- 5 10YR2-3黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中
- 6 7.5YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱

PP3 (c-c')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック1%
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック10%
- 3 10YR3-2黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色軟状土
- 4 10YR3-2黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック20%
- 5 10YR3-2黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック20%

PP4 (d-d')

- 1 10YR3-2黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中 10YR2-3黄褐色ブロック7%
- 2 10YR3-2黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中 10YR3-4黄褐色ブロック小10%
- 3 10YR3-2黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中
- 4 10YR3-2黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中 10YR2-3黄褐色ブロック小2%

PP5 (e-e')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR3-3黄褐色シルト
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR3-3黄褐色ブロック1%
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR3-3黄褐色ブロック1%
- 4 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR3-3黄褐色ブロック10%
- 5 10YR3-4黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中 10YR2-3黄褐色ブロック50%

PP6 (f-f')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱
- 2 10YR4-6黄褐色シルト 10YR3-3黄褐色上20%
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR3-6黄褐色ブロック30%

PP7 (g-g')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色粘土小1%

PP8 (h-h')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR3-4黄褐色軟状土
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR3-4黄褐色軟状土
- 4 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR3-4黄褐色ブロック
- 5 10YR2-3黄褐色シルト 粘性やや強・しまり中

PP9 (i-i')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色軟状土小1%
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色軟状土30%
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色軟状土小2%
- 4 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色ブロック2%
- 5 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色ブロック7%
- 6 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色ブロック1%
- 7 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色ブロック2%

PP10 (j-j')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色軟状土小1%
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色軟状土小1%
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色軟状土小2%
- 4 10YR5-6黄褐色シルト 10YR2-3黄褐色約5%
- 5 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色約2%
- 6 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色約3%

PP11 (k-k')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色ブロック小2%
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック1%
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色シルト1%
- 4 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色シルト1%
- 5 10YR2-6黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR2-3黄褐色約5%

PP12 (l-l')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色約1%
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色粘土小1%
- 4 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色粘土小2%
- 5 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色約1%
- 6 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色約10%
- 7 7.5YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱

PP13 (m-m')

- 1 7.5YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱

PP14 (n-n')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック2%
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック20%
- 4 10YR2-3黄褐色シルト 粘性中・しまり中弱
- 5 10YR2-3黄褐色シルト 粘性中・しまり中弱
- 6 10YR2-3黄褐色シルト 粘性中・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック2%

PP15 (o-o')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色約2%
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色約1%
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック20%

PP16 (p-p')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック1%
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック1%
- 3 10YR4-6黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR2-3黄褐色ブロック20%

PP17 (q-q')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック1%
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック2%
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック2%
- 4 10YR3-4黄褐色シルト 粘性中弱・しまり中 10YR4-6褐色ブロック3%
- 5 10YR2-3黄褐色シルト 粘性中・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック20%

PP18 (r-r')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック2%
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR4-6褐色ブロック2%
- 3 10YR2-3黄褐色シルト 粘性中・しまり中弱

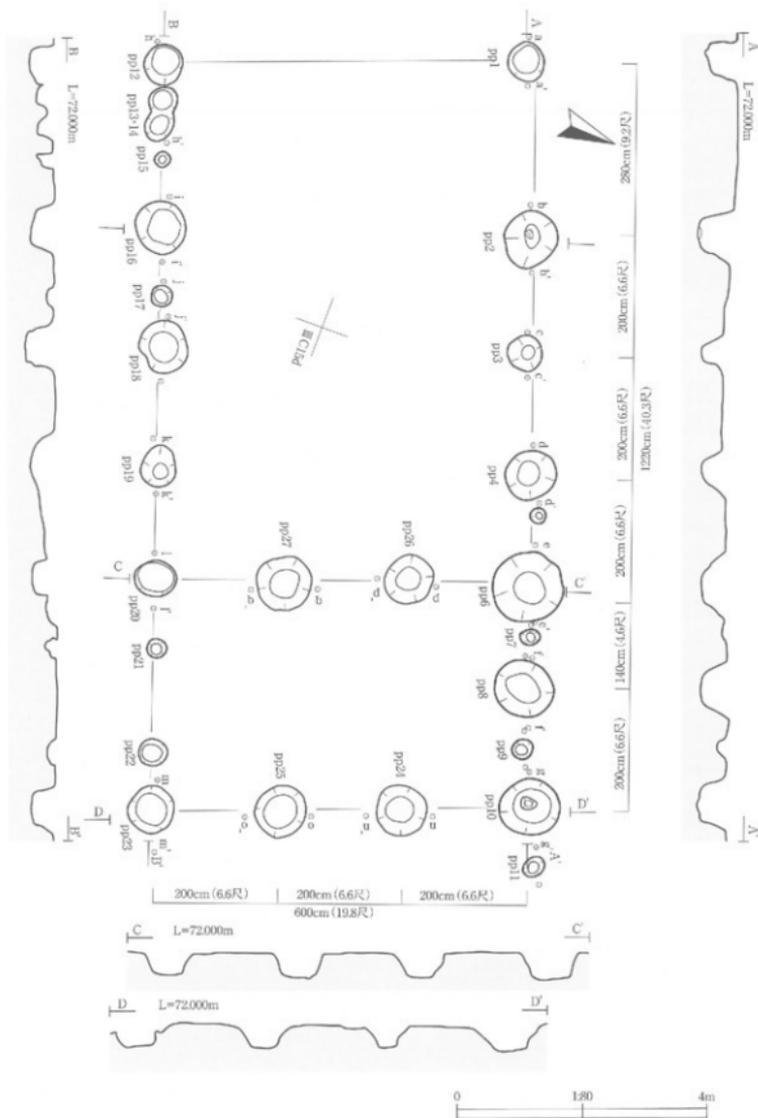
PP19 (s-s')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色約2%
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色約10%

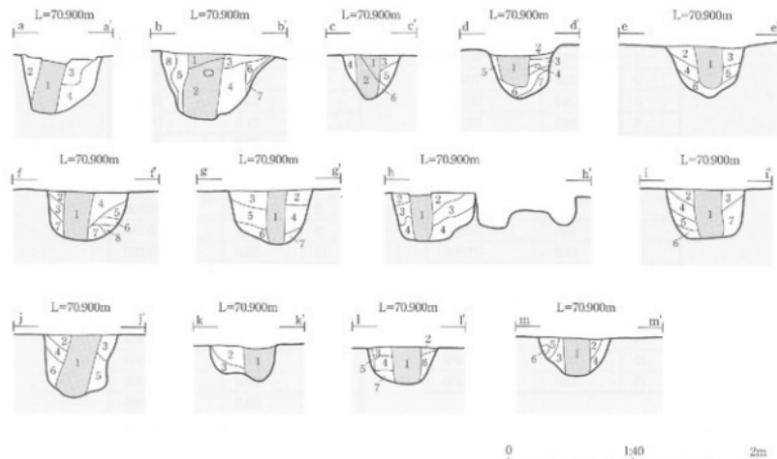
PP20 (t-t')

- 1 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色軟状土小1%
- 2 10YR2-3黄褐色シルト 粘性・しまり中弱 10YR5-6黄褐色軟状土小1%

第45図 SBO2 掘立柱建物跡 (2)



第46図 SB03 掘立柱建物跡 (1)



SB03

P1 (a-a')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色粒2%
- 2 10YR3/2黒褐色シルト 粘性・しまり中
- 3 10YR4/6褐色砂 10YR3/1黒褐色ブロック小30%
- 4 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色粒20%

P2 (b-b')

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色ブロック10%
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色ブロック5%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色10%
- 4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色ブロック20%
- 5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色ブロック小10%
- 6 10YR3/3褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色ブロック10%
- 7 10YR3/3褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色ブロック10%

P3 (c-c')

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色ブロック小5%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色ブロック15%
- 4 10YR4/6褐色砂 10YR2/2黒褐色ブロック小30%
- 5 10YR4/6褐色シルト 10YR2/2黒褐色土30%
- 6 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色ブロック2%

P4 (d-d')

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 25YR4/8赤褐色(海浜風)ブロック9%
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 25YR4/8赤褐色(海浜風)ブロック2%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 25YR4/8赤褐色(海浜風)ブロック3%
- 4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 25YR4/8赤褐色(海浜風)ブロック1%
- 5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 25YR4/8赤褐色(海浜風)ブロック15%
- 6 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 25YR4/8赤褐色(海浜風)ブロック1%
- 7 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/8褐色砂ブロック40%
- 8 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中

P5 (e-e')

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/6褐色砂ブロック小10%
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/6褐色砂ブロック30%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR2/2黒褐色ブロック30%
- 4 10YR4/6褐色シルト 10YR2/2黒褐色粒小5%
- 5 10YR4/6褐色シルト 10YR3/4暗褐色粒13%
- 10YR4/6褐色砂

P6 (f-f')

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/6褐色粒小3%
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/6褐色ブロック小5%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/6褐色ブロック1%
- 4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/6褐色ブロック小30%
- 5 10YR4/6褐色シルト 10YR2/2黒褐色ブロック30%
- 6 10YR4/6褐色シルト 10YR2/2黒褐色ブロック50%
- 7 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/6褐色ブロック7%
- 8 10YR1/1YR4/4褐色砂

P7 (g-g')

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/6褐色粒小5%
- 2 10YR4/6褐色砂質シルト 10YR2/2黒褐色土20%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/6褐色粒15%
- 4 10YR4/6褐色シルト 10YR2/2黒褐色土40%
- 5 10YR4/6褐色砂質シルト 10YR2/2黒褐色土30%
- 6 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/6褐色粒5%
- 7 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中 10YR4/6褐色粒10%

P8 (h-h')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色粒2%
- 2 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色粒大20%
- 3 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色土10%
- 4 10YR3/1黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色土30%

P9 (i-i')

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色ブロック20%
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色砂ブロック2%
- 3 10YR4/6褐色砂質シルト 10YR2/2黒褐色30%
- 4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色ブロック5%
- 5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色砂
- 6 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中
- 7 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や中弱・しまり中

P10 (j-j')

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色ブロック5%
- 10YR4/6褐色粒7%
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色ブロック20%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色粒70%
- 4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色粒30%
- 5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色シルト
- 6 10YR3/4暗褐色シルト 10YR2/2黒褐色土30%

P11 (k-k')

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色砂2%
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色砂1%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色砂小50%
- P12 (l-l') (P250)
- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色粒5小2%
- 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色粒5%
- 3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色粒20%
- 4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR4/6褐色粒30%
- 5 10YR4/6褐色シルト 粘性・しまり中
- 6 10YR2/2黒褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色粒小10%
- 7 10YR4/6褐色シルト 粘性・しまり中 10YR3/4暗褐色粒小2%

第47図 SB03 掘立柱建物跡 (2)

掘立柱建物跡柱穴計測表 (SB01)

柱穴No.	深さ (cm)	底面の標高 (m)
1	14.4	70.879
2	21.6	70.852
3	28.4	70.806
4	14.5	70.933
5	28.6	70.769
6	21.6	70.799
7	13.9	70.830
8	16.5	70.905
9	19.5	70.875
10	11.0	71.008
11	28.0	70.860
12	26.7	70.845
13	29.9	70.780
14	23.7	70.840
15	24.9	70.860
16	18.8	70.850

掘立柱建物跡柱穴計測表 (SB02)

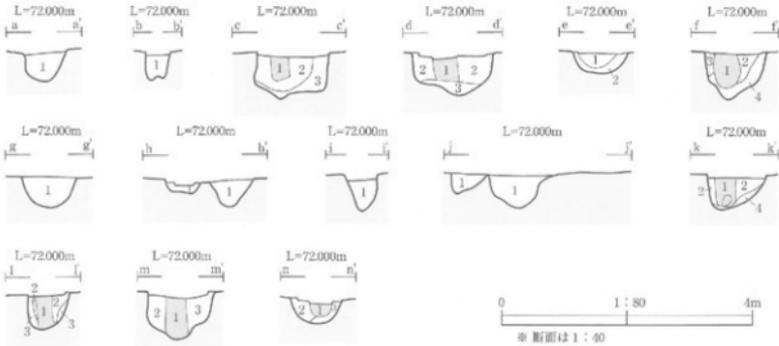
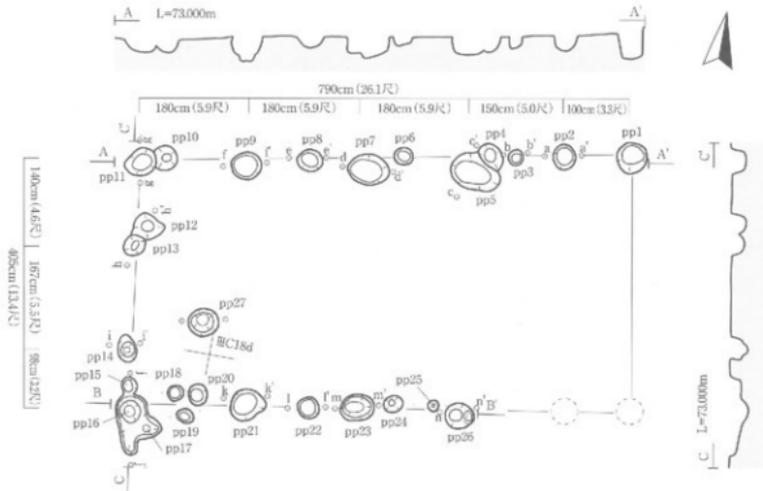
柱穴No.	深さ (cm)	底面の標高 (m)
1	48.5	70.785
2	57.8	70.735
3	33.5	70.960
4	21.6	70.969
5	31.0	70.895
6	25.6	70.904
7	22.2	70.918
8	26.1	70.920
9	63.5	70.785
10	58.0	70.780
11	32.8	70.988
12	35.6	70.944
13	31.0	70.995
14	31.6	71.269
15	17.5	71.065
16	26.8	71.000
17	28.0	71.005
18	25.4	70.976
19	24.1	71.016
20	24.5	71.026

掘立柱建物跡柱穴計測表 (SB03)

柱穴No.	深さ (cm)	底面の標高 (m)
1	47.6	71.445
2	56.6	71.294
3	35.3	71.346
4	40.2	71.346
5	11.3	71.578
6	45.5	71.330
7	18.9	71.570
8	43.8	71.336
9	21.5	71.505
10	48.6	71.272
11	20.4	71.480
12	44.1	71.395
13	30.9	71.413
14	29.0	71.422
15	26.9	71.458
16	39.3	71.404
17	15.6	71.578
18	46.0	71.317
19	13.0	71.394
20	25.8	71.432
21	15.8	71.587
22	12.5	71.610
23	36.8	71.405
24	39.3	71.358
25	39.0	71.373
26	38.1	75.384
27	38.9	71.384

掘立柱建物跡柱穴計測表 (SB04)

柱穴No.	深さ (cm)	底面の標高 (m)
1	53.6	71.449
2	25.7	71.589
3	21.9	71.614
4	24.1	71.594
5	41.1	71.427
6	13.7	71.695
7	36.2	71.426
8	18.3	71.645
9	43.1	71.417
10	25.0	71.564
11	24.5	71.573
12	22.5	71.580
13	21.9	71.588
14	30.7	71.528
15	18.5	71.648
16	27.6	71.548
17	19.7	71.657
18	23.1	71.626
19	24.7	71.603
20	23.9	71.610
21	32.5	71.497
22	29.3	71.565
23	41.8	71.457
24	32.1	71.535
25	15.0	71.730
26	33.0	71.560
27	39.7	71.429

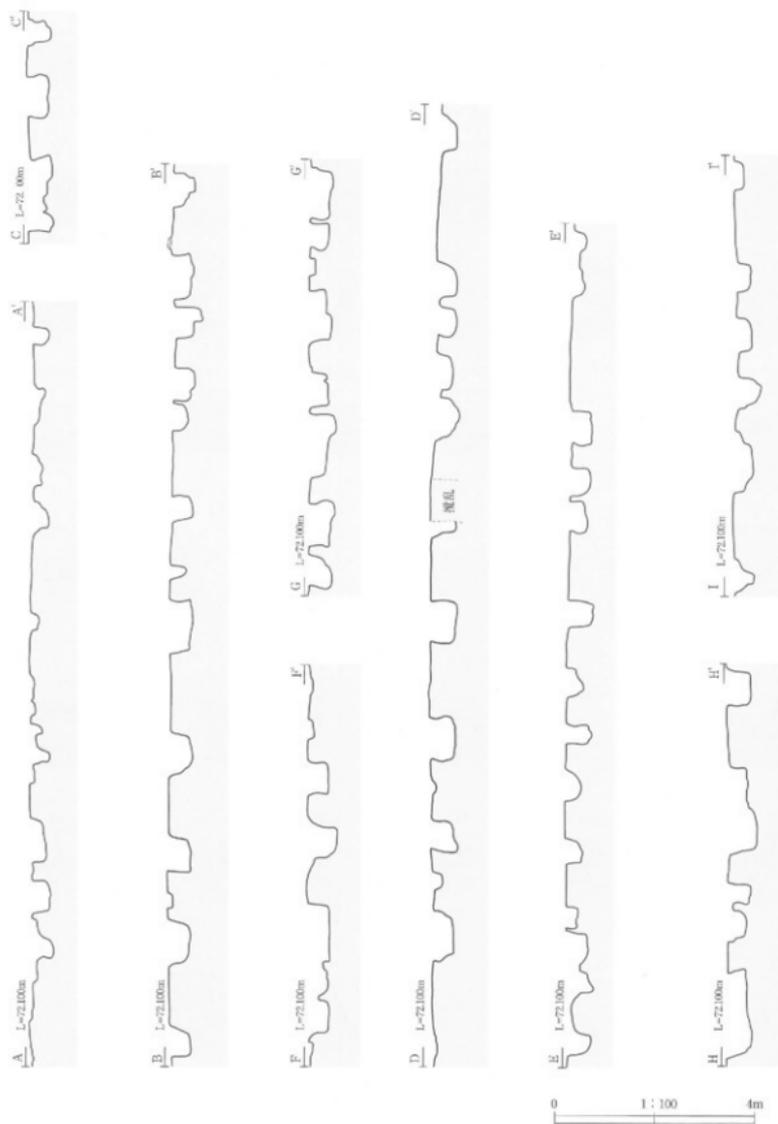


- pp2・3・8・7・9・11・16・21・23・26 (a-a'-n-n') 共通  
 1 10YR2-2弱褐色シルト 粘質・しまり弱  
 2 10YR3-3弱褐色シルト 粘質・しまり弱中 1層をブロック状に含む10%  
 3 10YR3-3弱褐色シルト 粘質・しまり弱中 2層をブロック状に含む10%

第48図 SBO4 掘立柱建物跡

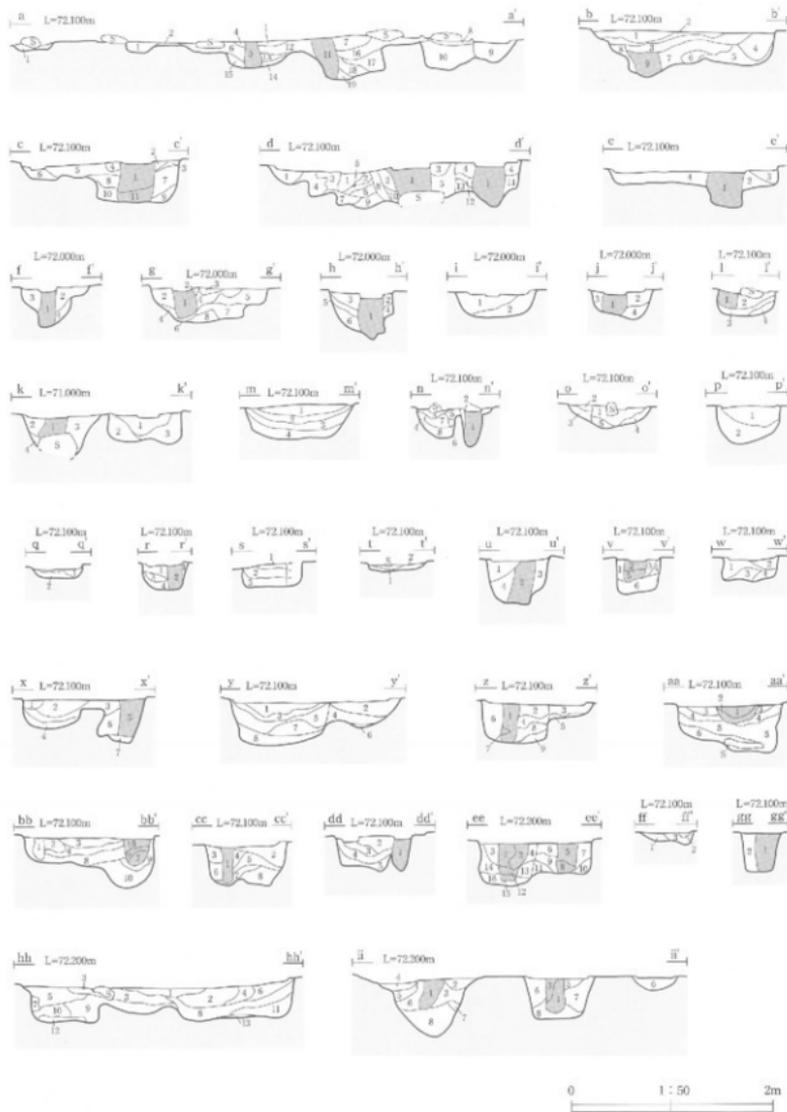


第49図 SB05-07 掘立柱建物跡 (1)



第50圖 SB05-07 掘立柱建物跡 (2)

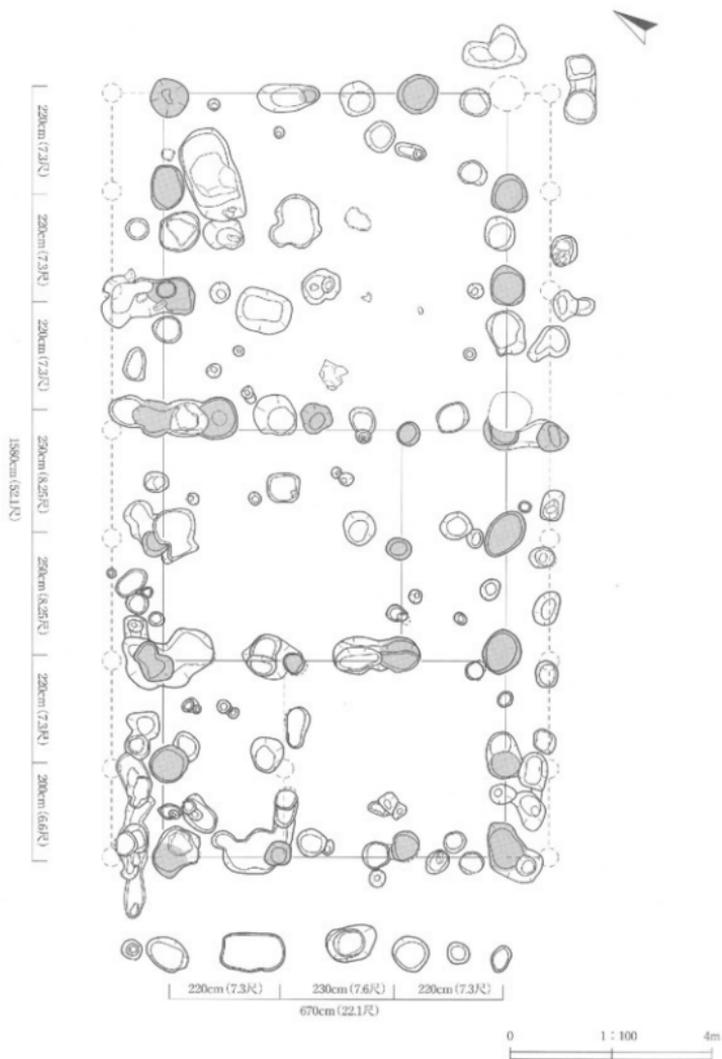
1 検出した遺構と遺物



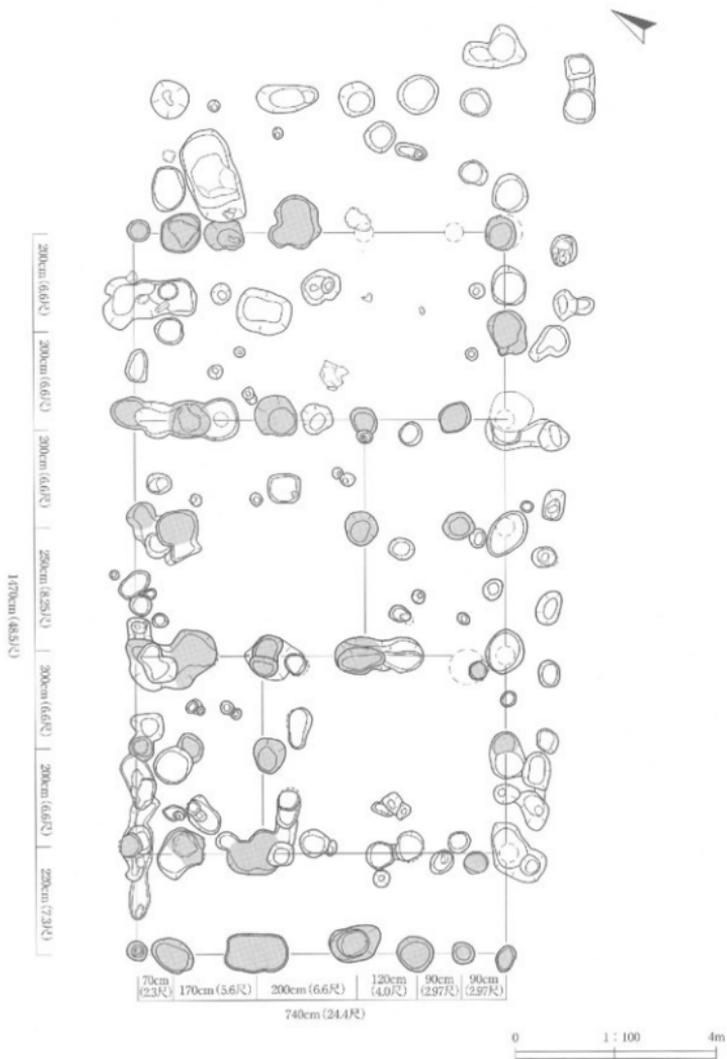
第51図 SB05~07 掘立柱建物跡 (3)







第53図 SB05 掘立柱建物跡



第54図 SB06 掘立柱建物跡



第55図 SB07 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡柱穴計測表 (SB05~07)

柱穴No.	深さ(m)	底面の標高(m)	柱穴No.	深さ(m)	底面の標高(m)	柱穴No.	深さ(m)	底面の標高(m)
1	10.7	71.901	54	41.0	71.630	107	40.8	71.560
2	14.2	71.891	55	64.5	71.400	108	14.7	71.800
3	49.3	71.533	56	47.4	71.574	109	41.0	71.580
4	21.0	71.798	57	41.4	71.582	110	24.7	71.830
5	36.4	71.656	58	53.0	71.491	111	42.1	71.574
6	49.2	71.573	59	34.8	71.710	112	41.5	71.580
7	14.7	71.931	60	27.6	71.782	113	40.4	71.590
8	42.0	71.630	61	47.5	71.592	114	28.8	71.700
9	35.4	71.672	62	18.7	71.845	115	24.2	71.728
10	50.5	71.485	63	41.5	71.605	116	39.8	71.580
11	40.0	71.591	64	47.1	71.556	117	12.0	71.810
12	19.5	71.803	65	46.7	71.522	118	36.7	71.648
13	8.3	71.905	66	40.1	71.609	119	51.3	71.442
14	45.3	71.554	67	48.4	71.486	120	33.5	71.635
15	32.5	71.680	68	38.7	71.596	121	69.5	71.200
16	20.2	71.792	69	41.6	71.610	122	55.2	71.400
17	34.5	71.643	70	43.2	71.594	123	48.8	71.507
18	18.0	71.760	71	39.2	71.618	124	31.5	71.660
19	40.8	71.552	72	33.5	71.675	125	38.5	71.575
20	30.0	71.690	73	47.1	71.534	126	40.5	71.550
21	47.0	71.503	74	39.3	71.625	127	32.0	71.595
22	17.5	71.756	75	37.9	71.635	128	32.5	71.570
23	25.7	71.710	76	36.8	71.667	129	37.0	71.56
24	17.1	71.714	77	44.7	71.578	130	17.0	71.700
25	32.0	71.653	78	39.7	71.649	131	33.5	71.550
26	51.0	71.410	79	17.8	71.869	132	24.5	71.680
27	44.5	71.520	80	23.0	71.815	133	15.0	71.780
28	44.5	71.495	81	41.9	71.598	134	55.5	71.410
29	39.5	71.535	82	37.9	71.65	135	24.6	71.744
30	20.7	71.705	83	43.5	71.593	136	35.9	71.616
31	43.8	71.430	84	45.2	71.574	137	19.8	71.795
32	33.8	71.520	85	25.8	71.740	138	27.2	71.714
33	25.9	71.613	86	52.3	71.522	139	38.0	71.603
34	32.5	71.540	87	42.9	71.596	140	25.4	71.712
35	18.2	71.668	88	8.0	71.952	141	29.9	71.656
36	22.0	71.730	89	43.2	71.620	142	19.1	71.766
37	30.5	71.620	90	53.2	71.558	143	14.3	71.822
38	45.5	71.515	91	51.8	71.466	144	9.5	71.855
39	46.3	71.534	92	40.4	71.618	145	26.2	71.694
40	14.4	71.825	93	9.2	71.875	146	18.1	71.781
41	37.6	71.624	94	7.8	71.897	147	18.9	71.810
42	5.2	71.520	95	48.8	71.532	148	32.2	71.694
43	36.2	71.688	96	3.6	71.650	149	26.8	71.760
44	52.5	71.535	97	35.7	71.648	150	8.1	71.979
45	35.5	71.735	98	33.7	71.668	151	62.1	71.493
46	36.0	71.710	99	36.7	71.698	152	28.3	71.736
47	28.2	71.778	100	18.5	71.910	153	25.1	71.979
48	49.8	71.567	101	59.8	71.474	154	35.3	71.649
49	61.8	71.382	102	31.4	71.730	155	22.3	71.759
50	50.7	71.495	103	35.3	71.672	156	12.0	71.882
51	41.2	71.590	104	17.7	71.896	157	28.0	71.719
52	5.7	71.918	105	50.6	71.572	158	13.2	71.874
53	15.7	71.890	106	21.7	71.770	159	3.2	71.96

## 近世の遺構

### (1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は合計7棟確認した。平面図の縮尺は1/80、1/100、1/120、断面図の縮尺は1/40、1/50を用い、いずれもスケールを付した。平面図に付してある寸法はカッコ内の単位は尺、カッコのないものはcmである。一尺は30.3cmとして計算した。また、個別の柱穴規模は表に記載した。柱穴の深さは、浅いもので10cmに満たないものがあり、柱穴配列も不足するものが多いことから削平により消失した柱穴が少なからず存在すると考えられ、本来は下屋などの付属施設を伴う可能性がある。

#### SB01掘立柱建物跡

遺構 (第42・43図、写真図版15)

[位置・重複] 調査区北側 IC19n、IC20l~o、IC21l~nグリッドに位置する。南西隅でSK45上坑と重複し、これを切る。

[平面形式] 梁間2間、桁行7間の長方形プランを呈すると考えられる。梁行500cm (16.5尺)、桁行1380cm (45.5尺)で、面積は690m<sup>2</sup> (約209.1坪)である。使用した柱穴は16個である。

[建物方位] 桁行の方向はN-72°-Eである。

[柱間寸法] 6尺6寸 (約200cm)、5尺3寸 (約160cm)を多用している。

[付属施設] 特になし。

[出土遺物] なし。

[年代] 近世~近代の所屬と考えられる。

#### SB02掘立柱建物跡

遺構 (第44・45図、写真図版16)

[位置・重複] 調査区北東側 IIC2r~t、IIC3p~4t、IIC4p~tグリッドに位置する。南側でSI01と重複し、これを切る。また、攪乱が多く柱穴配置が一部不明となっている。

[平面形式] 梁間4間、桁行7間の長方形プランを呈すると考えられる。梁行600cm (19.8尺)、桁行1450cm (47.9尺)で、面積は870m<sup>2</sup> (約263.6坪)である。使用した柱穴は20個である。

[建物方位] 桁行の方向はN-84°-Eである。

[柱間寸法] 桁桁6尺6寸 (約200cm)、梁桁5尺 (約150cm)を基準としている。

[付属施設] 特になし。

[出土遺物] なし。

[年代] 近世~近代の所屬と考えられる。

#### SB03掘立柱建物跡

遺構 (第46・47図、写真図版17)

[位置・重複] 調査区北東側 IIC13d~f、IIC14b~f、IIC15c~fグリッドに位置する。南側でSI05と重複し、これを切る。また、攪乱が多く柱穴配置が一部不明となっている。

[平面形式] 梁間3間、桁行6間の長方形プランを呈すると考えられる。梁行600cm (19.8尺)、桁行1220cm (40.3尺)で、面積は732m<sup>2</sup> (約221.8坪)である。使用した柱穴は17個である。

[建物方位] 桁行の方向はN-67°-Eである。

[柱間寸法] 6尺6寸 (約200cm)を多用している。

[付属施設] 特になし。

[出土遺物] なし。

[年代] 近世～近代の所屬と考えられる。

#### SB04掘立柱建物跡

遺 構 (第48図、写真図版18)

[位置・重複] 調査区北東側ⅢC16d～e、ⅢC17c～d、ⅢC18c～dグリッドに位置する。北西側でSK39と重複し、これを切る。また、南東側は調査区域外にかりり未調査である。

[平面形式] 梁間3間、桁行5間の長方形プランを呈すると考えられる。梁行405cm(13.4尺)、桁行790cm(26.1尺)で、面積は312m<sup>2</sup>(約97坪)である。使用した柱穴は12個である。

[建物方位] 桁行の方向はN-80°-Eである。

[柱間寸法] 5尺9寸(約180cm)を多用している。

[付属施設] 特になし。

[出土遺物] なし。

[年代] 近世～近代の所屬と考えられる。

#### SB05掘立柱建物跡

遺 構 (第49～53図、写真図版19～21)

[位置・重複] 調査区南側、段丘崖縁辺のⅢB12x～y、ⅢC12a、ⅢB13v～y、ⅢC13a～b、ⅢB14v～y、ⅢC14a、ⅢB15w～yグリッドにかけて位置する。同一地点で3棟分の建物配置を想定できることからこれをSB05～07掘立柱建物跡とした。相互の柱穴の新旧関係を明らかにできないことから、建物の新旧関係は不明である。また、同地区では民家跡の解体時などで生じたと思われる攪乱が多く存在し、このため柱穴配置が不明となっている部分もある。

[平面形式] 梁間3間、桁行7間の長方形プランを呈すると考えられる。梁行670cm(22.1尺)、桁行1580cm(52.1尺)で、面積は1058.6m<sup>2</sup>(約320.8坪)である。使用した柱穴は26個である。柱穴配列が不足するものが多いが、本来は前後に下屋を伴う形態と推測される。

[建物方位] 桁行の方向はN-58°-Eである。

[柱間寸法] 7尺3寸(約220cm)を基準としている。

[付属施設] 特になし。

遺 物 (第85図、写真図版63)

柱穴埋土中より陶磁器片が3点と古銭2点が出土している。292は播鉢片、295・296は寛水通寶である。

[年代] 出土遺物より近世～近代の所屬と考えられる。

#### SB06掘立柱建物跡

遺 構 (第49～52・54図、写真図版19～21)

[位置・重複] 調査区南側、段丘崖縁辺のⅢB12x～y、ⅢC12a、ⅢB13v～y、ⅢC13a～b、ⅢB14v～y、ⅢC14a、ⅢB15w～yグリッドにかけて位置する。同一地点で3棟分の建物配置を想定できることからこれをSB05～07掘立柱建物跡とした。相互の柱穴の新旧関係を明らかにできないことから、建物の新旧関係は不明である。また、同地区では民家跡の解体時などで生じたと思われる攪乱が多く存在

し、このため柱穴配置が不明となっている部分もある。

[平面形式] 梁間5間、桁行7間の長方形プランを呈すると考えられる。梁行740cm (24.4尺)、桁行1470cm (48.5尺)で、面積は1087.8m<sup>2</sup> (約329.6坪)である。使用した柱穴は35個である。

[建物方位] 桁行の方向はN-59° - Eである。

[柱間寸法] 6尺6寸 (約200cm)を基準にしている。

[付属施設] 特になし。

[出土遺物] なし。

[年代] 近世～近代の所屬と考えられる。

### SB07掘立柱建物跡

遺構 (第49～52・55図、写真図版19～21)

[位置・重複] 調査区南側、段丘縁辺のⅢB12x～y、ⅢC12a、ⅢB13v～y、ⅢC13a～b、ⅢB14v～y、ⅢC14a、ⅢB15w～yグリッドにかけて位置する。同一地点で3棟分の建物配置を想定できることからこれをSB05～07掘立柱建物跡とした。相互の柱穴の新旧関係を明らかにできないことから、建物の新旧関係は不明である。また、同地区では民家跡の解体時などで生じたとみられる攪乱が多く存在し、このため柱穴配置が不明となっている部分もある。

[平面形式] 梁間3間、桁行6間の長方形プランを呈すると考えられる。梁行800cm (26.4尺)、桁行1540cm (50.8尺)で、面積は1232m<sup>2</sup> (約373.3坪)である。使用した柱穴は18個である。

[建物方位] 桁行の方向はN-62° - Eである。

[柱間寸法] 8尺6寸 (約260cm)を基準にしている。

[付属施設] 特になし。

[出土遺物] なし。

[年代] 近世～近代の所屬と考えられる。

## (2) 溝 跡

### SD01溝跡

遺構 (第56図、写真図版22)

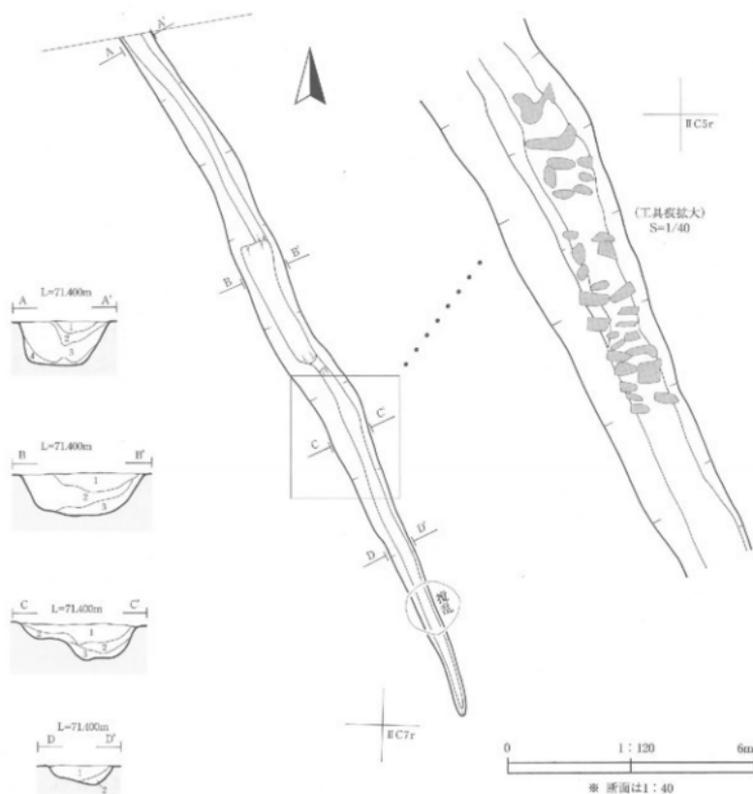
[位置・検出状況] 調査区北側上端部ⅡC2 p～6 rグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色シルトの帯状プランとして確認した。

[規模・形状] 規模は調査区域内における長さ約20m、溝幅25～110cm、深さは最深部で35cm前後を測る。平面形は北西～南東方向に長い直線状で、断面は皿形を呈する。底面は緩やかに北西側に傾斜しており、底部両端の高低差は20cm前後を測る。

[柱穴・ピット] 溝の南東端部から7m地点から約5m50cmの範囲で短径18cm前後、長径40cm前後・深さ5cm前後を測る小ピットが30基検出された。これらは多くが2個1対で検出され、その形状から工具痕跡と考えられる。

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする3層に大別され、一部暗褐色シルトを含んだ構成となっている。

[遺物・時期] 出土していない。時期は不明である。



SD01

(A-A')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中
- 2 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中
- 3 10YR6/6明黄褐色ブロック1%粘性・しまり中
- 4 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中・やや強
- 10YR6/6 明黄褐色粘土 (地山) 黄褐色1%粘性中・しまりやや強

(B-B')

- 1 10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混合土 粘性中・しまり中
- 2 10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混合土 粘性中・しまりやや強
- 3 10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色シルトの混合土 粘性中・しまりやや強

(C-C')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中
- 2 10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色シルトブロック1% 粘性中・しまり中
- 3 10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色シルトブロック1% 粘性中・しまり中 10YR6/6明黄褐色粘土1%

(D-D')

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中
- 2 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中

第56図 SD01 溝跡

**SD02溝跡****遺構** (第57図、写真図版22・23)

[位置・検出状況] 調査区中央部ⅡC15f～14rグリッドに位置し、SD03の南側3～5mに並行する。東側の一部は後世の攪乱によって切られる。

[規模・形状] 平面形では直線状に長い溝状を呈する。規模は調査区内における長さが約47m、溝幅40～100cm、深さは最深部で30cm前後を測る。断面形状は皿型である。底面は東側に緩やかに傾斜しており、底部両端の高低差は約39.5cmを測る。

[埋土] 暗褐色粒シルト2%以下を含む黒褐色シルトの単層で構成される。

[遺物・時期] 縄文土器片数点と石器1点が埋土上位より出土している。明確な共伴遺物を欠き、時期は不明である。

**SD03溝跡****遺構** (第57図、写真図版22・23)

[位置・検出状況] 調査区北側上端部ⅡC14d～13sグリッドに位置する。南方3～5mにはSD02が並走する。西側と東側の一部は後世の攪乱によって切られる。

[規模・形状] 平面形では直線状に長い溝状を呈する。規模は調査区区域内における長さ約60m、溝幅80～130cm、深さは最深部で90cm前後を測り、東西端は調査区域外に延びる。断面は西側でY字形を呈し、東側に向かうにつれて次第に袋状を呈する。底面はほぼ平坦で、底部両端の高低差は殆ど認められない。

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする5層に大別され、一部下層には褐色シルトを含んだ構成となっている。

[遺物・時期] 遺構に伴うと見られる遺物は出土していない。時期は不明である。

**SD04溝跡****遺構** (第58図、写真図版23・24)

[位置・検出状況] 調査区北側上端部ⅡC13x～y、ⅡD13aグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色シルトの帯状プランとして確認した。西端部はSD05溝跡、東端部はSD07溝跡に接続しており、これらと同時に機能していたことが想定される。また、西側同軸線上に位置するSD03と方向・溝幅をほぼ同一にしており、同一遺構である可能性が高いと考えられる。

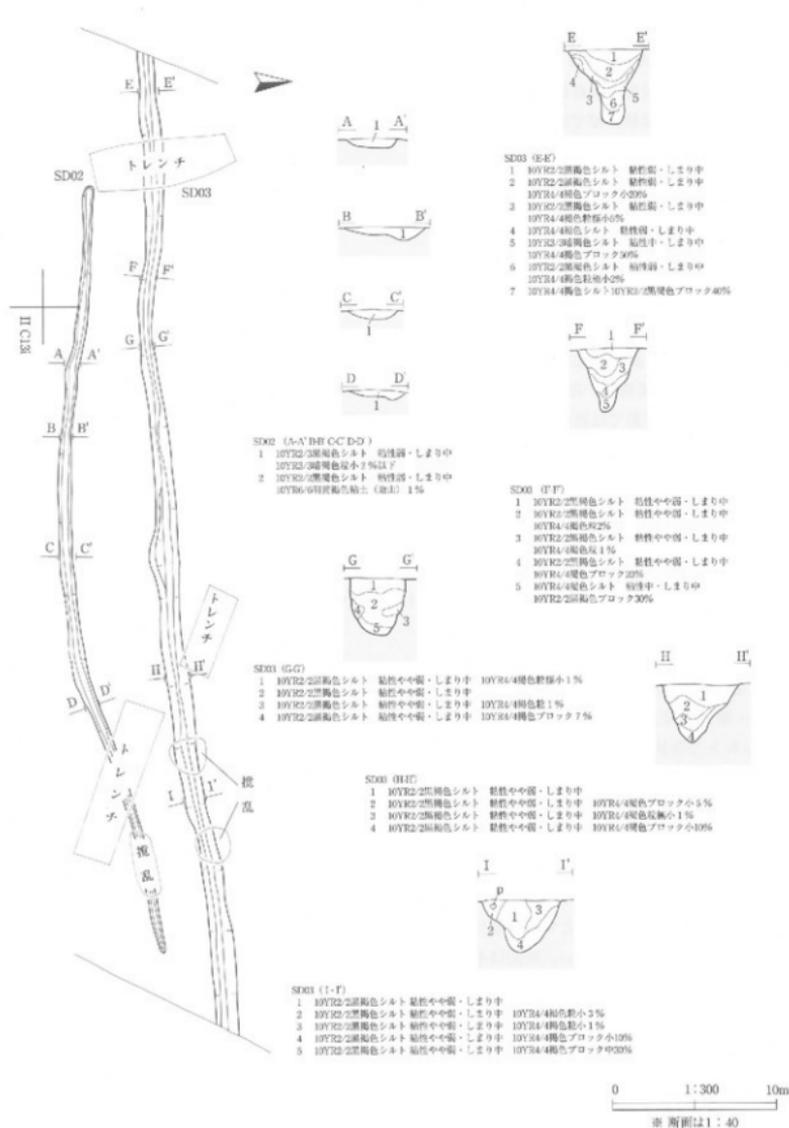
[規模・形状] 規模は調査区区域内における長さ約8.2m、溝幅49～52cm、深さは最深部で19cm前後を測る。平面形は東—西方向の弧状を描き、北に向かいやや内湾する。断面は皿形を呈する。底面はほぼ平坦で、底部両端の高低差は殆ど認められない。

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする4層に大別され、一部暗褐色シルトを含んだ構成となっている。

[遺物・時期] 出土していない。時期は不明である。

**SD05溝跡****遺構** (第58図、写真図版23・24)

[位置・検出状況] 調査区北側上端部ⅡC12y～ⅡD12a、ⅡC13v～yグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色シルトの帯状プランとして確認した。西端部は調査区域外、東端部はSD07と接続しており、これらと同時に機能していたと考えられる。また、西側同軸線上に位置するSD03と方向・溝



第57図 SD02・03 溝跡

幅をほぼ同一にしており、同一遺構である可能性が高いと考えられる。

[規模・形状] 規模は調査区域内における長さ約16.8m、溝幅34～55cm、深さは最深部で18cm前後を測る。平面形は東一西方向に長い直線状で、東側に向かい、枝分かれするような形状を呈し、中央部付近でSD04に接続する。断面は皿形を呈する。底面はほぼ平坦で、底部両端の高低差は殆ど認められない。

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする3層に大別され、一部暗褐色シルトを含んだ構成となっている。

[遺物・時期] 出土していない。時期は不明である。

#### SD06溝跡

遺構 (第58図、写真図版23・24)

[位置・検出状況] 調査区北側上端部ⅡC14w～x、ⅡC13y～ⅡD13aグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色シルトの帯状プランとして確認した。西端部は調査区域外にかかる。また、西側同軸線上に位置するSD02と、方向・溝幅をほぼ同一にしており、同一遺構である可能性が高い。

[規模・形状] 規模は調査区域内における長さ約13.3m、溝幅39～72cm、深さは最深部で30cm前後を測る。平面形は西一東方向に長い直線状で、断面は皿形を呈する。底面はごく緩やかに東側に傾斜しており、底部両端の高低差は約5cmを測る。

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする4層に大別され、一部暗褐色シルトを含んだ構成となっている。

[遺物・時期] 出土していない。時期は不明である。

#### SD07溝跡

遺構 (第58図、写真図版24)

[位置・検出状況] 調査区北側上端部ⅡD9a～11a、ⅡC9y～13y、ⅡD11b～15bグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色シルトの帯状プランとして確認した。北西～南東端部、東側は調査区域外に延びる。

[規模・形状] 規模は調査区域内における長さ約25m、深さ最深部で約55cmを測る。溝幅は、溝の東側が現道にかかるため不明である。平面形は北一南方向に長い直線状で、断面は残存部から推定して皿形を呈すると思われる。底面は緩やかに南側に傾斜しており、底部両端の高低差は25、前後を測る。

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする8層に大別され、一部暗褐色～明褐色シルトブロックを含んだ構成となっている。また、最下層において砂の堆積が認められたことから、水流があったことが推測できる。

[遺物・時期] 出土していない。時期は不明である。

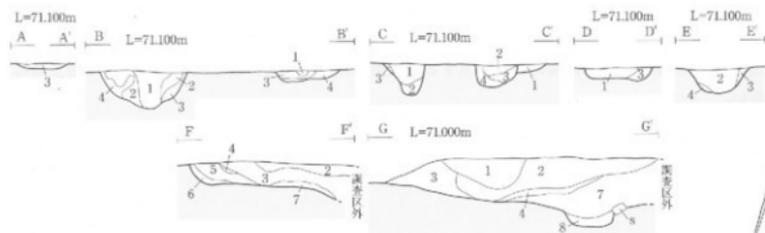
#### SD08溝跡

遺構 (第59図、写真図版25)

[位置・検出状況] 調査区北側上端部ⅠC12d、11e、10f、9g、8hグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色シルトの帯状プランとして確認した。南西、北東端部は調査区域外に延びる。

[規模・形状] 規模は調査区域内における長さ約20.5m、溝幅58～66cm、深さは最深部で27cmを測る。平面形は北東～南西方向に長い直線状で、断面は皿形を呈する。底面は緩やかに北東側に傾斜しており、底部両端の高低差は10cm前後を測る。

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする3層に大別され、一部にぶい黄褐色シルトを含んだ構成となって



SD04 (B-B' E-E' 共通)

- |   |                  |          |                   |
|---|------------------|----------|-------------------|
| 1 | 10YR 3/2 黒褐色シルト  | 粘性・しまり具中 | 10YR4/6褐色ブロック30%  |
| 2 | 10YR 2/2 黒褐色シルト  | 粘性・しまり具中 | 10YR3/3暗褐色ブロック2%  |
| 3 | 10YR 2/2 黒褐色シルト  | 粘性・しまり具中 | 10YR3/3暗褐色ブロック10% |
|   | 10YR4/6褐色ブロック2%  |          |                   |
| 4 | 10YR 3/3 暗褐色シルト  | 粘性・しまり具中 | 10YR2/2黒褐色ブロック30% |
|   | 10YR4/6褐色ブロック10% |          |                   |

SD06 (C-C' D-D' 共通)

- |   |                  |          |                   |
|---|------------------|----------|-------------------|
| 1 | 10YR 2/2 黒褐色シルト  | 粘性・しまり具中 | 10YR4/6褐色ブロック30%  |
| 2 | 10YR 2/2 黒褐色シルト  | 粘性・しまり具中 | 10YR3/3暗褐色ブロック15% |
| 3 | 10YR 2/2 黒褐色シルト  | 粘性・しまり具中 | 10YR3/3暗褐色ブロック10% |
|   | 10YR4/6褐色ブロック5%  |          |                   |
| 4 | 10YR 2/3 暗褐色シルト  | 粘性・しまり具中 | 10YR2/2黒褐色ブロック30% |
|   | 10YR4/6褐色ブロック10% |          |                   |

SD06 (A-A' B-B' 共通)

- |   |                 |          |                   |
|---|-----------------|----------|-------------------|
| 1 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | 粘性・しまり具中 | 10YR3/3暗褐色ブロック30% |
| 2 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | 粘性・しまり具中 | 10YR4/6褐色ブロック2%   |
| 3 | 10YR 3/3 暗褐色シルト | 粘性・しまり具中 | 10YR4/6褐色ブロック40%  |
| 4 | 10YR 4/6 褐色シルト  | 粘性・しまり具中 | 10YR2/2黒褐色ブロック2%  |

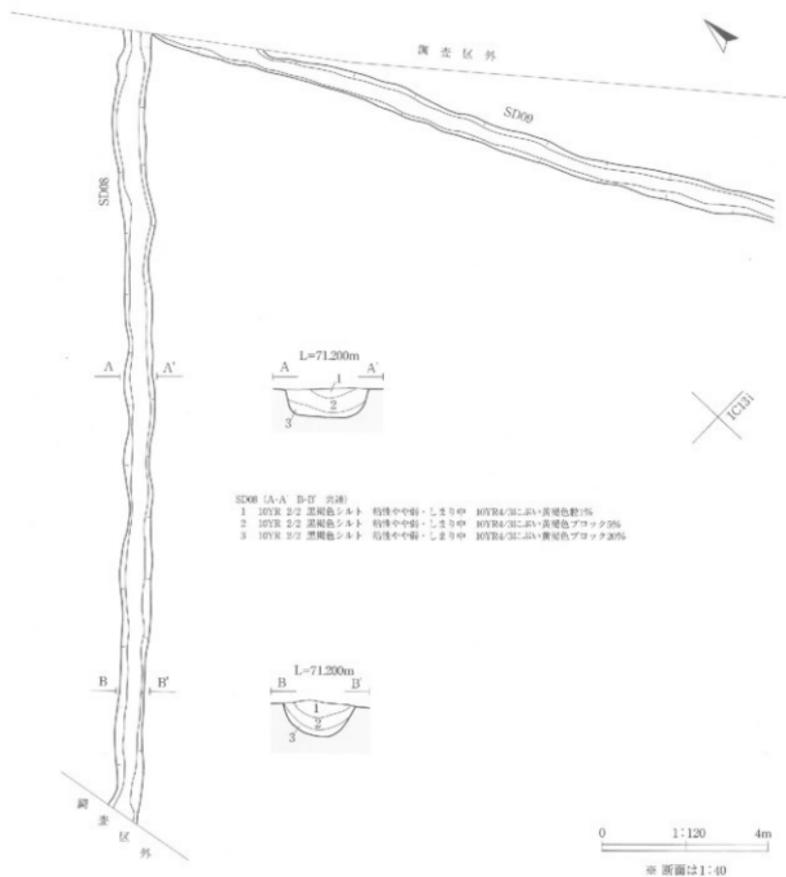
SD07 (F-F' G-G' 共通)

- |   |                 |          |                    |    |
|---|-----------------|----------|--------------------|----|
| 1 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | 粘性・しまり具中 | 10YR4/6褐色ブロック20%   | 観察 |
| 2 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | 粘性・しまり具中 |                    |    |
| 3 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | 粘性・しまり具中 | 10YR4/6褐色ブロック小30%  |    |
| 4 | 10YR 4/6 褐色シルト  | 粘性・しまり具中 | 10YR2/2暗褐色ブロック小30% |    |
| 5 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | 粘性・しまり具中 | 10YR3/3暗褐色ブロック小10% |    |
|   | 10YR4/6褐色ブロック2% |          |                    |    |
| 6 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | 粘性・しまり具中 | 10YR4/6褐色ブロック30%   |    |
| 7 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | 粘性・しまり具中 | 10YR4/6褐色ブロック7%    |    |
|   | 7.5YR5/6暗褐色ブロック |          | 小4%                |    |
| 8 | 10YR 2/2 黒褐色シルト | 粘性・しまり具中 | 7.5YR5/6暗褐色ブロック小4% |    |

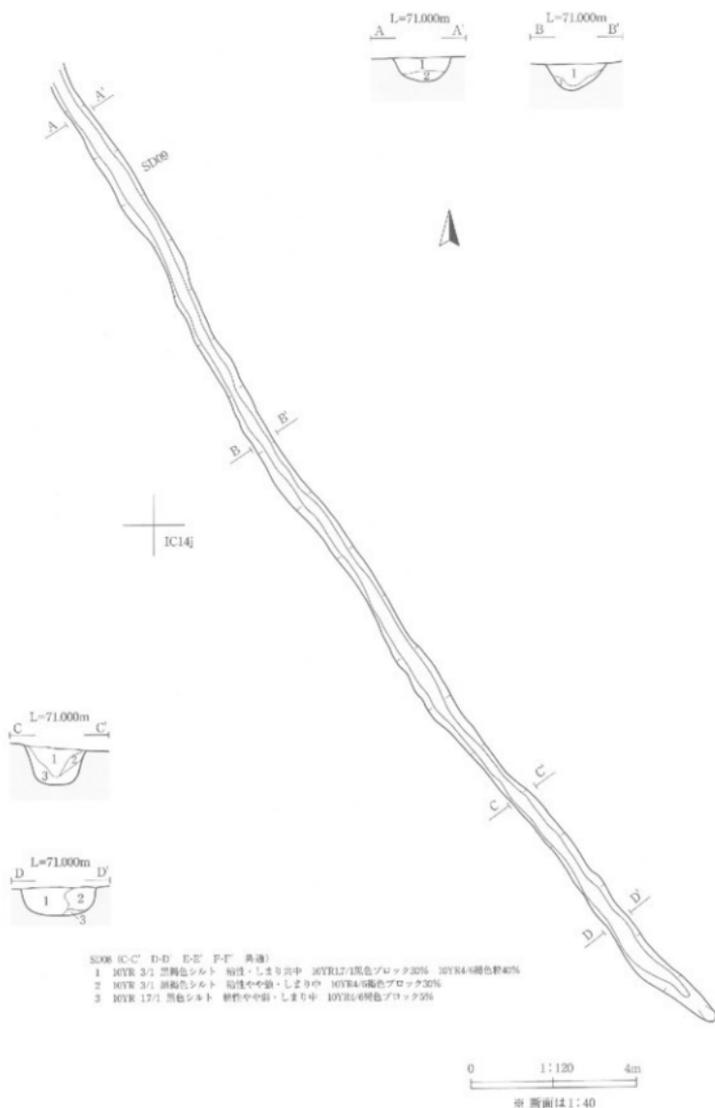
0 1:120 4m

※ 断面は1:40

第58図 SD04~07 満跡



第59図 SD08・09 溝跡 (1)



第60図 SD09 溝跡 (2)

いる。

[遺物・時期] 出土していない。時期は不明である。

#### SD09溝跡

遺 構 (第59・60図、写真図版25)

[位置・検出状況] 調査区北側上端部ⅠC9h、10h~i、11i、12i~j、13j、14k、15k~l、16l~mグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色シルトの帯状プランとして確認した。北西端部は調査区域外にかかる。

[規模・形状] 規模は調査区域内における長さ約38.2m、溝幅48~60cm、深さ約29cmを測る。平面形は北西-南東方向に長い直線状で、断面は皿形を呈する。底面は緩やかに南東側に傾斜しており、底部両端の高低差は約22cmを測る。

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする3層に大別され、一部褐色シルトを含んだ構成となっている。

[遺物・時期] 出土していない。時期は不明である。

#### SD10溝跡

遺 構 (第61図、写真図版26)

[位置・検出状況] 調査区北側上端部ⅡC23r~sグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色シルトの帯状プランとして確認した。東端部は調査区域外にかかる。

[規模・形状] 規模は調査区域内における長さ約5.6m、溝幅34~36cm、深さ約33cmを測る。平面形は東-西方向に直線状に延び、その後北側へ屈曲して鏡形を呈する。断面はU字形である。底面レベルは東側にむかい緩やかに傾斜しており、底部両端の高低差は10cm前後を測る。

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする3層に大別され、一部褐~暗褐色シルトを含んだ構成となっている。

[遺物・時期] 出土していない。時期は不明である。

#### SD11溝跡

遺 構 (第62図、写真図版26)

[位置・検出状況] 調査区北側上端部ⅢB8u~y、ⅢC8a~c、7d~fグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色シルトの帯状プランとして確認した。

[規模・形状] 規模は調査区域内における長さ約39.6m、溝幅31~36cm、深さは最深部で約17cmを測る。平面形は東-西方向に長い直線状で、断面は皿形を呈する。底面は緩やかに西側に傾斜しており、底部両端の高低差は20cm前後を測る。

[埋土] にぶい黄褐色シルトブロックをわずかに含む黒褐色シルトの単層である。

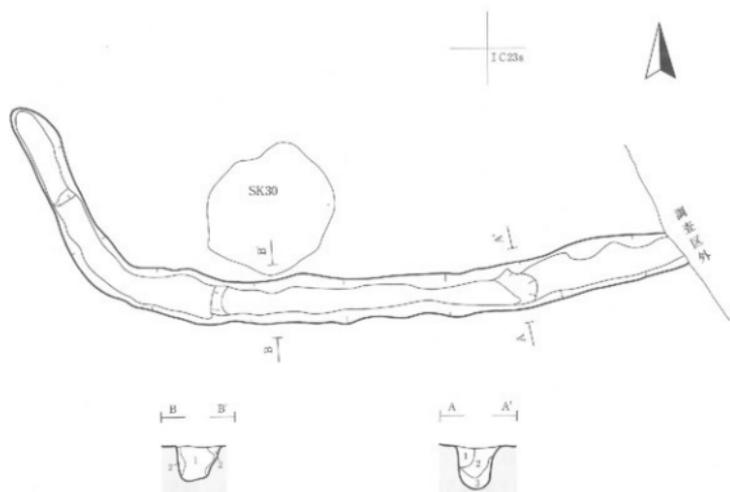
[遺物・時期] 出土していない。時期は不明である。

#### SD12溝跡

遺 構 (第63図、写真図版27)

[位置・検出状況] 調査区北側上端部ⅢB21x~y、ⅢC21a~cグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色シルトの帯状プランとして確認した。東端部は調査区域外にかかる。

[規模・形状] 規模は調査区域内における長さ約18.3m、溝幅140~166cm、深さ約32cmを測る。平面

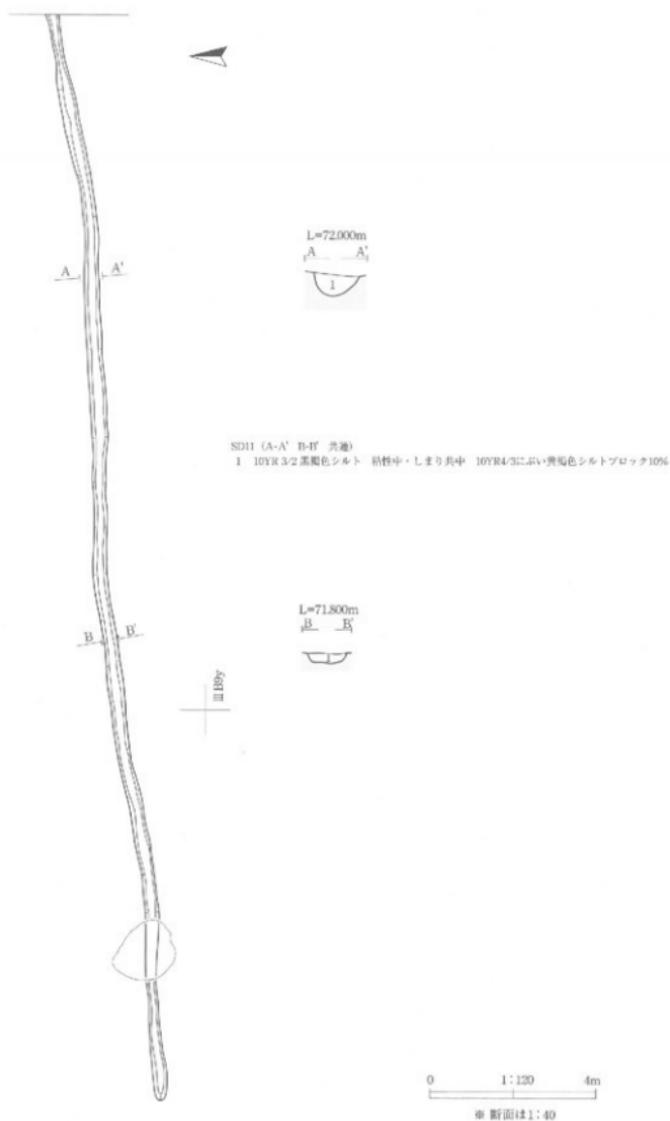


SD10 (A-A' B-B' 共通)

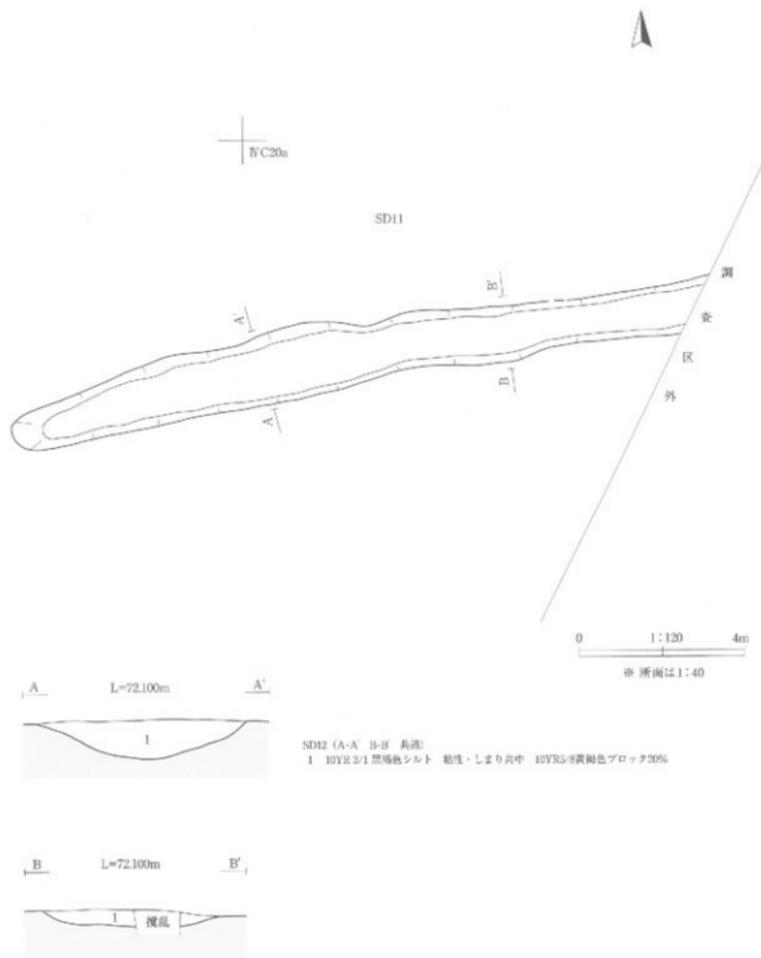
- 1 10YR 2/2 黒藍色シルト 粘性やや弱・しまり中  
10YR 4/0 褐色灰黒小砂
- 2 10YR 4/6 藍色シルト 粘性・しまり弱中  
10YR 2/2 黒藍色ブロック中砂%
- 3 10YR 2/2 黒藍色シルト 粘性やや弱・しまり中  
10YR 4/0 褐色ブロック40%

0 1:40 2m

第61図 SD10 溝跡



第62図 SD11 溝跡



第63図 SD12 溝跡

形は東一西方向に長い直線状で、断面は皿形を呈する。底面は緩やかに西側に傾斜しており、底部両端の高低差は20cm前後を測る。

[埋土] 黄褐色シルトブロックを少量含む、黒褐色シルトの単層で構成される。

[遺物・時期] 出土していない。時期は不明である。

### (3) カマド状遺構

本遺構は焚口部、燃焼部、煙道部によって構成され、各部とも地中に掘り込んで作られている。遺構の形状から鍋や釜をおいた可能性を想定し、カマド状遺構として報告する。

#### SX02カマド状遺構

遺 構 (第64図、写真図版27)

[位置・重複関係] 調査区中央部、ⅢC14aグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色シルトブロックと炭化物粒を含む赤褐色焼土のプランとして確認した。

[規模・形状] 全長295mを測り、焚口部と燃焼部、煙道部で構成される。焚口部は開口部径86×103cm、深さ24cmの隅丸方形を呈し、断面形は皿形である。燃焼部は径100cm、深さ27cmほどの円形を呈し、断面形は底面からやや内湾しながら立ち上がり袋状となる。また、焚口部と燃焼部の中間には接続部とみられる空間があり、長さ50cm、幅55cm、深さ24cmを測る。煙道部は燃焼部西壁面に構築され、21×51cm、深さ5～7cmの溝状を呈する。

[埋土] 7層に細分される。黒褐色シルトブロック、炭化物を少量含む赤褐色焼土主体で構成される。中位の暗褐色シルト層を介して底面には炭化物細片が2～5cmほど形成されている。また、中央部から西側の燃焼部、煙道部にかけては明赤褐色焼土が2～4cmにわたり形成されている。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

### (4) 墓 坑

#### SZ01墓坑

遺 構 (第65図、写真図版28)

[位置・重複関係] 調査区東側、ⅡC12yグリッドに位置する。検出面はⅢ層で黒褐色シルトの楕円形プランとして確認した。SD05溝跡と重複関係にあり、埋土の状況からこれより新しいと判断された。

[規模・形状] 開口部径86×114cm、底部径57.5×96cmの楕円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で19cmを測る。

[埋土] 3層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、一部に褐色シルトブロックを含んだ構成となっている。

遺 物 (写真図版63)

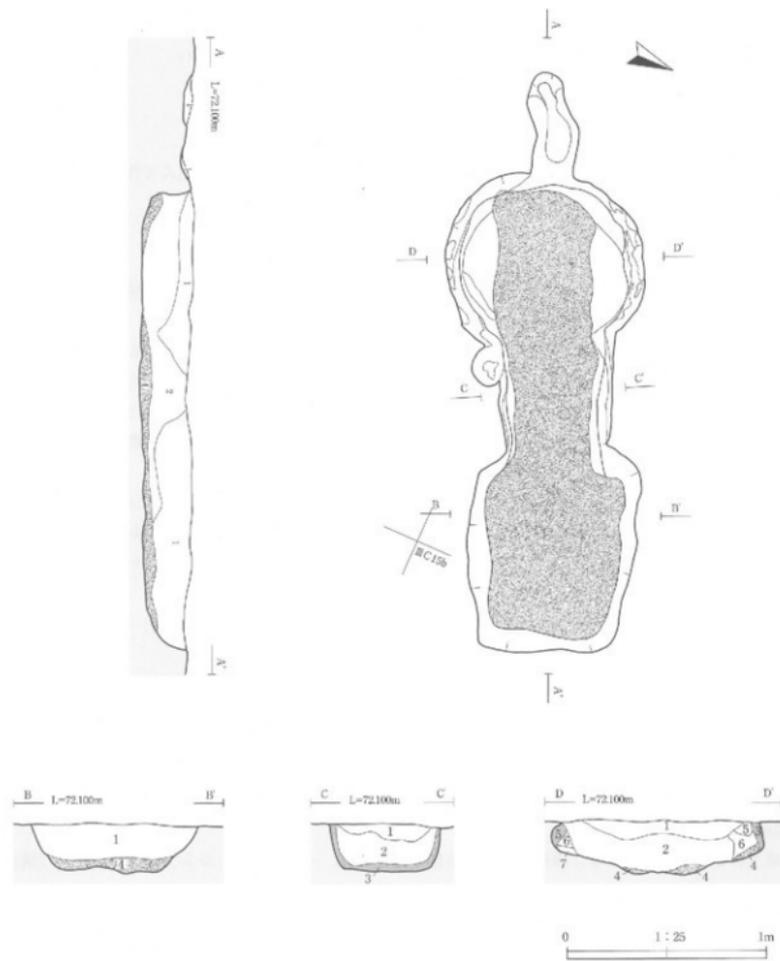
鉄釘1点(297)と棺桶材の小木片が1点(298)出土している。また、遺存状態が不良であるが、頭蓋骨、四肢骨?が出土した。鉄釘、木片の出土から近世以降のものと思われる。

#### SZ02墓坑

遺 構 (第65図、写真図版28)

[位置・重複関係] 調査区北側、ⅠC24rグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐～暗褐色の隅丸方形プランとして確認した。

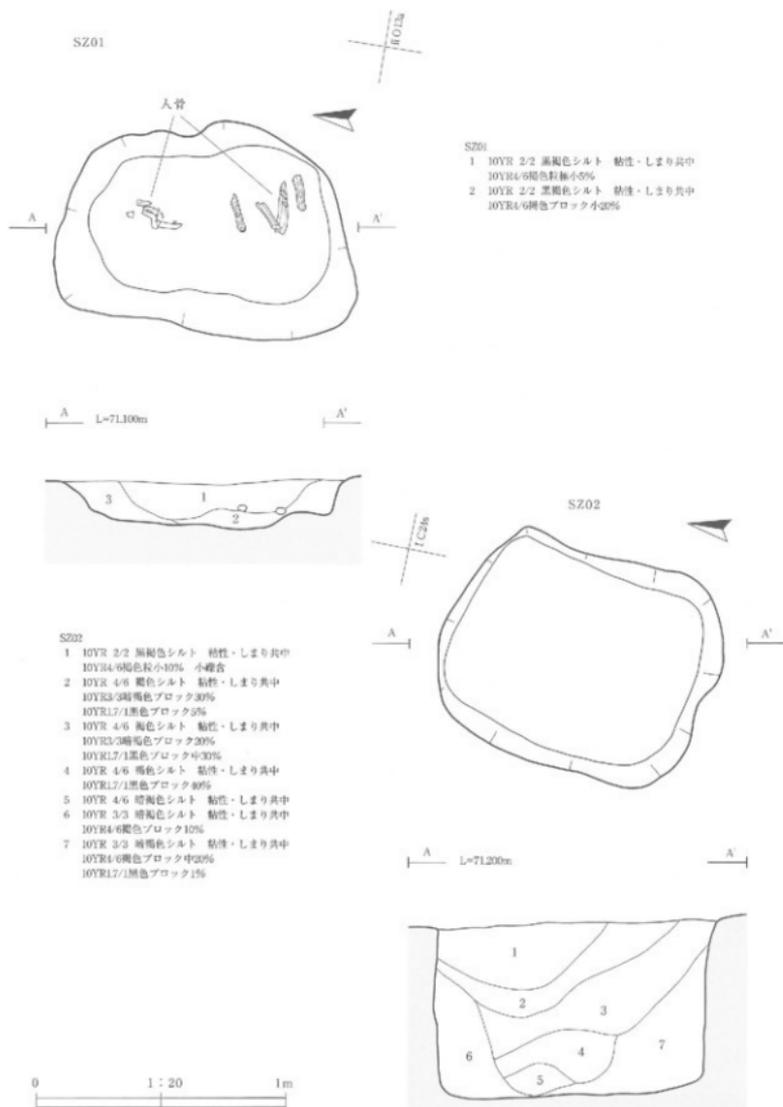
[規模・形状] 開口部径87.5×106cm、底部径74×96cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは



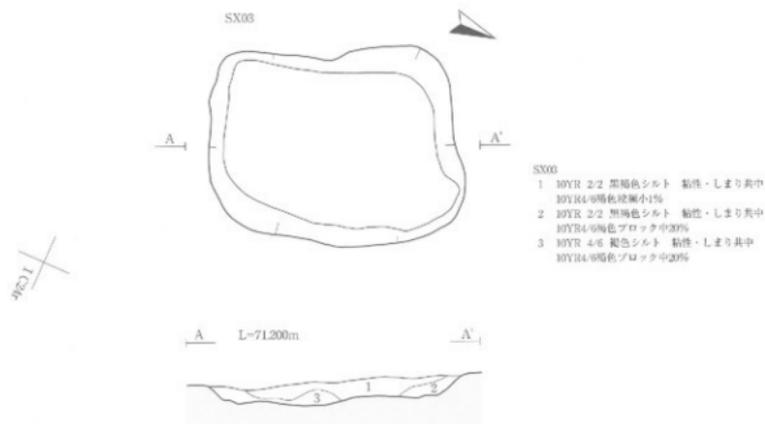
SX02カマド状遺構 [A-A' B-B' C-C' D-D' 共通]

- 1 2.5YR 4/8 赤褐色焼土 粘性・しまり共や中弱 10YR2/2黒褐色ブロック小20% 炭化物1%
- 2 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR2/2黒褐色ブロック小15% 10YR4/6褐色ブロック中15%
- 3 5YR 5/8 明赤褐色焼土 粘性・しまり共中
- 4 10YR 1.7/1 黒色シルト (炭化物粒)
- 5 5YR 5/8 明赤褐色焼土 粘性・しまり共中 10YR2/1黒色ブロック25%
- 6 10YR 5/1 におい・黄褐色シルト 粘性・しまり共や中強
- 7 10YR 4/4 褐色シルト 粘性・しまり共中

第64図 SX02 カマド状溝構

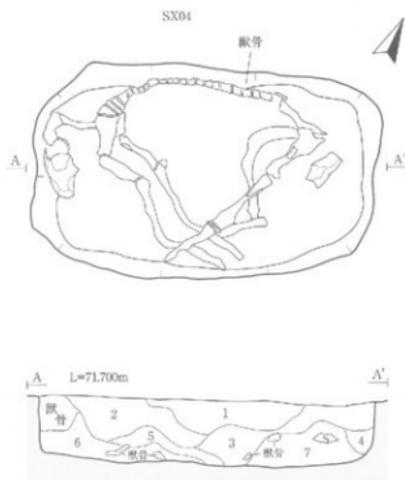


第65図 SZ01・02 墓坑



SX04 (A-A')

- 1 10YR 2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR3/3暗褐色粒小0% 10YR4/6褐色粒小10%
- 2 10YR 3/3 緑褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR2/2黒褐色ブロック中10%
- 3 10YR 2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR4/0褐色ブロック小1%
- 4 10YR 3/3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR2/2黒褐色ブロック10%
- 5 10YR 3/3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR2/2黒褐色ブロック小1%
- 6 10YR 2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR3/3暗褐色ブロック1%
- 7 10YR 2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR3/3暗褐色ブロック40%



0 1:25 1m

第66図 SX03・04 獣骨出土土坑

最深部で69cmを測る。壁はおおむね垂直に立ち、底面は平坦である。

[埋土] 7層に細分される。黒褐～暗褐～褐色シルトのブロック状の混合土主体で構成される。

遺物 (第84図・写真図版63)

キセル (残存不良のため部位不明) 1点 (299)、寛永通宝 3点 (300～302) が出土している。骨片は残存していなかった。

### (5) 獣骨出土土坑

#### SX03獣骨出土土坑

遺構 (第66図・写真図版28)

[位置・重複関係] 調査区中央部、I C 23q グリッドに位置する。検出面はⅢ層で黒褐色の隅丸長方形プランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径105×122cm、底部径77×95cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で11cmを測る。

[埋土] 3層に細分される。褐色シルトブロックを少量含む黒褐色粘土質シルト主体で構成される。

[遺物・時期] 埋土下位から底面にかけて馬の下顎骨とみられる獣骨片が出土している。時期はおおむね近世以降の所属と推測されるが、詳細は不明である。

#### SX04獣骨出土土坑

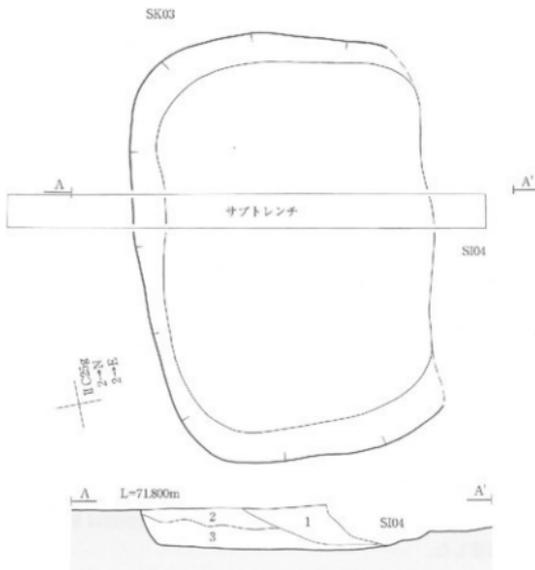
遺構 (第66図・写真図版28)

[位置・重複関係] 調査区中央部、Ⅲ C 6 d グリッドに位置する。検出面はⅢ層で黒褐～暗褐色の隅丸長方形プランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径153×168cm、底部径93×110cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で32cmを測る。

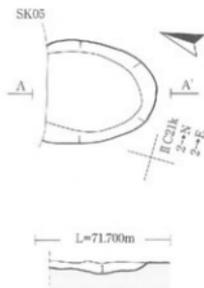
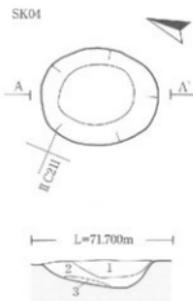
[埋土] 7層に細分される。黒褐～暗褐色シルトの混合土主体で構成される。

[遺物・時期] 埋土上位から底面にかけて頭部を西側、背を北側、脚部を南側に向けた状態の獣骨が一体分出土した。歯の形状などから馬であるとみられる。時期はおおむね近世以降のものと推測されるが、このほかに遺物は出土しておらず、詳細は不明である。



SK03

- 1 10YR 2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強・しまり強 5YR5/8赤褐色粘土15% 炭化物2%
- 2 10YR 3/1 黒褐色粘質シルト 粘性・しまりやや強 10YR4/3C・5YR黄褐色シルトブロック3%
- 3 10YR 2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強・しまり強 10YR4/3C・5YR黄褐色シルトブロック10%  
5YR5/8赤褐色シルト粘土1%以下



SK04

- 1 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中  
2.5YR6/8褐色焼土1%
- 2 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中  
2.5YR6/8褐色焼土40% 炭化物5%
- 3 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中  
2.5YR6/8褐色焼土2%

SK05

- 1 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中  
2.5YR6/8褐色焼土30% 炭化物1%



第67図 SK03~05 土坑

## 時期不明の遺構

## (1) 土 坑

## SK03土坑

遺 構 (第67図、写真図版29)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C25 g グリッドに位置する。検出面はⅢ層でSI04竅穴住居跡の床面を精査中に、赤褐色焼土と鈍い黄褐色粒を備かに含む黒褐色のプランとして確認した。SI04住居跡の埋土断面・貼り床の状況から、本土坑が古いと判断される。

[規模・形状] 開口部径-242×347cm、底部径217×298cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で35cmを測る。

[埋土] 3層に細分される。黒褐色粘上質シルトを主体で構成され、上位に明赤褐色焼土を少量含む。中位から下位にかけて鈍い黄褐色シルトブロックが混入する。埋土は粘性がやや強く、硬くしまっている。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

## SK04土坑

遺 構 (第67図、写真図版29)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C21 I グリッドに位置する。検出面はⅢ層で橙色焼土を含む黒褐色のプランとして検出した。

[規模・形状] 開口部径78×95cm、底部径48×61cmの楕円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で20cmを測る。

[埋土] 3層に細分され、黒褐色シルト主体で構成される。第2層は橙色焼土をブロック状に多量に含む黒褐色シルトが堆積する。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

## SK05土坑

遺 構 (第67図、写真図版29)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C20 k グリッドに位置する。検出面はⅢ層で橙色焼土を含む黒褐色のプランとして確認した。北半部は擾乱により切られている。

[規模・形状] 開口部径83×-89cm、底部径64×-77cmの楕円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で8cmを測る。

[埋土] 橙色焼土、炭化物を含む黒褐色シルトの単層である。

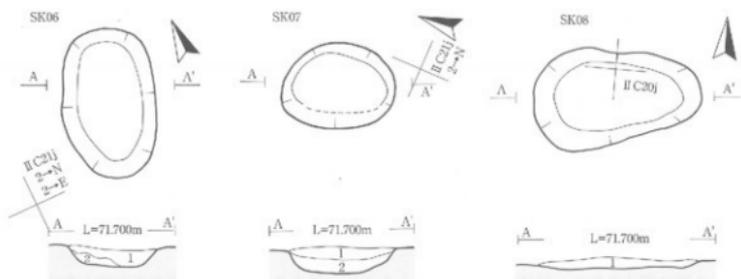
[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

## SK06土坑

遺 構 (第68図、写真図版29)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C20i グリッドに位置する。検出面はⅢ層で橙色焼土を含む黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径73×125cm、底部径51×97cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で13cmを測る。



SK06

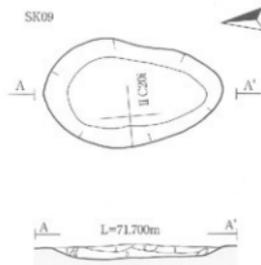
- 1 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中 25YR6-8褐色焼土5%
- 2 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中

SK07

- 1 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中 25YR6-8褐色焼土5%
- 2 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中 25YR6-8褐色焼土30% 炭化物30%

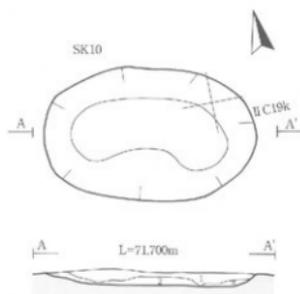
SK08

- 1 25YR 6-8褐色焼土シルト 10YR2/1 黒褐色土20% 炭化物5%



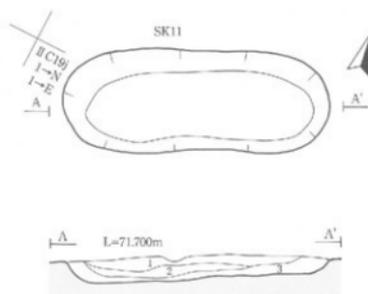
SK09

- 1 25YR 6-8褐色焼土シルト 10YR2/1黒褐色土13% 炭化物5%
- 2 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中
- 3 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中 25YR6-8褐色焼土2%



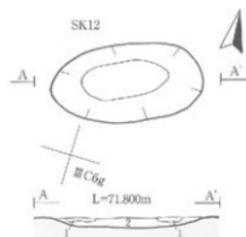
SK10

- 1 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中 25YR6-8褐色焼土ブロック10%
- 2 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中



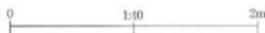
SK11

- 1 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中 25YR6-8褐色焼土1%
- 2 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中 25YR6-8褐色焼土ブロック3% 炭化物2%
- 3 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中



SK12

- 1 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中
- 2 10YR 2/1 黒褐色シルト 粘性・しまり各中 25YR6-8褐色焼土ブロック3% 炭化物2%



第68図 SK06～12 土坑

[埋土] 2層に大別され、黒褐色シルト主体で構成される。上位には橙色焼土が少量含まれる。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

#### SK07土坑

遺構 (第68図、写真図版30)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C20i グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、橙色焼土ならびに炭化物を含む黒褐色のプランとして確認したものである。

[規模・形状] 開口部径71×92cm、底部径47×76cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で21cmを測る。

[埋土] 2層に大別され、橙色焼土を少量含む黒褐色シルト主体で構成される。下位に炭化物が混入する。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

#### SK08土坑

遺構 (第68図、写真図版30)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C20 j グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、橙色焼土ならびに炭化物を含む黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径83×136cm、底部径51×104cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で10cmを測る。

[埋土] 黒褐色シルトブロック・炭化物を少量含む橙色焼土の単層で構成される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

#### SK09土坑

遺構 (第68図、写真図版30)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C20i グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、橙色焼土並びに炭化物を含む黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径87×144cm、底部径56×70cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で11cmを測る。

[埋土] 3層に細分され、橙色焼土ブロックを少量含む黒褐色シルト主体で構成される。最上位に黒褐色ブロックを少量含む橙色焼土の堆積が認められる。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

#### SK10土坑

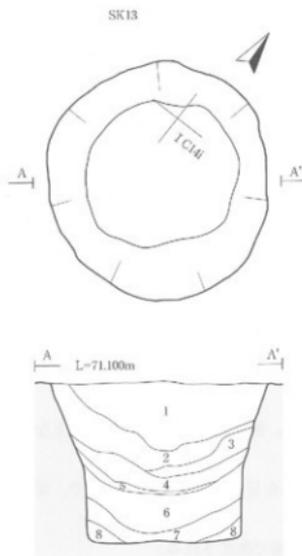
遺構 (第68図、写真図版30)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C18 j グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、橙色焼土を含む黒褐色のプランとして検出した。

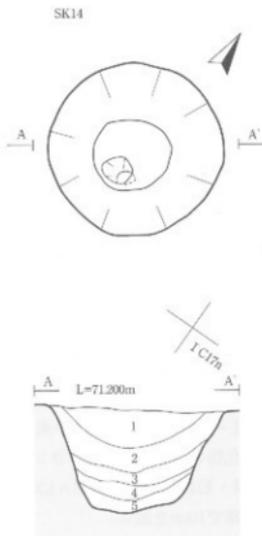
[規模・形状] 開口部径106×172cm、底部径41×126cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で11cmを測る。

[埋土] 2層に大別され、黒褐色シルト主体で構成される。上位に橙色焼土ブロックを少量含む。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

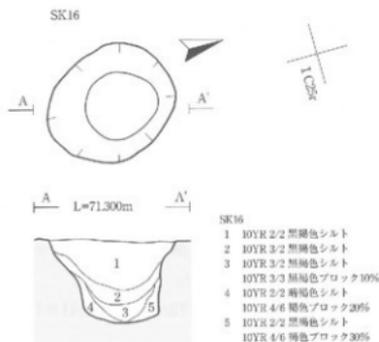
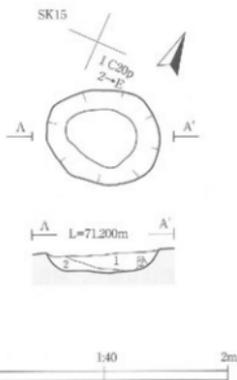


- SK13
- 1 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性やや強・しまり中  
10Y4 6褐色粒小2%
  - 2 10YR 4 6 褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強  
10Y3 1 5 黒褐色粒小30%
  - 3 10YR 3 1 黒褐色シルト 粘性やや強・しまり中  
10Y4 6 褐色ブロック5%
  - 4 10YR 3 2 黒褐色シルト 粘性やや強・しまり中  
10Y4 6 褐色ブロック6%
  - 5 10YR 3 2 黒褐色シルト 粘性やや強・しまり中  
10Y4 6 褐色ブロック20%
  - 6 10YR 3 1 黒褐色シルト 粘性やや強・しまり中  
10Y4 6 褐色ブロック兼小1%
  - 7 10YR 3 1 黒褐色シルト 粘性強・しまりやや強
  - 8 10YR 4 6 褐色シルト 粘性強・しまりやや弱



- SK14
- 1 10YR 3 2 黒褐色シルト 粘性やや強・しまり中  
10Y5 6 黄褐色 (塊状) 粘土粒1%以下
  - 2 10YR 3 2 黒褐色シルト 粘性やや強・しまり中  
10Y5 6 黄褐色 (塊状) 粘土粒1%含
  - 3 10YR 3 1 黒褐色シルト 粘性やや強・しまり中
  - 4 10YR 3 3 暗褐色シルト 粘性やや強・しまり中
  - 5 10YR 2 1 黒色シルト 粘性やや強・しまり中

- SK15
- 1 10YR 2 2 黒褐色シルト 粘性・しまり共に
  - 2 10YR 3 2 黒褐色シルト 粘性・しまり共に  
10YR2 2 黒褐色ブロック20%



- SK16
- 1 10YR 2 2 黒褐色シルト
  - 2 10YR 3 2 黒褐色シルト
  - 3 10YR 3 2 黒褐色シルト  
10YR 3 3 黒褐色ブロック10%
  - 4 10YR 2 2 暗褐色シルト  
10YR 4 6 褐色ブロック20%
  - 5 10YR 2 2 黒褐色シルト  
10YR 4 6 褐色ブロック20%

第69図 SK13~16 土坑

**SK11土坑****遺構** (第68図、写真図版31)

[位置・重複関係] 調査区中央部、ⅡC18jグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、橙色焼土および炭化物を含む黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径85×212cm、底部径55×182cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で19cmを測る。

[埋土] 3層に大別される。黒褐色シルト主体で構成され、上位には橙色焼土ブロック・炭化物が少量含まれる。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

**SK12土坑****遺構** (第68図、写真図版31)

[位置・重複関係] 調査区中央部南寄り、ⅢC5gグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、橙色焼土ならびに炭化物を含む黒褐色のプランとして確認された。

[規模・形状] 開口部径62×124cm、底部径25×70cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で20cmを測る。

[埋土] 2層に大別され、黒褐色シルトを主体として構成される。下位には炭化物・橙色焼土ブロックが少量含まれる。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

**SK13土坑****遺構** (第69図、写真図版31)

[位置・重複関係] 調査区北側、ⅠC14iグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、褐色粒を僅かに含む黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径176×197cm、底部径116×123cmの円形を呈する。断面形は逆台形状で、底面から60cmほど直立気味に立ち上がり、そこからやや外傾しながら開口部に至る。深さは最深部で130cmを測る。

[埋土] 黒褐色粘土質シルト主体で構成され、褐色シルトブロックの混入量で8層に細分される。埋土の状況から自然堆積と判断される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

**SK14土坑****遺構** (第69図、写真図版31)

[位置・重複関係] 調査区北側ⅠC16mグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、地山の黄褐色粘土粒を僅かに含む黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径140×142cm、底部径56×64cmの円形を呈する。断面形は袋形で、深さは最深部で84cmを測る。

[埋土] 5層に細分される。黒褐色粘土質シルト主体で構成され、最下層に粘性のやや強い黒色シルトが堆積する。埋土の状況から自然堆積と判断される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

SK17

- 1 10YR 2/2暗褐色シルト 極小礫含
- 10YR 3/3暗褐色粒小10%
- 10YR 4/6褐色粒小10%
- 2 10YR 3/3暗褐色シルト
- 10YR 4/6褐色ブロック10%
- 3 10YR 3/3暗褐色シルト
- 10YR 2/2黒褐色ブロック20%
- 4 10YR 3/3暗褐色シルト
- 10YR 2/2黒褐色ブロック20%
- 10YR 4/6褐色ブロック20%

SK18

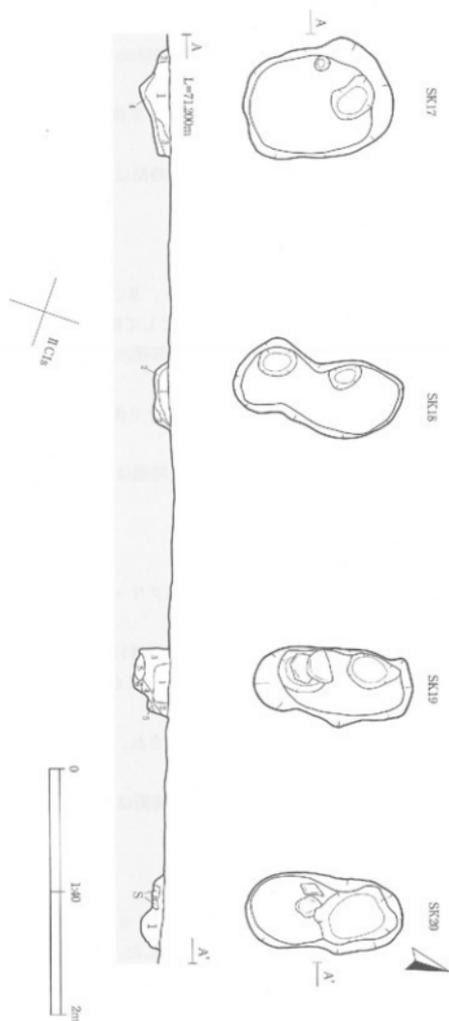
- 1 10YR 2/2暗褐色シルト 極小礫含
- 10YR 3/3暗褐色粒小10%
- 10YR 4/6褐色粒小10%
- 2 10YR 3/3暗褐色シルト
- 10YR 2/2褐色ブロック10%
- 10YR 4/6褐色ブロック20%
- 3 10YR 3/3暗褐色シルト
- 10YR 4/6褐色ブロック10%

SK19

- 1 10YR 2/2暗褐色シルト
- 10YR 3/3暗褐色粒小10%
- 10YR 4/6褐色粒小10% 極小礫含
- 2 10YR 4/6褐色シルト
- 10YR 3/3暗褐色ブロック20%
- 10YR 2/2黒褐色ブロック10%
- 3 10YR 2/2黒褐色シルト
- 4/6褐色ブロック20%
- 4 10YR 3/3暗褐色シルト
- 10YR 2/2暗褐色ブロック20%
- 10YR 4/6褐色ブロック20%
- 5 10YR 2/2暗褐色シルト
- 10YR 3/3暗褐色ブロック20%
- 6 10YR 2/2暗褐色シルト
- 10YR 3/3暗褐色粒小10%
- 10YR 4/6褐色ブロック5%

SK20

- 1 10YR 2/2暗褐色シルト
- 10YR 3/3暗褐色粒小10%
- 10YR 4/6褐色粒小10% 極小礫含



第70図 SK17~20 土坑

**SK15土坑****遺構** (第69図、写真図版32)

[位置・重複関係] 調査区北側、I C20pグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径78×92cm、底部径44×57cmの円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で14cmを測る。

[埋土] 2層に細分される。黒褐色シルトを主体で構成される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

**SK16土坑****遺構** (第69図、写真図版32)

[位置・重複関係] 調査区北東側、II C25rグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径89×105cm、底部径53×58cmの円形を呈する。断面形は袋形で、底面から30cmほど直線的に立ち上がり、その後外傾しながら開口部に至る。深さは最深部で65cmを測る。

[埋土] 5層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、下位に褐色シルトブロックを少量含む。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

**SK17土坑****遺構** (第70図、写真図版32)

[位置・重複関係] 調査区北東側、I C25rグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径89×120cm、底部径79×98cmの楕円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で24cmを測る。

[埋土] 4層に細分される。黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

**SK18土坑****遺構** (第70図、写真図版32)

[位置・重複関係] 調査区北東側、I C25rグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

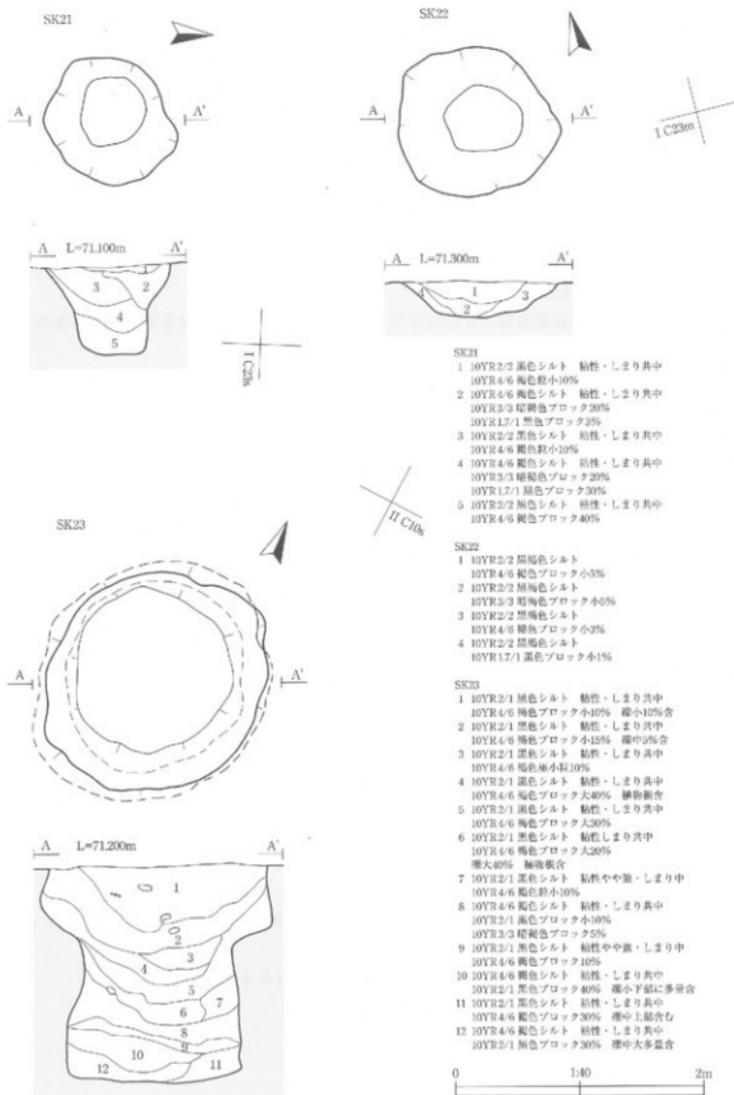
[規模・形状] 開口部径65×137cm、底部径56×125cmの楕円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で14cmを測る。

[埋土] 3層に細分される。黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

**SK19土坑****遺構** (第70図、写真図版33)

[位置・重複関係] 調査区北東側、I C25sグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。



第71図 SK21~23 土坑

[規模・形状] 開口部径63×128cm、底部径49×100cmの楕円形を呈する。断面形は皿基調を呈し、深さは最深部で30cmを測る。

[埋土] 6層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、全体に暗褐～褐色シルトブロックが混入する。底面からは径24～28cmの扁平礫が2個検出されている。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

### SK20土坑

遺構 (第70図、写真図版33)

[位置・重複関係] 調査区北東側、IC25sグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径62×127cm、底部径55×117cmの楕円形を呈する。断面形は皿形基調を呈し、深さは最深部で16cmを測る。

[埋土] 一部に暗褐色シルトブロックを含む黒褐色シルト主体で構成される。径20cmほどの扁平礫が2個検出されている。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

### SK21土坑

遺構 (第71図、写真図版33)

[位置・重複関係] 調査区北東側、IC23rグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径103×104cm、底部径52×54cmの円形を呈する。断面形は逆台形状で、底面から30cmほど直線的に立ち上がり、その後外傾して開口部に至る。深さは最深部で70cmを測る。

[埋土] 5層に細分される。黒褐色シルト主体で、一部に褐色～暗褐色シルトブロックを含む構成となっている。埋土は粘性がやや強く、硬くしまっている。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

### SK22土坑

遺構 (第71図、写真図版33)

[位置・重複関係] 調査区北側、IC22lグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランを確認した。

[規模・形状] 開口部径120×128cm、底部径53×61cmの円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で70cmを測る。

[埋土] 4層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、一部に暗褐～褐色シルトブロックを含む構成となっている。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

### SK23土坑

遺構 (第71図、写真図版34)

[位置・重複関係] 調査区中央部北東寄り、II C10rグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒色のプランとして確認した。



[規模・形状] 開口部径175×176cm、底部径140×150cmの円形を呈する。断面形は逆凸状で、底面からやや内傾しながら100cmほど直線的に立ち上がり、その後一旦外側に短く張り出し段を形成し開口部に至る。深さは最深部で176cmを測る。

[埋土] 12層に細分される。黒色～褐色シルトを主体で構成され、上位に明赤褐色焼土を少量含む。10～12層中に礫を多量に含む。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

#### SK24土坑

遺構 (第72図、写真図版34)

[位置・重複関係] 調査区中央部北東寄り、II C10nグリッドに位置する。検出面はIII層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径162×178cm、底部径59×62cmの不整な楕円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で53cmを測る。

[埋土] 3層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、中位に暗褐色シルトブロックを含む。上位に明赤褐色焼土を少量含む。中位から下位にかけて鈍い黄褐色シルトブロックが混入する。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

#### SK25土坑

遺構 (第72図、写真図版34)

[位置・重複関係] 調査区中央部北東寄り、II C4pグリッドに位置する。検出面はIII層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径91×105cm、底部径25×28cmの円形を呈する。断面形は袋形で、深さは最深部で81cmを測る。

[埋土] 7層に細分される。黒褐～暗褐色シルト主体で、一部に暗褐～黒色シルトブロックを含む構成となっている。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

#### SK26土坑

遺構 (第72図、写真図版34)

[位置・重複関係] 調査区北側、I C10eグリッドに位置する。検出面はIII層で黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径77×198cm、底部径62×173cmの楕円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で15cmを測る。

[埋土] 暗褐色シルトブロックを少量含む黒褐色シルトの単層である。

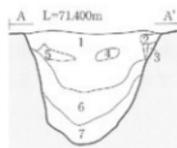
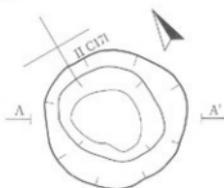
[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

#### SK27土坑

遺構 (第72図、写真図版35)

[位置・重複関係] 調査区東側、II C18pグリッドに位置する。検出面はIII層で黒褐色のプランとして確認した。

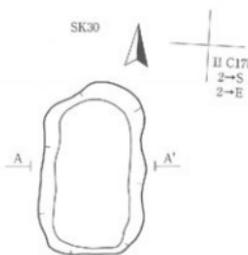
SK28



SK28

- |                   |                                   |
|-------------------|-----------------------------------|
| 1 10YR 2/2 黒褐色シルト | 10YR4 6暗褐色ブロック小1%                 |
| 2 10YR 2/2 黒褐色シルト | 10YR4 6暗褐色ブロック30%                 |
| 3 10YR 3/3 暗褐色シルト | 10YR2 2黒色ブロック30%                  |
| 4 10YR 2/2 黒褐色シルト | 10YR3 3暗褐色シルト小5%                  |
| 5 10YR 2/2 黒褐色シルト | 10YR4 6暗褐色シルト小5%                  |
| 6 10YR 2/2 黒褐色シルト | 10YR3 3暗褐色シルト小30%                 |
| 7 10YR 3/3 暗褐色シルト | 10YR2 2黒色ブロック5% 10YR4 6暗褐色ブロック30% |

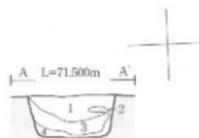
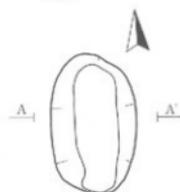
SK30



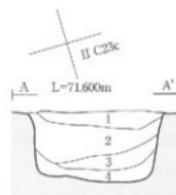
SK29

- 1 10YR 2/2 黒色シルト
- 10YR3 3暗褐色ブロック小3%
- 10YR4 6暗褐色ブロック小1%
- 2 10YR 4/6 暗褐色シルト
- 10YR2 2黒色ブロック10%
- 3 10YR 2/2 黒褐色シルト
- 10YR3 3暗褐色ブロック小3%
- 10YR4 6暗褐色ブロック1%
- 4 10YR 3/3 暗褐色シルト
- 10YR2 2黒色ブロック1%

SK29



SK31



SK30

- 1 10YR 4/6 暗褐色シルト
- 2 10YR 3/3 暗褐色シルト
- 10YR4 6暗褐色シルト小5%
- 10YR3 3暗褐色シルト小5%
- 陶器片少量
- 3 10YR 4/6 暗褐色シルト
- 10YR3 3暗褐色シルト小30%

SK31

- 1 10YR 4/6 暗褐色シルト
- 10YR4 6暗褐色シルト小30%
- 2 10YR 2/2 黒褐色シルト
- 3 10YR 2/2 黒褐色シルト
- 10YR4 6暗褐色シルト小1%
- 4 10YR 2/2 黒褐色シルト
- 10YR4 6暗褐色シルト小5%



第73図 SK28~31 土坑

[規模・形状] 開口部径105×130cm、底部径96×120cmの隅丸長方形を呈する。断面形はピーカー形で、深さは最深部で48cmを測る。

[埋土] 6層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、一部に褐～黒褐色シルトブロックを含む。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

### SK28土坑

遺構 (第73図、写真図版35)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C171グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径113×115cm、底部径43×56cmの円形を呈する。断面形は袋形で、深さは最深部で90cmを測る。

[埋土] 7層に細分される。黒褐～暗褐色シルト主体で構成され、一部に褐色シルトブロックを含む。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

### SK29土坑

遺構 (第73図、写真図版35)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C19iグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径69×113cm、底部径34×70cmの楕円形を呈する。断面形はピーカー形で、深さは最深部で34cmを測る。

[埋土] 4層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、一部に黒～暗褐色ブロックを含む。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

### SK30土坑

遺構 (第73図、写真図版35)

[位置・重複関係] 調査区中央部、II C171グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、暗褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径84×140cm、底部径60×119cmの隅丸方形を呈する。断面形はピーカー形で、深さは最深部で32cmを測る。

[埋土] 3層に細分される。褐～暗褐色シルト主体で構成され、一部に黒色シルトブロックを含む。

[遺物・時期] 埋土中から磁器片が2点 (306、307)、ガラス製の器片が1点出土している (308)。このことからおおむね近世以後～現代にかけての所屬と考えられる。

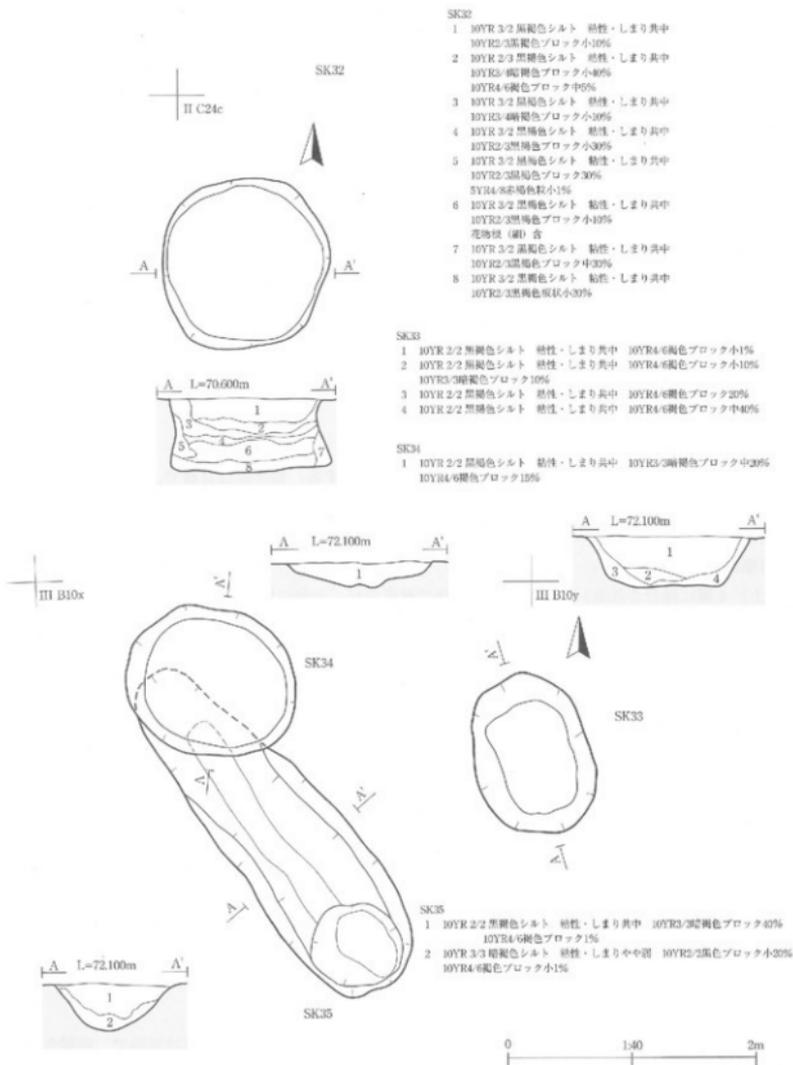
### SK31土坑

遺構 (第73図、写真図版36)

[位置・重複関係] 調査区中央部西寄り、II C22cグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、暗褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径110×112cm、底部径67×84cmの円形を呈する。断面形はピーカー形で、深さは最深部で57cmを測る。

[埋土] 4層に細分される。暗褐～黒褐色シルト主体で構成され、一部に褐色シルトブロックを含む。



第74図 SK32～35 土坑

[遺物・時期] 埋土中より棒状鉄製品が1点出土している(311)。遺構の時期を決定し得るような遺物は出土しておらず詳細は不明である。

### SK32土坑

遺構(第74図、写真図版36)

[位置・重複関係] 調査区中央部西寄り、II C24cグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径135×138cm、底部径125×126cmの円形を呈する。断面形はフラスコ形で、底面からやや内傾しながら立ち上がる。深さは最深部で60cmを測る。

[埋土] 8層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、一部に暗褐色～褐色シルトブロックを含む。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

### SK33土坑

遺構(第74図、写真図版36)

[位置・重複関係] 調査区南側西寄り、Ⅲ B10wグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径92×133cm、底部径58×90cmの楕円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で40cmを測る。

[埋土] 4層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、一部に褐色シルトブロックを含む。

[遺物・時期] 埋土中より縄文土器片が1点出土している(312)。遺構の時期を決定し得るような遺物は出土しておらず詳細は不明である。

### SK34土坑

遺構(第74図、写真図版36)

[位置・重複関係] 調査区南側西寄り、Ⅲ B10wグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径120×138cm、底部径100×116cmの円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で19cmを測る。

[埋土] 暗褐色～褐色シルトブロックを含む黒褐色シルトの単層である。

[遺物・時期] 埋土中より縄文土器片1点(313)、剥片3点(314～316)が出土している。このほか遺構の時期を決定し得るような遺物は出土しておらず詳細は不明である。

### SK35土坑

遺構(第74図、写真図版37)

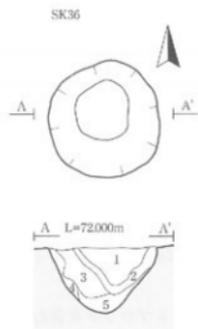
[位置・重複関係] 調査区南側西寄り、Ⅲ B10wグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径90×315cm、底部径20×256cmの長楕円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で38cmを測る。

[埋土] 2層に細分される。上位は暗褐色シルトブロックを含む黒褐色シルト主体で構成される。下位は、暗褐色シルト主体で構成され、黒～褐色シルトブロックを含む。

SK36

- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性中・しまりやや強
- 10YR4/6褐色ブロック小1%
- 2 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性中・しまりやや強
- 10YR4/6褐色ブロック5%
- 3 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性中・しまりやや強
- 10YR4/6褐色ブロック極小2%
- 4 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘性中・しまりやや強
- 10YR2/2黒色ブロック5%
- 5 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性やや強・しまり中
- 10YR3/3暗褐色ブロック10%

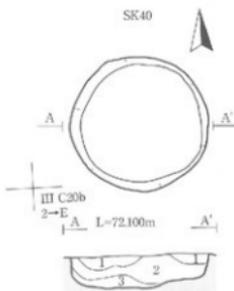
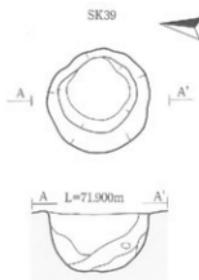
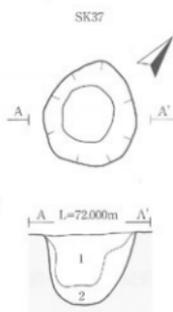


SK37

- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR3/3暗褐色ブロック小1%
- 2 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR4/6褐色ブロック中25%

SK38

- 1 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR2/2黒色ブロック大30%
- 10YR4/6褐色ブロック小30%

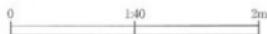


SK39

- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR3/3暗褐色ブロック小1%
- 2 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR3/3暗褐色ブロック小5%
- 3 10YR 4/6 褐色シルト 粘性・しまり共中
- 4 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR4/6褐色ブロック大30%
- 10YR4/6褐色ブロック10%
- 5 10YR 4/6 褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR3/3暗褐色ブロック10%
- 10YR2/2黒色ブロック10%
- 6 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR4/6褐色ブロック小5%

SK40

- 1 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共やや強
- 10YR4/6褐色ブロック5%
- 2 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR3/2暗褐色ブロック25%
- 3 10YR 4/4 褐色シルト 粘性・しまり共やや弱



第75図 SK36~40 土坑

〔遺物・時期〕 埋土中より縄文土器片が1点出土している（317）。遺構の時期を決定し得るような遺物は出土しておらず詳細は不明である。

### SK36土坑

遺 構（第75図、写真図版37）

〔位置・重複関係〕 調査区南側西寄り、ⅢB8xグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプラントとして確認した。

〔規模・形状〕 開口部径88×96cm、底部径42×49cmの円形を呈する。断面形は碗形で、深さは最深部で52cmを測る。

〔埋土〕 5層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、一部に暗褐色シルトブロックを含む。

〔遺物・時期〕 遺物は出土していない。時期は不明である。

### SK37土坑

遺 構（第75図、写真図版37）

〔位置・重複関係〕 調査区南側西寄り、ⅢB9yグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプラントとして確認した。

〔規模・形状〕 開口部径75×86cm、底部径41×46cmの円形を呈する。断面形は碗形で、深さは最深部で56cmを測る。

〔埋土〕 2層に細分される。上位は暗褐色シルトブロックを少量含む黒褐色シルトで構成され、下位は褐色シルトブロックを少量含む暗褐色シルト主体で構成される。

〔遺物・時期〕 遺物は出土していない。時期は不明である。

### SK38土坑

遺 構（第75図、写真図版37）

〔位置・重複関係〕 調査区南西側、ⅢB12yグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、暗褐色のプラントとして確認した。

〔規模・形状〕 開口部径93×118cm、底部径83×110cmの楕円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で12cmを測る。

〔埋土〕 暗褐色シルト主体で構成され、黒～褐色シルトブロックを少量含む。

〔遺物・時期〕 埋土中より砥石が1点出土している（320）。このことから近世以降の所屬であると推測されるが、詳細な時期は不明である。

### SK39土坑

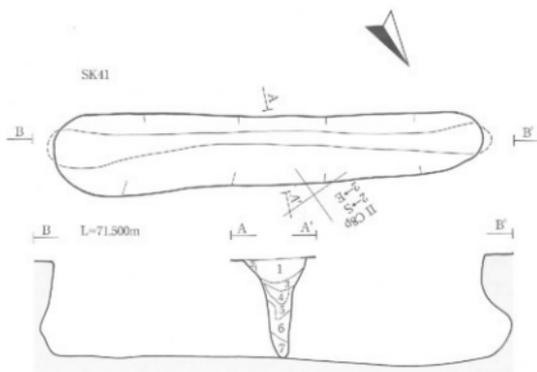
遺 構（第75図、写真図版38）

〔位置・重複関係〕 調査区南側、ⅢC17cグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプラントとして確認した。

〔規模・形状〕 開口部径83×85cm、底部径50×50cmの円形を呈する。断面形は碗形で、深さは最深部で47cmを測る。

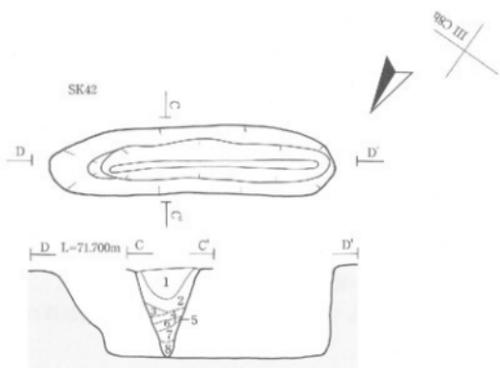
〔埋土〕 6層に細分される。黒褐～暗褐色シルト主体で構成され、一部に褐色シルトブロックを含む。

〔遺物・時期〕 遺物は出土していない。時期は不明である。



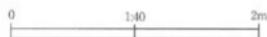
SK41土坑

- 1 10YR 2.2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 褐色粒小1%
- 2 10YR 2.3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR4.6褐色粒極小5%
- 3 10YR 2.3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR4.6褐色粒極小3%
- 4 10YR 2.3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR2.2黒褐色ブロック30%
- 5 10YR 4.6 褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR2.2黒褐色ブロック30% 10YR2.3黒褐色ブロック50%
- 6 10YR 4.6 褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR2.3黒褐色粒極小2%
- 7 10YR 4.6 褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR2.3黒褐色粒状450% 10YR2.2黒褐色ブロック420%



SK42土坑

- 1 10YR 1.7/1 黒色シルト 粘性やや弱・しまり中
- 2 10YR 1.7/1 黒色シルト 粘性やや弱・しまり中 10YR2.3黒褐色ブロック3%
- 3 10YR 2.3 黒褐色シルト 粘性中・しまり弱
- 4 10YR 7.6 明黄褐色シルト
- 5 10YR 7.6 明黄褐色シルト、10YR2.3黒褐色ブロック30%
- 6 10YR 2.3 黒褐色シルト 粘性中・しまりやや弱
- 7 10YR 2.3 黒褐色シルト 粘性中・しまりやや弱 10YR1.7/1黒色ブロック30%
- 8 10YR 2.3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中



第76図 SK41・42土坑

## SK40土坑

## 遺構 (第75図、写真図版38)

[位置・重複関係] 調査区南側、ⅢC19bグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径110×111cm、底部径94×97cmの円形を呈する。断面形はピーカー形で、深さは最深部で26cmを測る。

[埋土] 3層に細分される。上位は黒褐色シルト、中位はぶい黄褐色シルト、下位は褐色シルト主体で構成され、一部に褐色～黒褐色のシルトブロックを含む。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。時期は不明である。

## SK41土坑

## 遺構 (第76図、写真図版38)

[位置・重複関係] 調査区北東側、ⅡC8pグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径50×349cm、底部径30×355cm、深さ85cm(最深部)を測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-62°-Eである。短軸の断面形は底部から50cmほど直立気味に立ち上がり、そこから開口部に向かって緩やかに外反するY字形である。長軸の断面形は両側が内湾するフラスコ形を呈し、底面は北西側に傾斜しているがほぼ平坦である。底部両端の高低差は約10cmである。

[埋土] 7層からなり、上～中位は黒褐色シルト、下位は褐色シルト主体で構成される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が木米の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

## SK42土坑

## 遺構 (第76図、写真図版38)

[位置・重複関係] 調査区中央部南寄り、ⅢC7hグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径51×237cm、底部径30×170cm、深さ72cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-120°-Eである。短軸の断面形は底部から開口部に向かって外傾するV字形を呈する。長軸の断面形は南西側がほぼ直立し、北東側が緩やかに外傾して立ち上がる逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[埋土] 8層からなり、上位は黒色シルト、中位は明黄褐色シルト、下位は黒褐色シルトを主体として構成される。

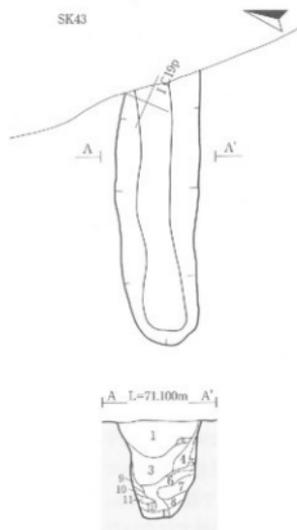
[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が木米の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

## SK43土坑

## 遺構 (第77図、写真図版39)

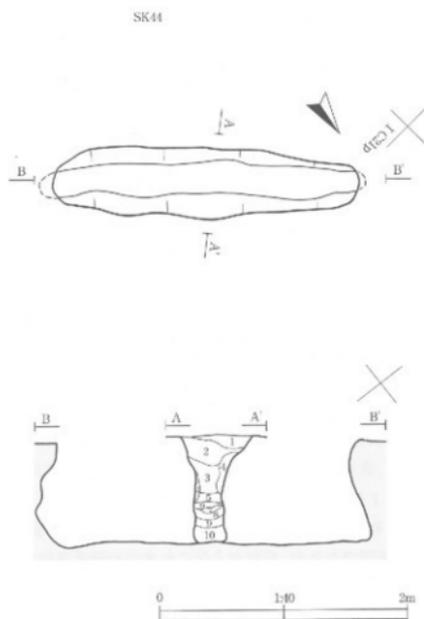
[位置・重複関係] 調査区北側、ⅠC19aグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径68×-212cm、底部径24×-200cm、深さ79cmを測る。平面形は溝形を呈し、



SK43

- 1 10YR 2/1 黒色シルト 粘性・しまり共中
- 2 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR5/8褐色ブロック10%
- 3 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR3/3暗褐色ブロック50%
- 4 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘性・しまり共やや強  
10YR5/8褐色ブロック20%
- 5 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘性・しまり共やや強  
10YR3/3暗褐色ブロック50%
- 6 10YR 4/1 褐色シルト 粘性・しまり共中
- 7 10YR 5/3 緑褐色シルト 粘性・しまり共やや強
- 8 10YR 6/8 明黄褐色シルト 粘性・しまり共弱  
10YR3/3暗褐色ブロック10%
- 9 10YR 7/5 明黄褐色シルト 粘性中・しまり弱
- 10 10YR 4/6 褐色シルト 粘性・しまり共中
- 11 10YR 8/8 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり中
- 12 10YR 6/8 明黄褐色シルト 粘性・しまり共弱  
10YR3/3暗褐色ブロック20%
- 13 10YR 6/8 明黄褐色シルト 粘性・しまり共弱  
10YR3/3暗褐色ブロック40%



SK44

- 1 10YR 4/2 黄褐色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの混合(50%) 粘性・しまり共中
- 2 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 3 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR5/8褐色粘質ブロック2%
- 4 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR5/8褐色粘質ブロック40%
- 5 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR5/8黄褐色粘質ブロック10%
- 6 10YR 2/1 黒色シルト 粘性やや強・しまり中
- 7 10YR 2/1 黒色シルト 粘性やや弱・しまりやや弱  
10YR4/6褐色粘質40%
- 8 10YR 4/6 褐色シルト 粘性・しまり共弱  
10YR2/1黒色シルト1%
- 9 10YR 4/6 褐色シルトと10YR2/1黒色シルトの混合(50%) 粘性・しまり共中
- 10 10YR 4/6 褐色シルト 粘性・しまり共ごく弱

第77図 SK43・44 土坑

長軸方向はN-73°-Eである。短軸の断面形は底部から開口部に向かって緩やかに開くU字形を呈する。断面形は皿形で、底面はほぼ平坦である。

[埋土] 13層に細分される。上位は黒色シルト、中位は黒褐～暗褐色シルト、下位は明黄褐色シルト主体で構成される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

#### SK44土坑

##### 遺構 (第77図、写真図版39)

[位置・重複関係] 調査区北側、IC21pグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、褐灰色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径58×246cm、底部径26×263cm、深さ88cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-56°-Wである。短軸の断面形は底部から50cmほど直立気味に立ち上がり、そこから開口部に向かって緩やかに外反するY字形である。長軸の断面形は両側が内湾するフラスコ形を呈し、底面はほぼ平坦である。

[埋土] 10層に細分される。上位は褐灰色シルトと黒褐色シルトの混合土が堆積し、中位は黒褐色シルト主体、下位は褐色シルト主体で構成され、最下層には褐色砂の堆積が認められる。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

#### SK45土坑

##### 遺構 (第78図、写真図版39)

[位置・重複関係] 調査区北側、IC22jグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒色のプランとして確認した。北側でSB01掘立柱建物跡の柱穴(pp1)と重複し、これにより切られる。

[規模・形状] 開口部径38×308cm、底部径32×306cm、深さ31cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-22°-Eである。短軸の断面形は底部から直立して立ち上がるビーカー形を呈する。

[埋土] 6層に細分される。上位は黒色シルト主体、下位は褐色シルト主体で構成される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

#### SK46土坑

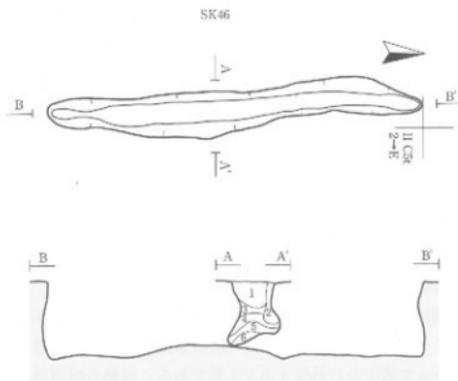
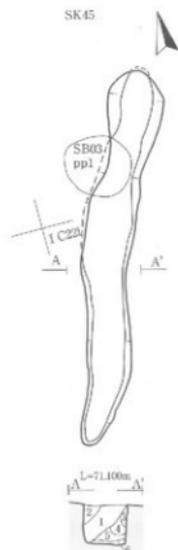
##### 遺構 (第78図、写真図版39)

[位置・重複関係] 調査区東側、II C5tグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認された。

[規模・形状] 開口部径38×302cm、底部径16×296cm、深さ62cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-3°-Wである。短軸の断面形は底部から不整に立ち上がる袋形である。長軸の断面形は両側が弱く内湾するフラスコ形を呈し、底面はやや凹凸が見られる。

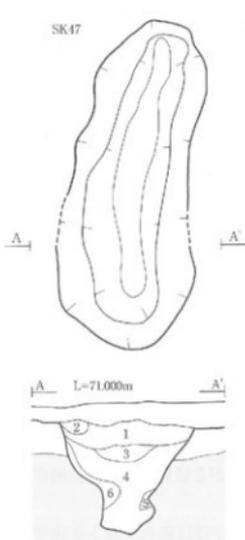
[埋土] 6層に細分される。上位は黒褐色シルト主体で構成され、下位は褐色シルト主体で構成される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など



SK45

- 1 10YR 2/2 黒色シルト 粘性・しまり共中 10YR2/1黒色ブロック30%、10YR4/6褐色ブロック10%
- 2 10YR 4/6 褐色シルト 粘性中弱・しまり中 10YR2/2褐色ブロック10%
- 3 10YR 4/6 褐色シルト 粘性中弱・しまり中 10YR2/2褐色ブロック5%
- 4 10YR 2/2 黒色シルト 粘性中弱・しまり中 10YR4/1褐色ブロック30%
- 5 10YR 4/6 褐色シルト 粘性中弱・しまり中 10YR2/1黒色ブロック10%
- 6 10YR 4/6 褐色シルト 粘性中弱・しまり中

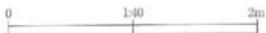


SK46

- 1 10YR 2/2 黒色シルト 粘性・しまり共中 10YR4/6褐色粒小1%
- 2 10YR 4/6 褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR2/2褐色ブロック大20%
- 3 10YR 2/2 黒色シルト 粘性・しまり共中 10YR4/6褐色ブロック小5%
- 4 10YR 2/2 黒色シルト 粘性・しまり共中
- 5 10YR 4/6 褐色シルト 粘性中・しまり中 10YR2/2褐色ブロック2%
- 6 10YR 4/6 褐色シルト 粘性中・しまり中 10YR2/2褐色ブロック20%

SK47

- 1 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 2 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR3/2黒褐色粒小1%
- 3 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 4 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR3/2褐色ブロック小5%
- 5 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR3/1黒褐色ブロック小10%
- 6 10YR 4/6 褐色シルト 粘性中弱・しまり中 10YR3/1黒色ブロック30%



第78図 SK45~47 土坑

詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

#### SK47土坑

##### 遺構 (第78図、写真図版40)

[位置・重複関係] 調査区北側、I C14jグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径109×268cm、底部径26×212cm、深さ92cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-10°-Eである。短軸の断面形は底部から開口部に向かって外傾する不整なV字形を呈する。

[埋土] 6層に細分される。黒褐色シルト主体で、明度の異なる黒褐色シルトブロックが少量混入する構成となっている。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

#### SK48土坑

##### 遺構 (第79図、写真図版40)

[位置・重複関係] 調査区北側、II C22nグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径53×245cm、底部径30×239cm、深さ72cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-30°-Wである。短軸の断面形は底部から内湾して立ち上がるフラスコ状で、その後外反して開口部に至る。長軸の断面形は両側が内湾するフラスコ形を呈し、底面はほぼ平坦である。

[埋土] 9層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、一部に黒色～明度の異なる黒褐色シルトブロックが混入する。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

#### SK49土坑

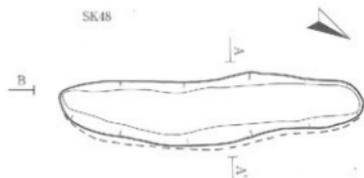
##### 遺構 (第79図、写真図版40)

[位置・重複関係] 調査区中央部北寄り、II C12nグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径56×286cm、底部径42×356cm、深さは最深部で59cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-87°-Eである。短軸の断面形は底部から内湾しながら立ち上がるフラスコ状で、その後直立気味に立ち上がり開口部に至る。長軸の断面形は両側が一旦外方に強く張り出したのち内湾するフラスコ形を呈する。底面には径8cm、深さ20～25cmほどの小穴が5個、連続して設けられている。

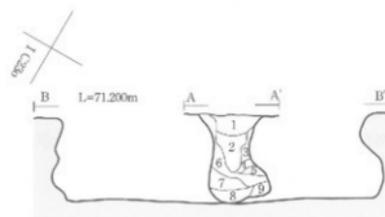
[埋土] 6層に細分される。上位は黒褐色粘土質シルト主体で、褐色シルトブロックを含む構成、下位にはよい黄褐色～暗褐色シルト主体で構成される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。



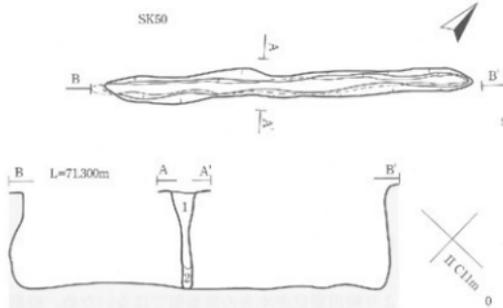
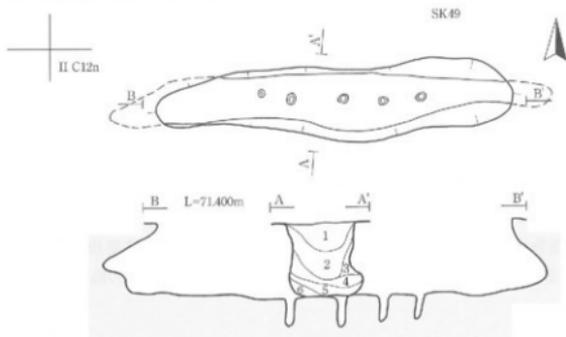
SK48

- 1 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR3/2黒褐色ブロック10%
- 10YR4/6褐色ブロック小10%
- 2 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 3 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 4 10YR 4/6 褐色シルト 粘性やや弱・しまり中 10YR3/1黒色ブロック5%
- 5 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR3/1黒褐色ブロック20%
- 6 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR3/1黒褐色ブロック10%
- 7 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR3/1黒褐色ブロック40%
- 8 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR3/1黒褐色ブロック30%
- 9 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共中



SK49

- 1 10YR 2/3 黒褐色粘質シルト 粘性中・しまりやや弱
- 2 10YR 2/3 黒褐色粘質シルト 粘性・しまり共やや強  
10YR4/4褐色ブロック40% 10YR7/4にふい黄褐色ブロック10%
- 3 10YR 4/4 褐色シルト 粘性やや強・しまり中  
10YR7/4にふい黄褐色ブロック30%
- 4 10YR 7/4 にふい黄褐色シルト 粘性弱・しまりやや弱  
10YR2/3黒褐色ブロック5%
- 5 10YR 3/3 緑褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR7/4にふい黄褐色ブロック20%
- 6 10YR 6/4 にふい黄褐色シルト 粘性・しまり共弱  
10YR4/4褐色ブロック42%



SK50

- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中  
10YR3/6黄褐色ブロック小20%
- 2 10YR 5/6 黄褐色シルト 粘性・しまり共やや強  
10YR3/3暗褐色ブロック30%

0 1:40 2m

第79図 SK48~50 土坑

## SK50土坑

## 遺構 (第79図、写真図版40)

[位置・重複関係] 調査区中央部北寄り、II C11グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径20×298cm、底部径8×302cm、深さは最深部で35cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-44°-Wである。短軸の断面形は底部から50cmほど直立気味に立ち上がり、そこから開口部に向かって緩やかに外傾するY字形である。長軸の断面形はフラスコ形を呈するが、北西壁の立ち上がりはそれほど内湾せず、やや内傾する程度である。底面は北西側に傾斜しているがほぼ平坦である。

[埋土] 2層に大別される。上位は黄褐色シルトブロックを少量含む黒褐色シルト、下位は暗褐色シルトブロックを少量含む黄褐色シルト主体で構成される。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

## SK51土坑

## 遺構 (第80図、写真図版41)

[位置・重複関係] 調査区北側、I C10gグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径57×115cm、底部径44×103cmの楕円形を呈する。断面形はピーカー形で、深さは最深部で23cmを測る。

[埋土] 3層に細分される。黒褐色シルト主体で、褐色～黄褐色シルトブロックが少量混入する構成となっている。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

## SK52土坑

## 遺構 (第80図、写真図版41)

[位置・重複関係] 調査区北側、I C14lグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

[規模・形状] 開口部径52×258cm、底部径20×241cm、深さは最深部で60cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-81°-Wである。短軸の断面形は底部から緩やかにやや外傾しながら立ち上がるU字状を呈する。長軸の断面形はピーカー状を呈し、両側ともほぼ直立して立ち上がる。底面は中央部付近がやや高いが、ほぼ平坦に推移する。

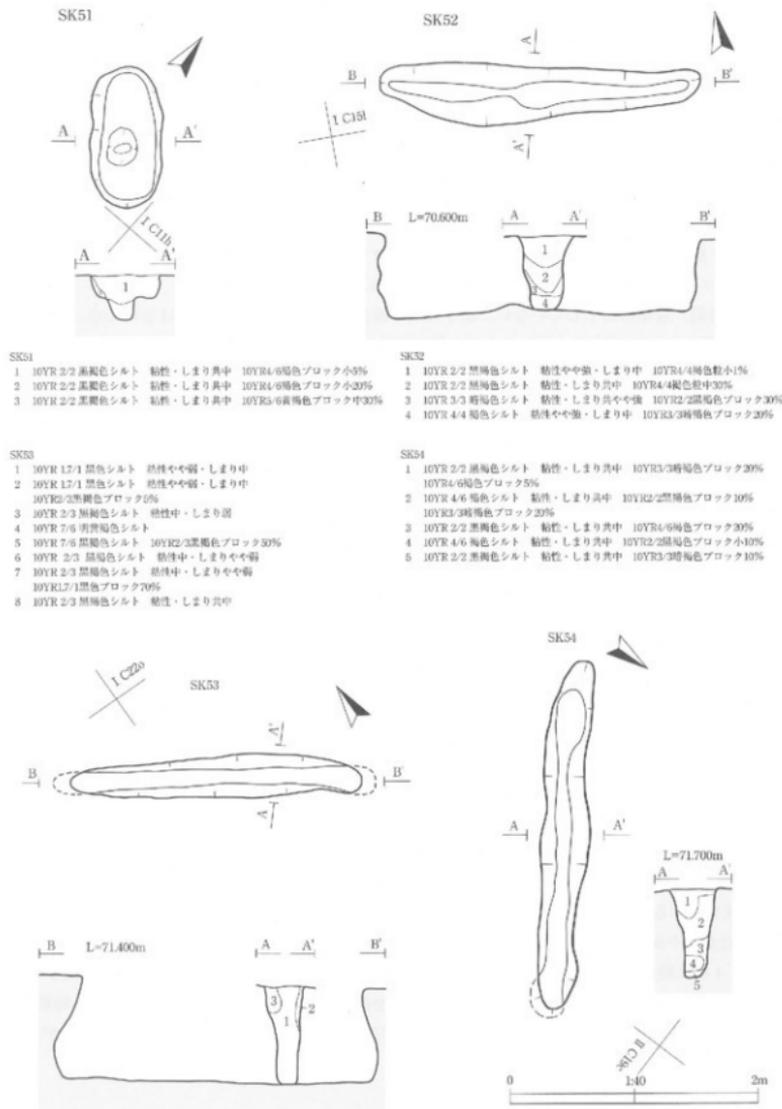
[埋土] 4層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、最下位に褐色粘土質シルトが堆積する。

[遺物・時期] 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

## SK53土坑

## 遺構 (第80図、写真図版41)

[位置・重複関係] 調査区北側、I C22oグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒色のプランとして



第80図 SK51~54 土坑

確認した。

〔規模・形状〕 開口部径36×235cm、底部径12×260cm、深さは最深部で80cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-58°-Wである。短軸の断面形は底部から緩やかに外傾して立ち上がるU字状を呈する。長軸の断面形は両側が内湾するフラスコ形を呈し、底面はほぼ平坦である。

〔埋土〕 3層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、褐～黄褐色シルトブロックが少量混入する。

〔遺物・時期〕 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

#### SK54土坑

遺構（第80図、写真図版41）

〔位置・重複関係〕 調査区中央部西側、II C19bグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

〔規模・形状〕 開口部径40×284cm、底部径14×268cm、深さは最深部で72cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-60°-Eである。短軸の断面形は底部から緩やかに外傾しながら立ち上がるU字形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔埋土〕 5層に細分される。黒褐～褐色のシルト主体で構成され、明度の異なるブロックが少量混入する。

〔遺物・時期〕 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

#### SK55土坑

遺構（第81図、写真図版42）

〔位置・重複関係〕 調査区中央部西側、II C21cグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

〔規模・形状〕 開口部径37×243cm、底部径11×225cm、深さは最深部で47cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-45°-Eである。短軸の断面形は底部から丸みをもって立ち上がり直線的に開口部へ至るU字状である。

〔埋土〕 5層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、中に暗褐色シルトが堆積する。

〔遺物・時期〕 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

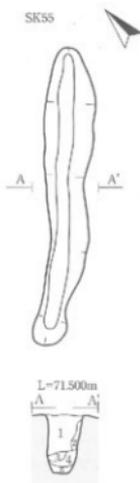
#### SK56土坑

遺構（第81図、写真図版42）

〔位置・重複関係〕 調査区中央部西側、III B2yグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

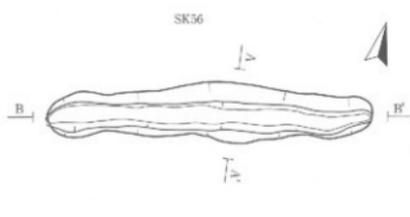
〔規模・形状〕 開口部径49×261cm、底部径10×262cm、深さは最深部で83cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-75°-Eである。短軸の断面形は底部から開口部に向かって外傾するV字状を呈する。長軸の断面形は両側がほぼ直立して立ち上がるピーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔埋土〕 5層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、中に暗褐色シルトを介する。全体的に



SK55

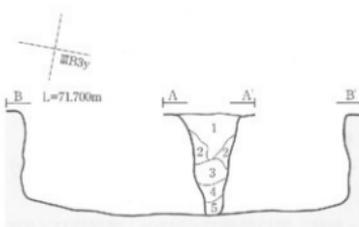
- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性中・しまりやや弱
- 10YR17/3 黒色ブロック10% 10YR4/6 褐色ブロック小10%
- 2 10YR 4/6 褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR2/2 黒褐色ブロック小5%
- 3 10YR 4/6 褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR2/2 黒褐色ブロック10%
- 4 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘性・しまり共やや強
- 10YR2/2 黒褐色ブロック中1%
- 5 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘性・しまり共やや強
- 10YR2/2 黒褐色板状ブロック30%



SK56

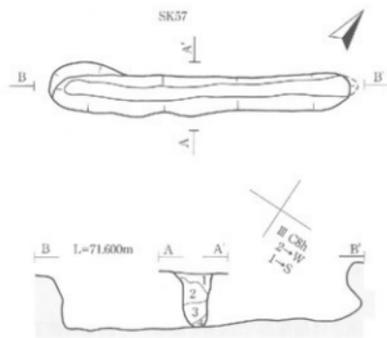
SK56

- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR3/4 暗褐色砂小5%
- 2 10YR 3/4 暗褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR2/2 黒褐色ブロック小30%
- 3 10YR 3/4 暗褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR2/2 黒褐色ブロック中40%
- 4 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性やや中弱・しまり中
- 10YR3/4 暗褐色ブロック中30%
- 5 10YR 3/4 暗褐色シルト 粘性やや中弱・しまり中



SK57

- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR3/4 暗褐色ブロック5%
- 2 10YR 2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR2/2 黒褐色ブロック5%
- 3 10YR 2/3 黒褐色シルト 粘性・しまり共中
- 10YR2/2 黒褐色ブロック
- 10YR4/6 褐色ブロック中5%
- 4 10YR 4/6 褐色シルト 粘性・しまり共中



SK57



第81図 SK55~57 土坑

暗褐～黒褐色シルトブロックが少量混入する。

〔遺物・時期〕 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

#### SK57土坑

遺構（第81図、写真図版42）

〔位置・重複関係〕 調査区中央部南寄り、ⅢC 8gグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色のプランとして確認した。

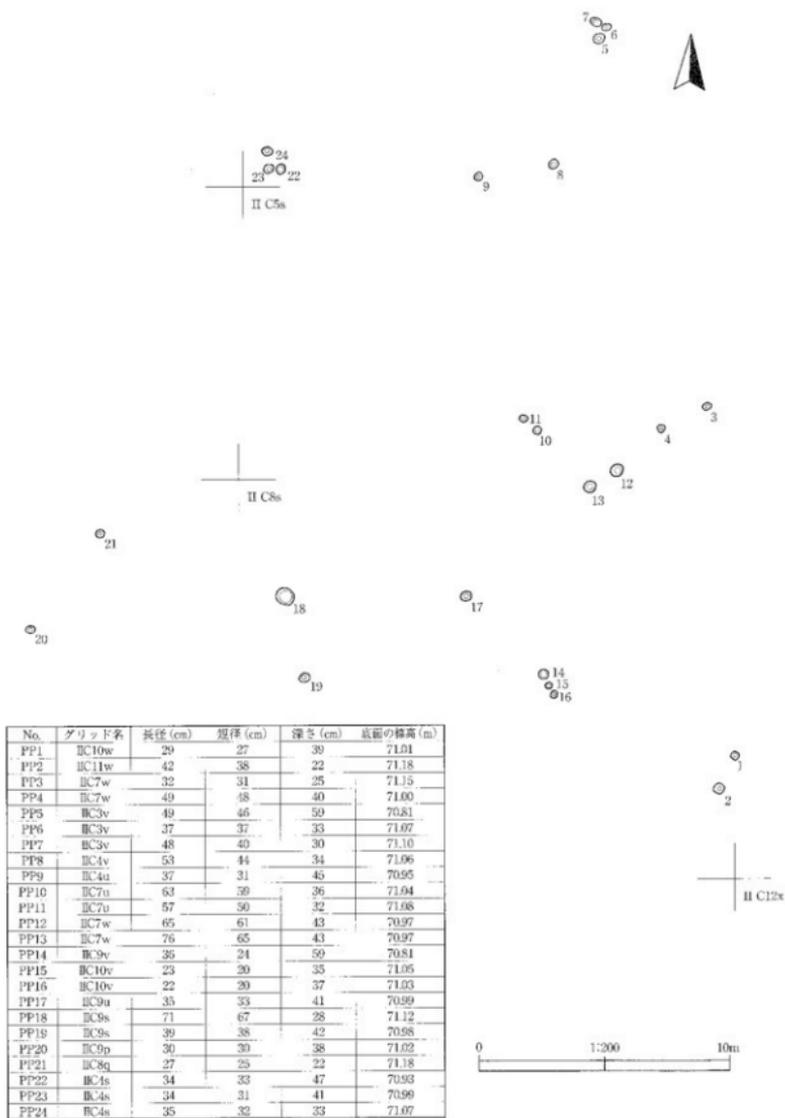
〔規模・形状〕 開口部径32×242cm、底部径8×236cm、深さは最深部で45cmを測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向はN-56°-Eである。短軸の断面形は底部から丸みをもって立ち上がり、その後直線的に開口部に至るU字形を呈する。長軸の断面形は南西側がほぼ直立し、北東側が内湾するフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔埋土〕 4層に細分される。黒褐色シルト主体で構成され、最下層に褐色シルトが堆積する。

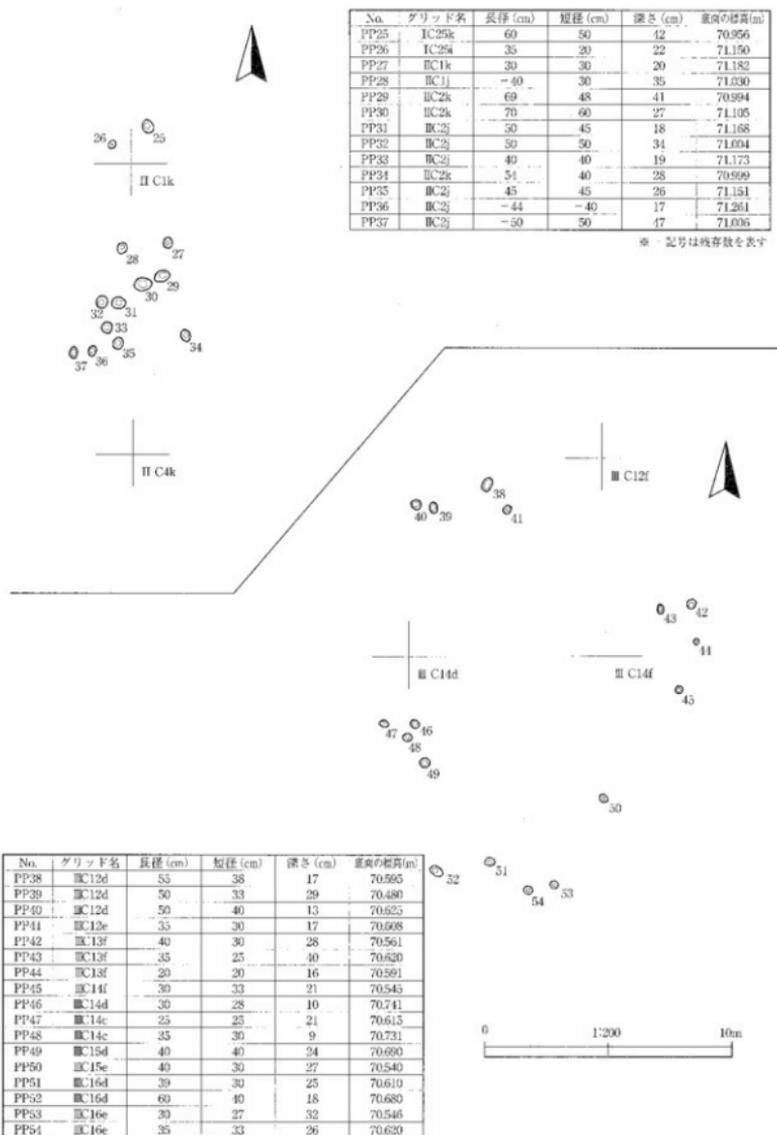
〔遺物・時期〕 遺物は出土していない。削平により検出層位が本来の構築面ではないため、時期など詳細は不明であるが、形状およびこれまでの研究事例などから、縄文時代の陥し穴である可能性がある。

#### （2） 柱穴状ビット群（第82・83図、写真図版43）

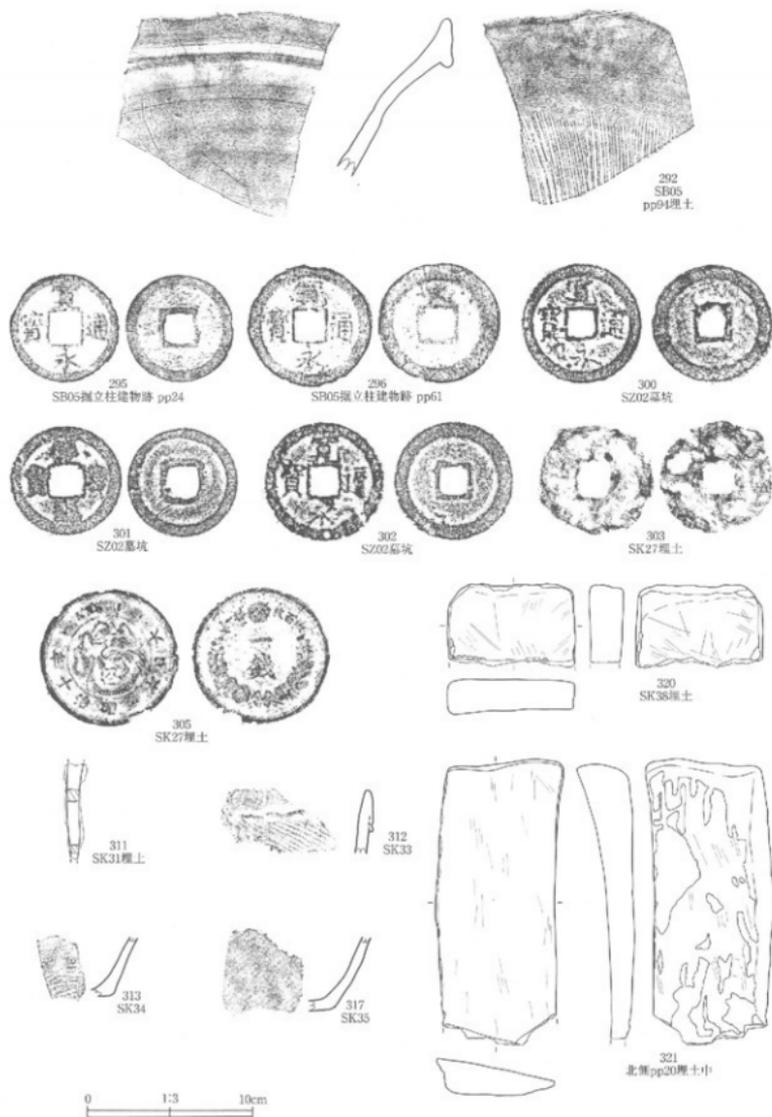
ⅡC区北側、ⅢC区中央部から計54個を検出した。個々の計測値・位置関係については第83・84図を参照されたい。平面形は円形を基調とし、規模は20～76cm・深さ9～59cmの幅におさまる。埋土は黒褐色シルト主体で構成されるものが多く、柱当りの確認できる柱穴も存在する。明確に建物跡を構成するような配置が確認できなかったため、柱穴状ビットに含めたが本来は掘立柱建物跡を構成する可能性のあるものを含む。出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。



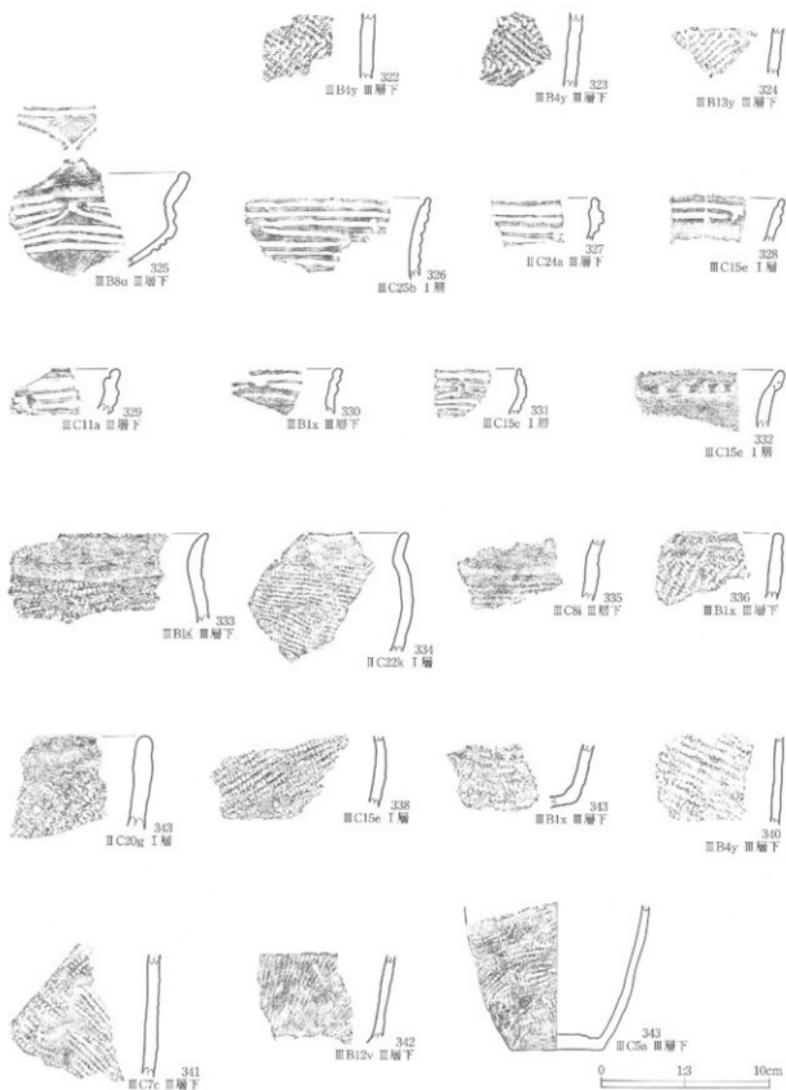
第82図 II C区A柱穴状小ピット群



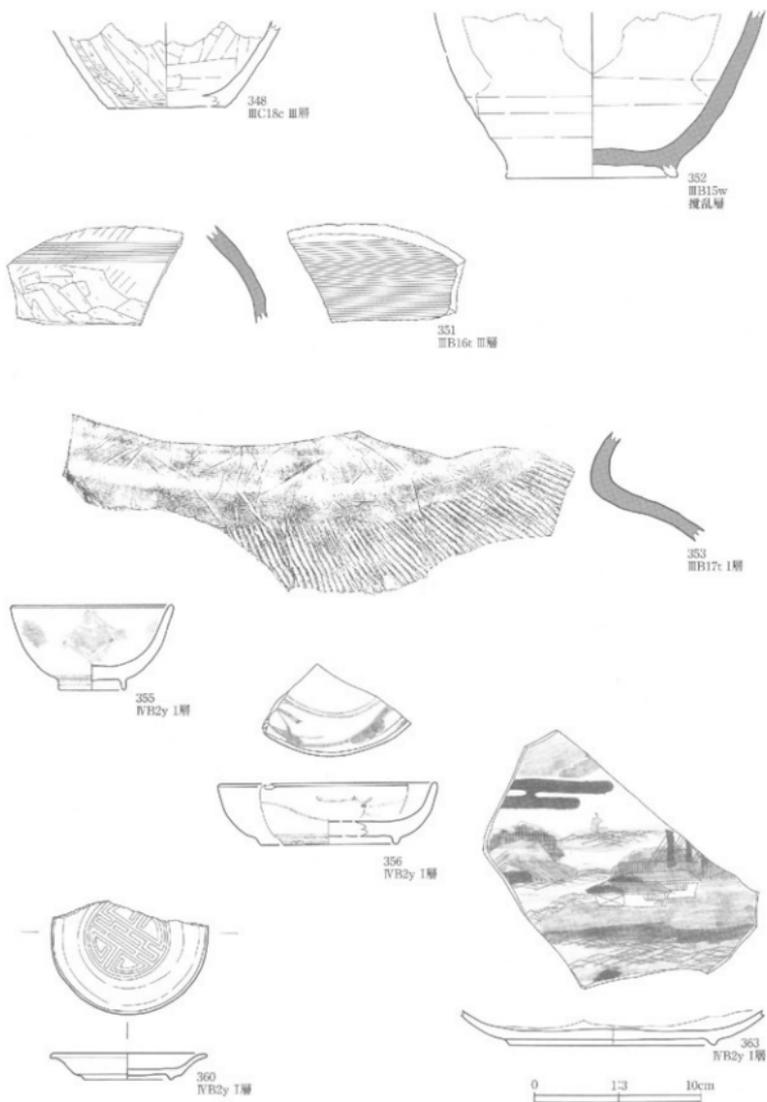
第83図 II C区B・III C区柱穴状小ピット群



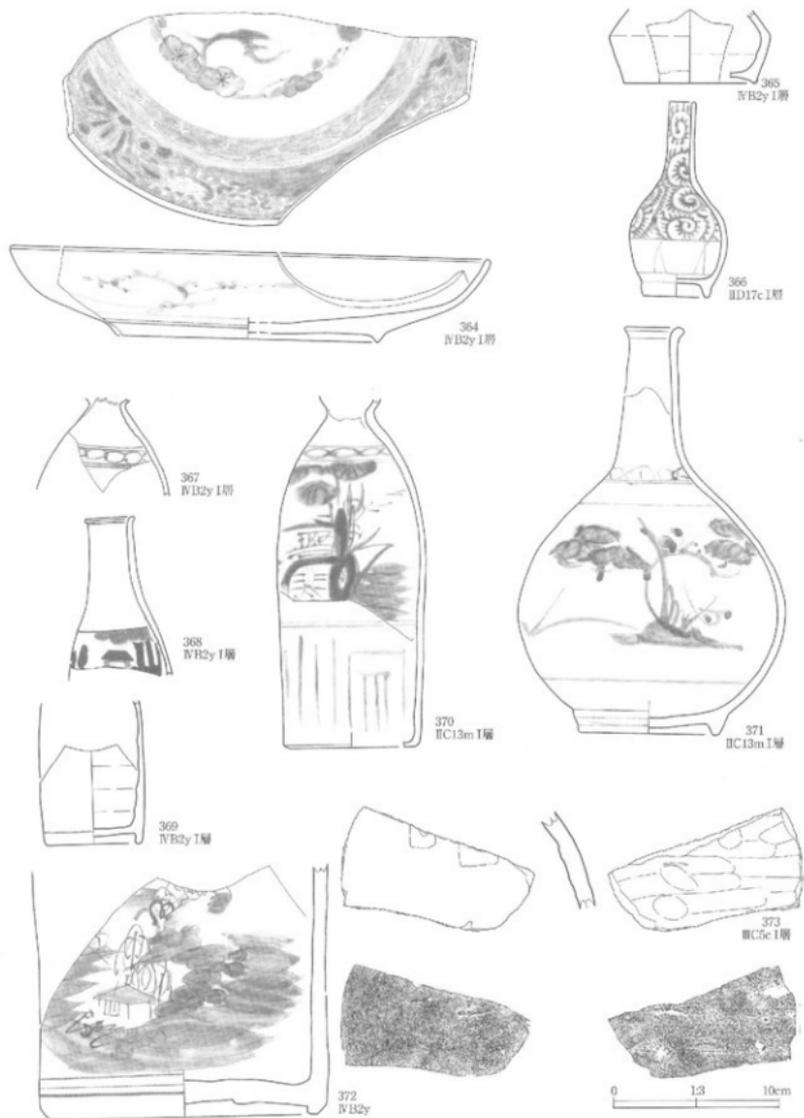
第84図 その他の遺構内出土遺物



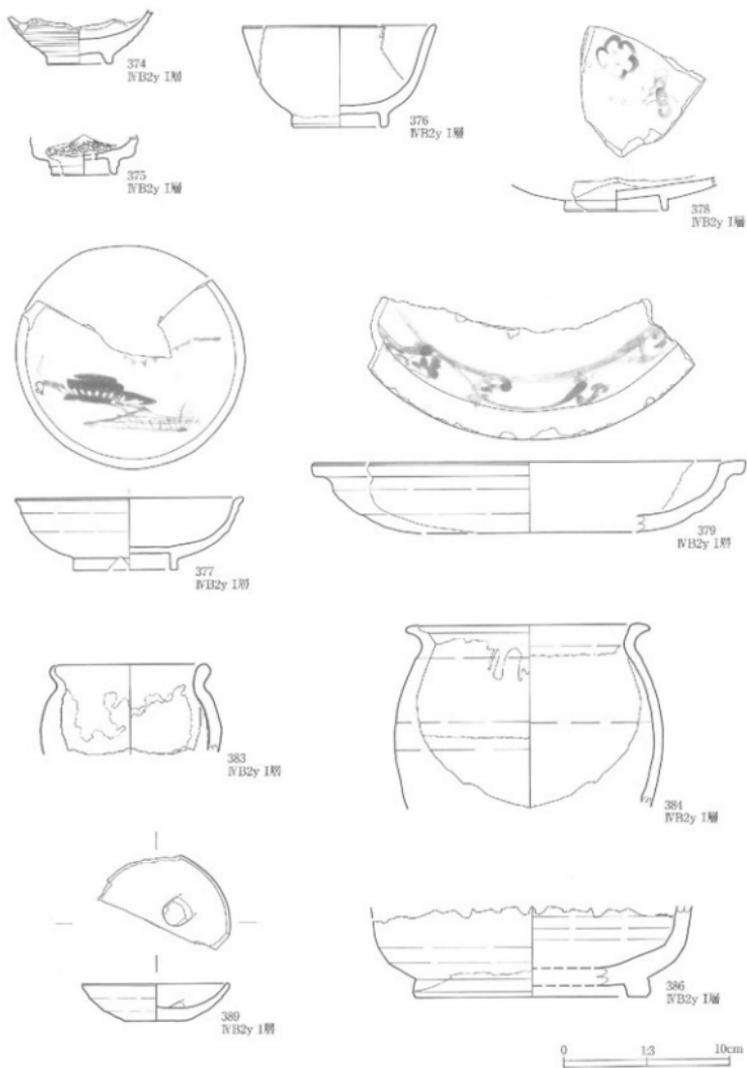
第85図 遺構外出土遺物(1)



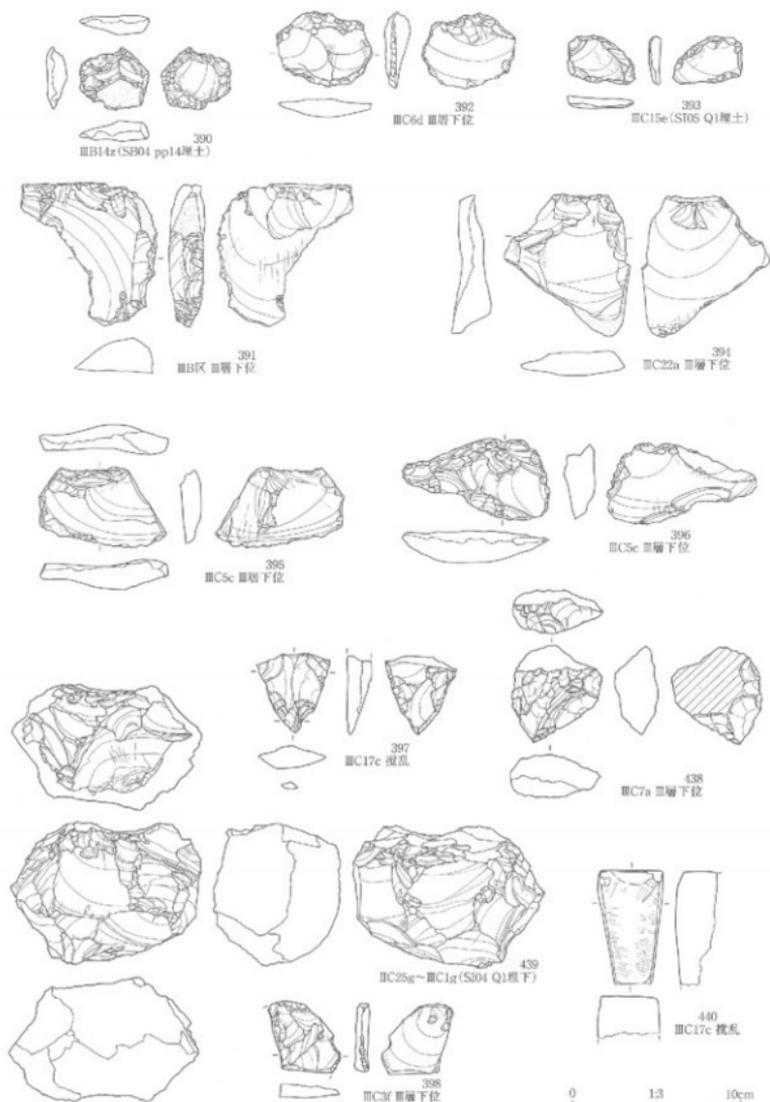
第86図 遺構外出土遺物(2)



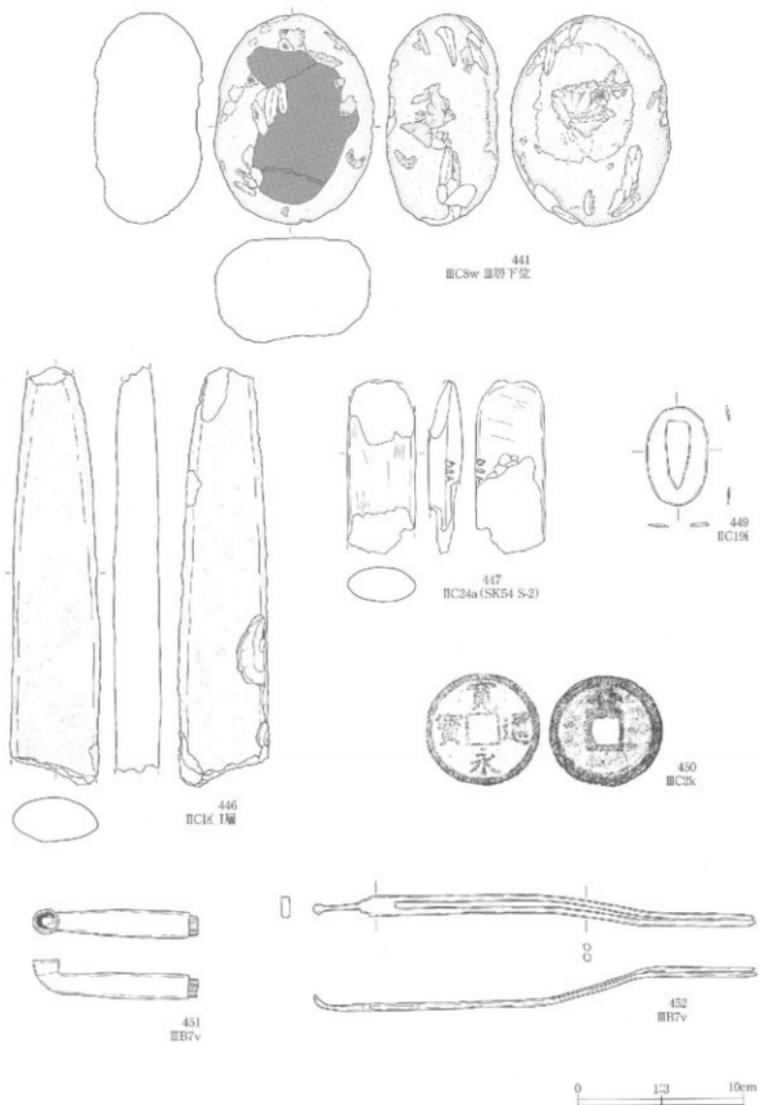
第87図 遺構外出土遺物(3)



第88図 遺構外出土遺物(4)



第89圖 遺構外出土遺物(5)



第90図 遺構外出土遺物(6)

## 2 遺構外の出土遺物

2ヶ年にわたる調査で出土した土器はコンテナ（42×32cm・深さ30cm）でおよそ10箱である。うち、遺構外からはコンテナで3箱分の遺物が出土した。内訳は土器（縄文・弥生・土師器・須恵器）、陶磁器、土製品、石器、金属製品（切羽・簪・キセル）である。殆どが調査区南側のⅢB、ⅢC、B区を中心に出土したものである。以下では種類毎にその特徴を記す。

### 1 土器・土製品・陶磁器

#### （1）縄文土器（第85図322～324、写真図版64）

Ⅲ層黒褐色土層中より3点が出土した。いずれも深鉢形土器片で、器形が判明するものは皆無である。322～324は体部片で、胎土には多量の植物繊維を含む。外面には結束羽状縄文が施文されている。胎土はやや軟質で、色調は灰黄褐色～掲灰色を呈する。これらは小片であるため、型式の特定が困難であるが、胎土に多量の植物繊維を含むこと、施文原体などから縄文時代前期初頭の特徴を持つものである。

#### （2）弥生土器（第85図325～331、写真図版64）

325～331は結節沈線文を基調とした変形工字文が施されるものである。325は高坏形土器の口縁部片で、斜行する2条の沈線が貼り袖で交わり、扁平な三角形の底辺に沿って横位に展開する文様を構成するものと思われる。326は甕形土器の口縁部片である。流水状の沈線による変形工字文を施すもので、いずれの沈線も狭い範囲で平行に流れ、半円形に曲がって展開する。327は小片であるため詳細は不明であるが、浅鉢状の器形の口唇部と思われる。内外のミガキが顕著である。328は壺形土器の口縁部片で、上端部に彫去によるとみられるπ字状にちかい結節沈線文を作出するものである。329は細く粗い沈線と粘土粒により、粗末な結節沈線文が描かれる。330は沈線内に2個1対の粘土粒を盛り上げ、結節沈線文を作出している。331は三角形を基調とした沈線を展開するものと考えられるが、小片のため詳細は不明である。これらは弥生時代初頭の青木畑式期の特徴を持つものである。

#### （3）その他粗製土器（第85図332～343、写真図版64・65）

332～343は縄文時代晩期末葉～弥生時代初頭の土器に伴うと考えられる粗製土器である。332は甕形土器の口縁部片で、粘土紐の貼付けにより口唇部が肥厚する。333～335は口頸部にわずかな括れを持ち、その後口縁部が短く外反するものである。口縁部は無文で、胴部には単節の斜行縄文が施される。336～337は胴上部から口縁部まで直線的に立ち上がる器形を呈し、口縁部は無文、胴部に単節の斜行縄文が施文される。338～343は甕形土器の胴部～底部片で、地文として単節の斜行縄文が施文される。

#### （4）土師器・須恵器（第86図、写真図版65）

4点を掲載した。344～346は土師器の坏である。いずれも外面ロクロナデ調整、内面ミガキ＋黒色処理される。347は須恵器の蓋と思われる。小破片であるため詳細は不明である。348は土師器甕で、外面タキ成形後、ケズリ調整される。内面はナデ＋一部ハケメ状の調整を持つ。349～352は須恵器の甕壺片である。350は外面ロクロナデ調整の後、櫛書波状文を表出する。351は外面タキ→カキメ状の回転ナデ→ケズリ調整を持つ。内面はカキメ状の回転ナデ調整が施される。353は須恵器大甕の口縁～体部片で、外面平行タタキ、内面は円形無文アテグ痕を持つ。

(5) 陶磁器 (第86～88図、写真図版65～68)

陶磁器は42点出土している。内、図示したのは29点である。古代末～中世のものと考えられる373(ⅢC5c)を除く大半は18後半代～19世紀以降の近世～近代にかけてのものであり、95.2%を占める。以下、遺構外のものについて記述する。

国産陶磁器 (292～294、306～308、355～389)

調査区中央部北寄りⅡC13m、ⅡD17cグリッド、および段丘斜面部ⅣB2yグリッドを中心に出土した。373はⅢC5cグリッド、Ⅲ層中から出土した常滑の大甍片である。355～358は肥前産の柴付磁器片で、器種は355は碗、356～358は皿である。いずれも18世紀代のものと考えられる。366は肥前産柴付の小瓶で、18世紀後半～19世紀前半代のもと思われる。374・375は18世紀代大瀬相馬産の磁器碗で、内外面の軸の掛け分けを行っている。そのほか製作年代19世紀前半以降の東北産とみられる碗、皿、平鉢、徳利、灯明皿、挿鉢などがあわせて33点出土している。

(6) 石器・石製品 (第89・90図、写真図版68～71)

石器・石製品については67点出土している。内、図示したのは15点で、剥片については写真・表掲載とした。これらは本遺跡出土の土器に伴うものと考えられる。390～394はスクレイパーである。395はピエスエスキューの可能性のある剥片である。396・397は両面調整石器で、396は未成品、397は尖頭状を呈する。398はリクッチドフレイクである。399～437は剥片である。438・439は石核である。438は両極打法により作出され、素材は赤色頁岩を使用する。446～448は石剣類である。

(7) その他 (第90図449～452、写真図版71)

その他遺物としては15点が出土している。449は切羽で、材質は銅である。450は寛永通宝で、その字体から新寛永と考えられる。451は銅製のキセルの雁首である。材質は銅製で、一部木質が残存する。452は銀色にメッキが施された銅製の管である。

第2表 遺物調査表(土師器・須恵器)

No.	出土地点	種類	器種	残存率	色調	土表外周調査(目一様)	土表内周調査(目一様)	底 部	位置 (cm)	備 考	分 類
									口徑 芯径 底径		
1	SI 0 1	カマド支脚	土師器 環	90%	73YR7/6色	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	13.9 4.8 5.5	内面黒色処理	1Da-2
2	SI 0 1	FI底面・灰	土師器 高台杯	60%	73YR7/7色	(口一)ミガキ	(口一)ミガキ	同軸糸切り	—	6.5 7.7	内外面黒色処理
3	SI 0 1	Tosa上10cm	土師器 杯	25%	73YR7/4C:5A:4B	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	(15.5) 3.25	—	—
4	SI 0 1	Tosa下上4cm	土師器 高台杯	25%	73YR7/4C:5A:4B	(口一)体	(口一)体	糸状状残り	—	2.55 (7.3)	内面黒色処理
5	SI 0 1	Tosa上上10cm	土師器 高台杯	10%	73YR7/4C:5A:4B	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
6	SI 0 1	カマド焼皿・灰	土師器 蓋	80%	10YR8/8色	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
7	SI 0 1	Tosa上上10cm	土師器 蓋	18%	23Y6 8割	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	17.8 23.8 9.8	—	—
8	SI 0 1	Tosa上上10cm	土師器 蓋	10%以下	10YR7/21:5A1黄緑	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
9	SI 0 1	Tosa下上3cm	須恵器 大甕	10%以下	(体) 10YR8/3:6黄緑	(体) 同心円穴アタテ	(体) 同心円穴アタテ	—	—	—	—
10	SI 0 2	林	土師器 環	10%以下	10YR8/3:6黄緑	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	(13.0) 4.9 5.6	—	内面黒色処理
11	SI 0 2	Q1木	須恵器 環	30%	73Y5/10C	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
12	SI 0 2	カマド焼成	須恵器 環	30%	73Y5/10C	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
13	SI 0 2	カマド左側・床	須恵器 環	20%	10YR8/10C	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	(13.4) -1.6	—	—
14	SI 0 2	カマド左側	須恵器 環	20%	10YR8/10C	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
15	SI 0 2	カマド左側	須恵器 環	10%以下	73YR8/3:6黄緑	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
16	SI 0 2	カマド左側	須恵器 環	10%以下	23Y8-3:6黄緑	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
17	SI 0 2	カマド焼成	須恵器 環	20%	10YR8/3:6黄緑	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	(14.8) -9.5	—	16と同一體か
18	SI 0 2	カマド左側	須恵器 環	10%以下	10YR7/10C白	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
19	SI 0 2	カマド左側	須恵器 環	10%以下	10YR3/10C黒	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
20	SI 0 2	カマド焼成	須恵器 環	10%以下	10YR3/10C黒	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
21	SI 0 2	Q1木上5cm	須恵器 大甕	10%以下	73YR5/2:8黄	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
22	SI 0 3	カマド右側	須恵器 環	90%	73Y4/10C	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	13.4 4.2 7.0	—	1Ca-2
23	SI 0 3	カマド右側・P2 掘土	須恵器 環	45%	10YR8/3:6黄緑	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	16.4 6.2 (6.0)	—	内面黒色処理
24	SI 0 3	カマド右側	須恵器 環	40%	73YR7/6色	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	(24) 5.2 3.5	—	内面黒色処理
25	SI 0 3	P2掘土	須恵器 環	30%	10YR8/4:6黄緑	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
26	SI 0 3	Q1掘土	須恵器 環	30%	73YR7/6色	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
27	SI 0 3	Q1掘土	須恵器 環	30%	73YR7/6色	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
28	SI 0 3	Q1掘土	須恵器 環	60%	23Y8-2:6白	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	13.8 5.0 4.8	—	1Ca-2
29	SI 0 3	Q1掘土	須恵器 環	50%	73Y5/10C灰	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	(13.6) 4.5 5.8	—	内外面火焼痕
30	SI 0 3	Q1掘土	須恵器 環	60%	5Y6/10C	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	13.2 4.1 7.2	—	—
31	SI 0 3	Q2掘土中心	土師器 杯	10%以下	73YR7/6色	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—
32	SI 0 3	カマド右側	土師器 蓋	10%以下	23Y8/3:6黄緑	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	内面黒色処理?
33	SI 0 3	カマド掘土	土師器 蓋	10%以下	73YR8/6黄緑	(口一)体	(口一)体	同軸糸切り	—	—	—

34	SI 0.3	カマド方焼	土師器	須恵器	丸	10%以下	75YR7/4C-赤い	(L) ナメ→ヨコナテ	(L) ナメ→ヨコナテ	-	-	-
35	SI 0.3	P2埋上・灰	土師器	須恵器	丸	10%以下	75YR6/4黄緑	(T) ハケメ→ヨコナテ	(E) ハケメ→ヨコナテ	-	6.1	-
36	SI 0.3	Q1埋上中・上	土師器	須恵器	丸	20%	75YR6/6橙	(E) ロクロナテ	(E) ロクロナテ	同系赤褐色	5.9	7.2
37	SI 0.3	カマド方焼	土師器	須恵器	丸	15%	75YR5/1緑灰	(E) ロクロナテ→ケズリ	(E) ロクロナテ→ナテ	-	-	23.1
38	SI 0.3	Q1埋上	土師器	須恵器	丸	10%以下	5YR7/1黄緑	(E) タタキ→ロクロナテ	(E) ロクロナテ	-	-	-
39	SI 0.3	Q1埋上中位	土師器	須恵器	丸	10%以下	25YR5-4C-赤い味緑	(E) ロクロナテ	(E) 放射状・平行ナテ	-	-	-
40	SI 0.3	カマド方焼	土師器	須恵器	丸	15%	(E) 平行タタキ	(E) 平行ナテ	-	-	-	-
41	SI 0.3	Q1埋上中位	土師器	須恵器	丸	10%以下	75YR5/1黄緑	(L) 一休・ケズリ→ヨコナテ	(E) ロクロナテ→ナテ	ムシロ灰・緑辺黒テ	16.2	6.6
43	SI 0.4	P3埋上・灰	土師器	須恵器	丸	90%以上	5YR6/8橙	一部ミガキ	ナテ	ナテ	-	-
44	SI 0.4	P2埋上・灰	土師器	須恵器	丸	80%	5YR6/6橙	(T) 一休 ヨコナテ→ナテ	(T) 一休 ヨコナテ→ナテ	ムシロ灰・緑辺黒テ	13.4	4.1
45	SI 0.4	P3埋上・灰	土師器	須恵器	丸	90%以上	5YR6/6橙	(L) 一休 ヨコナテ→ナテ	(E) ヨコナテ→ナテ	ムシロ灰・黒ケズリ	13.6	4.3
46	SI 0.4	P2埋上・灰	土師器	須恵器	丸	70%	75YR7/6橙	(L) 一休 ヨコナテ→ケズリ	(E) ヨコナテ→ナテ	ムシロ灰・緑辺黒テ	13.4	3.7
47	SI 0.4	P3埋上・灰	土師器	須恵器	丸	20%	10YR7/3C-赤い黄緑	(E) ケズリ	(E) ナテ	ナテ	-	3.4
48	SI 0.4	P3埋上・灰	土師器	須恵器	丸	25%	5YR6/6橙	(L) 一休 ヨコナテ→ケズリ	(L) 一休 ヨコナテ→ナテ	-	(14.1)	(14.2)
49	SI 0.4	P2埋上・灰	土師器	須恵器	丸	3%	5YR5/3C-赤い味緑	(L) 一休 ヨコナテ→ケズリ	(L) 一休 ヨコナテ→ナテ	同系赤褐色	(15.8)	3.4
50	SI 0.4	P2埋上・灰	土師器	須恵器	丸	70%	75YR7/4C-赤い味緑	(T) 一休 ロクロナテ	(E) ロクロナテ	同系赤褐色	(14.6)	4.85
51	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	90%以上	75YR7/1黄緑	(E) ミガキ	(E) ミガキ	ムシロ灰・緑辺黒テ	13.2	1.6
52	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	60%	10YR7/4C-赤い黄緑	(E) ミガキ	(E) ミガキ	ムシロ灰・緑辺黒テ	(14.6)	5.8
53	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	40%	75YR6/4C-赤い味緑	(L) 一休 ケズリ→ミガキ	(T) 一休 ミガキ	ムシロ灰・緑辺黒テ	(14.0)	4.6
54	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	40%	75YR6/6橙	(E) ケズリ→ミガキ	(E) ミガキ	ムシロ灰・緑辺黒テ	(14.8)	4.8
55	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	40%	10YR8/3C-赤い味緑	(L) 一休 ヨコナテ→ケズリ	(E) ヨコナテ→ナテ	ムシロ灰・緑辺黒テ	(15.4)	4.3
56	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	40%	75YR7/6橙	(L) 一休 ミガキ	(E) ミガキ	ムシロ灰・ミガキ	(14.7)	4.9
57	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	40%	75YR7/6橙	(L) 一休 ヨコナテ→ケズリ	(E) ナテ	ケズリ	14.0	4.5
58	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	25%	10YR8/2K白	(L) 一休 ヨコナテ→ナテ	(E) ミガキ	ムシロ灰・ナテ	-	-
59	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	30%	75YR7/4C-赤い味緑	(L) 一休 ヨコナテ→ケズリ	(E) ミガキ	ナテ	-	-
60	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	25%	75YR6/8橙	(E) ケズリ	(E) ナテ	ナテ	(18.0)	3.6
61	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	30%	75YR6/6橙	(E) ケズリ→ミガキ	(E) ミガキ	ムシロ灰・黒ケズリ	-	-
62	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	30%	75YR7/6橙	(E) ミガキ	(E) ミガキ	ムシロ灰・ミガキ	-	-
63	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	10%以下	5Y2/1黄	(E) ミガキ	(E) ミガキ	ムシロ灰・ミガキ	-	-
64	SI 0.4	P3埋上	土師器	須恵器	丸	45%	5YR5YR橙	(L) 一休 ヨコナテ→ケズリ	(E) ミガキ	ケズリ	(13.8)	4.3



93	SI 0 4	Q 2 株~下下	土脚器	環	40%	75YR6 6R	(1)~(体) ヨコナテ→ケズリ	(1)~(体) ヨコナテ・ナテ	ケズリ	(148) 44 (67)	水素ムシロ紙を有する可能性あり・輪縁高部露出、押押さへ	II C-2
94	SI 0 4	Q 3 股±位	土脚器	環	15%	75YR7/4においぬ	(1)~(体) ヨコナテ→ナテ	(1)~(体) ヨコナテ・ナテ	ムシロ紙	(112) 36 (70)	輪縁高部露出、押押さへ	II B-2
95	SI 0 4	環上±位	土脚器	環	40%	5YR6 4Cにおいぬ	(1)~(体) ヨコナテ→ケズリ	(1)~(体) ヨコナテ・ナテ	ケズリ→ナテ	(150) 53 (63)	水素ムシロ紙を有する可能性あり	II B-1
96	SI 0 4	Q 1 股±位	土脚器	環	30%	75YR8 4R	(1)~(体) ヨコナテ→ケズリ	(1)~(体) ヨコナテ・ナテ	ケズリ	(127) 42 (55)	水素ムシロ紙を有する可能性あり	II B-3
97	SI 0 4	Q 1 株~下下	土脚器	環	25%	10YR7 8R	(1)~(体) ヨコナテ→ケズリ	(1)~(体) ミガキ	ケズリ	(128) 47 (50)	水素ムシロ紙を有する可能性あり・内側面色処理	II B-3
98	SI 0 4	Q 1 株~下下	土脚器	環	20%	5YR6 6R	(1)~(体) ヨコナテ→ケズリ	(1)~(体) ヨコナテ・ナテ	ケズリ	(134) 40 (56)	水素ムシロ紙を有する可能性あり	II C-2
99	SI 0 4	Q 4 股±位	土脚器	環	25%	5YR6 6R	(体) ケズリ→ミガキ	(体) ミガキ	ミガキ	-	-	-
100	SI 0 4	Q 3 股±位	土脚器	環	25%	75YR2 1R	(1)~(体) ヨコナテ→ケズリ・ナテ	(1)~(体) ナテ	ケズリ・ナテ	(145) 48 (54)	水素ムシロ紙を有する可能性あり	II C-2
101	SI 0 4	Q 2 株	土脚器	環	25%	75YR7 2R	(体) ミガキ	(体) ハケメ→ミガキ	ケズリ	-	30 (80)	内外側面色処理
102	SI 0 4	Q 1 股±位	土脚器	環	20%	5YR6 6R	(1)~(体) ヨコナテ→ケズリ	(1)~(体) ヨコナテ・ナテ	ムシロ紙・縁部露出 ケズリ	(114) 33 (60)	-	II C-2
103	SI 0 4	Q 2 株±位	土脚器	環	25%	75YR7 1R	(1)~(体) ミガキ	(1)~(体) ミガキ+ハケメ状調整	-	(156) 51	内外側面色処理	-
104	SI 0 4	Q 2 股±位	土脚器	環	25%	75YR7 6R	(1)~(体) ヨコナテ→ケズリ	(1)~(体) ヨコナテ・ナテ	-	(130) 52	-	-
105	SI 0 4	Q 2 股±位	土脚器	環	30%	5Y6 6R	(1)~(体) ヨコナテ→ケズリ	(1)~(体) ミガキ	-	(133) 45	-	-
106	SI 0 4	Q 2 股±位	土脚器	環	20%	5Y6 6R	(1)~(体) ヨコナテ→ケズリ	(1)~(体) ミガキ	-	(130) 38	-	-
107	SI 0 4	Q 2 股±位	土脚器	環	15%	5Y6 6R	(1)~(体) ヨコナテ→ケズリ	(1)~(体) ヨコナテ・ナテ	-	(143) 39	-	-
108	SI 0 4	Q 3 股±位	土脚器	環	30%	5Y7 6R	(1)~(体) ロクロナテ	(1)~(体) ロクロナテ	縁部露出	(127) 355 54	-	1 D0-2
109	SI 0 4	Q 1 股±位	土脚器	環	30%	75YR8 3R	(1)~(体) ロクロナテ	(1)~(体) ロクロナテ	縁部露出	133 51 60	-	1 D0-2
110	SI 0 4	Q 1 股±位	土脚器	環	15%	75YR8 3R	(1)~(体) ロクロナテ	(1)~(体) ロクロナテ	縁部露出	-	3.3 5.7	-
111	SI 0 4	Q 2 株~下	土脚器	環	50%	5YR7 6R	(1)~(体) ロクロナテ	(1)~(体) ロクロナテ	縁部露出	135 40 53	-	1 D0 2
112	SI 0 4	Q 2 股±位	土脚器	環	25%	75YR8 3R	(1)~(体) ロクロナテ	(1)~(体) ロクロナテ	縁部露出	(131) 565 41	-	1 D0-2
113	SI 0 4	Q 3 股±位	土脚器	環	20%	5YR7 6R	(1)~(体) ロクロナテ	(1)~(体) ロクロナテ	縁部露出	(130) 40 (64)	-	1 D0 2
114	SI 0 4	Q 2 株~下下	土脚器	高台環	25%	5YR3 6R	(体) ケズリ	(体) ミガキ	ムシロ紙・ナテ	-	40 83	内外側面色処理
115	SI 0 4	Q 1 股±位	土脚器	環	25%	75Y2 1R	(1)~(体) ロクロナテ	(1)~(体) ロクロナテ	縁部露出	-	275 36	内外側面色処理
116	SI 0 4	Q 1 股±位	土脚器	環	10%以下	5YR4 2R	(1)~(体) ハケメ→ヨコナテ	(1)~(体) ヨコナテ・ナテ	縁部露出	-	10	-
117	SI 0 4	Q 2 股±位	土脚器	環	10%以下	5YR5 4Cにおいぬ	(1)~(体) ハケメ→ヨコナテ	(1)~(体) ヨコナテ・ナテ	-	-	7.6	-
118	SI 0 4	Q 4 株~下下・P 7 股±	土脚器	環	10%以下	5YR6 8R	(体) ハケメ	(体) ナテ	ムシロ紙	-	61 100	-

119	SI 0.4	Q 3 運上上位	土師器	要	25%	25YR5:8明赤燐	(体) ロクロナデ	(体) ロクロナデ	同軌乗切	-	8.8	17.6	
120	SI 0.4	Q 2 運上中位	土師器	要	15%	25YR5:8明赤燐	(体) ナデ	(体) ナデ	ムシロ炭	-	4.9	7.0	
121	SI 0.4	Q 2 灰-運下	土師器	要	10%以下	5YR5:6明赤燐	(体) ナデ	(体) ナデ	ムシロ炭	-	1.5	6.2	
122	SI 0.4	Q 4 灰-運下	土師器	要	10%以下	7.5YR4:4褐	(体) ハケメ	(体) ナデ	ムシロ炭	-	1.2	7.0	
123	SI 0.4	Q 4 灰・P 6 灰土	土師器	要	10%以下	5Y:R5:8明赤燐	(体) ナデ	(体) ナデ	ムシロ炭	-	5.0	10.0	
124	SI 0.4	Q 3 運上	土師器	要	10%以下	5Y:R6:4C1灰白燐	(体) ナデ	(体) ハケメ	ムシロ炭	-	-	-	
125	SI 0.4	Q 2 運上上位	土師器	要	10%以下	5Y:R6:3C1灰白燐	-	-	ムシロ炭	-	-	-	
126	SI 0.4	Q 2 運上中位	土師器	要	10%以下	5Y:R6:3C1灰白燐	-	-	ムシロ炭	-	-	-	
127	SI 0.4	Q 2 運上中位	土師器	要	10%以下	5Y:R5:1灰白燐	-	-	ムシロ炭	-	-	-	
128	SI 0.4	Q 3 運下-灰	土師器	要	10%以下	7.5YR7:3C1灰白燐	(体) ミガキ	(体) ナデ	ムシロ炭	-	-	-	内面黒色物質
130	SI 0.4	Q 2 運下-灰	土師器	要	10%以下	7.5YR7:6褐	(体) ナデ	(体) ナデ	ムシロ炭	-	-	-	
131	SI 0.4	Q 2 運下-灰	土師器	要	10%以下	7.5YR5:6明赤	(体) ナデ	(体) ナデ	ムシロ炭	-	-	-	
132	SI 0.4	Q 2 運下-灰	土師器	要	10%以下	7.5Y:R6:8褐	(体) ナデ	(体) ナデ	ムシロ炭	-	-	-	
133	SI 0.4	Q 3 運下-灰	土師器	要	10%以下	7.5YR8:4C1黄燐	(体) ナデ	(体) ナデ	ムシロ炭	-	-	-	
134	SI 0.4	Q 3 運下-灰	土師器	要	10%以下	7.5YR8:4C1黄燐	(体) ナデ	(体) ナデ	ムシロ炭	-	-	-	
135	SI 0.4	Q 2 運上上位	土師器	小形要	15%	5Y:R8:1灰白	(口-体) ヨコナデ・ナデ	(口-体) ヨコナデ→ナデ	-	(9.8)	7.2	-	
136	SI 0.4	Q 1 運上上位	土師器	小形要	25%	5Y:R8:1灰白	(口-体) ケズリ	(口-体) ナデ	-	(9.8)	6.6	-	
137	SI 0.4	Q 1 運上	土師器	要	10%以下	5Y:R5:6明赤燐	(口-体) ロクロナデ→ナデ	(口-体) ロクロナデ→ナデ	-	(22.0)	8.8	-	
138	SI 0.4	Q 2 運上上位	土師器	要	10%以下	7.5YR4:6褐	(口-体) ヨコナデ→ケズリ	(口-体) ヨコナデ→ナデ	-	-	5.4	-	
139	SI 0.4	灰-運下	須器	要	15%	10Y:R5:1灰白	(口-体) ロクロナデ	(口-体) ロクロナデ	ナデ	-	16.0	15.8	
140	SI 0.4	Q 2 灰土位	須器	要	10%以下	10Y:R6:2C1灰白	(体) ケズリ	(体) ナデ	-	-	-	-	
141	SI 0.4	Q 2 灰土位	須器	要	10%以下	10Y:R7:1灰白	(体) 骨付タタキ	(体) ナデ	-	-	-	-	
142	SI 0.4	Q 2 運上中位	須器	要	10%以下	10Y:R8:3C1黄燐	(体) 骨付タタキ	(体) ナデ	-	-	-	-	
143	SI 0.5	カマド灰燐・P	須器	要	60%	5B:R3:1灰	(口-体) ロクロナデ	(口-体) ロクロナデ	同軌乗切	12.6	4.7	6.5	I Ae-3
144	SI 0.5	P 1 運上	須器	要	70%	2.5Y:7:1灰白	(口-体) ロクロナデ	(口-体) ロクロナデ	静止乗切	3.3	4.4	3.1	I Ce-2
145	SI 0.5	Q 1 灰	須器	要	85%	5B:4:1黄燐灰	(口-体) ロクロナデ	(口-体) ロクロナデ	同軌乗切	12.9	4.2	6.8	I Ae-3
146	SI 0.5	P 1 灰燐	須器	要	90%以上	10Y:R8:1灰白	(口-体) ロクロナデ	(口-体) ロクロナデ	同軌乗切	14.6	5.3	7.2	I Ae-2
147	SI 0.5	P 1 灰燐	須器	要	80%	5B:4:1黄燐灰	(口-体) ロクロナデ	(口-体) ロクロナデ	同軌乗切	13.3	4.5	6.7	I Ce-2
148	SI 0.5	カマド灰燐・灰	土師器	要	70%	7.5Y:R8:4C1黄燐	(口-体) ロクロナデ→ケズリ	(口-体) ロクロナデ・ナデ	同軌乗切	30.2	29.0	-	
149	SI 0.5	Q 1 灰	土師器	要	10%以下	7.5Y:R8:4C1黄燐	(体) ナデ?	(体) ナデ?	ケズリ	-	-	-	
150	SI 0.5	カマド灰燐・P	須器	要	75%	7.5YR4:1灰白	(体) ロクロナデ→ケズリ	(体) ロクロナデ→ナデ	ナデ	-	-	-	
151	SI 0.5	灰燐・P	須器	要	10%以下	7.5YR4:1灰白	(口-体) ロクロナデ	(口-体) ロクロナデ	同軌乗切	-	-	-	
152	SI 0.6	P 1 運上	土師器	要	50%	10Y:R8:4C1黄燐	(口-体) ロクロナデ	(口-体) ロクロナデ	同軌乗切	(5.6)	2.5	-	体部黒色物質あり、灰燐部「A」形あり、内面黒色物質



200	SI 0.9 Q41R	土留器	差	10%以下	75YR5.6(1)	ハケム→ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ→ハケム	-	-	-	-
201	SI 0.9 Q1R	土留器	差	10%以下	75YR5.4(1)	ハケム→ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ→ハケム	-	-	-	-
202	SI 0.9 Q2R	土留器	差	10%以下	10YR6.1(1)	ハケム→ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ→ハケム	-	-	-	-
203	SI 0.9 灰固	土留器	差	10%以下	75YR6.2(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
204	SI 0.9 カマド構成	土留器	差	10%以下	10YR4.2(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
205	SI 0.9 Q1R	土留器	差	10%以下	10YR4.2(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
206	SI 0.9 灰固 P-6	土留器	差	10%以下	5YR6.6(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
207	SI 0.9 灰固 P-3	土留器	差	10%以下	5YR5.6(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
208	SI 0.9 灰固	土留器	差	10%以下	2.5Y6.2(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
209	SI 0.9 Q41R	土留器	差	10%以下	2.5Y6.2(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
210	SI 0.9 カマド構成	土留器	差	70%	75YR5.3(1)	ハケム→ナテ	ナテ	ナテ	-	15.9	3.15	6.5
211	SI 0.9 カマド構成	土留器	差	45%	5YR5.6(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	(15.4)	5.1	(5.8)
212	SI 0.9 カマド構成	土留器	差	20%	75YR6.6(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	(11.0)	3.2	-
213	SI 0.9 カマド構成	土留器	差	10%以下	5YR6.6(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
214	SI 0.9 カマド構成	土留器	差	10%	75YR6.6(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
215	SI 0.9 カマド構成	土留器	差	15%	75YR5.4(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
216	SI 0.9 カマド構成	土留器	差	10%以下	5YR6.6(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
217	SI 0.9 カマド構成	土留器	差	10%以下	10YR5.4(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
219	SI 1.0 灰固	土留器	差	10%以下	10YR6.4(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
220	SI 1.0 カマド構成	土留器	差	10%以下	75YR6.6(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
221	SI 1.0 カマド構成	土留器	差	10%以下	75YR7.4(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
222	SI 1.0 カマド構成	土留器	差	10%以下	75YR7.4(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
223	SI 1.0 Q2下	土留器	差	10%	10YR4.1(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
224	SI 1.0 灰固	土留器	差	70%	10YR7.1(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
225	SI 1.0 P1上	土留器	差	10%	5Y4.1(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
226	SI 1.0 灰固	土留器	差	15%	10YR6.2(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
227	SI 1.0 Q1上	土留器	差	15%	10YR4.1(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
228	SI 0.1 P1上	土留器	差	20%	10YR6.3(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
229	SI 0.1 Q1R	土留器	差	10%以下	75YR6.6(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
230	SI 0.1 Q4R	土留器	差	10%以下	75YR6.6(2)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
231	SI 0.1 Q3R	土留器	差	10%以下	5YR5.6(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
232	SI 0.1 P1上	土留器	差	10%	10YR5.4(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
233	SI 0.1 P1上	土留器	差	10%以下	75YR7.4(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-
234	SI 0.1 P1上	土留器	差	10%以下	75YR6.4(1)	ナテ	ナテ	ナテ	-	-	-	-

本表は土留器名を有する可能性あり 底部内面に削り痕あり  
 (15.4) 5.1 (5.8) する可能性あり  
 (11.0) 3.2 - ムシロ色系統  
 - ムシロ色系統  
 - ムシロ色系統  
 - 内面黒色変質  
 - ムシロ色系統  
 - 内外黒色変質?  
 - 内外黒色変質  
 - ムシロ色系統  
 - 1.5 (6.2)  
 - 4.6 (10.8)  
 14.0 4.5 7.2  
 - 2.3 5.9  
 - 輸送品目録書  
 - ムシロ色系統



No.	遺物	出土位置	形状	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	産地	備考
273	SK 0.1 環上	土師器 要	10%以下	10YR7/41:赤い黄緑	(体) ロクロナデ→タケスリ	(体) タケスリ	-	-	-	-
274	SK 0.1 環上	土師器 要	10%以下	10YR5/31:赤い黄緑	(体) タケスリ	(体) タケスリ	-	-	-	-
275	SK 0.1 環上	土師器 要	10%以下	10YR8/28:白	(体) タケスリ→タケスリ	(体) タケスリ	-	-	-	-
276	SK 0.1 環上	土師器 要	25%	5YR5/6:明黄緑	(口) ハケメ→ヨコナデ	(口) 体	ヨコナデ・ハケメ	-	100	底面水漬あり
277	SK 0.1 環上	土師器 要	15%	10YR6/41:赤い黄緑	(体) ハケメ	(体) ハケメ	-	-	141 (86)	底面水漬あり
278	SK 0.1 環上	土師器 要	10%以下	10YR6/41:赤い黄緑	(体) タケスリ	(体) タケスリ	-	-	-	-
279	SK 0.1 環上	土師器 要	10%以下	10YR5/31:赤い黄緑	(体) タケスリ	(体) タケスリ	-	-	-	-
280	SK 0.1 環上	土師器 要	10%以下	10YR4/1:緑灰	(体) タケスリ	(体) タケスリ	-	-	-	-
282	SK 0.2 環上・下褐色土	土師器 要	10%以下	10YR7/41:赤い黄緑	(体) ロクロナデ?	(体) ロクロナデ?	-	-	-	-
283	SK 0.2 環上・下褐色土	土師器 要	10%以下	10YR7/31:赤い黄緑	(体) ロクロナデ	(体) ロクロナデ	-	-	-	-
284	SK 0.2 環上土位	土師器 要	10%以下	10YR8/3:黄緑	(口) 体	ロクロナデ	-	-	-	-
285	SK 0.2 環上土位	土師器 要	10%以下	2.5Y7/29:黄	(口) 体	ロクロナデ	-	-	-	-
289	SK 3.1 (泥丸)	土師器 要	10%以下	10YR4/1:緑灰	(体) 椅子タケスリ	(体) タケスリ	-	-	-	-
310	SK 3.1 (泥丸)	土師器 要	10%以下	10YR6/41:赤い黄緑	(体) ロクロナデ	(体) ミガキ	-	-	-	-
318	SK 3.8 環上	土師器 要	10%以下	10YR5/41:赤い黄緑	(体) ロクロナデ	(体) ロクロナデ	-	-	-	-
319	SK 3.8 環上	土師器 要	10%以下	7.5YR7/41:赤い黄	(口) ヨコナデ	(口) ヨコナデ	-	-	-	-
344	III B 5 土師器 環	土師器 要	10%以下	10YR6/31:赤い黄緑	(口) 体	ロクロナデ	-	-	-	-
345	III B 10 土師器 環	土師器 要	10%以下	7.5YR7/41:赤い黄	(口) 体	ロクロナデ	-	-	-	-
346	III B 10 土師器 環	土師器 要	10%以下	10YR7/31:赤い黄緑	(体) ロクロナデ	(体) ミガキ	-	-	-	-
347	III C 18 土師器 環	土師器 要	10%以下	5Y5/19:白	(口) 体	ロクロナデ	-	-	-	-
348	III C 18 土師器 環	土師器 要	10%以下	10YR7/21:赤い黄緑	(体) タケスリ→タケスリ	(体) タケスリ	-	-	5.2 (70)	-
349	III C 24 土師器 環	土師器 要	10%以下	7.5YR7/2:黄緑	(口) 体	ロクロナデ	-	-	-	-
350	III B 9 土師器 環	土師器 要	10%以下	5.B44/1	(体) ロクロナデ→縄文	(体) ロクロナデ	-	-	-	-
331	III B 6 土師器 環	土師器 要	10%以下	10YR4/1:緑灰	(体) タケスリ→タケスリ	(体) カキメ状ロクロナデ	-	-	-	-
352	III B 5 土師器 環	土師器 要	25%	N4.0:灰	(体) ロクロナデ	(体) ロクロナデ	-	-	10.2 (10.4)	-
353	III B 7 土師器 環	土師器 要	10%以下	10YR4/1:緑灰	(口) 体	ヨコナデ→平打タケスリ	-	-	-	-

第3表 遺物観察表(石器・石製品)

No.	出土位置	形状	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	産地	備考
144	S04 Q4埋土中位	砥石	(10.68)	4.72	4.10	143.50	安山岩	奥羽山脈	-
145	S04 Q4埋土中位	石核	8.66	7.72	6.45	337.50	安山岩	奥羽山脈	-
146	S04 Q2埋土中位	石核	6.11	5.61	2.60	102.20	玉すい	奥羽山脈	西條打込
314	SK24 環上	削片	3.48	4.58	1.33	17.29g	黄岩	奥羽山脈	-
315	SK24 環上	削片	2.40	2.27	0.40	1.47g	黄岩	奥羽山脈	-
316	SK34 環上	削片	4.23	5.12	1.95	33.03g	幸也貫行	奥羽山脈	-
321	SK38 環上	砥石	(5.00)	(7.62)	(2.16)	122.19g	黄灰岩	奥羽山脈	-
322	北側pp20埋土中	砥石	(17.50)	(7.74)	(3.40)	416.56g	黄灰岩	奥羽山脈	-
300	III B 4a (S004 pp14埋土)	スクレイパー	2.54	2.29	0.91	5.55g	黄岩	奥羽山脈	産地:ピュネスエキースの可能性あり

391	III C16 皿下位	スタレイバー	5.86	5.44	1.44	35.874	銅片	飛羽山脈	接ぎ	写真のみ
392	III C1d 皿下位	スタレイバー	2.94	3.90	1.06	10.016	銅片	飛羽山脈	削・接ぎ	写真のみ
393	III C1e (S05 Q1上)	スタレイバー	2.99	1.81	0.51	3.10	銅片	飛羽山脈	削	写真のみ
394	III C2a 皿下位	スタレイバー	5.80	5.10	1.58	28.75g	銅片	飛羽山脈	削	写真のみ
395	III C3e 皿下位	ビスエスキール?	3.29	5.16	1.26	16.33g	銅片	飛羽山脈	削	写真のみ
396	III C5c 皿下位	何瀬製石器	3.31	5.96	1.24	22.12g	銅片	飛羽山脈	作りかけ	写真のみ
397	III C17c 銅片	何瀬製石器	(3.16)	(2.80)	(1.65)	7.30	銅片	飛羽山脈	尖頭状	写真のみ
398	III C11 皿下位	リッターダフレイタ	(2.70)	(3.06)	(0.61)	4.77g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
399	III C20a (S08 Q3R)	銅片	1.34	4.12	0.89	4.10g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
400	III C20a (S054 焼土片白色土)	銅片	4.22	3.22	0.51	10.32g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
401	III C20a (S054 S-1)	銅片	2.76	4.37	0.86	8.01g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
402	III C25g-III C1g (S04 Q2上)	銅片	1.82	1.61	0.51	1.40	銅片	飛羽山脈	削	写真のみ
403	III C25g-III C1g (S04 Q1上)	銅片	4.78	5.32	1.58	28.40	銅片	飛羽山脈		写真のみ
404	III C25g-III C1g (S04 Q2下)	銅片	3.91	5.80	1.67	31.50	銅片	飛羽山脈		写真のみ
405	III C25g-III C1g (S04 Q1中)	銅片	5.13	4.53	1.10	20.24	銅片	飛羽山脈		写真のみ
406	III C25g-III C1g (S04 Q2下)	銅片	4.69	5.66	2.19	21.35	銅片	飛羽山脈		写真のみ
407	III C25g-III C1g (S04 Q2下)	銅片	4.12	2.81	1.28	1.851	銅片	飛羽山脈		写真のみ
408	III C25g-III C1g (S04 Q2下)	銅片	3.48	4.58	0.95	9.70	銅片	飛羽山脈		写真のみ
409	III C25g-III C1g (S04 Q4下)	銅片	2.19	3.81	0.54	35.90	銅片	飛羽山脈		写真のみ
410	III C25g-III C1g (S04 Q3上)	銅片	2.10	4.53	1.13	6.00	銅片	飛羽山脈		写真のみ
411	III C25g-III C1g (S04 Q2下)	銅片	1.53	5.66	0.54	1.60	銅片	飛羽山脈		写真のみ
412	III C25g-III C1g (S04 Q2下)	銅片	1.89	2.29	0.73	1.80	銅片	飛羽山脈		写真のみ
413	III B17 (S09 焼土)	銅片	4.55	4.99	1.40	28.40g	銅片	飛羽山脈	作業3方面、2つは擦板打法	写真のみ
414	III B17c (S004 pp38焼土)	銅片	2.40	1.71	0.48	1.84g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
415	III B17c (S004 pp38焼土)	銅片	4.89	3.79	1.48	28.35g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
416	III B17c (S004 pp38焼土)	銅片	3.21	1.84	1.00	7.83g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
417	III B13x (S004 pp25焼土)	銅片	5.29	3.17	0.90	6.87g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
418	III B13y (S004 pp27焼土)	銅片	3.60	3.00	0.89	6.00g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
419	III D15c 皿下位	銅片	3.72	4.74	1.85	25.36g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
420	III C4h 皿下位	銅片	2.60	3.85	1.20	11.50	銅片	飛羽山脈		写真のみ
421	III C4j 皿下位	銅片	4.10	3.59	1.18	20.40	銅片	飛羽山脈		写真のみ
422	III C5a 皿下位	銅片	3.00	1.90	0.69	3.08g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
423	III C5a 皿下位	銅片	3.31	3.42	1.21	13.16g	銅片	飛羽山脈	削	写真のみ
424	III C7a 皿下位	銅片	1.88	5.09	1.43	26.51g	銅片	飛羽山脈	削	写真のみ
425	III C8w 皿下位	銅片	3.62	3.67	0.86	11.84g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
426	III C8w 皿下位	銅片	2.26	3.21	1.02	8.19g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
427	III C8w 皿下位	銅片	2.89	2.00	0.38	1.94g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
428	III C8w 皿下位	銅片	3.10	1.21	0.05	2.96g	銅片	飛羽山脈		写真のみ
429	III C11a 皿下位	銅片	6.13	4.71	1.43	33.87g	銅片	飛羽山脈	削	写真のみ
430	III C15e (S05 Q3焼土)	銅片	2.76	1.91	0.50	1.80	銅片	飛羽山脈		写真のみ

No.	再上層位	層位	器種名	形状	寸法	文書特徴	素材	内面調整	時期	備考
431	ⅢC15c (S05 Q1層上)	薄片	3.75	4.57	1.18	17.60	片岩	奥羽山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
432	ⅢC15e (S05 Q1層上)	薄片	3.37	3.60	0.64	4.60	頁岩	奥羽山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
433	ⅢC15e (S05 Q2層上)	新片	1.30	2.50	0.72	1.50	頁岩	奥羽山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
434	ⅢC15e (S05 Q2層上)	新片	1.90	2.37	0.48	1.50	頁岩	奥羽山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
435	ⅢC17c 残片	薄片	1.62	3.10	0.30	1.40	頁岩	奥羽山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
436	ⅢC22a Ⅲ層下位	薄片	2.53	4.39	1.47	14.79g	頁岩	奥羽山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
437	ⅢC22a Ⅲ層下位	薄片	2.83	3.28	1.04	9.27g	頁岩	奥羽山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
438	ⅢC7a Ⅲ層下位	石核	3.98	3.32	1.70	22.11g	赤色頁岩	奥羽山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
439	ⅢC25g-ⅢC1g (S04 Q1層下)	石核	7.72	5.80	3.11	254.40	頁岩	奥羽山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
440	ⅢC17c 残片	砥石	(6.89)	2.60	(2.27)	92.90	デブサイト	奥羽山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
441	ⅢC3w Ⅲ層下位	砥石・砥石	12.84	9.42	6.61	620.9kg	安山岩	奥羽山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
442	ⅢC24a (SK54層下10)	薄片	(8.33)	(5.11)	—	119.06g	砂岩	北上山脈	久保後に焼熱・焼土と同層存在	写真のみ
443	ⅢC24a (SK54 S-4)	薄片	(10.64)	(5.93)	—	287.53g	ホルンフェルス	北上山脈	久保後に焼熱・焼土と同層存在	写真のみ
444	ⅢC24a (SK54 S-5)	薄片	(16.10)	(13.30)	(9.53)	2981.70g	安山岩	奥羽山脈	久保後に焼熱・焼土と同層存在	写真のみ
445	ⅢB1y (S09層上)	?	2.08	3.36	0.94	0.90g	砂岩	北上山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
446	ⅢC15c I層	石割削	(17.05)	(3.59)	(1.80)	174.80	砂岩	北上山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
447	ⅢC24a (SK54 S-2)	石割削	(7.65)	(2.87)	(1.38)	340.5g	凝灰岩	北上山脈	晩期古-弥生初	写真のみ
448	ⅢC7a Ⅲ層下位	石割削	(2.11)	(1.97)	(0.68)	3.72g	頁岩	北上山脈	晩期古-弥生初	写真のみ

第4表 遺物類解表(縄文・弥生土器)

No.	再上層位	層位	器種名	形状	寸法	文書特徴	素材	内面調整	時期	備考
312	SK33	Ⅲ上	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ナデ	晩期古-弥生初	粗製
313	SK34	Ⅲ上	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ナデ	晩期古-弥生初	粗製
317	SK35	Ⅲ上	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ナデ	晩期古-弥生初	粗製
322	ⅢB1y	Ⅲ層下	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ナデ	晩期古-弥生初	粗製
323	ⅢB4y	Ⅲ層下	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ナデ	晩期古-弥生初	粗製
324	ⅢB1y	Ⅲ層下	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ナデ	晩期古-弥生初	粗製
325	ⅢB2y	Ⅲ層下	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ナデ	晩期古-弥生初	粗製
326	ⅢC25 b	I層	台付鉢	—	—	口縁：沈部による凹状 口縁：山形 変形工字文	RL?	ナデ	前期弥生	粗製
327	ⅢC25a	Ⅲ層下	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ミガキ	弥生初期	粗製
328	ⅢC15a	I層	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ミガキ	弥生初期	粗製
329	ⅢC14a	Ⅲ層下	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ミガキ	弥生初期	粗製
330	ⅢB11x	Ⅲ層下	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ミガキ	弥生初期	粗製
331	ⅢC15e	I層	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ミガキ	弥生初期	粗製
332	ⅢC15e	I層	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ミガキ	弥生初期	粗製
333	ⅢB1c	I層	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ミガキ	弥生初期	粗製
334	ⅢC25 k	I層	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ミガキ	弥生初期	粗製
335	ⅢC81	Ⅲ層下	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ナデ	晩期古-弥生初	粗製
336	ⅢB1x	Ⅲ層下	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ナデ	晩期古-弥生初	粗製
337	ⅢC29g	I層	深鉢	鉢底心	—	口縁：折角返し状金差し肥厚・横穴列込	RL	ナデ	晩期古-弥生初	粗製

338	III C13c	1 階	深鉢	砂粒含	図：横文	LR	ナナ	晩明末～弥生初	粗製
339	III B1 x	Ⅱ階下	深鉢	砂粒含み粗	図：横文 裏：網代*	RL	ナナ	晩明末～弥生初	粗製
340	III B4 y	Ⅱ階下	深鉢	砂粒含み粗	図：横文	LR	ナナ	晩明末～弥生初	粗製 細部内面磨付着
341	III C7 c	Ⅱ階下	深鉢	砂粒含	図：横文	LR	ミガキ	晩明末～弥生初	粗製
342	III B12 v	Ⅱ階下	深鉢	砂粒含	図：横文	LR	ナナ	晩明末～弥生初	粗製 細部外周磨付着
343	III C5 3	Ⅱ階下	深鉢	砂粒含	図：横文	LR	ナナ	晩明末～弥生初	粗製

第5表 遺物観察表(土製品)

No	出土地点・層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
42	SI 0 3 カマド打油	不明	(2.07)	(2.43)	(0.66)	5.75	穿孔多数
143	SI 0 4 Q 3 層中	地成粘土塊	(8.51)	(5.53)	(2.18)	80.3	穿孔のみ
162	SI 0 5 Q 1 層上	地成粘土塊	4.11	3.36	2.34	17.45	穿孔のみ
286	SK 0 2 層中：地上層	地成粘土塊	(6.18)	(4.77)	(3.11)	56.17	穿孔のみ
354	III C17 a 祝瓦	祝瓦子	(3.32)	(4.00)	—	10.31	穿孔のみ

第6表 遺物観察表(金属製品・その他)

No	出土地点・層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
295	SI 0 5 銅立柱礎跡 p024	忌瓦(寛永通宝)	2.22	2.22	0.13	2.38	
296	SI 0 5 銅立柱礎跡 p041	古銭(寛永通宝)	2.51	2.51	0.13	2.38	
297	SZ 0 1 銅銭	銅	(2.80)	(1.60)	(0.68)	14.72	
298	SZ 0 1 銅銭	小片	(2.20)	(1.65)	(0.48)	0.73	
299	SZ 0 2 銅銭	キセル	(3.62)	(0.98)	—	1.53	
300	SZ 0 2 銅銭	古銭(明認不明)	2.49	2.51	0.17	7.23	300-302は編む
301	SZ 0 2 銅銭	古銭(明認不明)	—	—	—	—	
302	SZ 0 2 銅銭	古銭(寛永通宝)	2.51	2.51	0.13	—	
303	SK 2 7 土塊 層上	古銭(明認不明)	2.32	2.32	0.27	2.67	
304	SK 2 7 土塊 層上	古銭(明認不明)	2.74	2.73	0.28	3.89	
305	SK 2 7 土塊 埋土	銅貨(1銭銀貨)	2.79	2.79	0.16	6.53	
449	III C10	切針	3.69	2.47	0.10	2.37	
450	III C2 k	古銭(寛永通宝)	2.32	2.32	0.10	2.44	
451	III B7 v	キセル	6.60	1.53 (1.10)	0.10	13.03	
452	III B7 v	簪	17.90	0.81	0.28	14.54	

第7表 遺物観察表 (鉄製品)

No	出土地点・層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
147	S101 Q3R	鉄鏃	11.2	2.7	0.5	32.9	2分類
148	S104 Q2埋土中位	刀子	-8.3	1.9	0.5	30.8	
149	S104 Q2埋土中位	鉄鏃?	-3.6	0.9	0.6	3.17	
150	S104 Q2埋土中位	棒状鉄製品	-4.1	0.8	0.8	4.27	
151	S104 西<4>ト1層	鋸片?	4.3	4.2	0.7	21.0	他局に棒うち鋸片の断定できない
152	S104 西<4>ト1層	鋸片?	-8.2	-5.2	1.0	99.4	複数の鋸片に分類(別個体の可能性あり); 左記に棒うち鋸片と断定できない
190	S108 Q4埋土	棒状鉄製品	-4.5	0.6	0.5	18.58	
218	S109 カマド燃焼部	鋸片	4.2	3.7	0.5	22.35	レントゲンNo. 6
287	SK02 2層	小刀	-18.7	2.7	0.4	104.51	レントゲンNo. 1
288	SK02 2層	小刀	22.0	2.6	0.8		レントゲンNo. 2
289	SK02 2層	鉄鏃	13.8	2.8	0.6	181.05 (他名)	レントゲンNo. 3
290	SK02 2層	鉄鏃	9.1	3.0	0.4	28.47	レントゲンNo. 5
291	SK02 2層	鉄鏃?	8.2	0.5	0.3	16.8	レントゲンNo. 4
311	SK31 灰土	棒状鉄製品	-4.0	0.8	0.7	5.46	

※ 番号は保存庫名を表す

第8表 遺物観察表 (陶器器・その他)

No	出土地点	部位	器種	胎土	釉薬	胎痕・絵付	製作地	製作年代	その他
281	SK 0 2	器十中位	白磁・四耳釜	灰土		灰緑	中国	12世紀代	
292	SB 0 5	P19埋土	磁器/青鉢	青青灰		灰緑	東北	19世紀代	
293	SH 0 5	P12埋土	磁器/皿	灰白		灰緑	東北	19世紀以降	
294	SD 0 5	PT101埋土	陶器/?	におい青灰		黒褐色	東北?	19世紀以降	
305	SK 3 0	埋土	磁器/酒徳利	灰白		染付/透明	東北?	19世紀以降	
307	SK 3 0	埋土	磁器/?	灰白		透明	東北?	19世紀以降	
308	SK 3 0	埋土	不明	ガラス灰			東北?		
355	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/碗	灰白		染付/透明	肥前	18世紀代	
356	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/皿	灰白		染付/透明	肥前	18世紀代	
357	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/皿	灰白		染付/透明	肥前	18世紀代	
358	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/皿	灰白		染付/透明	肥前	18世紀代	
359	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/皿	灰白		染付/透明	東北?	19世紀代	
360	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/等文皿	灰白		染付/透明	東北?	19世紀代	他の白磁台
361	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/皿	灰白		透明	東北?	19世紀代	
362	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/皿	灰白		染付/透明	東北?	19世紀代	他の白磁台
363	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/皿	灰白		染付/透明	東北?	19世紀代	他の白磁台
364	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/大皿	灰白		染付/透明	東北?	19世紀代	目録あり
365	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/大皿	灰白		染付/透明	東北?	19世紀代	目録あり
366	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/急須	灰白		透明	東北?	19世紀代	
367	II D17 c	I層 (埋土)	磁器/小瓶	灰白		染付/透明	肥前	18世紀-19前半	
368	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/酒徳利	灰白		染付/透明	東北?	19世紀代	
368	WB 2 Y	I層 (埋土)	磁器/酒徳利	灰白		染付/透明	東北?	19世紀代	

369	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/酒壺形	灰白	表付付/透明	東北?	19世紀代
370	WC13m	I層 (埋瓦)	船形/酒壺形	灰白	表付付/透明	東北?	19世紀代
371	WC13m	I層 (埋瓦)	船形/酒壺形	灰白	表付付/透明	東北?	19世紀代
372	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/火鉢	灰	表付付/透明	東北?	19世紀代
373	WC5c	I層 (埋瓦)	帯形/大甕	緑灰	口内面	常陸	12世紀代
374	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/碗	灰白	外; 表付付/内; 透明	大塚和馬	18世紀代
375	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/碗	灰白	外; 透明+緑釉/内; 透明	大塚和馬	18世紀代
376	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/碗	黄灰	灰釉	東北	19世紀以降
377	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/皿	黄灰	灰釉	東北	19世紀以降
378	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/皿	灰黄	灰釉	東北	19世紀以降
379	WB2y	I層 (埋瓦)	脚形/平鉢	灰黄	灰釉	東北	18後~19前半
380	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/碗	緑灰	灰釉	東北	19世紀以降
381	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/碗	緑灰	灰釉	東北	19世紀以降
382	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/壺	緑灰	灰釉	東北	19世紀以降
383	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/壺	灰黄	灰釉	東北	19世紀以降
384	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/壺	灰黄	灰釉	東北	19世紀以降
385	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/壺	灰黄	灰釉	東北	19世紀以降
386	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/壺	灰黄	灰釉	東北	19世紀以降
387	WB2y	I層 (埋瓦)	船形/壺	灰	灰釉	東北	19世紀以降
388	WB2y	I層 (埋瓦)	脚形/脚碗	淡黄	灰釉	東北	19世紀以降
389	WB2y	I層 (埋瓦)	脚形/有列皿	白っぽい	自然釉	東北	19世紀以降

### 3 分析・鑑定

#### (1) 高木中館遺跡より出土した炭化種実

吉川純子 (古代の森研究会)

はじめに

高木中館遺跡は、北上川左岸の河岸段丘上に形成された平安時代及び近世を中心とした複合遺跡である。平安時代の当時の生業を推定する目的で竪穴住居の床面、竈及び土坑から覆土を採取し、炭化種実の検出を試みた。竪穴住居SI01、SI02、SI03の竈燃焼部、SI09の竈と同層位の床面、SI01内の土坑P1、SX01住居状遺構内の土坑P1～P5、pp1～pp3の覆土については、発掘担当者により現場で簡易フローテーションが行われた。残渣から筆者が実体顕微鏡下で同定可能な炭化種実を選び出し、同定計数した。また、SX01竪穴住居の土坑P1、P4、P5より採取した一部土壌試料P1W、P4W、P5Wは、筆者が0.5mm目の篩により水洗篩別し、実体顕微鏡下で同定計数した。試料は乾燥標本として保管ビンにいれ、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに保管されている。

炭化種実の出土傾向

表1にSI01、SI02、SI03、SI09、SK02より出土した炭化種実を示した。SI01、SI02、SI03は竈のある竪穴住居である。SI01では竈脇にある土坑P1及び竈燃焼部より試料が採取された。P1からはイネとシロザ近似種を1個ずつ出土し、木材の樹皮などに付着する菌核を出土した。竈燃焼部からはイネ、オオムギ、マメ科、スミレ属を少量と菌核を出土した。SI02の竈燃焼部からはアワ1個と菌核を出土した。SI03の竈燃焼部からはイネ、ミズキ、アサ、タデ属と菌核を出土した。これらの3住居の竈燃焼部及び土坑からの炭化種実の出土数はいずれも少量であった。土壌1kgあたりの出土個数は最も多いSI01竪穴住居で0.7個/kgである。

SI09は竈のある住居で、竈と同層位の床面を4区画に区切りQ1～Q4の4試料を調査した。イネはQ1及びQ4から数個出土した。オオムギは各試料から出土し、種子のほかには穂軸も出土している。また、Q3からはコムギを1個出土した。穀類はほかにアワとヒエを1個ずつ出土した。利用植物としてはサンショウをQ1、Q2から出土している。出土個数はQ1、Q4では3個/kg前後であるが、Q2、Q3は0.6個/kgと、地点により出土数に差が見られる。

土坑SK02は長方形の遺構で被熱した骨片と炭化種実が検出されており、埋葬施設と推定されている。本土坑からはイネとオオムギをわずかに出土した。

SX01は竈を持たない方形の住居状遺構で床面には数基の土坑がある。これらの土坑から出土した炭化種実を表2に示した。これらの土坑からは多くの穀類と少量の利用植物及び雑草などの種実を出土した。穀類はイネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエを出土し、穀類が焼け膨れたとみられる炭化粒子も出土した。イネとオオムギは特に多く、pp1でイネは14.5個/kg、オオムギは13.5個/kg出土している。アワとヒエも比較的多く出土しており、pp1では10個/kgを越える。本遺構では出土個数は少ないが利用植物も多種類出土した。食用とするオニグルミ、クリ、ウメ、サンショウ、マクタビ、トチノキ、ササゲ属、マメ科、アサなどで、ミズキは現在では食用としないが利用していた可能性はある。また、ウルシ属は、果実から燃料などに利用できるろう物質を採取する可能性もある。その他のオモダカ科、エノコログサ属、ヒエ属、ホタルイ属、タデ属は水田などの雑草で、穀類の混入種子として検出例が多い。

表3表 高木中館遺跡における土壌1kgあたりの炭化種実出土個数

遺構	SI01	SI01	SI02	SI03	SI09	SI09	SI09	SI09	SI09	SK02
地点	P1	竈	竈	竈	Q1	Q2	Q3	Q4	5層	
炭化種実出土総個数		0.7	0.1	0.2	3.3	0.6	0.9	3.0	0.1	

遺構	SX01										
地点	P1	P1W	P2	P3	P4	P4W	P5	P5W	pp1	pp2	pp3
穀類出土個数	5.7	4.8	3.3	31.3	2.0	10.4	0.5	3.4	53.0	11.5	3.0
穀類以外の出土個数	0.2	0.8	0.1	1.8	0.1	1.7	0.1	0.4	0.5	3.5	0.0
炭化種実出土総個数	5.9	5.5	3.4	33.2	2.1	12.1	0.5	3.8	53.5	15.0	3.0
穀類出土比率	97.4	86.4	97.5	94.4	93.2	86.0	96.2	88.7	99.1	76.7	100.0

## 炭化種実からみた遺構の性格と当時の植物利用

竈のある住居SI01、SI02、SI03、SI09では炭化種実の出土数が少ない傾向が見られた。特にSI01～SI03は燃焼部を採取しており、竈を常時使用している場合は、燃焼してしまうので炭化種実の残存はほとんどないと考えられる。これに対し、SI09は燃焼部ではなく床面覆土を採取しており、穀類、特にオオムギをやや多く出土している。おそらく竈で生成された炭化物が灰の廃棄などに伴い床面にこぼれるなどしてそのまま堆積したとみられる。住居内の地点による出土個数の差は竈との距離、住居内での動線などが関係していると考えられる。また、脱穀後は種子と別に保管される部位であるオオムギの穂軸を出土しており、脱穀後の麦わらを住居内で加工、あるいは火付け材などに利用していた可能性もある。

竈のない建物であるSX01では穀類が多数出土していることと、数基の土坑が構築されていることから食料保管もしくは精米製粉など食料加工所の目的で使用されていた可能性が高い。SX01からは穀類以外にも利用植物を出土しており、食料のほか、サンショウ、マタタビ、アサなどは薬用としても利用されることから、さまざまな利用植物を乾燥させて穀類と共に保管していたとも考えられる。本遺構からはオオムギの穂軸は出土せず、脱穀後の果実だけが保管されていたと思われる。ただし、この建物跡の発掘時には焼失の痕跡が認められず、竈もなく焼失もしていない建物でなぜ多くの炭化物が生成されたかは不明である。

北上川流域の近隣では平安時代中期の堰向Ⅱ遺跡でイネ、オオムギ、コムギと雑穀のアワが出土し、西川目遺跡ではオオムギ、コムギを出土している(吉川、印刷中)。平安時代のこの地域ではイネがオオムギ、コムギ、アワ、ヒエの雑穀を随伴する傾向にあり、雑穀への依存度が高かったと推測される。こうした傾向は山梨県内の平安時代の遺跡でも確認されており、平安時代の終わり頃になるにつれ、雑穀の出土比率が高くなる(榎原、1999)。東北の類例はまだ少ないが、平安時代にイネから雑穀への依存度が高くなる傾向が東日本の広域に及んでいた可能性も考えられる。

## 特筆すべき炭化種実の形態記載

オオムギ：炭化種子と炭化頭果、穂軸を出土した。種子は紡錘形で頂部は丸みを帯び、種子長は幅の約2.5倍、厚さは幅の3分の2程度、腹面の基部に孔があり、背面の中央には縦に溝がある。炭化種子は焼け膨れが激しいものが多い。保存状態の良い種子は先端が尖った長い紡錘形で種皮が密着しており、皮オオムギと考えられる。オオムギには完熟して穎がはがれやすくなる裸オオムギと、穎が分泌物で密着しはがれない皮オオムギがある。皮オオムギは裸オオムギと比較すると耐寒性があり、早熟でやせ地適応性が高いため、東日本特に東北地方で栽培される。小さく幅と厚さが低い不熟種子

もみられた。穂軸は背の高い台形で連結している軸も見られた。皮オオムギは現在では食用とされず、当時も家畜の飼料に利用していたと推測されている。

コムギ：炭化した種子を出土した。種子は基部と頂部が丸い円筒形で、基部には孔があり、背面の中央には縦に溝がある。厚さが幅の約1.2倍ある。コムギの種子は崩れやすく、炭化している種子も破損、欠落しているものが多かった。

アワ：炭化種子を出土した。種子は径1mm前後のほぼ円形でヒエ種子に似るが、基部には長三角形の胚があり、ヒエの楕円形の胚とは形が少し異なる。焼け膨れが激しいと背腹方向に影らみやすく、種子表面ははがれている種子が多い。

キビ近似種：炭化種子を出土した。種子は径2mm前後のほぼ球形で基部には短三角形の胚がある。

ヒエ：炭化種子は径1.5mm前後の丸みの強い菱形で基部には楕円形の胚がある。

穀類：イネ、オオムギ、コムギなどの穀類が焼け膨れ破片になった塊とみられる。

マタタビ：種子は楕円形で全面に大きさのそろった網目があり、網目の中心には孔がある。

トチノキ：種皮は3層構造でそれぞれ異なる方向に割れることが多い。表面は肉眼では光沢があるが、微細な流紋状または渦巻き紋がある。幼果は縦に伸びた宝珠形で稜は3つ、本遺跡で出土した幼果は大変小さく、受粉後数日のものとみられる。種子はあく抜きして食料とする。

ミズキ：内果皮は球形から楕円球で縦方向に太く深い溝が全面にある。内部は中央の壁で2室に分かれている。熟した果実は甘い。

アサ：種子は丸い紡錘形で基部にはやや大きくまるいへそがあり、種子表面には脈状の模様がある。種子を食用とし、茎から繊維をとるほか、薬用に用いる。

ササゲ属：種子は楕円形で一辺のほぼ中央にへそがある。半分に分けると内面に初生葉という休眠芽が認められたもののみササゲ属と同定した。現在のアズキ、リョクトウなどがこの属に含まれる。

マメ科：楕円形で半分に分れる構造を持ち、へそがみとめられる種子もあった。これらのうち初生葉が認められなかった、ササゲ属ではない種子をマメ科とした。また、7-10mm前後の径の楕円形で焼け膨れし脂肪光沢がある種子をマメ科焼け膨れ種子とした。

ウルシ属：内果皮は横に長い楕円形で縦に2、3本浅い溝がある。走査型電子顕微鏡で観察した結果、内果皮は激しく焼け爛れており、SX01-P3及びP4Wで出土した内果皮は細胞配列の観察ができなかった。SX01-P2は内果皮壁断面を観察することができ、最外層に構状組織は認められずツタウルシまたはヤマウルシの可能性が大きい。ウルシ属はほとんどの種が果実の中果皮にろう質の油脂成分を多く含んでいる。

オモダカ科：種子はチューブを折り曲げた形である。抽水植物で水田などに多く生育する。

エノコログサ属：アワと同属で種子はやや長い紡錘形で厚さがなく小さい。

ヒエ属：種子を出土した。種子は長楕円形で胚は長く、種子の厚さがヒエの半分ほどで薄い。イヌビエなどの雑草と考えられる。

ホタルイ属：果実は上部が太い紡錘形で表面には微細な波状のしわがある。水田などの開けた水湿地に生育する。

ツユクサ：種子は食パンを切った様な形で全面に激しい凹凸がある。湿った日陰に生育する。

タデ属：果実は三角形で表面には光沢がある。焼け膨れているため種の同定はできないが、多くの種類が路傍などに生育する雑草である。

シロザ近似種：炭化種子を出土した。種子は円形で扁平、表面はほぼ平滑でやや光沢があり、周囲から中央に向かって一本の溝が走る。

スマレ属：種子は1.5mm程度の水滴型で、縦に1本すじがある。基部は円形でやや大きく緑が盛り上がる。

担子菌：本遺跡で出土した子座の一部は上面から見ると網目状で横から見ると櫛状構造を呈する。朽木や土壌などに生育するいわゆるキノコと呼ばれる種類の傘の部分である。

核菌綱：腐った樹皮などに付着して生育する菌類で、菌核は1mm前後の構造のない球体であることが多い。

不明：液果など果実の可能性のある炭化物で表面に皮が認められる球体である。

#### 引用文献

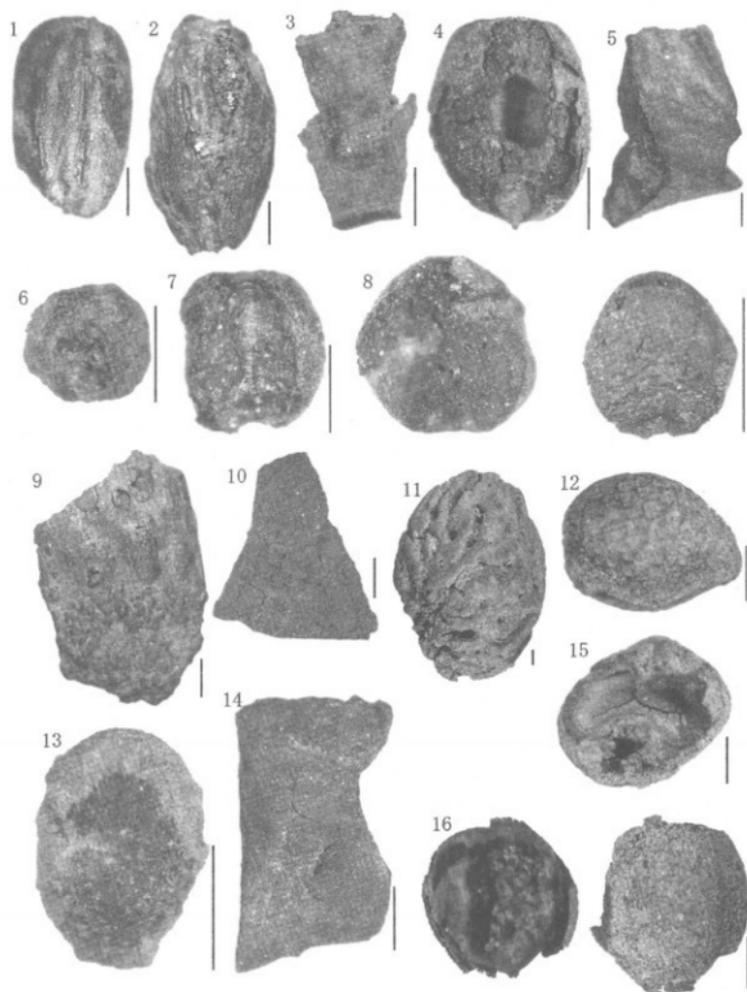
- 柳原巧一、1999、「炭化種実から探る食生活」-古代-中世を中心に- 食の復元-遺跡遺物から何を読み取るか、研究集会報告集2、帝京大学山梨文化財研究所、P.81-98。  
古川純子、2005、塚内Ⅱ遺跡より出土した炭化種実、西川員・塚内Ⅱ遺跡、岩手県埋蔵文化財センター

表1 高木中館遺跡より出土した炭化種実 (SI01, SI02, SI03, SI09, SK02)

分類群	学名	遺構 地点 部位・土層(kg)	SI01	SI02	SI03	SI09	SI09	SI09	SI09	SI02
			P1	遺	遺	遺	Q1	Q2	Q3	Q4
穀類										
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	乳孔定形 粥付籾 粥乳糊片 下熟籾子	1	1			2		1	1
オオムギ	<i>Hordeum vulgare</i> L.	粥粟 籾子 籾子破片 小熟籾子	1			12	2	3	20	2
コムギ	<i>Triticum aestivum</i> L.	籾穂 下熟籾子				9			1	
アワ	<i>Setaria italica</i> Beauv.	籾子		1				1		
キビ近縁類	<i>Panicum cf. milliarium</i> L.	籾子								
ヒエ	<i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Yabuho	籾子				1				
穀類		籾子焼け跡								
利用植物										
オニタマシ	<i>Japanea ailanthifolia</i> Carr.	内果皮破片								
タリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	果皮破片								
フナ科	<i>Fagopyrum</i>	果皮破片								
ウメ	<i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	核								
キンショウ	<i>Zanthoxylum piperitum</i> (Lam.) DC.	内果皮				2	1			
マツタビ	<i>Arctostaphylos indica</i> (Thunb.) Sieb. et Zucc. / <i>Planch. et Maxim.</i>	籾子								
トチノキ	<i>Asaculus turbinata</i> Blume	籾子破片								
ミズキ	<i>Cornus controversa</i> Hemsl.	内果皮破片				1				
アサ	<i>Cuscuta sativa</i> L.	籾子				2				
ササノガ	<i>Vigna</i>	籾子								
マメ科	<i>Leguminosae</i>	籾子 籾子焼け跡	2							
その他										
ウルシ属	<i>Rhus</i>	内果皮								
トチノキ	<i>Asaculus turbinata</i> Blume	空果								
オモダコ科	<i>Alstonia</i>	籾子								
エノコログサ属	<i>Setaria</i>	籾子								
ヒエ属	<i>Echinochloa</i>	籾子								
ホタルイ属	<i>Scirpus</i>	空果								
フタタギ	<i>Commersonia communis</i> Linn.	籾子								
タケ属	<i>Polygonum</i>	空果				2				
シロヤ近縁類	<i>Chenopodium cf. album</i> L.	籾子	3							
スミシロ属	<i>Vicia</i>	籾子		1						
茄子属	<i>Solanum</i>	子実								
枝藨類		果枝	10	2	5	4	2			
不明						1				

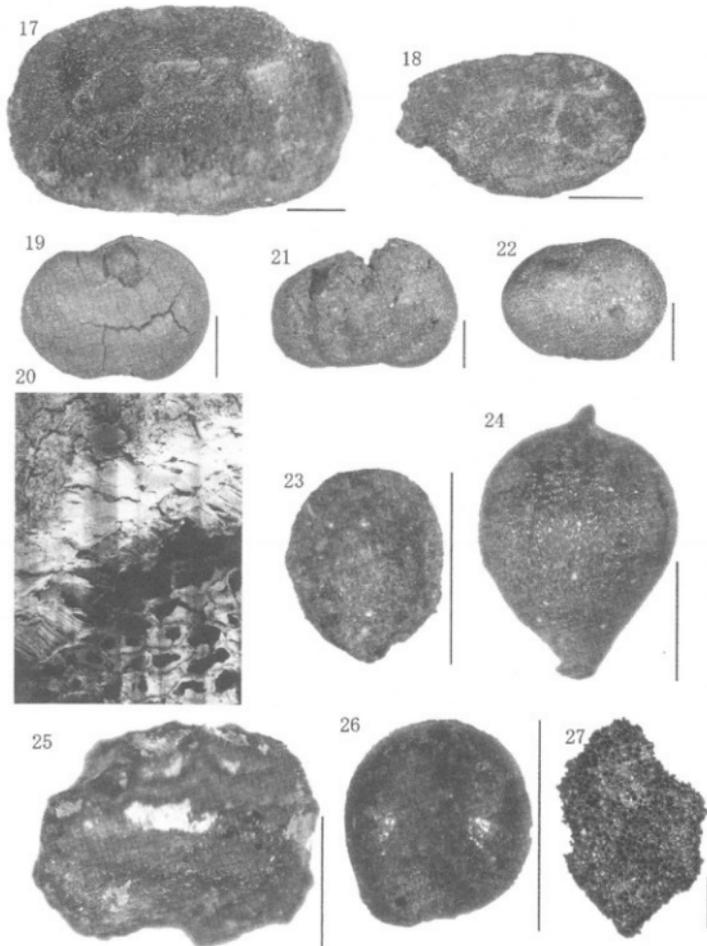
表2 高木中館遺跡より出土した炭化種実 (SX01)

分類群	学名	遺構 地点 部位・土層(kg)	SX01	SX01	SX01	SX01	SX04	SX01	SX01	SX01	SX01	SX01
			P1	P1W	T2	P3	P4	P4W	P5	P5W	pp1	pp2
穀類												
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	乳孔定形 粥付籾 粥乳破片 小熟籾子	40	16	75	76	17	36	14	50	10	2
オオムギ	<i>Hordeum vulgare</i> L.	籾穂 籾子 籾子破片 小熟籾子	2	54	29	3	2	1	1			
コムギ	<i>Triticum aestivum</i> L.	籾子 下熟籾子	2	1	6	20	19	40	4	4	2	
アワ	<i>Setaria italica</i> Beauv.	籾子	4	4	9	27		20	8	25	2	
キビ近縁類	<i>Panicum cf. milliarium</i> L.	籾子						30	18	14	2	
ヒエ	<i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Yabuho	籾子	3	8	22	98	10	79	9	28	25	1
穀類		籾子焼け跡	19	44	13	34	60		23			
利用植物												
オニタマシ	<i>Japanea ailanthifolia</i> Carr.	内果皮破片			2	3	1	6	3		2	
タリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	果皮破片			4							
フナ科	<i>Fagopyrum</i>	果皮破片			1							
ウメ	<i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	核			12						1	
キンショウ	<i>Zanthoxylum piperitum</i> (Lam.) DC.	内果皮						1				
マツタビ	<i>Arctostaphylos indica</i> (Thunb.) Sieb. et Zucc. / <i>Planch. et Maxim.</i>	籾子			1	1		1		1		
トチノキ	<i>Asaculus turbinata</i> Blume	籾子破片						3				
ミズキ	<i>Cornus controversa</i> Hemsl.	内果皮破片					1					
アサ	<i>Cuscuta sativa</i> L.	籾子					1		1			
ササノガ	<i>Vigna</i>	籾子	3									
マメ科	<i>Leguminosae</i>	籾子 籾子焼け跡	2			1	2	1	1		1	
その他								1	8	15	1	
ウルシ属	<i>Rhus</i>	内果皮				1		1				
トチノキ	<i>Asaculus turbinata</i> Blume	空果			1							
オモダコ科	<i>Alstonia</i>	籾子							1			
エノコログサ属	<i>Setaria</i>	籾子				7		6				
ヒエ属	<i>Echinochloa</i>	籾子	1		5	4		3		3		1
ホタルイ属	<i>Scirpus</i>	籾子		2				1				
フタタギ	<i>Commersonia communis</i> Linn.	籾子						1				
タケ属	<i>Polygonum</i>	空果			2		1	5	1	3		
シロヤ近縁類	<i>Chenopodium cf. album</i> L.	籾子				1		7	3		2	
スミシロ属	<i>Vicia</i>	籾子						3				
茄子属	<i>Solanum</i>	子実						2				
枝藨類		果枝			1					4		
不明								1				



図版1 高木中館遺跡より出土した炭化種実その1

1.イネ、胚乳(SX01-P5W) 2.オオムギ、種子(SX01-P5W) 3.オオムギ、穂軸(SI09-Q1) 4.コムギ、種子(SX01-P4) 5.オニグルミ、内果皮片(SX01-P2) 6.アヲ、種子(SX01-PP1) 7.キビ近似種、種子(SX01-P5W) 8.ヒエ、種子(SX01-P2) 9.クリ、基部片(SX01-P1W) 10.ブナ科、果皮(SX01-P2) 11.ウメ、核(SX01-PP2) 12.サンショウ、内果皮(SI09-Q1) 13.マタビ、種子(SX01-PP1) 14.トチノキ、種皮片(SX01-P2) 15.ミズキ、内果皮(SI03カマド) 16.アサ、種子(SX01-P4) スケールは1mm



図版2 高木中館遺跡より出土した炭化種実その2

17. ササゲ属、種子(SX01-P1) 18. マメ科、種子(SI01カマド) 19. ウルシ属、内果皮(SX01-P2)  
 20. 同、電子顕微鏡写真約9000倍 21. ウルシ属、内果皮(SX01-P3) 22. ウルシ属、内果皮(SX01-P4W)  
 23. ヒエ属、種子(SX01-P3) 24. ホタルイ属、果実(SX01-P1W) 25. ツユクサ、種子(SX01-P4W)  
 26. シロザ近似種、種子(SI01-P1) 27. 担子菌、子座(SX01-P4W) スケールは1mm

## (2) 放射性炭素年代測定結果 (AMS測定)

IAA 株式会社 加速器分析研究所

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表す。
- 3) 付記した誤差は、標準偏差 (1  $\sigma$ ) に相当する年代で、次のように算出している。  
複数回 (通常は4回) の測定値について  $\chi^2$  検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根 (標準偏差) と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としている。
- 4)  $\delta^{13}\text{C}$  の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される  $\delta^{13}\text{C}$  の値を用いることもある。  
 $\delta^{13}\text{C}$  補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載した。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (% ; パーミル) で表したものである。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{As} - {}^{14}\text{Ar}) / {}^{14}\text{Ar}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{AR} - {}^{13}\text{APDB}) / {}^{13}\text{APDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{As}$ : 試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度: ( ${}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ ) S—または ( ${}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C}$ ) S

${}^{14}\text{Ar}$ : 標準現代炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度: ( ${}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ ) R—または ( ${}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C}$ ) R

$\delta^{13}\text{C}$  は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度 ( ${}^{13}\text{As} = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ ) を測定し、PDB (白亜紀のベレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算する。

ただし、IAAでは加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ も測定しているので、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に [加速器] と註記している。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$  は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$  (‰) であるとしたときの ${}^{14}\text{C}$ 濃度 ( ${}^{14}\text{AN}$ ) の換算した上で計算した値である。(1) 式の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の推定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{AN} = {}^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{As} \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{As} \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{AN} - {}^{14}\text{AR}) / {}^{14}\text{AR}] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{13}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

${}^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{13}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

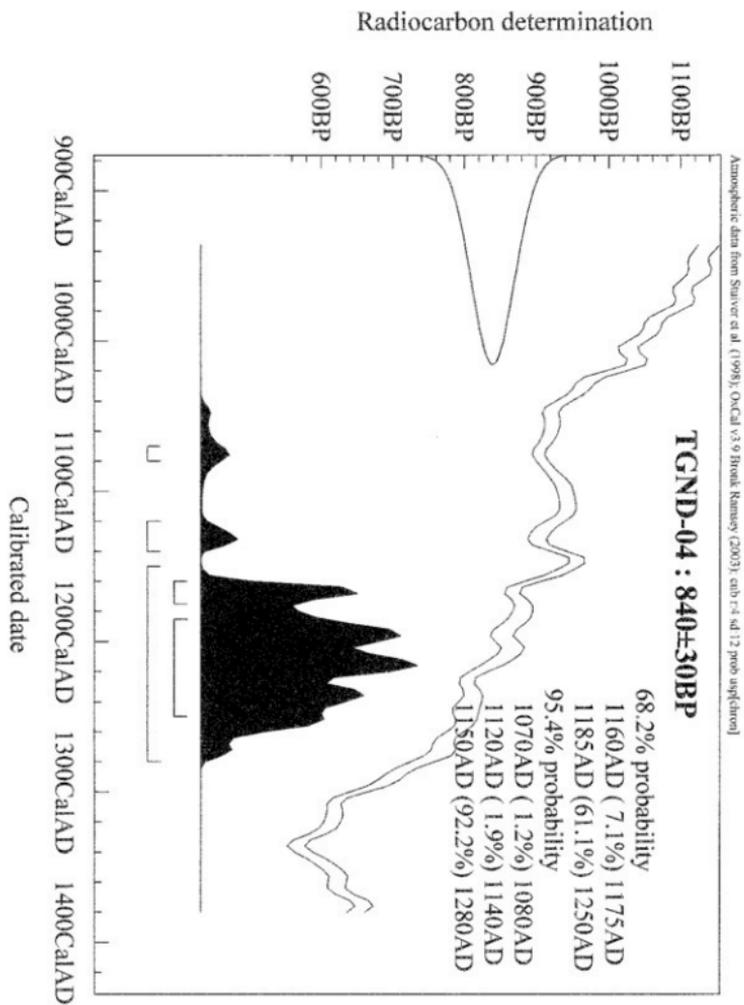
$$\text{pMC} = \Delta^{13}\text{C} / 10 + 100 \quad (\text{‰})$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{13}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{13}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

IAA Code No.	試	料	BP年代および炭素の同位体比
LAAA-41579	試料採取場所 :	岩手県花巻市高木第22地割ほか	Libby Age (yrBP) : 840 ± 30
	遺構名 :	SK02土坑 第4～5層	$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -23.99 ± 0.82
	試料形態 :	炭化物	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -99.1 ± 3.8
	試料名 :	TGND 04	pMC (%) = 90.09 ± 0.38
#741	(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -97.2 ± 3.5
			pMC (%) = 90.28 ± 0.35
			Age (yrBP) : 820 ± 30



### (3) 高木中館遺跡出土鉄器の組成と組成に基づく分類

岩手県立博物館 赤沼 英男

#### 1) はじめに

岩手県花巻市に立地する高木中館遺跡は国道4号花巻東バイパス建設事業に伴い、平成15～16年度に発掘調査された遺跡である。調査の結果、9世紀～10世紀中葉に比定される竪穴住居跡、竪穴住居状遺構、土坑、11世紀～12世紀にかけて比定される土坑、および近世の掘立柱建物跡、溝跡などが検出された<sup>1)</sup>。

10世紀～12世紀初頭に比定される遺構からは、残存状況が良好で、型式学的研究が可能な鉄器が見出されている。当該時期に比定される岩手県下から出土した鉄器の金属考古学的解析例は乏しく、出土資料の組成の面から、奥州藤原氏前段階の鉄器普及の状況を検討する状況にはいたっていない。高木中館遺跡出土鉄器の金属考古学的調査結果は、当該時期の鉄器普及の変遷を研究するうえでの基礎資料になると期待される。以下に、高木中館遺跡出土鉄器の金属考古学的調査結果について報告する。

#### 2) 調査資料

金属考古学的調査を行った資料は、出土土器によって10世紀前葉～中葉に比定される住居跡のカメラド燃焼部 (SI09)、当該時期に比定される住居跡床面 (SI04)、陶磁器の形式学的年代、ならびに炭火物のAMS年代測定によって、11世紀末～12世紀初頭に比定される土坑 (SK02) から出土した鉄器7資料 (No.1～No.7) である。No.4を除く6点については、外観形状をよく残している、器形の特定が可能である。調査資料の考古学的情報は、表1に示すとおりである。なお、No.5については、小刀の型式学的特長から、11世紀を上限とする特徴を有するとされている<sup>2)</sup>。

#### 3) 調査試料の抽出

鉄器からの調査試料抽出は、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル (以下、ハンドドリルという) を使って実施した。No.4については2つの破片から、No.7については刃 (Eg) および棟 (Rg) 部の2ヶ所から、2つの試料を抽出した。各鉄器から抽出した約0.2gの試料をさらに2分し、大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。試料抽出位置は図1および図2に示すとおりである。

#### 4) 調査方法

組織観察用試料についてはエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された領域の組織および観察された非金属 inclusion 組成を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー (EPMA) で分析した。

化学分析用試料は表面に付着する土砂、錆をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。洗浄した試料を130℃で2時間以上乾燥し、メノー乳鉢で粉砕した後約0.05gをテフロン分解容器に秤量し、マイクロウェーブ分解装置で溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe (全鉄)、Cu (銅)、ニッケル (Ni)、コバルト (Co)、マンガン (Mn)、リン (P)、チタン (Ti)、けい素 (Si)、カルシウム (Ca)、アルミニウム (Al)、マグネシウム (Mg)、およびバナジウム (V)

の12元素を高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法 (ICP-AES法) で分析した。

## 5) 調査結果

### 5)-1 鉄器の化学組成

表2に各鉄器から抽出した試料の化学成分分析結果を示す。7資料から抽出した9試料のT.Feは45.86~72.57mass%で、いずれも錆化が進んだ試料である。No.1およびNo.2Sa<sub>2</sub>からは0.005mass%を上回るCu、Ni、およびCoが、No.2Sa<sub>1</sub>からは0.005mass%を上回るCu、Niが、No.3およびNo.6からは0.005mass%を上回るCo、Niが、No.5からは0.005mass%のCoが検出されている。9試料には0.2mass%を超えるPが含有されている。

錆化が進んだ試料に含有される微量元素を検討する場合、埋蔵環境からの富化の可能性を考慮する必要がある<sup>2)</sup>。分析した9試料のうち最も錆化が進んでいるNo.7EgのCu、Ni、およびCoはいずれも0.003mass%以下であり、調査対象とした資料を埋蔵する土壌に0.005mass%以上のCu、Ni、Coが含有される可能性は乏しい。調査対象資料に異種金属の付着がみられなかったこと<sup>2)</sup>を考慮すると、0.005mass%以上のCo、Ni、Cuが検出された試料については、上記三成分のほとんどが錆化前の地金に含まれていたとみることができる。

Pについては埋蔵環境下から富化されることがある<sup>2)</sup>。錆化した試料におけるPの分析値を評価するにあたっては、試料中のPの分布状況、遺物を包み込んでいた土壌およびほぼ同じ埋蔵環境下にあったとみなすことのできる他の鉄器のP含有量を調べ、富化の可能性を検討する必要がある。後述するように、No.2Sa<sub>1</sub>、Sa<sub>2</sub>についてはマイクロ組織観察によって、Fe-P系領域が見出されている。左記2試料については、検出されたPの多くが製作時に使用された地金に含有されていたと解釈できる。他の7試料については、錆化が著しく試料中のPの分布状況を明確にすることはできない。試料を包み込んでいた土壌サンプルもないため、ここでは相当量のPが含有されていた可能性を指摘するにとどめる。

### 5)-2 抽出した試料の組織観察結果

No.1 (図1 a<sub>1</sub>) から抽出した試料にはいたるところに空隙や亀裂がみられる (図1 b<sub>1</sub>)。錆化が進んだ試料である。図1 b<sub>1</sub>枠内部のEPMAによる組成像 (COMP) には、微細な線状結晶 (Cm) またはその欠落孔によって構成される鳥状組織が観察される (図1 c<sub>1</sub>)。枠内部を拡大した組成像には、結晶Cmが層状に並び鳥状領域を形成した組織とともに、ウスタイト (Wus) と微細粒子が混在したガラス化した領域 (Ma) によって構成される非金属介在物が観察される。EPMAによる含有元素濃度分布測定によって、結晶CmはFe、Cを主成分とすることが確認された。この結晶はセメントイト (Fe<sub>3</sub>C) と推定される。セメントイトまたはその欠落孔によって構成される鳥状領域をパーライトととし、その分布状況をFe-C 2元系合金の標準組織<sup>2)</sup>と比較すると、錆化前の地金は炭素量0.3~0.4%の鋼と推定される。No.4、No.6、およびNo.7Rgにも同様の組織が見出され (図3)、錆化前の地金の炭素量は表2右欄のとおり評価された。No.5については局所的にセメントイトまたはその欠落孔からなる組織がみられたが、錆化前の地金の炭素量推定は困難であった。No.3およびNo.7Egについては、錆化前の地金の炭素量を推定できる組織を見出すことができなかった。

No.4にはガラス化した領域 (Gl) によって構成される非金属介在物が、No.6およびNo.7Egには微細な鉄チタン酸化物 (XT) とガラス化した領域によって構成される非金属介在物が、No.5には鉄チタン酸化物によって構成される非金属介在物が観察される (表2、図3)。No.2Sa<sub>1</sub>およびNo.2Sa<sub>2</sub> (図2 a<sub>1</sub>) から抽出した試料にはいたるところに空隙がみられる (図2 b<sub>1</sub>・図2 c<sub>1</sub>)。図2 b<sub>1</sub>、図2 c<sub>1</sub>枠内部

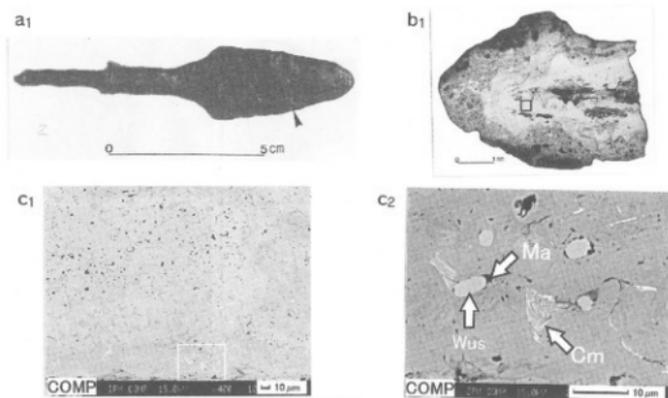


図1 No.1の外観と抽出した試料の組織観察結果

a<sub>1</sub>: 外観。矢印は試料抽出位置。b<sub>1</sub>: a<sub>1</sub>の矢印の部分から抽出した試料のマクロ組織。c<sub>1</sub>: b<sub>1</sub> 枠内部のEPMAによる組成像 (COMP)。c<sub>2</sub>: c<sub>1</sub>枠内部のEPMAによる組成像 (COMP)。Cm: セメントタイトまたはその欠落孔、Wus: ウスタイト、Ma: マトリックス。

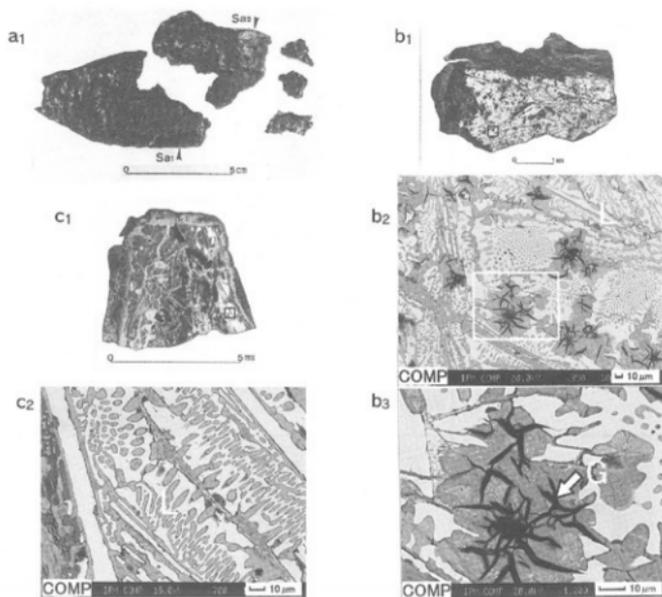


図2 No.2の外観と抽出した試料の組織観察結果

a<sub>1</sub>: 外観。b<sub>1</sub>-c<sub>1</sub>: それぞれa<sub>1</sub>のSa<sub>1</sub>部、Sa<sub>2</sub>部から抽出した試料のマクロ組織。b<sub>2</sub>・b<sub>3</sub>: それぞれb<sub>1</sub>・b<sub>1</sub>枠内部のEPMAによる組成像 (COMP)。L: レードブライト、G: 片状黒鉛。c<sub>2</sub>: c<sub>1</sub>枠内部のEPMAによる組成像 (COMP)。

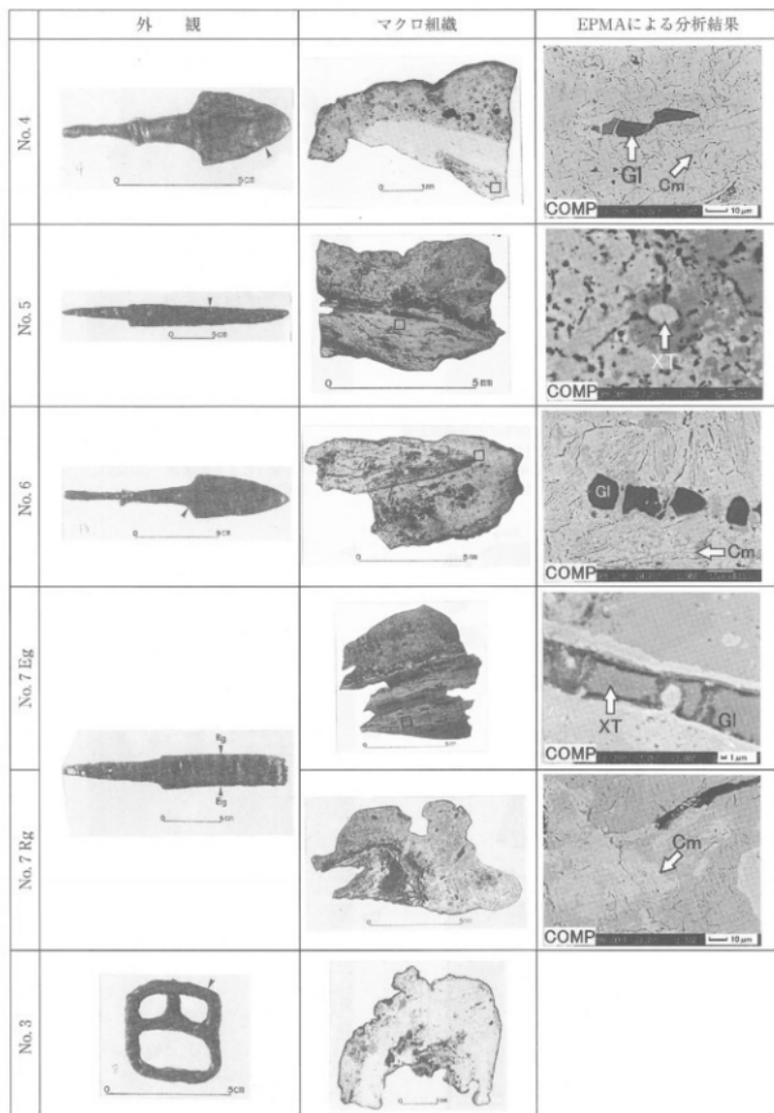


図3 No.3～No.7の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。ミクロ組織 [EPMAによる組成像 (COMP)] はマクロ組織の枠内部。Cmはセメンタイトまたはその欠落孔。XT：鉄チタン化合物、Gl：ガラス質ケイ酸塩。

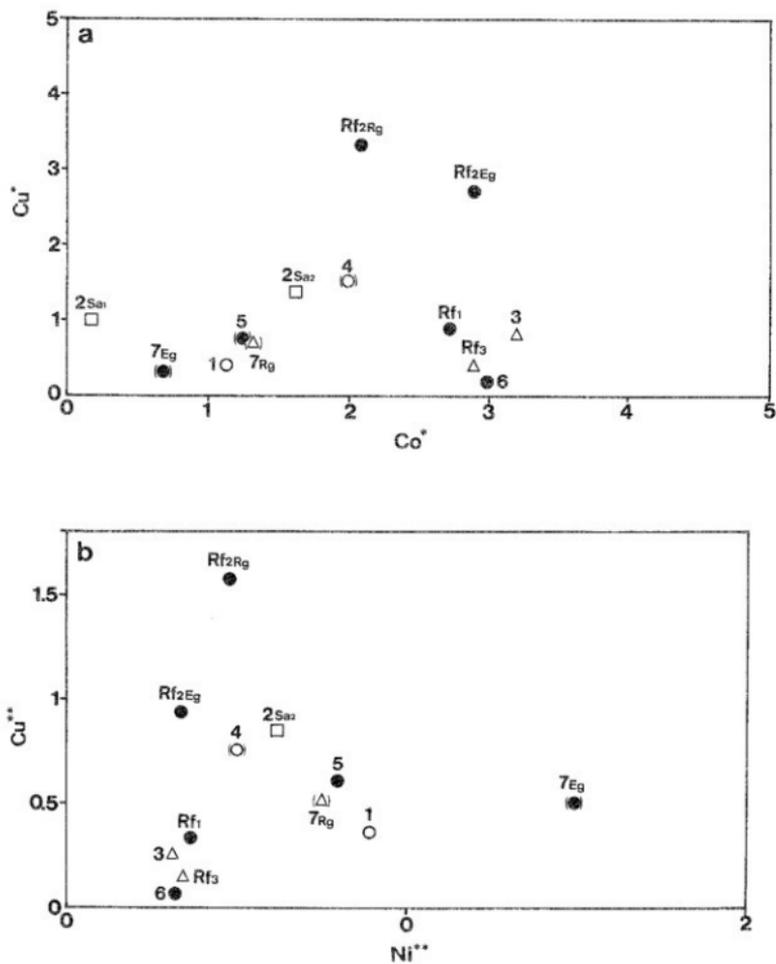


図4 金属考古学的調査資料に含有されるCu、Ni、Co三成分比

No.は表2に対応。Rf1・Rf2：杉の堂遺跡出土刀子、短刀。Rf3：柳之御所遺跡第20次調査出土鉄鍔。

●：非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された銅製鉄器。

○：非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった銅製鉄器

△：非金属介在物が見出されなかった銅製鉄器。

□：鋳造鉄器

$\text{Co}^*$  : (mass%Co) / (mass%Ni) ,  $\text{Cu}^*$  : (mass%Cu) / (mass%Ni)

$\text{Co}^{**}$  : (mass%Ni) / (mass%Co) ,  $\text{Cu}^{**}$  : (mass%Cu) / (mass%Co)

はいずれもレーデブライト (L) 組織によって構成されており、前者には片状黒鉛 (G) も析出している。別途行われた含有される元素濃度分布測定によって、No.2S<sub>1</sub>およびS<sub>2</sub>にはFe-P系領域 (リン化鉄と推定される) が確認された。No.2S<sub>1</sub>およびS<sub>2</sub>は高リンの鉄鉄を素材とする。

## 6) 考察

No.1、およびNo.4~No.7は鍛造鉄器である。これらのうち、No.5を除く4点には、炭素量0.5%未満の亜共析鋼が配されている。No.2S<sub>1</sub>およびS<sub>2</sub>は高リンの鉄鉄を素材とする鍛造鉄器である。古代・中世には複数の鋼製造法があった可能性がある。いずれの方法が用いられたとしても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されていたことは間違いない。同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じて、最終製品の素材となった鋼の組成に差異が生じる可能性が高く、鉄器地金の分析結果を単純に比較するという解析方法では、調査資料の精度の高い分類はもとより、製作地域推定につながる有益な結果を得ることは難しい。調査資料を分類し、製作地域を推定するための情報を得るためには、地金の製造方法の如何に係わらず、製錬産物である鉄や製品鉄器の客観的分類を可能にする方法論の確立が不可欠である。さらに、長い間土中に埋蔵され腐朽した考古資料を調査対象とする場合、埋蔵環境からの微量元素の富化についても考慮しなければならない。

表1の中で、Cu、Ni、Coの三成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度メタルに取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまる。従って合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず地金の製造に使用された素材、とりわけ製鉄原料の組成比に近似すると推定される。原料から最終製品にいたるまでの成因の差異が、地金の組成に与える影響を軽減するため、上記三成分の含有量比を比較することによって、より精度の高い分類ができるものと期待される。この方法については列島内から出土し、型式分類された中世および近世の鉄鋼について適応され、その有効性が確かめられている<sup>20)</sup>。

図3a・bはそれぞれ表2から、 $(\text{mass}\% \text{Co})/(\text{mass}\% \text{Ni})$  と  $(\text{mass}\% \text{Cu})/(\text{mass}\% \text{Ni})$ 、 $(\text{mass}\% \text{Ni})/(\text{mass}\% \text{Co})$  と  $(\text{mass}\% \text{Cu})/(\text{mass}\% \text{Co})$  の値を求め、それらの関係をプロットしたものである。既述のとおり、Ni、Coがそれぞれ0.005mass%未満で錆化している試料については、埋蔵環境下からの富化の可能性がある。そこで、図3aではNiが0.005mass%未満のNo.4、No.5、およびNo.7Eg・Rgを、図3bではCoが0.005mass%未満のNo.4、No.7Eg・Rgに括弧を付し、それらについては参考値として扱うこととする。なお、図3bでは、No.2S<sub>1</sub>のプロットは見合わせた。また、図3a・bには比較試料として、杉の堂遺跡SI07、SI18住居跡床面直上から出土した刀子 (表2Rf<sub>1</sub>)、短刀 (表2Rf<sub>2</sub>) (いずれも9世紀代と推定される)<sup>7)</sup>、柳之御所遺跡第20次調査で出土した鉄鏃 (表2Rf<sub>3</sub>)<sup>8)</sup> もプロットした。

図3a・bから明らかなように、No.2S<sub>1</sub>およびNo.2S<sub>2</sub>は離れた位置に分布する。化学組成に差異を有する鉄鋼片の可能性が高く、No.2S<sub>1</sub>およびNo.2S<sub>2</sub>は別個体から派生した破片と推定される。No.3は杉の堂遺跡出土刀子 (表2Rf<sub>1</sub>)、No.6は柳之御所遺跡第20次調査で出土した鉄鏃 (表2Rf<sub>3</sub>) とほぼ同じ化学組成をとる。No.6とRf<sub>3</sub>が型式学的に類似していることを加味すると、それぞれ同じ地域で製作された鉄器がそれぞれの遺跡に運び込まれた可能性がある。No.7EgとNo.7Rgの化学組成には明瞭な差異がみられる。刃と棟部に組成の異なる鋼を配して作られた資料の可能性もある。同様の状況は杉の堂遺跡出土短刀 (表2Rf<sub>2</sub>) にもみられる<sup>7)</sup>。この点については、同型式の資料の中から、断面構造の調査が可能な資料を選別して確かめる必要がある。Ni、Co含有量が低レベルのため積極的に主張することはできないが、No.2S<sub>2</sub>とNo.4、No.5とNo.7Rgはほぼ同じ化学組成の地金を用いて製作された可能性がある。この点についても類例の蓄積を図り、吟味する必要がある。

表1 調査資料の概要

No.	素材名	遺構名	部位	資料番号	推定年代
1	鉄鍍	SI04	Q3壁向	147	10世紀前半～中葉
2	鉄鍍片	SI04	西ペルト層上(1層)	152	層上による出入の可能性不詳(不明)
3	鉄具	SI09	カマド燃焼部	218	10世紀前半～中葉
4	鉄鍍			290	
5	小刀			287	
6	鉄鍍	SK02	2層	289	11世紀末～12世紀初葉
7	小刀			288	

注1) No.1は多量鉄質、焼付鉄鍍。素材番号、部位名、発見場所は調査結果報告書(センター)・発見位置図による。

注2) No.1およびNo.3の年代は同層位および同層位より炭化物のAMS法による。

表2 鉄鍍の分析結果

No.	素材名	部位	資料名	化学組成 (mass%)														ミクロ組織	n.m.f.
				Ti	Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Si	Ca	Al	Mg	V				
1		Q3壁向	鉄鍍	58.10	0.016	0.040	0.045	0.003	0.28	0.029	1.82	0.111	0.602	0.096	0.001	Cm (0.3-0.4)	Wus, Ma		
2	SI04	西ペルト(1層)	鉄鍍片	72.57	0.018	0.018	0.003	0.007	0.37	0.010	0.311	0.004	0.002	0.007	0.014	L.G	-		
3	SI09	カマド燃焼部	鉄具	53.16	0.011	0.008	0.013	0.010	0.42	0.030	2.28	0.451	0.649	0.111	0.003	L	-		
4			鉄具	38.38	0.001	0.005	0.016	0.003	0.47	0.016	1.33	0.043	0.230	0.045	0.002	no	no		
5			小刀	52.59	0.003	0.002	0.004	0.010	0.33	0.056	3.66	0.308	1.17	0.200	0.001	Cm (0.4-0.5)	GI		
6	SK02	2層	鉄鍍	53.67	0.003	0.004	0.005	0.003	0.25	0.034	3.22	0.077	0.393	0.096	0.001	Cm (不明)	XT		
7	Rg		小刀	51.25	0.001	0.006	0.018	0.003	0.38	0.022	2.41	0.089	0.334	0.074	0.001	Cm (0.4-0.5)	XT, GI		
Rg				45.86	0.001	0.003	0.002	0.014	0.28	0.119	5.72	0.336	1.50	0.435	0.001	no	XT, GI		
Rg				53.65	0.002	0.003	0.004	0.003	0.31	0.027	2.45	0.079	0.496	0.101	0.001	no	XT, GI		
R4	SI07	層面位上	刀片	67.25	0.016	0.018	0.019	0.001	0.08	0.028	0.96	0.009	0.347	0.001	Cm (0.2-0.3)	XT, GI			
R5	SI48	層面	短刀	65.97	0.000	0.011	0.002	0.001	0.08	0.028	0.96	0.009	0.347	0.001	no	XT			
R5				67.35	0.066	0.020	0.012	0.002	0.08	0.078	0.67	0.008	0.217	0.014	0.001	no	XT, Ma		
R5			鉄鍍	41.21	0.004	0.010	0.029	0.059	2.98	0.105	-	-	-	-	no	no			

注1) No.1は焼付、No.4は焼付鉄鍍片。化学組成分析はEDX-AMS法による。

注2) Cmはセメンタイトまたはその欠片、Gは片状石墨、Lはレーアグラフ、括弧内の数値はミクロ組織から推定される数値、noは見いだされず、-は分析せず。

注3) n.m.f.は調査報告書の略称、Wus: ウスタイト (化学組成組成FeO)、XT: Xとして酸化鉄および酸化チタンからなる化合物、GI: オークス質チタン酸、Ma: マトリックス。

注4) R4、R5は別の遺構、R5は別の層位調査結果に基づく。

上記の金属考古学的解析結果から、①同時代に複数の地域から鉄器がもたらされた可能性が高いこと、②時代の推移とともに鉄器の供給地域が変化した可能性があること、③広域的に流通した可能性がある鉄器の型式と地金の組成の間に相関関係が認められること、の3点を指摘することができる。今後、考古学的に時代特定ができ型式学的分類が可能な資料の金属考古学的調査結果を蓄積させることによって、古代から中世の東北地方における鉄器普及の変遷がみえてくるにちがいない。

## 註

- 1) 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査センター・丸山直美氏からのご教授による。
- 2) 佐々木稔、伊藤薫「川台遺跡出土の鉄斧、鉄鎌ならびに鋸先の金属学的調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所、1987、pp.63-73。
- 3) 佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、1984、pp.27-33。
- 4) 『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』佐藤知雄編、丸善株式会社、1968。
- 5) 赤沼英男「アムール川下流域に伝わる鑄造鉄器の組成」『北太平洋の先住民交易と工業』株式会社思文閣出版、2003、99～102頁
- 6) 小野哲也「中世・近世における鉄鋼製作方法の地域差」『物質文化』77、2004、pp.39-56
- 7) 『杉の堂遺跡発掘調査報告書』財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、2004。
- 8) 『樽之御所遺跡発掘調査報告書』岩手県平泉町教育委員会、1994。

## 4 考 察

高木中館遺跡の発掘調査は平成14年から同15年の2ヶ年に亘って行われ、平安時代の居住域、中世の墓域、近世～近代の居住域・墓域、縄文時代の狩猟域であったことが判明した。確認された遺構は平安時代の竪穴住居跡10棟、土坑1基、11世紀末葉～12世紀初頭の土坑1基、近世～近代にかけての獨立建物跡7棟、溝跡12条、カマド状遺構1基、墓坑2基、獣骨出土土坑2基、時期不明の土坑55基、柱穴状小土坑54個である。以下、主な検出遺構について簡単にまとめる。

### (1) 遺 構

#### ① 竪穴住居跡

検出された10棟の竪穴住居跡は、調査区中央部から段丘縁辺部にかけてややまとまる傾向が認められた。以下に規模、カマドの構築方向、柱穴配置などの属性について記す。

〔平面形・規模〕平面形にはほぼ方形のものと長方形のものがある。図aは全体形の明確な7棟について示したもので、カマドが設置された壁側の軸ともう一方の軸との相関図である。縦軸に主軸方向の2辺の壁の平均値、横軸に主軸と直交する2辺の壁の平均値をとった。これによると住居跡の平面形は、a：2辺の値がほぼ等しいもの（SI05・SI06・SI09・SI10）、b：カマドが設置される辺が長いもの（SI01）、c：カマドが設置される辺が短いもの（SI03・SI04）の3つに大別される。このうちaは規模的に1辺307cm以下のもの（SI05・SI06・SI10）、390cm以上～400cm未満（SI09）の2つのグループに分かれる。前者のグループに属するSI05とSI06は規模、カマドの構築位置においてもきわめて近接した値を示す。bに該当するSI01は、埋土に十和田a降下火山灰の堆積が認められる。cのうち、SI03には柱穴配置におけるSI04との構造的な違いが認められる。

〔カマドの方向〕図bはカマドの構築された方向を示した模式図である。対象としたのはカマドの構築位置が明確な7棟である。方向は北を基準として南に振れることからN-〇°-Sのように表記した。これによると、カマドはすべて16方位でいう北から南東の間に構築されており、東を向くものが最も多い（SI02・SI05・SI10）。SI05・SI10は平面形・規模においても類似しており、同時期の可能性がある。

〔十和田a降下火山灰〕SI01において、埋土中に鈍い黄褐色を呈する十和田a降下火山灰の断続的な帯状堆積が確認された。層中のテフラの状態は小ブロック～粒状で、そのあり方から若干移動している可能性はあるものの、降下年代と大差ない時期の堆積と推定される。同テフラは基本層序において確認されず、他の遺構堆積土中にも認められない。SI01は他の遺構とやや離れた地点に存在し、カマドの構築位置も1棟のみ北東方向を向くことから、時期差を表すものと思われる。

〔柱穴配置および壁溝〕明確に柱配置が確認されたものは1棟のみである。SI03はカマドが設置される辺が短く、東側壁面に接するように主柱穴が片寄って構築されている。これは本遺跡のなかでは大型に属し、1辺4m以上を測る。これ以外の住居

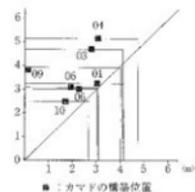


図 a

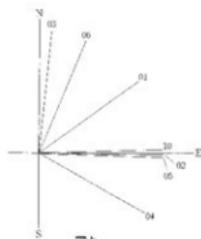


図 b

跡では、全く柱穴が確認されないか、検出されても浅い小土坑が1個ないしは数個点在する程度である。一方、2辺の値がほぼ等しく、1辺307cm以下の規模を持つSI05、SI10においては壁溝が確認されている。このことから本遺跡における傾向として、1辺4m以上の住居跡にのみ掘削あるいは掘り込みを必要とする主柱を設け、1辺3m内外の住居跡にはそれに代わるものとして掘削の浅い、あるいは簡易な柱や壁際構築物を単用あるいは並用していたことが窺える。

本遺跡とはやや時期が異なるが、8C代を主体とする古代集落である水沢市杉の堂遺跡では、古代堅穴住居跡の柱穴と壁溝の関係において次のような傾向がみられた。すなわち、杉の堂遺跡の堅穴住居跡は床面積25m<sup>2</sup>以上のばあい壁溝が確認され、9m<sup>2</sup>以下のものでは認められないこと、加えて、床面積16m<sup>2</sup>以上の住居跡ではすべてに壁溝が伴う、という構造的特徴である。つまり本遺跡の傾向と比較した場合全く逆の結果を示すもので、この結果から、壁溝の有無は住居規模のみを反映していないことが窺える。

〔炭化材・炭化種子〕炭化材は2棟で確認された（SI08・SI10）。これらに対し、樹種および種子の同定を実施している。対象としたのはSI08の床～貼り床出土の試料、SI10 P1埋土出土試料で、それぞれアオダモ・ヤマザクラ（SI08）、サクラ（SI10）という鑑定結果を得た。

また、SI01 P1・カマド、SI02カマド、SI03カマド、SI09床面上の堆積土の一部を採取して、土壌のフローテーションを実施している。検出された炭化種子の同定結果は以下のとおりである。

	SI01 P1	SI01 カマド	SI02 カマド	SI03 カマド	SI09 床面
SI01 P1	イネ1	イネ1、オオムギ1、マメ科2	アワ1	イネ1、ミズキ1、アサ2	イネ3、オオムギ53、コムギ1、アワ1、ヒエ1、サンショウ3

※ 穀類・利用植物のみ掲載。詳細については分析・鑑定事項参照

## ② 堅穴住居跡以外の遺構について

### 堅穴住居状遺構

本遺跡では堅穴住居状遺構（SX01）1棟が確認されている。「堅穴住居状遺構」という呼称は、居住を想定させる付属施設（カマド）を伴わないものとして「堅穴住居跡」と区別して用いるものである。

SX01は調査区中央部西寄りで検出された。隅丸方形プランの4隅、東壁際中央付近、プラン中央部に計6基の上坑が掘削されている。また、床面中央部P6の東半部を囲むように柱穴が3基位置しており、住居跡とは雰囲気や異にする。床面は黒褐色～明黄褐色シルトの混合土によって貼り床されているが、これらの土坑上には及んでおらず開口した状態での使用が想定される。またP4、5の底面～埋土上位にかけて完形の土師器坏が各1点出土している。両者は貯蔵穴と判断される。

〔フローテーション・炭化種実同定の実施〕当時の生業を推定する目的で本遺構の土坑底面および柱穴から堆積土を採取し、炭化種実の検出を試みた。P1～5、pp1～3の堆積土について遺跡担当者が現場で簡易フローテーションを行い、残渣については古代の森研究舎に実体顕微鏡下での炭化種実の同定集計を委託した。また、P1、P4、P5より採取した一部土壌試料P1W、P4W、P5Wについては同社に0.5mm目の篩によるセパレーションと、実体顕微鏡下での同定集計を委託した（詳細は分析鑑定事項参照）。同定後の試料名および個数を列記すると、穀類：イネ493個、オオムギ433個、コムギ

113個、アワ108個、キビ近似種3個、ヒエ285個、穀類（種子焼け膨れ）195個、利用植物：オニグルミ片23（2）個、マタタビ3個、トチノキ4個、ミズキ1個、アサ2個、ササゲ属8個、マメ科（種子焼け膨れ）25個による。

穀類のなかではイネが最も多く、ついでオオムギ、ヒエと続く。これらは果実を食用とするだけでなく、茎は家畜の餌や肥料として利用できるなど利用価値が高い。その一方、本遺構からは穀物以外にもオニグルミ、マタタビ、トチノキ、ミズキ、アサ、ササゲ、マメ科など利用植物としても多種の植物が出土している。これらも食用、薬用、繊維の採取、燃料など活用方法は幅広い。炭化種実については年代測定を行っていないことから理化学的年代は不明であるが、SX01はその形状から古代に属するものと考えられ、該期の植物資源利用の一端を示す良好な資料となり得る。以上のことから遺構の性格を考えるならば、様々な利用植物を乾燥させて穀類とともに保管していた保管庫などの可能性を想定したい。

#### 白磁四耳壺片が出土した土坑

SK02は、調査区中央部西寄りで検出されたものである。遺構の規模は長軸180cm程度で、焼上ブロックの楕円形プランとして確認した。焼土層からは鉄製武器ほか（小刀2点、鉄鏃1点、鉄釘1点）、白磁四耳壺の口縁部片、下位の黒色土層からは焼骨片少量、炭化種子3点が出土している。

〔フローテーション・炭化種子同定の実施〕第5層の黒色土を対象としてフローテーションを行った。その結果、同層からは炭化種子3点と焼骨片、炭化材小片が得られている。炭化種子は同定の結果イネ1点、オオムギ2点であることが判明している。

〔AMS年代測定の実施〕遺構の所属年代を明らかにするために、フローテーションで得られた炭化材小片を対象としてAMS法による放射性炭素年代測定を実施している。遺構堆積土は中位の焼土層を介して上中下にて3大別され、混入物等により更に5細分される。試料はこのうち中位の焼土層にバックされたような状態を示す4～5層黒色土から抽出したものである。分析の結果、未補正で820±30BPの値が得られている（詳細については分析・鑑定項参照）。

〔年代測定結果と出土遺物との関連について〕上記のとおり土坑から得られた炭化材小片のAMS年代測定結果は、相伴した白磁四耳壺、小刀、鉄鏃の形式学的年代とも矛盾するものではない<sup>11)</sup>。また、平泉町教育委員会により調査された柳之御所遺跡からは、本遺構のものと同形の鉄鏃、小刀が出土しており、12世紀代の遺物として報告されている（平泉町教育委員会1994）。白磁四耳壺については、江刺市豊田館擬定地（豊田城）から出土したものが口縁部の形状の特徴を同一にしており、これと同時期に比定されるものと考えられる。さらに12世紀の遺物との関連で述べれば、本遺構の28m南方から常滑の大甍片が1点出土している。本調査区において該期の遺物はこれ以外に認められず、位置関係も比較的近接するものであることから一応触れておく。

〔遺構の性格について〕出土した遺物、焼骨片、焼土ブロック、白磁四耳壺片のありかたから、再葬墓といったような、葬制に関わる施設と仮定したい。再葬墓であるならば、ブロック状を示す焼土の状態、焼骨片、白磁（燄骨器？）が纏まった出土状況を示さないこともこれらと矛盾しない。

当該期の高木中館遺跡の性格については、安倍、清原、藤原氏の拠点遺跡と推測されている江刺市豊田館擬定地（豊田城）の類例を鑑み、現時点では本遺跡もこれらに類する平泉と何らかの関わりを持った拠点遺跡のうちの一つにあたると思いたい。今後も調査が増加することでこれらの一端が徐々に明らかになるものと思われる。いずれ、本県において該期の遺構遺物は希少であり、貴重な事例を追加することとなった。

註(1) 小刀の年代については新潟県川原文化財センターの神野仁氏より、11世紀を上限とする特徴を有するとのご教示をいただいている

### 近世の掘立柱建物跡

確認された7棟のうち、現場で把握されたものはSB01～SB04の4棟で、SB05～07は後日柱配置から推定したものである。検出地点は調査区北側と中央部、南側で、ほとんどが重複している。このことから同じ場所でも繰り返し建て替えが行われたことが窺える。調査区南側段丘崖部分は後世の攪乱が著しく、残存状態は不良であった。このことから本来は外屋などの付属施設が付属していた可能性のある建物も存在するが、詳細を明らかにできなかったものも多い。各建物跡はすべてが長方形のプランを呈するいわゆる「直家」形式で、そのなかでもSB05には外屋柱が付属するものと考えられる。多用される柱間寸法の内訳は6尺6寸(約200cm)が最も多く、次いで5尺9寸(約180cm)、7尺3寸(約220cm)、8尺6寸(260cm)、5尺(150cm)などである。掘立柱建物跡の間尺について、盛岡藩領における近世掘立柱民家の柱間寸法は5寸で割り切れる数値が使用され、多用される寸法は7尺以上が一般的であるとする指摘がなされている(羽柴2001)。本調査で検出している掘立柱建物跡については7尺以上の寸法を持つものが2棟存在し、一部でこの傾向が看取される。また、出土遺物として近世銅鉢片、寛永通宝が存在することから、時期はほぼ近世とみて大過ないものと考えられる。

### 近世の墓坑

2基共に調査区北側から検出された。SZ01墓坑とSD05溝跡は重複関係にあり、断面観察からSD05溝跡より新しいことが判明している。北側に位置するSZ02は平面形が方形を呈する掘り込みの深いもので、規模は87.5×106cm・深さ69cmを測る。人骨は残存していないが、副葬品としてキセル(残存不良のため部位不明)1点と寛永通宝3点が出土している。一方、南側のSZ01は平面形が楕円形を呈し掘り込みが浅く、規模は86×114cm・深さ19cmを測る。人骨は少量残存していたが、副葬品としては釘が少量出土したにすぎない。両者はほぼ同一の比較的平坦な地点に立地するが、微視的にみれば南側に位置するSZ01のほうが40cmほど高い地点にあたり、耕地造成による削平を考慮しても、両者の間には掘り込みの深さにおいて明らかな違いがある。同時期の墓坑が多数検出された旧河崎村の河崎の橋凝定地において、平面形が楕円形を呈し掘り込みの浅いタイプからは副葬品が殆ど伴わず、掘り込みの深いタイプからは鏡や古銭といった副葬品が多く出土する傾向が看取されたという。更に河遺跡では両者間に新旧関係が認められ、楕円形のほうが古いことが確認されている。この事例を援用すれば、南側の墓坑が古いという仮説が成り立つが、遺物による比較ができないため、詳細は不明である。

### 溝跡

全城から12条が検出されている。SD05溝跡は前述のとおり重複関係からSZ01墓坑より古いことが判明している。SZ01の帰属年代は近世であることから、SD05溝跡の構築年代の下限は近世以前となる。

SD02、SD03、SD11、SD12は、掘削された方向が互いに平行するように段丘縁辺まで延びており、掘削自体は組織的な意図の下でなされた行いと考えられる。溝跡の用途について推測させる要素の一つに、SD07の底面において砂粒の水成堆積が部分的に認められたことがあげられる。ここからは人工的な流路の可能性が想定できるが、この地点は調査区域内において最も標高が低く、自然冠水による現象の可能性も捨てきれない。明治30年代の資料によると、近世後期は盛岡藩による米の増産指向によって水田化が推し進められた時期にあたり、堰の掘削が盛んに行われている。本遺構の性格について強いて言及するならば、このような農地開発に伴う水路などの可能性が指摘できよう。

## (2) 遺物

## ①遺構内出土の上器

〔製作技法と形態による分類〕

出土土器には坏、高台坏、甕、鉢、壺などがある。それぞれ上師器（黒色処理・非黒色処理）、須恵器の種別に分かれる。ここでは各種別のうち比較的上出量の多い坏を主な対象とし、その他の器種については出土量が少ないため参考程度に触れる。

坏

I群 製作に際してロクロを使用するもの II群 製作に際してにロクロを使用しないもの

- A類 体部が直線もしくは直線状に開くもので、体部断面が逆台形を呈するもの。  
 B類 体部が内湾しながら立ち上がるもの。「碗形」を呈するもの。  
 C類 体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反するもの。  
 D類 底部側縁で一度屈曲し、その後内湾しながら立ち上がるもの。口縁部は外反しない。  
 E類 底部側縁で一度屈曲し、その後内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反するもの。  
 F類 体部が内湾しながら立ち上がり、口唇部外面が削ぎ落とされたような形状のもの。

〔坏の法量分析〕

ここでは須恵器・土師器（黒色処理）・土師器（非黒色処理）を対象とする。



坏の形態分類

図4cは全体の器形・法量が判明する65点について、遺跡全体の法量分布を示した。須恵器坏は口径13.3～13.8cm、器高4.2～4.5cmに分布が集中する。土師器（黒色処理）坏は口径11.7～16.4cm、器高4.2～6.2cmに分布し、須恵器よりも分布域が広い。土師器（非黒色処理）坏は口径12.7～14.6cm、器高3.6～5.1cmに分布する。

法量1 口径が15～16.4cmのもの。器高は4.3～6.4cmの範囲に収まる。

法量2 口径が13～14.8cmのもの。器高は3.5～6.1cmの範囲に収まる。

法量3 口径が11.7～12.9cmのもの。器高は3.6～5.2cmの範囲に収まる。

本遺跡においては、法量別には2類が主体を占め（48個）、ついで3類（10個）、1類（7個）となっている。

〔各分類と構成比率〕

ここでは（1）（2）で行った分類をもとに、各遺構の坏構成比率を見てゆく。表Aは、破片資料を含め掲載遺物をすべて対象とした場合の出土点数一覽、図dは形態の判明するもののみで作成した出土点数一覽である。各遺構毎の各類の構成比率は表Aに基づき、形態についてのみ図dを使用している。これによると①須恵器のみで構成される（SI05・SI10）、②上師器（黒色処理）のみで構成される（SI06）、③上師器（非黒色処理）を含まず、土師器（黒色処理）、須恵器で構成される（SI02・SI03・SK01）、④須恵器を含まず、土師器（黒色処理）と上師器（非黒色処理）で構成される（SI01・SI04・SI09・SX01）、⑤須恵器、土師器（黒色処理）、土師器（非黒色処理）で構成される（SI08）の5つのパターンに大別が可能である。

パターン1：SI05 須恵器5点で構成され、土師器が伴わない。形態はA—3点、C—2点で構成さ

れる。法量は2と3の範疇に取まり、口径12.9~13.3cm、器高4.5cmのものが多い。口径：底径比は1.9~2.0のものに分布が集中する。底部切り離し技法は回転糸切りが殆どであるが、静止糸切りも1点確認される。甕はロクロ調整され、口縁部が緩やかに外傾し、口唇部が下方に引き出されるような形態のものが伴う(158)。

SI10 須恵器2点で構成される。形態の判明するものは須恵器の1点のみでAに該当する。法量は2に当てはまり、口径14.0cm、器高4.5cmを測る。口径：底径比1.9である。(土師器も数点供伴しているが、床面土坑中から出土した須恵器と比較した場合、年代観に違和感があり、埋土の状況からも混入の可能性が高いため除外している。)甕はロクロ製作と非ロクロのものが混在するが、口唇部形態が判明するものはない。

パターン2：SI06 土師器3点(全て黒色処理)で構成される。形態はB-2点、不明-1点である。法量は2と3の範疇に取まる。口径12.8~14.4cm、器高5.1~6.1cm、口径：底径比は2.2~2.3cmを測るものである。このほか、須恵器の蓋が2点供伴する。甕の出土はない。

パターン3：SI02 土師器1点(黒色処理)、須恵器3点で構成され、須恵器の割合が高い。形態分類可能な個体は須恵器の1点のみで、Aに該当する。法量は2の範疇に取まり、口径13.0cm、器高4.9cm、口径：底径比は2.3、底部の切り離し技法は回転糸切りによる。甕はロクロ製作のものと、非ロクロのものが共存し、口縁部が外反したのち、口唇部が上方或は両端に引き出される形態のものが伴う。

SI03 土師器5点(全て黒色処理)、須恵器3点で構成される。土師器の形態はB-1点、D-1点、不明3点、法量は1と3で構成され、ばらつきが見られる。口径：底径比は2.3~2.7である。底部切り離しは回転糸切りによるが、底部縁辺に篋ケズリ再調整を持つものが1点伴う。須恵器の形態はC-2点、E-1点である。法量は2の範疇に取まり、口径13.4~13.8cm、器高4.2~5.0cmにピークが見られる。口径：底径比は1.9~2.9と一定していない。底部回転糸切りされる。甕はロクロ製作のものと非ロクロのものが共存し、後者には少数ながらハケメ調整をもつものも存在する。口縁部形状は単純口縁を呈するものと、外反後口唇部が両端に引き出されるものが供伴する。

SK01土坑 土師器7点(全て黒色処理)、須恵器7点で構成される。土師器の形態はC-1点、不明6点、法量は2に該当し、口径13.4cm、器高5.5cm、口径：底径比2.2である。底部は回転糸切りされる。須恵器の形態はC-1点、D-1点、不明5点である。法量は2に該当し、口径13.6~13.8cm、器

高4.5cm、口径：底径比2.1~2.3である。底部切り離し技法は回転糸切りによるが、回転糸切りが1点供伴する。甕はロクロを使用して制作されたものがほとんどで、口唇部上端が引き上げられる形状のものが多い。尚、少数ではあるが非ロクロで、体部にハケメ調整を持つものも見られる。

パターン4：SI04 土師器54点(内、黒色処理19)で構成される。土師器は製作に際しロクロを使用するもの(I群)10点と、非ロクロのもの(II群)44点が混在し、

表A

	黒色処理土師器	赤黒色処理土師器	須 恵 器
SI01	1	1	0
SI02	1	0	3
SI03	5	0	3
SI04	19	35	0
SI05	0	0	5
SI06	3	0	0
SI08	1	1	2
SI09	3	13	0
SI10	2	1	2
SK01	1+1?	11	0
SK01	7	0	7

●銀行資料を含むすべての掲載遺物を対象とした

後者のみに底部に繊維圧痕（いわゆるムシロ痕）を持つものが存在する。形態はI群ではB-2点、C-3点、D-5点でDに集中が見られる。法量は2・3で、大形のものが見られない。口径：底径比は2.0~3.2まで認められる。底部の切り離しは回転糸切りによる。II群ではA-1点、B-15点、C-10点、F-1点、不明17点で、B・Cに集中が見られる。法量は1~3に該当し、口径：底径比は1.9~2.7と幅広く、個体によるばらつきが目立つ結果となった。底部調整は、部位が残存する個体のうち再調整により不明なものを除けばすべてムシロ痕を有するものである。なお、本区分に含まれ、底部にムシロ痕を持つ土師器がまとめて出土したSI04については別項を設けて後述する。

SI01：土師器2点（内、黒色処理1）で構成される。形態にはD-1点、不明-1点がある。法量は2に該当し、口径13.9cm、器高4.8cm、口径：底径比は2.5である。底部は回転糸切りされる。甕はロクロ調整を持つもので口縁部が短く外反し、口唇部が上下に軽く引き出されるような形状を呈する。SI09：土師器16点（内、黒色処理3）で構成される。SI04と同様ロクロ製作のものと非ロクロのものが混在する。形態はB-1点、C-2点、D-1点、E-2点、不明-10点である。法量は1と2があり、口径13.5~13.8cm、器高4.5~4.8cmにまとまる。口径：底径比は2.3前後である。底部はロクロ製作されるものは回転糸切り、非ロクロ製作されるものは篋ケズリ再調整により不明である。しかしながら後者は輪積み痕が顕著に残るなど、製作技法からみて同一の系統に属すると判断できるもので、再調整で消された可能性が高い。甕はすべて非ロクロで製作されるもので、内外面共にハケメ調整（一部その後ナデ調整）され、底部にムシロ痕を持つ。

SX01：土師器13点（内、黒色処理1+1?）で構成される。形態はB-1点、D-1点、不明-11点がある。法量は2に該当し、口径13.2~13.6cm、器高4.4~4.8cmを測る。口径：底径比2.5~2.8で、やや小形傾向を示すものが含まれる。底部切り離しは回転糸切りによる。また、1点のみムシロ痕系統とみられる土師器の坏片が出土しているが小片であり、不明な点が多い為除外する。(234)。甕はすべて非ロクロで、体部はケズリもしくはナデ調整され、少数でハケメ調整が認められる。口唇部形態は不明である。

パターン5：SI08 土師器2点（内、黒色処理1）、須恵器2点で構成される。土師器の形態および法量は不明-2点、須恵器の形態はD-1点、E-1点、法量は2に該当し、口径13.3~13.8cm、器高4.2~4.8cmを測る。口径：底径比2.3~2.5である。底部は回転糸切りされる。甕はロクロナデ調整されるものが殆どで、下半部は篋ケズリ調整される。口縁部形状はやや強く外反・外傾し、口唇部が上方ないしは下方に引き出されるものが併存する。

〔SI04竅穴住居跡出土遺物について〕

本遺跡においてSI04竅穴住居跡床面および床面土坑、堆積土中より良好な一括遺物が得られ、その総数は122点にのぼる。このうち土師器は合わせて99点出土しており、製作に際してロクロを使用するもの（I群）と使用しないもの（II群）の2系統が存在する。器種組成は坏が全体の54.5%（I群18.5%、II群81.5%）、高台坏が8%（I群12.5%、II群87.5%）、耳皿1%（I群）、甕が26.3%（I群7.7%、II群92.3%）を占める。

#### 底部に繊維圧痕を有する非ロクロ土師器

本遺跡では底部に繊維圧痕を有する土師器が、底部の圧痕が明瞭なものに限ると28点確認されている。このほか、底部の再調整により圧痕が不明瞭もしくは不明であっても製作・調整技法を同じくするものを含めると総数は69点にのぼる。岩手県内において、繊維圧痕をもつ土師器については稲野彰子氏の論考がある。その中で氏は東北6県の資料を対象に繊維圧痕の種類を織物（ムシロ・タミ：A種）と編み物（アンギン系：B種）の2つに大別し、更に縦糸の幅、横糸の長さなどで3つに細分を行っ

ている（稲野1995）。

1995年当時、県内における底部に繊維圧痕を持つ土師器の出上例は、石鳥谷町大曲遺跡、北上市下谷地A遺跡、金成遺跡、森下遺跡、岩崎台地遺跡群など5遺跡で16点を数えるのみであったが、その後資料数の増加を経て、現在までに二戸市大向Ⅱ遺跡、盛岡市細谷地遺跡第8次、北上市堰向Ⅱ遺跡の3遺跡3点と報告遺跡の28点を加えた9遺跡47点にのぼる。出土遺跡は県北～県南にかけて散見されるが、とりわけ神貫地域の北上川東岸で分布が厚い傾向が見られる。表aは、これを計測値を含めて一覧表に示したものである。

#### 製作技法の特徴

本遺構から出土した製作に際しロクロを使用しない（以下、非ロクロ）土器群において、製作技法の特徴を以下に記す。対象とした器種は、坏、高台付坏、甕である。なお、ここでは先述の28点のほか、底部の繊維圧痕が不明瞭もしくは不明であっても、繊維圧痕を有する土器と製作技法上の共通点が認められるものは一括して扱った。

〔坏〕坏には47点が該当する。

成形：粘土紐巻き上げにより、ロクロを用いず指押さえの工程のみを経て成形される。43・91～94、107は3～4段の粘土紐巻き上げ痕跡が明瞭に確認できる個体である。うち、91・93においては更に指押さえによる圧痕が確認できる。なお、指頭の凹みは紐巻き上げの接合部と一致する傾向が強い。

外面調整：口唇部には狭い（幅5mm～1cm程）ヨコナデ調整が入る。体部は口縁部付近までヘラ状工具によるケズリ調整が行われるもの、ナデ調整されるもの、ミガキ調整＋黒色処理が行われるものの3つが存在する。また、個数体は多くないが、体部上半部に工具調整が及ばない（口縁部付近まで工具調整が及ばない）個体においては、比較的明瞭に粘土紐巻き上げ痕跡が残存する傾向が看取される。

内面調整：ヨコナデ調整後、ナデ調整されるものが殆ど。少数ではあるがハケメ調整が行われるもの（44、86、91）や、ミガキ調整＋黒色処理されるもの（51・52・73）がある。

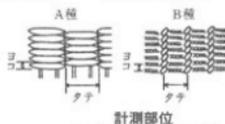
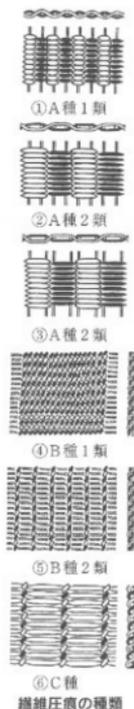
底部：繊維圧痕を持つものと、調整のため底部の状況が不明となるものに大別される。このうち前者はA種1類の圧痕を有する（44・46・47・52・63）ものと、A種2類の圧痕を有するもの（217）に分けられる。前者は底部がケズリ、ナデ、もしくはミガキ調整されるものであるが、調整が全面に及ぶものと、再調整が完全でなく、繊維圧痕が残存しているものの両者がある。

〔高台付坏〕高台付坏には7点が該当する。

成形：坏と同様、粘土紐巻き上げにより、ロクロを用いず指押さえの工程のみを経て成形される。75においては粘土紐巻き上げ痕跡が認められる。

外面調整：口唇部には狭い（幅5mm～1cm程）ヨコナデ調整が入る。体部は口縁部付近までヘラ状工具によるケズリ調整が行われるもの、ナデ調整されるものの2者が存在する。

内面調整：ヨコナデ調整後、ナデ調整される。1点のみミガキ調整＋黒色処理されるものが存在する（114）。



計測部位  
※ 稲野(1995)より転載

底部：高さ2.5cmほどのハの字形の長脚の高台がつく。底部は繊維圧痕を持つものと、調整のため底部の状況が不明となるものに大別される。このうち前者はA種1類の圧痕を有する(75、114)。後者は底部がナデ調整されるものであるが、再調整が完全でなく繊維圧痕が残存するものである(65、76)。後者の観察によると、成形段階ですでに底部と繊維は接しており、その後再調整を経て高台が作られたことが解る。

〔甕〕甕は18点が出土している。

成形：粘土紐巻き上げにより、ロクロを用いない。粘土紐巻き上げ痕跡は器面調整によりほとんど残存していない。

外面調整：口唇部ヨコナデ後、ハケメ調整もしくはケズリ調整が行われる。

内面調整：ヨコナデ調整後、ナデ調整もしくは一部ハケメ調整が行われる。

底部：A種1類が11点、A種2類が4点、B種1類が3点確認されている。

〔鉢・壺類〕小片で器種の特定が困難であるため一括して扱う。3点が該当する。

成形：粘土紐巻き上げにより、ロクロを用いない。

外面調整：口唇部の残存する個体はない。体部はいずれもミガキ調整+黒色処理される。

内面調整：いずれもミガキ調整+黒色処理が行われる。

底部：明瞭に繊維圧痕が確認できるものは69の1個体のみでB種1類に該当する。

#### ②本遺跡から出土した遺物の時期について

以上、遺構内出土遺物について形態、法量、各分類と構成比率による坏組成の大別を試みてきた。全体的に遺物の数が不足するため十分な検討とはならないまでも、遺跡における時期区分について一応の傾向が示されるのではないかと考え、これに坏の形態的特徴A~Fの6類、法量3種を含めて総合的に概観した結果を以下に示しておく。

第1期 須臾器A、C類からなる。出土量はA類が多い。法量は2・3の組み合わせからなり、口径：底径比が1.9~2.0のものに分布が集中し、底径の大形傾向が認められる。(パターン1)

〔供伴器種〕土師器甕・須臾器甕壺類

第2期 須臾器A、C、D、E類からなる。出土量はC類が多い。法量はすべて2に収まり、最も同一性が高い。口径：底径比は1.9~2.3のものが多く、1期より底径が縮小傾向となる。土師器はI群Ba、Ca、Da類からなり、1期より形態差が広がる。法量は1~3、底径比は2.2~2.7となり、個体差が大きくなる。(パターン2、3、5；パターン5は土師器(非黒色処理)を含むため、含まない3と分離したが、広義の土師器という意味で本期に一括した。)

〔供伴器種〕土師器鉢？、短頸壺、甕・須臾器蓋、甕壺類、大甕

第3期 製作技法に2系統見られる。製作に際してロクロを使用するものI群にはBa、Da、Ea、Bb、Cb、Db、Ebがあり、Dbが最も多い。法量は2・3、口径：底径比は2.0~3.2で、個体差が大きいものの1・2期に比して底径の小形化がさらに顕著となる。製作に際してロクロを使用しないII群にはAc、Bc、Cc、Fc、Bd、Cdが存在し、Bcが最も多い。法量は1~3、口径：底径比は1.9~2.7と、最も形態・法量におけるばらつきが大きい。(パターン4)

〔供伴器種〕土師器高台坏、耳皿、鉢？、壺、甕、ナベ・須臾器甕壺類、大甕

但し、本期に該当する4遺構(SI01、SI04、SI09、SX01)の製作技法分類における組成は全て同一な訳ではなく、以下のように細分可能である。すなわち、

第3a期 I群のみで構成(SI01)

第3b期 I・II群両方で構成(SI04、SI09、SX01)

となる。

これらは現在までの県内における土器型式学的年代観に照らせば、おおむね第1・2期が9世紀代(SI05・SI06・SI10・SI02・SI03・SI08・SK01)、第3期が10世紀前～中葉(SI01・SI04・SI09・SX01)に比定される特徴を持つと思われる。うち、第1期(SI05・SI10)は須恵器主体で構成され、底部から直線的に立ち上がるA類の器形を指向するものが多いこと、底径の大形傾向などから2期より古相の特徴を持つものである。

### ③平安時代の集落構成

今回の調査で判明した集落は竪穴住居跡10棟、竪穴住居跡状遺構1棟、土坑2基から構成されている。前項において竪穴住居跡の規模、形状、十和田a降下火山灰の有無、構造等から竪穴住居跡についての特徴をまとめた。加えて、住居跡を主体とする遺構単位での出土土器の検討を行い、大きく3期の時期区分を行ってきた。最後にこれらの傾向を踏まえ、時期別に分けてまとめたい。

**平安時代Ⅰ期集落** 遺物第1・2期に対応するもの。SI02・SI03・SI05・SI06・SI08・SI10・SK01が該当する。住居跡の主軸方位が東に振れるもの(4棟)と、北に振れるもの(2棟)からなる。規模は一辺307cm以下のものと390～498cmのものに分けられ、大小が存在する。これら住居跡は規模により構造が異なり、1辺4m以上の住居跡で主柱穴が認められ、1辺3m内外の住居跡には壁溝が認められるといった傾向が看取できた。但し、住居規模の大小が時期差によるものか、組み合わせで同時に存在するものかは明らかにできなかった。そのなかにあつて遺物第1期に相当するSI05、SI10は住居の主軸方向、規模においても類似しており、遺構と遺物双方において同様な結果が得られた。同住居跡は出土遺物から、なかでも古相の特徴を有するものである。Ⅰ期集落の所属時期は9世紀代と考えられる。

**平安時代Ⅱ期集落** 遺物第3期に対応するもの。SI01・SI04・SI09・SX01が該当する。住居跡の主軸方位が北東に振れるもの(1棟)、南東に振れるもの(1棟)が認められる。これらの4遺構は前述のように土器製作技法分類によって第3a期(SI01)と、第3b期(SI04・SI09・SX01)に分けられるが、前者については埋土に十和田a降下火山灰の断続的層状堆積が確認されており、テフラ年代から見れば少なくとも10世紀前葉には廃棄されていたと考えられる。一方、後者3遺構のうちSI09とSX01については埋土の残存状態が極めて不良であるためこの点での対比は不可能であるが、対比可能なSI04に同テフラの堆積はなく、ここに時期差の存在が確認できる。同テフラが層状に堆積しない時期とすればテフラ降下以降の可能性が最も高く、SI04はSI01より後出と考えるのが妥当である。これらの小期は規模、住居の主軸にも反映しているとみられ、第3a期が一辺312～416cm、住居主軸が北東を示すのに対し、第3b期は一辺374～514cmの範疇に収まり、住居主軸は明確なもので南東を示している。Ⅱ期の所属時期は10世紀前葉～中葉(第2～3四半期)にあたると思われる。

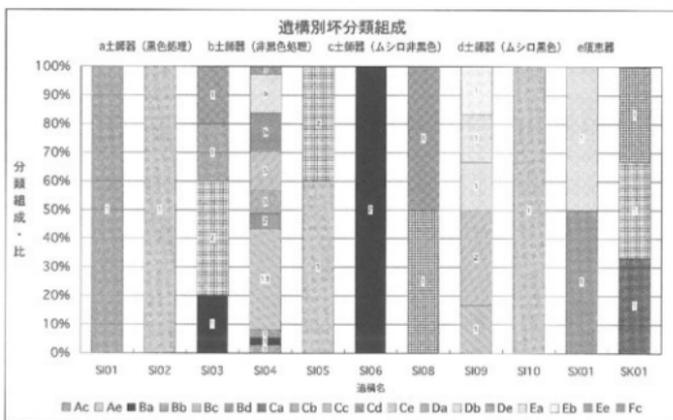
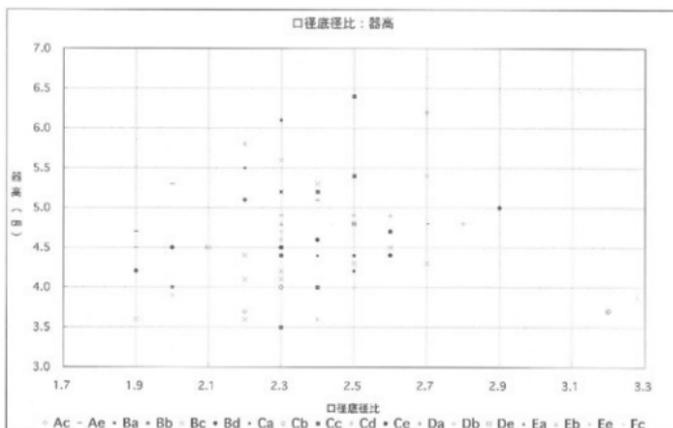
結びにかえて

以上、床面出土遺物の検討および麓層の堆積状況から各遺構の使用時期大別作業を行い、それを反映させる形で遺構形態や付属施設の相違点を考察してきた。結果、今回の調査区域内では9世紀代から10世紀中葉にかけて集落が営まれ、その時期は大別2期・細別3期に分けられることが判明した。このうち特筆されるのは、Ⅱ期集落の住居跡において土師器の製作技法に2系統が認められたことである。SI04住居跡においては底部に繊維圧痕(いわゆるムシロ痕)を持つ土師器が69点まとまって出土しており、出土事例がきわめて少ない底部繊維圧痕(ムシロ痕)を持つ遺物の帰属時期について、貴重な資料を提供することとなった。底部繊維圧痕を持つ土師器について、これまでに示されている年代観を集成した稲野彰子氏によれば、その時期幅は9世紀初頭～12世紀と幅が広い(稲野1995)。この時期幅の中には本遺跡における時期区分全てが含まれることになるが、前述のとおりⅡ群出土遺構における

供伴土器の年代観は坯底径の小形傾向、高台坏脚部の形状など、形態や法量上の特徴から10世紀前～中葉（第2～3四半期）の一時期に集中しており、テフラ年代的にもこれを追認する形となっている。よって、少なくとも本遺跡で捉えられる底部繊維圧痕（ムシロ痕）土器の存在時期はこの一時期に限定されるといえる。

本報告書に掲載した土師器および須恵器片は総数315点である。ほとんどは竪穴住居跡からの出土で、大多数が破片資料であり、SI04竪穴住居跡のものを除けば出土状況はかならずしも良好とはいえない。このような条件下で土器の分類を中心に年代的な位置づけについて若干の検討を行ってきたが、遺物の絶対数の不足や判断要素の乏しさから確度の高い資料を提示するまでには至らなかった。しかしながら、本遺跡の大まかな所属時期については明らかになったものとする。

（丸山 直美）

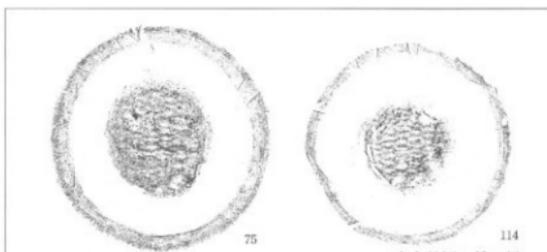


表a 岩手県内の底部に縄文圧痕を有する土器出土遺跡一覧 (編年 1995に準ず)

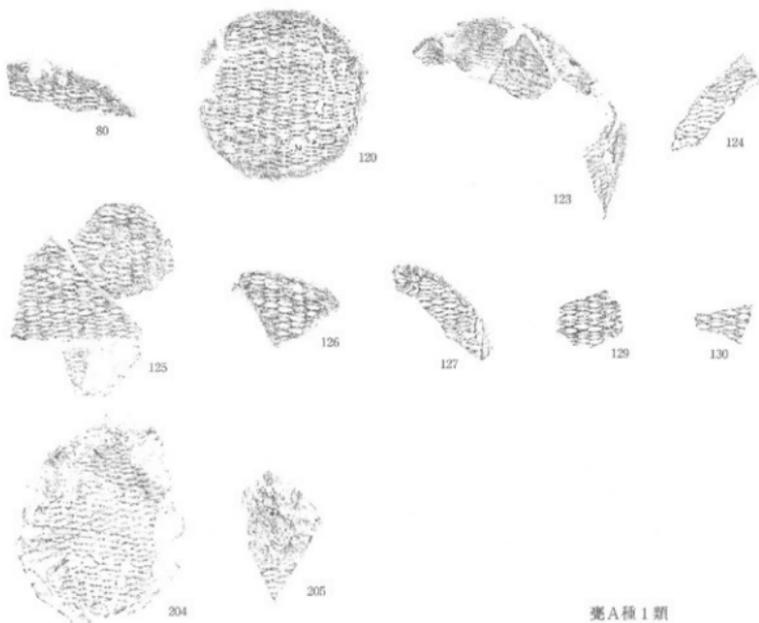
No.	遺跡名	遺跡No.	市町村	資料No.	種類	器種	分類	タテmm	ヨコmm	名称	文献	備考
1	大曲遺跡 (旧 石鳥岩町)	1	花巻市	1	土師器 埴	土師器 埴	A1	4.54	2.91	ムシロ状のわら製品 ムシロ製品 ムシロ製品 ムシロ製品 ムシロ製品 ムシロ製品 ムシロ製品	縄野(1995)に基づく	
2		2		土師器 埴	土師器 埴	A1	4.54	2.94				
3		3		土師器 埴	土師器 埴	A1	4.70	2.47				
4		4		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.50	2.80				
5		5		土師器 小形埴	土師器 小形埴	A1	6.73	3.13				
6		6		土師器 埴	土師器 埴	A1	50.00	7.00				
7		7		土師器 埴	土師器 埴	A1	?	?				
8	下谷本A遺跡	8	北上市	1	土師器 埴	土師器 埴	A2	18.00	2.50	中瀬みの器代値		
9		2		土師器 埴	土師器 埴	A2	18.00	2.78				
10		3		土師器 埴	土師器 埴	A1	6.33	3.00				
11		4		土師器 埴	土師器 埴	A2	18.00	2.75				
12		5		土師器 埴	土師器 埴	A2	21.00	2.80				
13		6		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.50	1.41				
14		7		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.70	2.17				
15		8		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.67	2.75				
16		9		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.78	2.60				
17		10		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.00	1.80				
18	高小中遺跡	18	北上市	1	土師器 埴	土師器 埴	A1	4.83	1.83	縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文	岩野文(54)編2004 岩野文(64)編2005	
19		2		土師器 埴	土師器 埴	A1	4.50	1.67				
20		3		土師器 埴	土師器 埴	A1	4.50	1.67				
21		4		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.00	2.00				
22		5		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.00	2.00				
23		6		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.00	1.80				
24		7		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.75	2.75				
25		8		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.92	1.71				
26		9		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.83	2.50				
27		10		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.83	2.41				
28		11		土師器 埴	土師器 埴	A1	7.90	2.00				
29	高小中遺跡	29	北上市	1	土師器 埴	土師器 埴	A1	6.00	2.21	縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文 縄野文	岩野文(7)編2006	
30		2		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.78	2.00				
31		3		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.75	2.80				
32		4		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.50	2.06				
33		5		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.50	2.29				
34		6		土師器 埴	土師器 埴	A1	5.50	2.00				
35		7		土師器 埴	土師器 埴	A1	10.33	2.83				
36		8		土師器 埴	土師器 埴	A1	7.80	2.50				
37		9		土師器 埴	土師器 埴	A2	18.00	2.50				
38		10		土師器 埴	土師器 埴	A2	18.00	2.04				
39		11		土師器 埴	土師器 埴	A2	?	2.14				
40		12		土師器 埴	土師器 埴	A2	?	3.83				
41	13	土師器 埴	土師器 埴	A2	?	3.57						
42	14	土師器 埴	土師器 埴	A1	21.50	3.57						
43	15	土師器 埴	土師器 埴	B1	3.00	2.17						
44	16	土師器 埴	土師器 埴	B1	4.25	1.65						
45	17	土師器 埴	土師器 埴	B1	3.35	2.00						
46	18	土師器 埴	土師器 埴	B1	2.45	1.55						
47	19	土師器 埴	土師器 埴	B1	3.44	2.00						



坏A種1類



高台付坏A種1類



葉A種1類



坏A種2類 217



121



131



132



133

堿A種2類



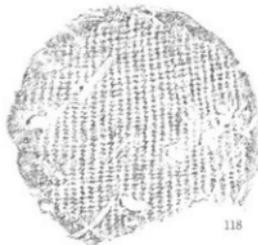
60



90



128



118



122

堿B種1類

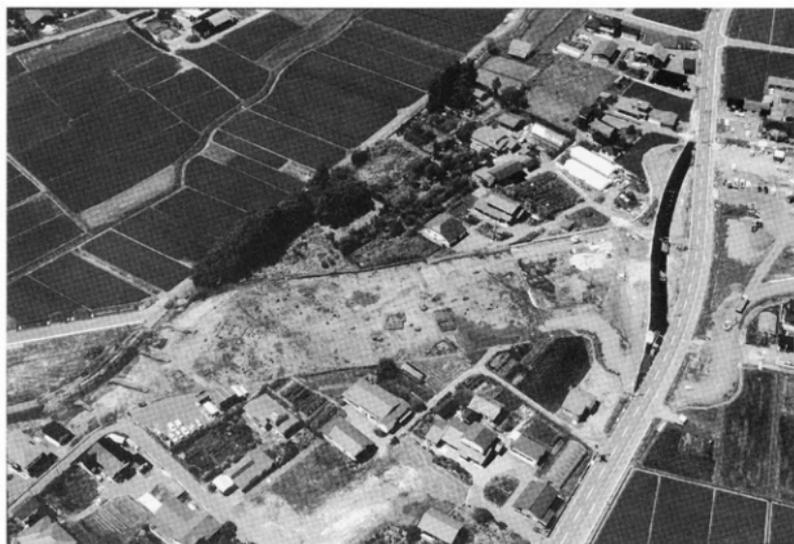
## 引用・参考文献

- 稲野彰子 1995 いわゆるムシロ底について【北上市立博物館研究報告 第10号】：1～12, 北上博物館
- 井上雅孝 1997 陸奥における10・11世紀の土器様相【北陸古代土器研究 第7号】：45～56, 北陸古代土器研究会
- 伊藤武士 1997 出羽における10・11世紀の土器様相【北陸古代土器研究 第7号】：32～44, 北陸古代土器研究会
- 菅原祥夫 2000 平安時代における北方系土器の南下一律令政権下の軀表をめぐって—【阿部正光君追悼集】：131～142, 阿部正光君追悼集刊行会
- 高橋 学 2000 米代川流域にも埴文土器あり—能代市小友Ⅱ遺跡にみる古代集落の様相—【阿部正光君追悼集】：114～129, 阿部正光君追悼集刊行会
- 平泉町教育委員会 1994 【柳之御所遺跡発掘調査報告書—平泉バイパス・一関遊水池関連地関連遺跡発掘調査—】
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003 【細谷地遺跡発掘調査報告書—第4・5次調査—】岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第414集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 【細谷地遺跡第8次発掘調査報告書】岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第454集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2005 【西川Ⅱ・塚向Ⅱ遺跡発掘調査報告書】岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第464集

# 写 真 图 版



遺跡遠景（南から）



調査区全景（東から）

写真図版1 遺跡遠景・調査区全景



調査前風景 (南西から)



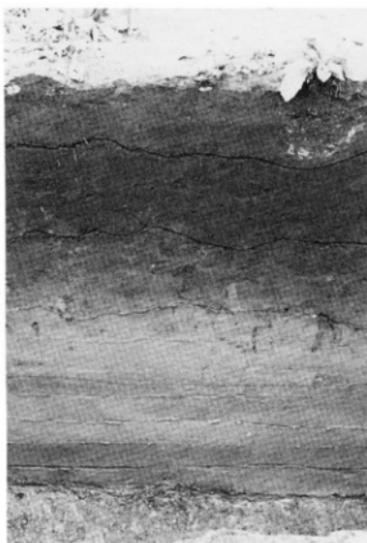
作業風景 (段丘崖から低地を望む)



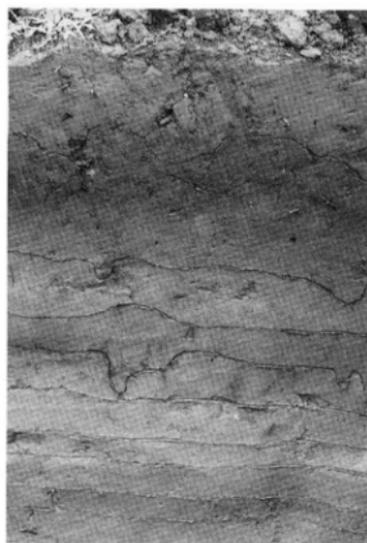
作業風景



作業風景



基本土層 (平坦部)



基本土層 (段丘崖寄り)

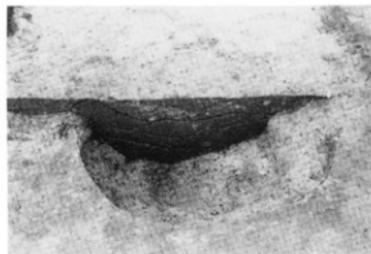
写真図版2 調査前風景・基本土層



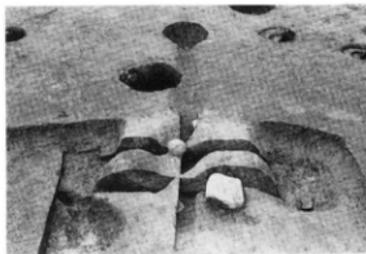
平面 (南西から)



断面 (南東から)

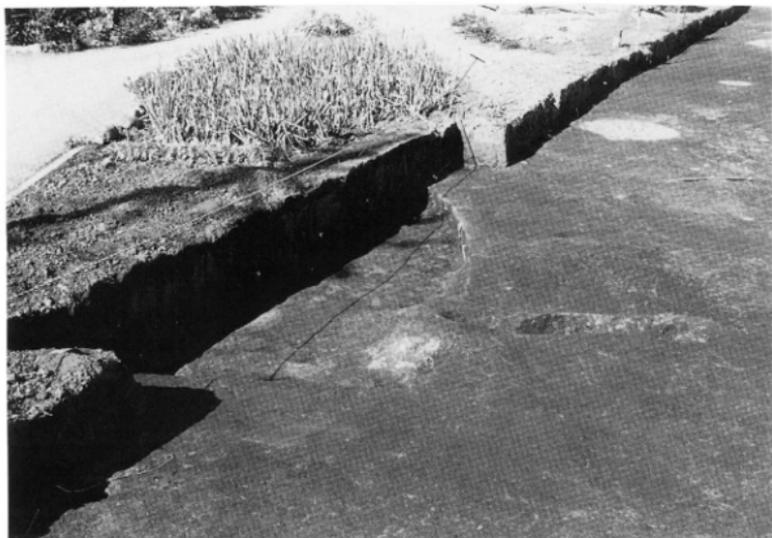


P1断面 (南西から)



カマド断面 (南西から)

写真図版3 SI01竪穴住居跡



平面（南から）



断面（東から）



カマド・煙道断面（南から）

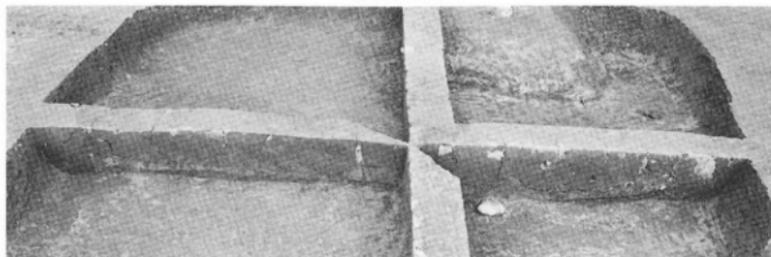


煙道断面②（西から）

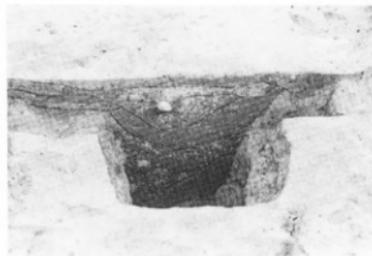
写真図版4 SI02竪穴住居跡



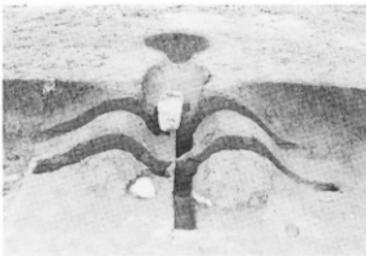
平面（南から）



断面（南から）



P2断面（南から）



カマド断面（南から）

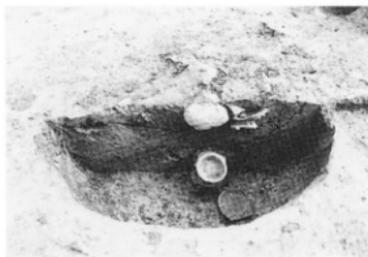
写真図版5 SI03竪穴住居跡



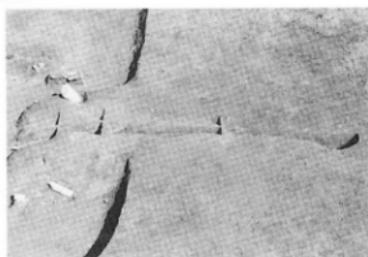
平面（北南から）



断面（南東から）



P3断面（北南から）

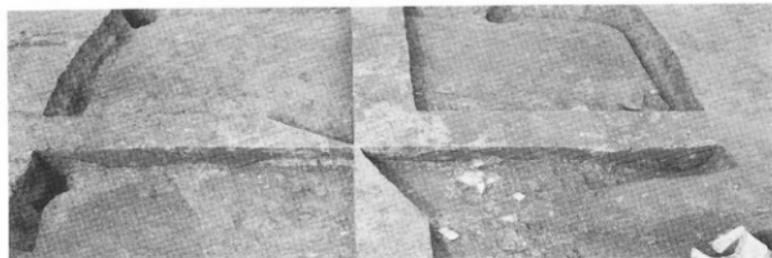


カマド・煙道断面（南西から）

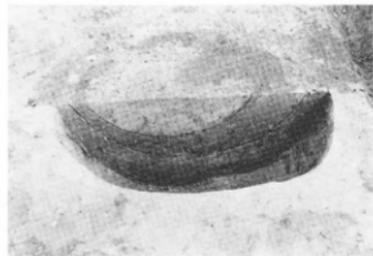
写真図版6 SI04竪穴住居跡



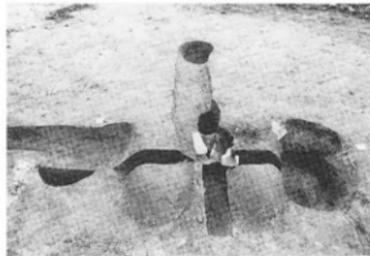
平面（西から）



断面（南から）



P2断面（西から）

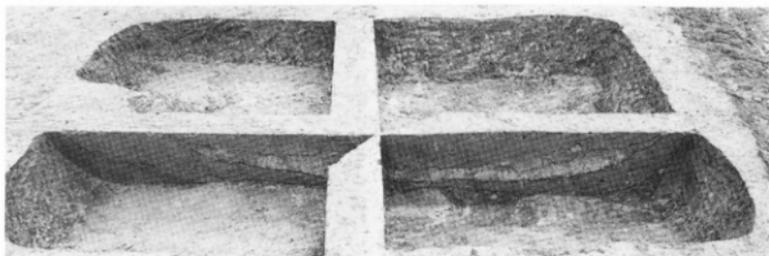


カマド断面（西から）

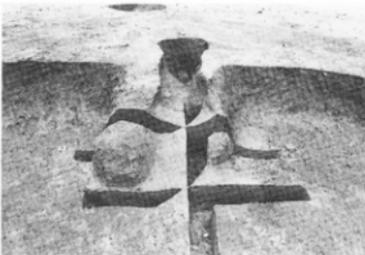
写真図版7 SI05竪穴住居跡



平面 (南から)



断面 (西から)



カマド断面 (南から)



煙道部断面 (東から)

写真図版8 SI06竪穴住居跡



SI07カマド燃焼部検出（南から）



SI07北側煙道部断面（南から）



SI07南側煙道部断面（南から）



SI07北側煙道部断面（東から）



SI08完掘断面（南から）



SI08カマド燃焼部断面（南から）



SI08断面（西から）

写真図版9 SI07・08竪穴住居跡



平面 (西から)



断面 (東から)



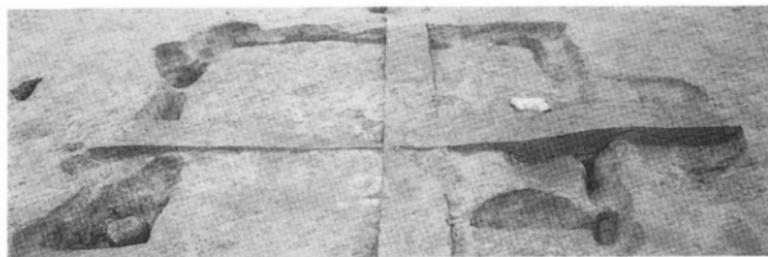
カマド平面 (北から)



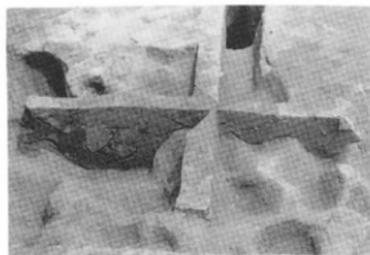
カマド断面 (北から)



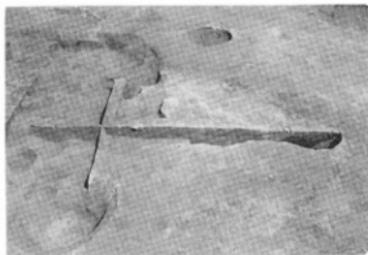
平面（西から）



断面（東から）



カマド平面（西から）



煙道断面（南から）

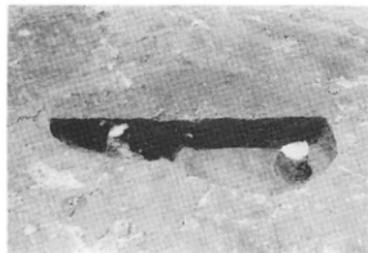
写真図版11 S110竪穴住居跡



平面（西から）



断面（東から）

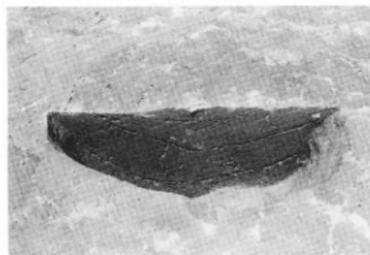


P1断面（東から）

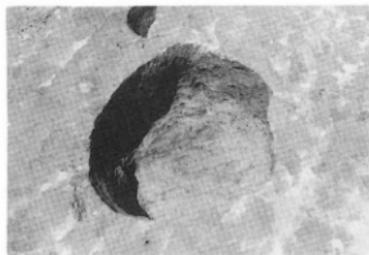


P1平面（南東から）

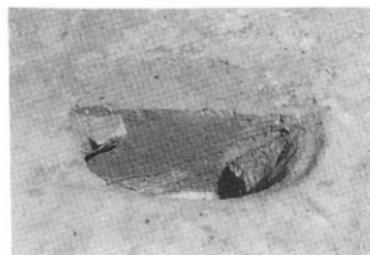
写真図版12 SX01竪穴住居状遺構（1）



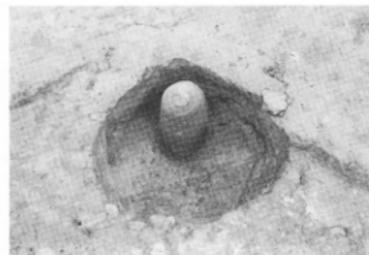
P2断面 (南から)



P2平面 (南から)



P3断面 (南から)



P4平面 (西から)



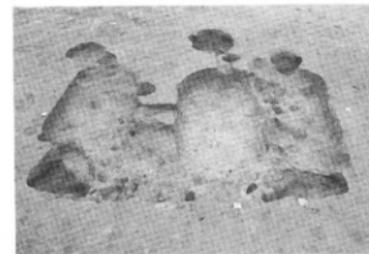
P4断面 (南から)



P5平面 (南東から)



P6平面 (西から)



完盤 (西から)

写真図版13 SX01竪穴住居状遺構 (2)



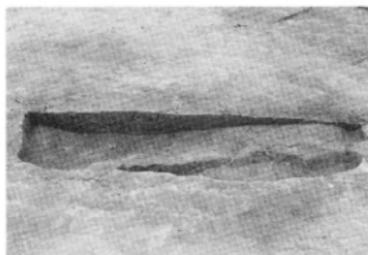
SK01土坑

平面



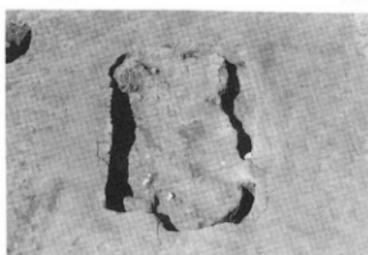
SK01土坑

断面



SK02土坑

断面①



SK02土坑

残土層平面



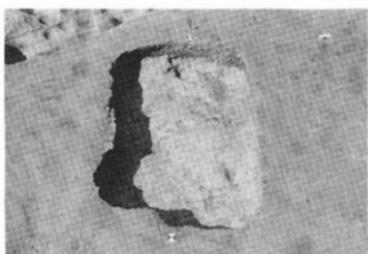
SK02土坑

断面②・遺物出土状況①



SK02土坑

遺物出土状況②



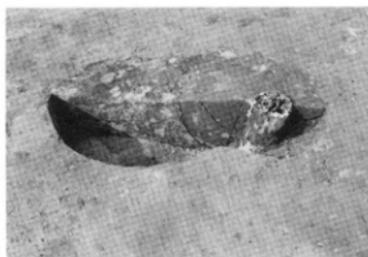
SK02土坑

完備

写真図版14 SK01・02土坑



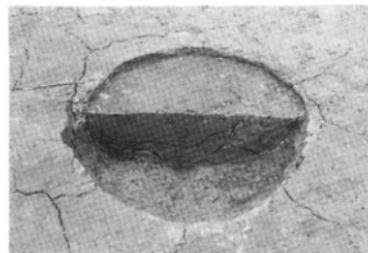
全景（東から）



PP2断面（南西から）



PP5断面（南から）



PP6断面（南から）

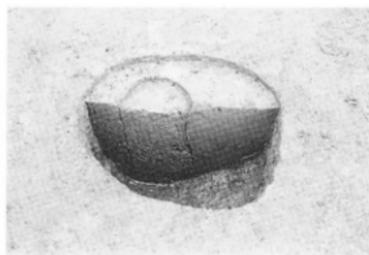


PP15断面（南から）

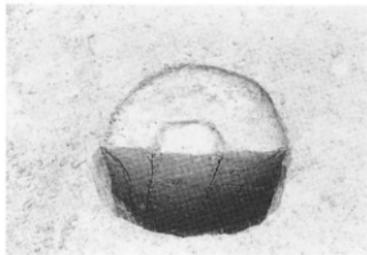
写真図版15 SB01掘立柱建物跡



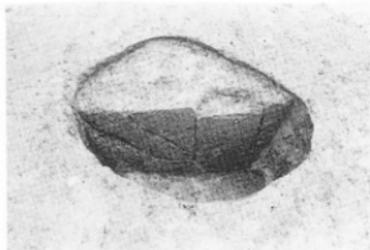
全景 (南から)



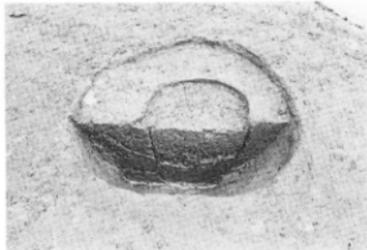
PP1断面 (南から)



PP2断面 (南から)



PP3断面 (南から)

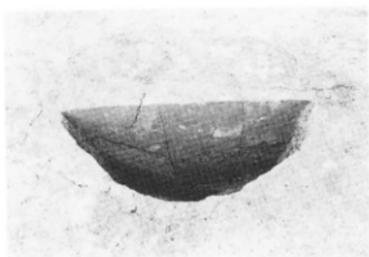


PP5断面 (南から)

写真図版16 SB02掘立柱建物跡



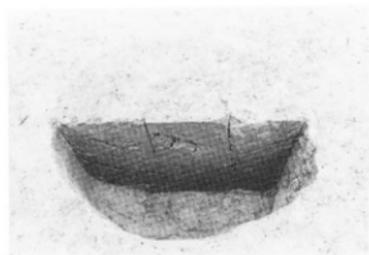
全景（南西から）



PP5断面（南東から）



PP6断面（南東から）



PP9断面（南東から）

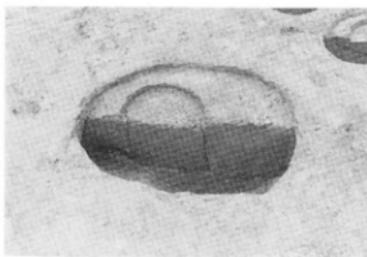


PP12断面（南東から）

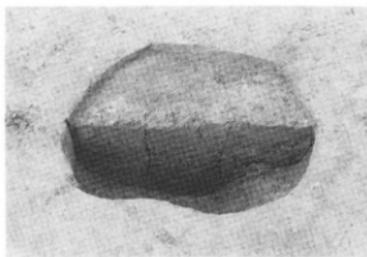
写真図版17 SB03掘立柱建物跡



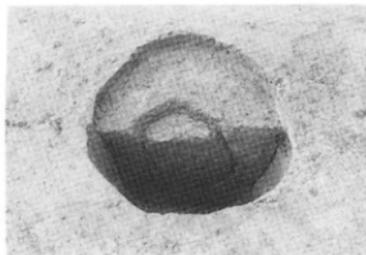
全景 (西から)



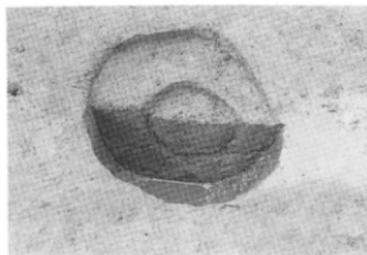
PP8断面 (南から)



PP25断面 (南から)



PP26断面 (南東から)



PP28断面 (南から)

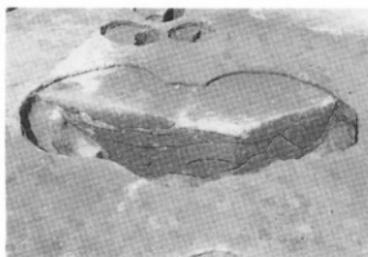
写真図版 18 SBO4掘立柱建物跡



全景 (南東から)



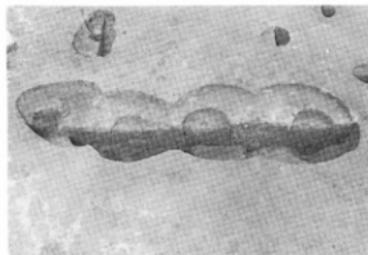
PP1~9断面 (南から)



PP10・11断面 (南東から)

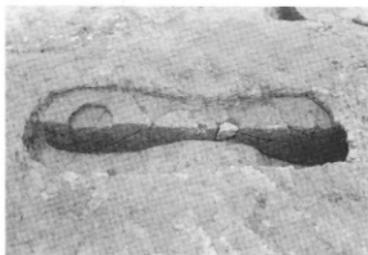


PP14~16断面 (南から)

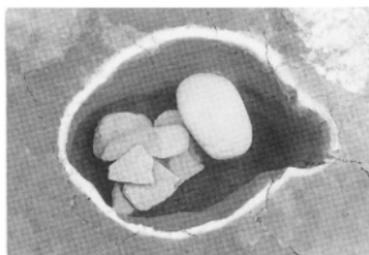


PP18~21断面 (南から)

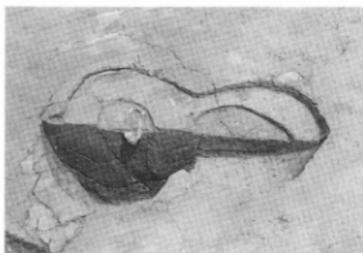
写真図版19 SB05~07掘立柱建物跡 (1)



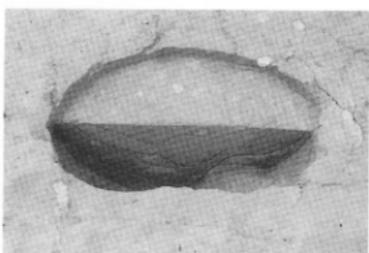
PP36・37断面（東から）



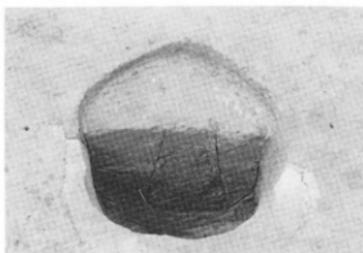
PP38断面（南から）



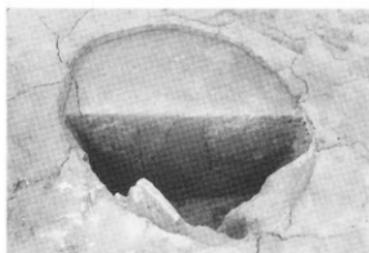
PP39・40断面（南西から）



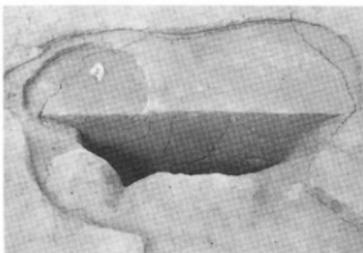
PP43断面（南東から）



PP44断面（南東から）



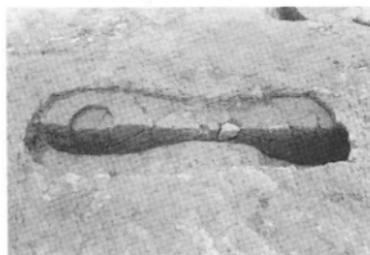
PP54断面（南から）



PP55断面（南西から）



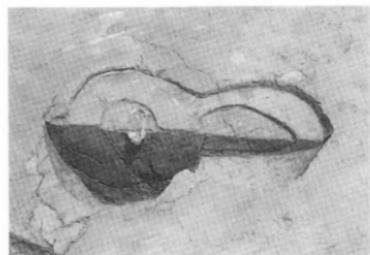
PP58断面（南から）



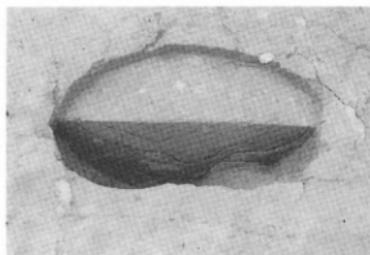
PP73断面 (北から)



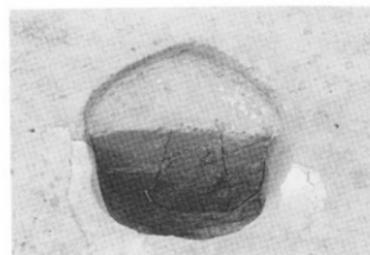
PP68 (南東から)



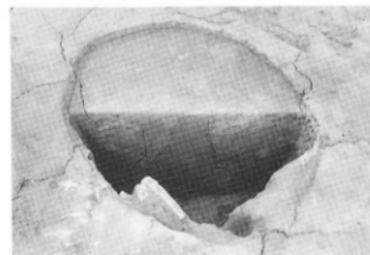
PP76~79 (南西から)



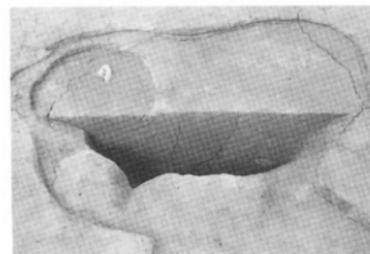
PP70 (東から)



PP83・84 (南から)



PP57 (南から)



PP58 (東から)



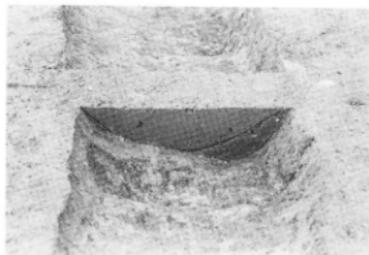
PP51 (南東から)

写真図版21 SB05~07掘立柱建物跡 (3)



SD01溝跡

平面



断面④



底面工具痕



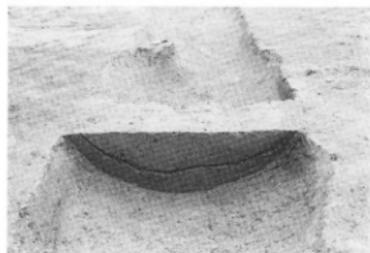
SD02・03溝跡

平面

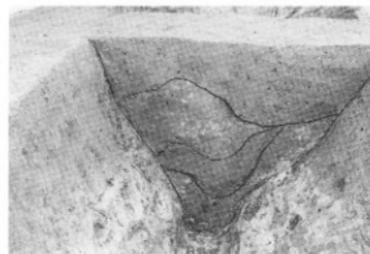


SD02溝跡

断面①

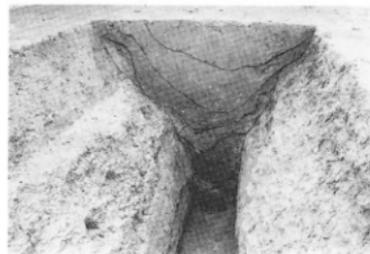


断面②



SD03溝跡

断面②



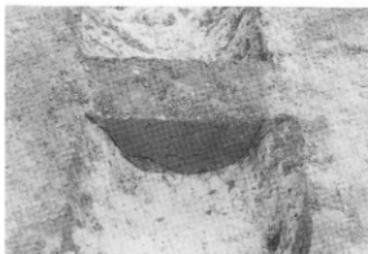
断面⑤



SD04~06溝跡

平面

写真図版23 SD02~06溝跡



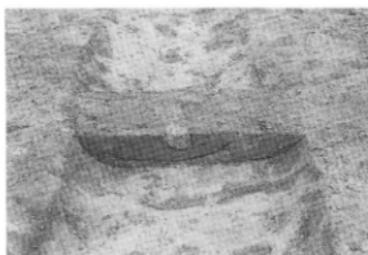
SD04溝跡

断面



SD05溝跡

断面



SD06溝跡

断面



SD07溝跡

断面



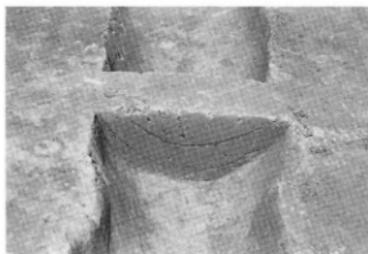
SD07溝跡

平面

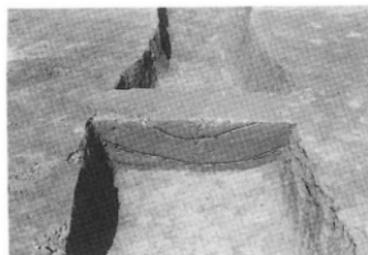


SD08溝跡

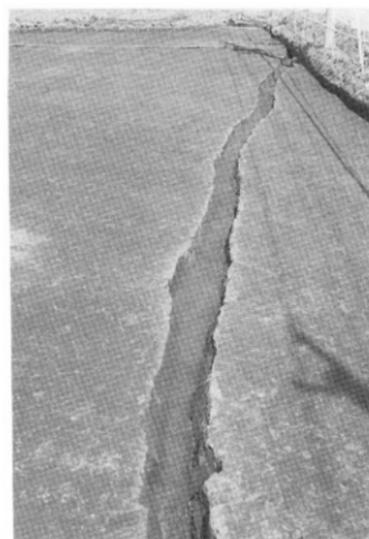
平面



断面①



断面②



SD09溝跡

平面



断面①



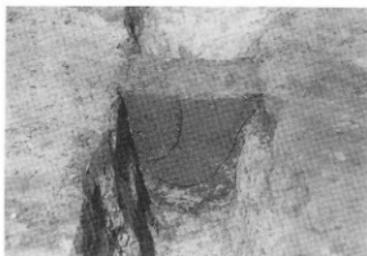
断面②

写真図版25 SD08・09溝跡



SD10溝跡

平面



断面①

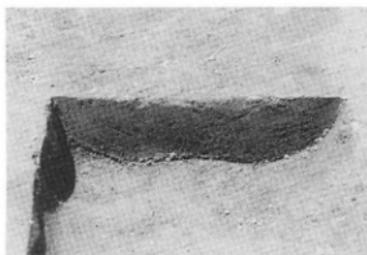


断面②



SD11溝跡

平面



断面①

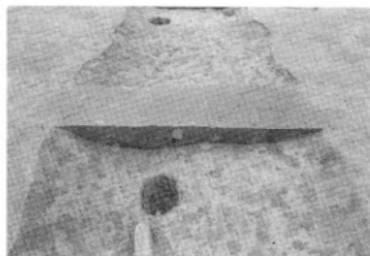


断面②



SD12溝跡

平面



断面①



断面②



SX02カマド状遺構

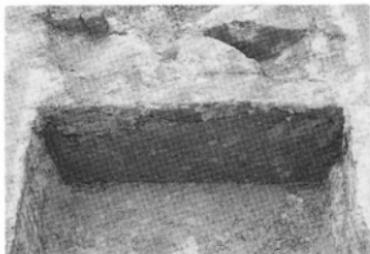
検出



断面①

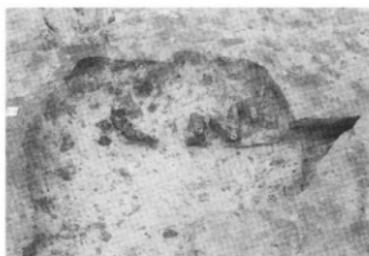


平面



断面②

写真図版27 SD12溝跡、SX02カマド状遺構

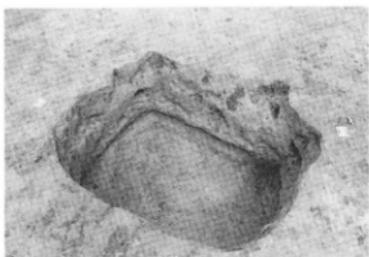


SZ01墓坑

平面

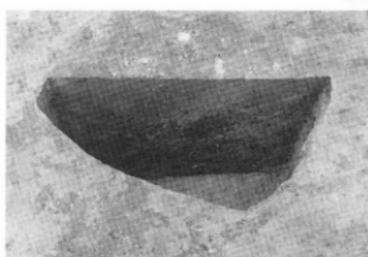


断面

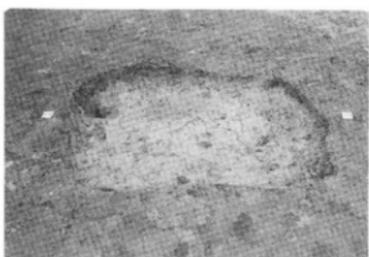


SZ02墓坑

平面

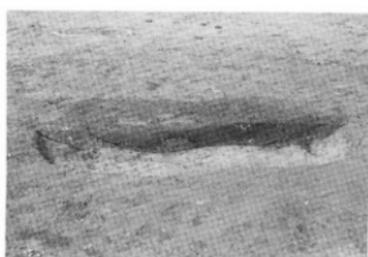


断面



SX03獸骨埋納土坑

平面



断面



SX04獸骨埋納土坑

平面



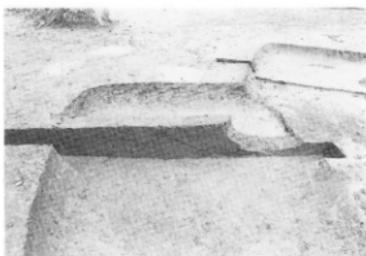
断面

写真図版28 SZ01~02墓坑、SX03・04獸骨出土土坑



SK03土坑

平面

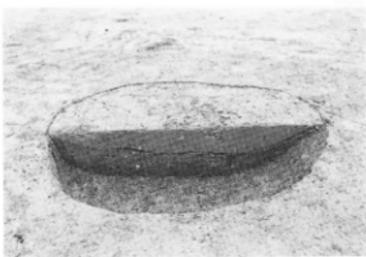


断面

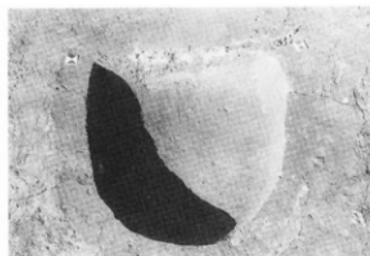


SK04土坑

平面



断面

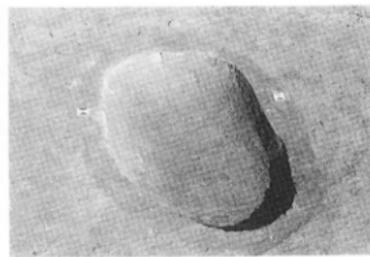


SK05土坑

平面

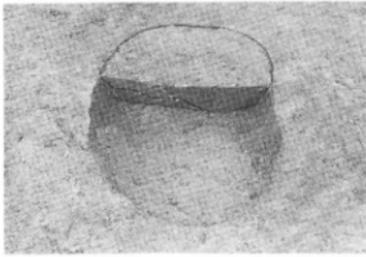


断面



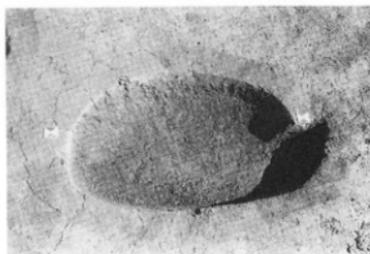
SK06土坑

平面



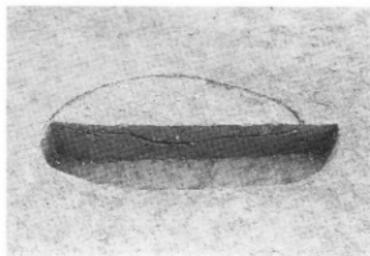
断面

写真図版29 SK03~06土坑

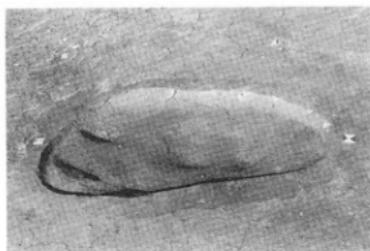


SK07土坑

平面

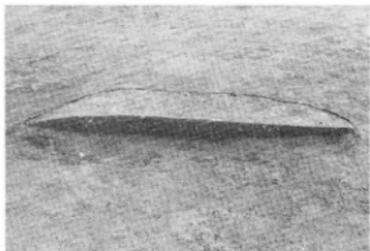


断面



SK08土坑

平面



断面



SK09土坑

平面



断面



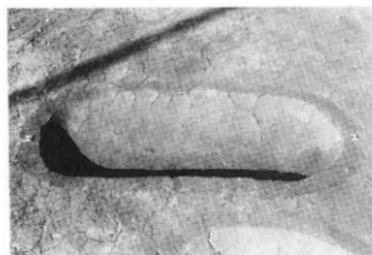
SK10土坑

平面



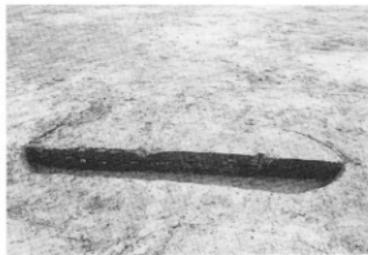
断面

写真図版30 SK07~10土坑



SK11土坑

平面



断面

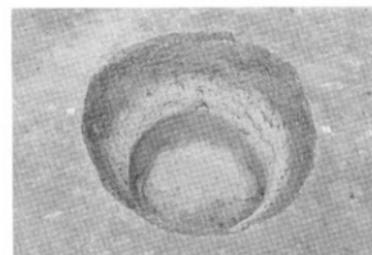


SK12土坑

平面

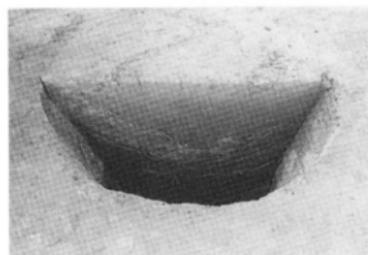


断面

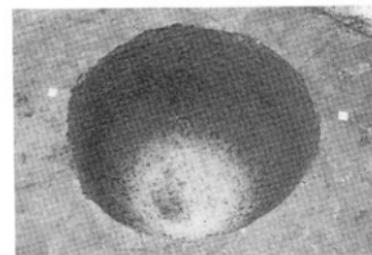


SK13土坑

平面

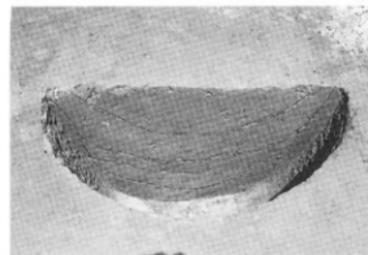


断面



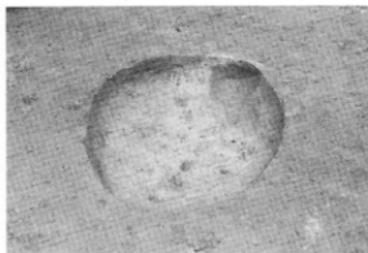
SK14土坑

平面



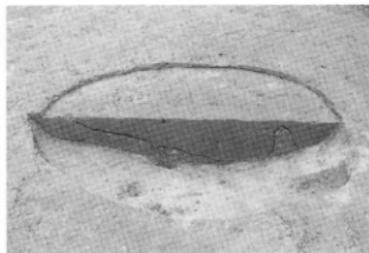
断面

写真図版31 SK11~14土坑

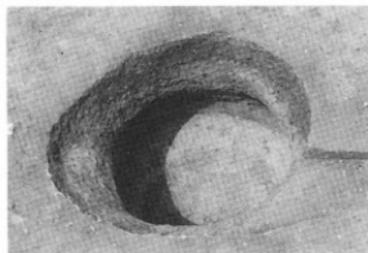


SK15土坑

平面

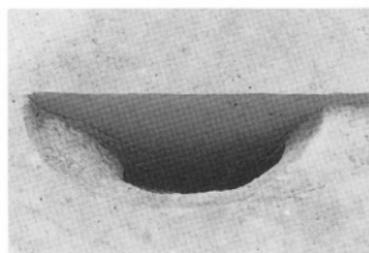


断面

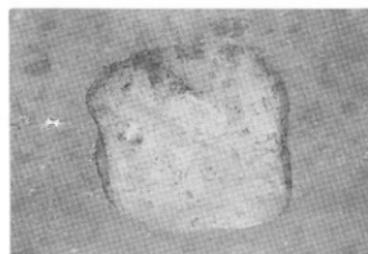


SK16土坑

平面

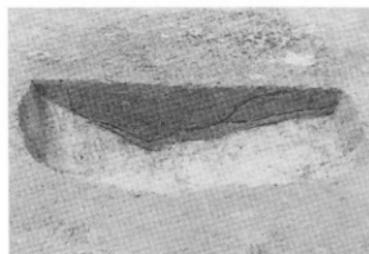


断面



SK17土坑

平面



断面



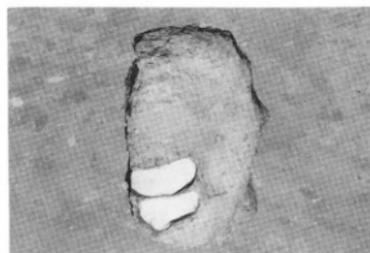
SK18土坑

平面



断面

写真図版32 SK15~18土坑

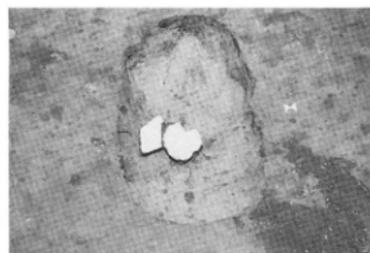


SK19土坑

平面

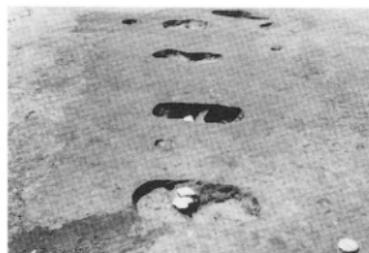


断面

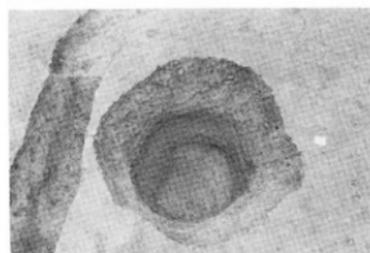


SK20土坑

平面

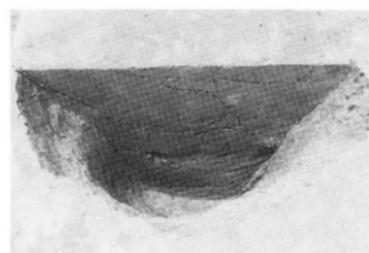


断面

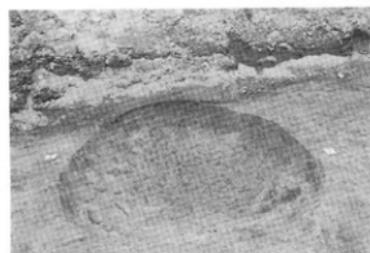


SK21土坑

平面

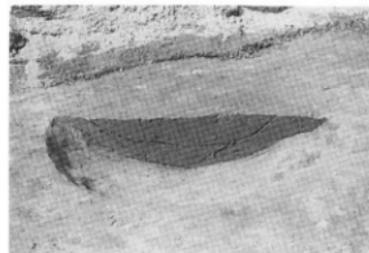


断面



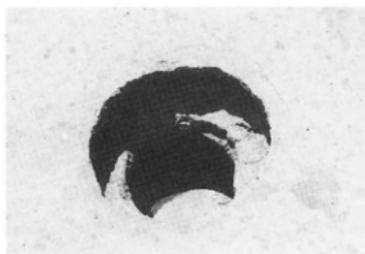
SK22土坑

平面



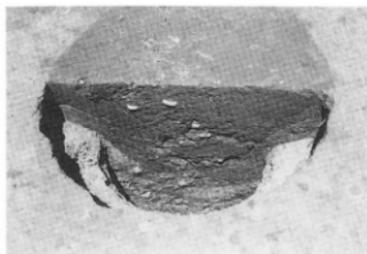
断面

写真図版33 SK19~22土坑

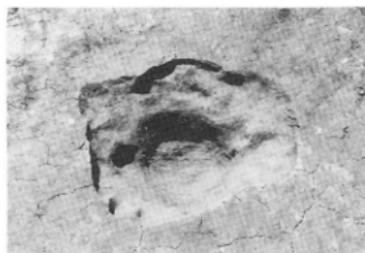


SK23土坑

平面

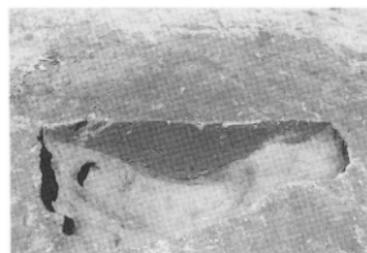


断面

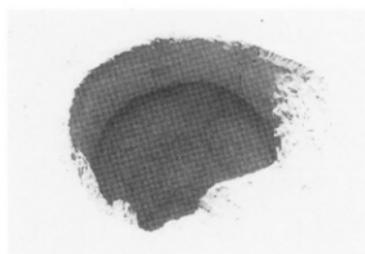


SK24土坑

平面

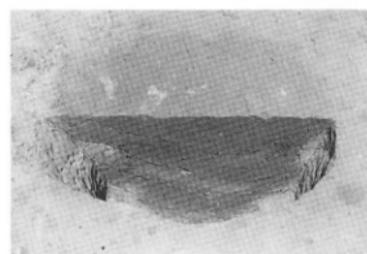


断面



SK25土坑

平面



断面



SK26土坑

平面



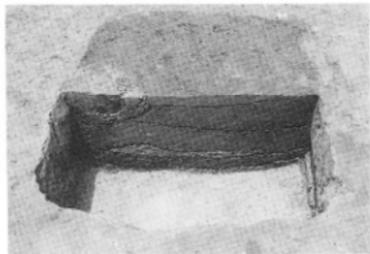
断面

写真図版34 SK23~26土坑



SK27土坑

平面

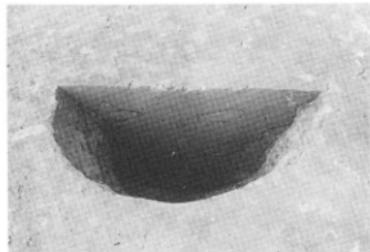


断面

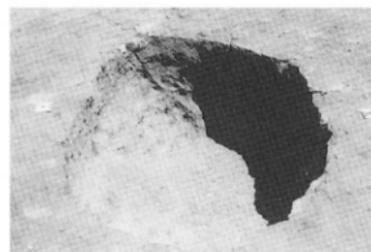


SK28土坑

平面

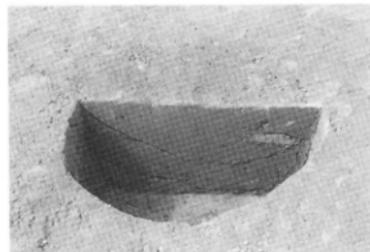


断面



SK29土坑

平面

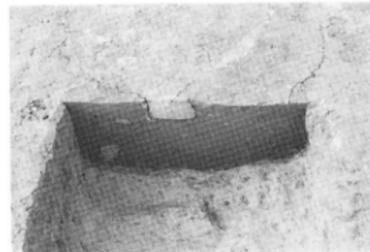


断面



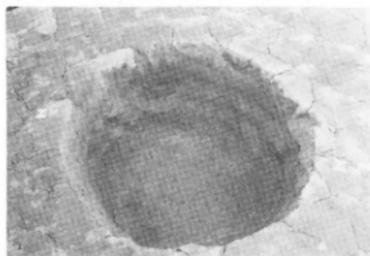
SK30土坑

平面



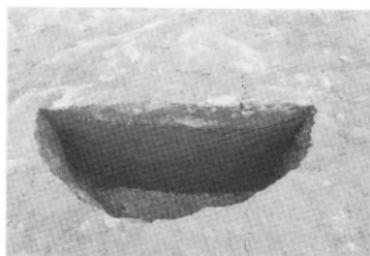
断面

写真図版35 SK27~30土坑

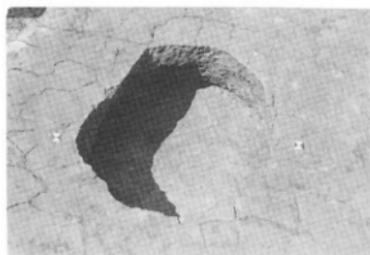


SK31土坑

平面



断面

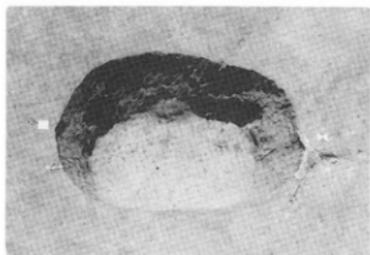


SK32土坑

平面

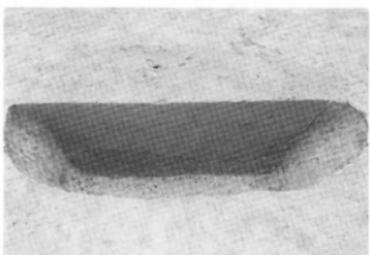


断面

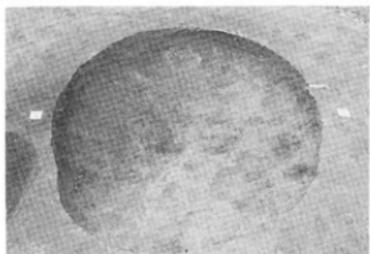


SK33土坑

平面

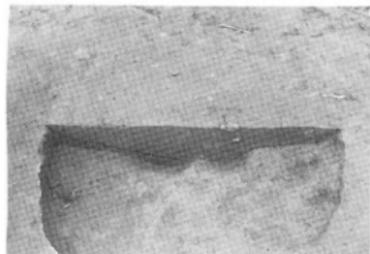


断面



SK34土坑

平面

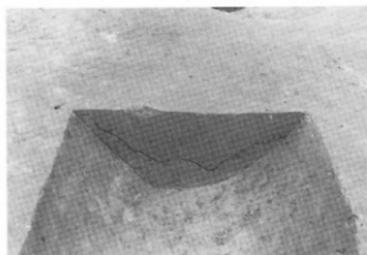


断面

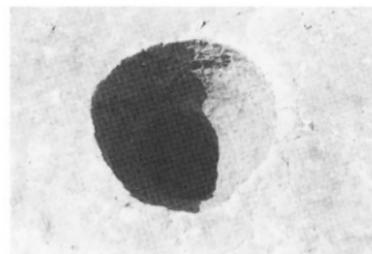


SK35土坑

平面

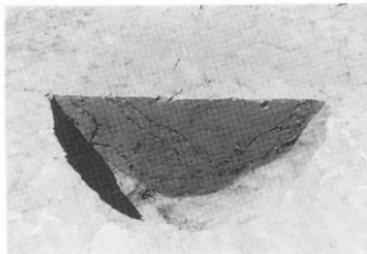


断面

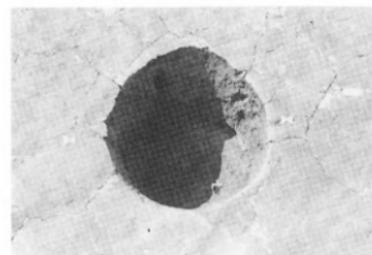


SK36土坑

平面

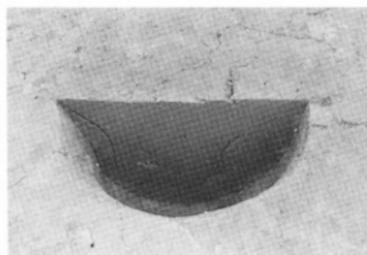


断面

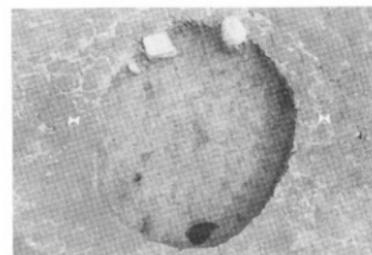


SK37土坑

平面

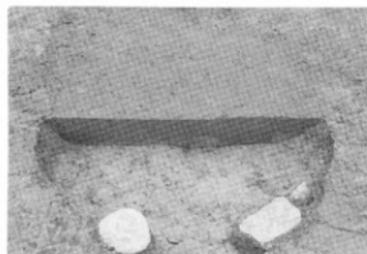


断面



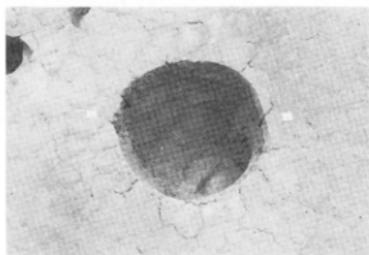
SK38土坑

平面



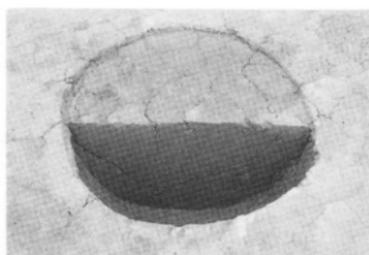
断面

写真図版37 SK35~38土坑

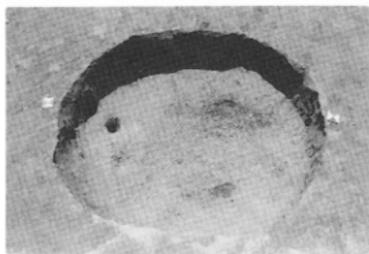


SK39土坑

平面



断面



SK40土坑

平面



断面



SK41土坑

平面

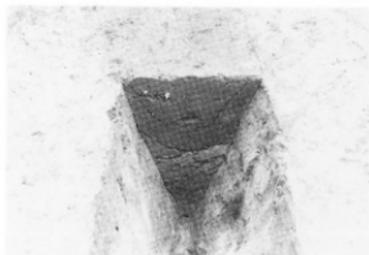


断面



SK42土坑

平面



断面

写真図版38 SK39~42土坑



SK43土坑

平面



断面



SK44土坑

平面

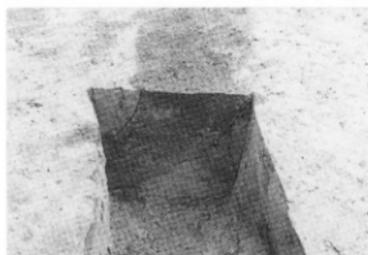


断面



SK45土坑

平面

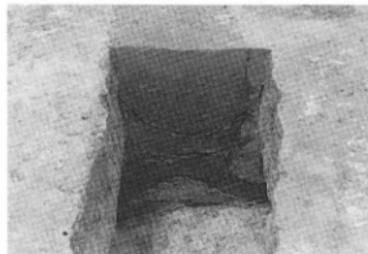


断面



SK46土坑

平面



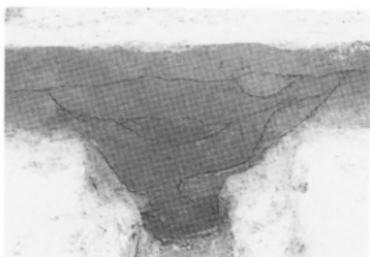
断面

写真図版39 SK43~46土坑



SK47土坑

平面



断面



SK48土坑

平面



断面



SK49土坑

平面



断面



SK50土坑

平面



断面



SK51土坑

平面

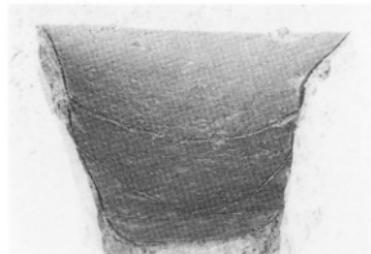


断面



SK52土坑

平面



断面



SK53土坑

平面

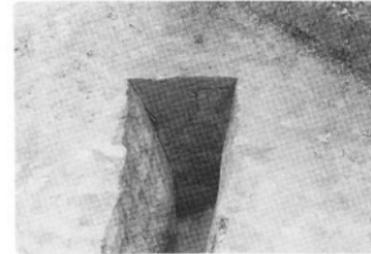


作業風景



SK54土坑

平面



断面

写真図版41 SK51～54土坑



SK55土坑

平面

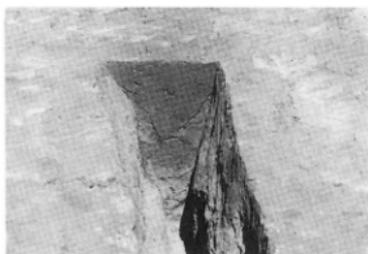


断面



SK56土坑

平面



断面



SK57土坑

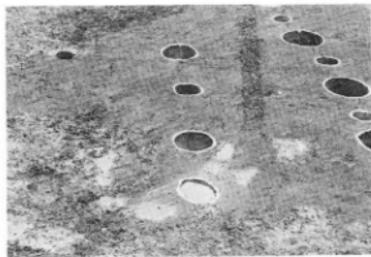
平面



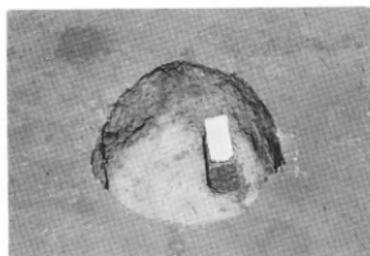
断面



Ⅱ地区小柱穴群（南から）



ⅢC区柱穴列（西から）



PP20砥石出土状況



作業風景



段丘崖ベルト①（北東から）



段丘崖ベルト②（北東から）



現地説明会風景①

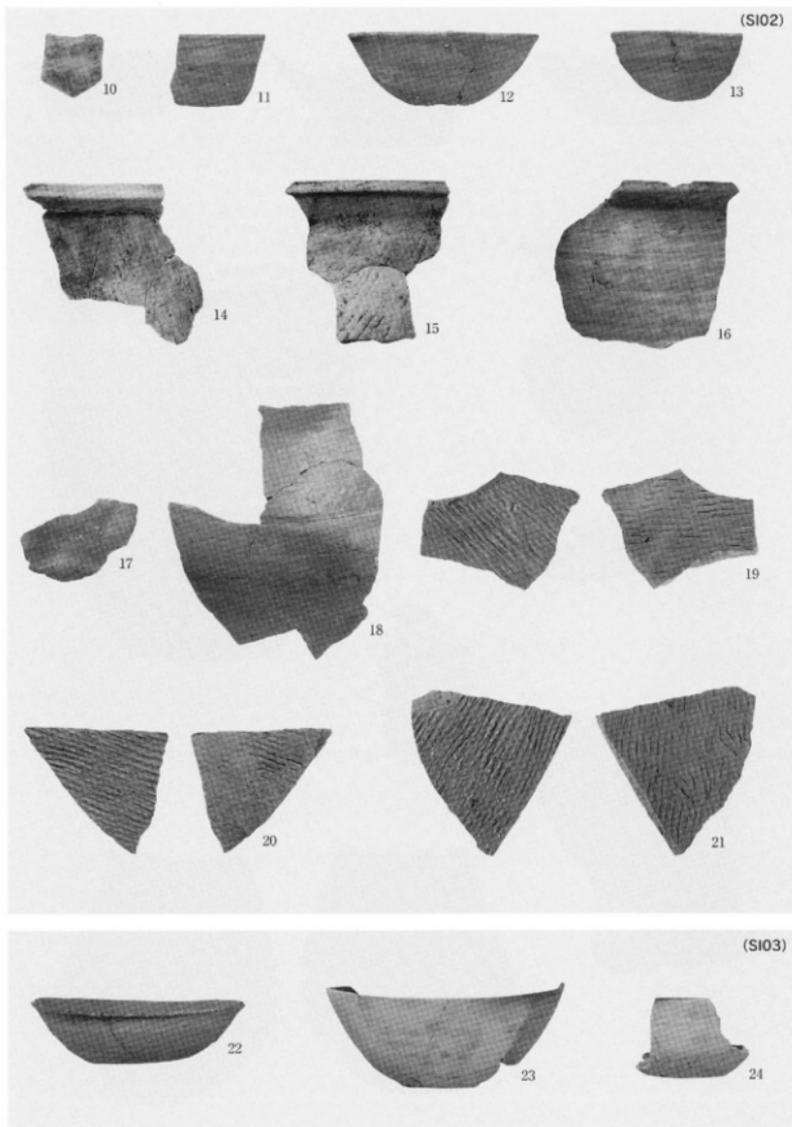


現地説明会風景②

写真図版43 ⅢC区柱穴状小ピット群・段丘崖トレンチ断面

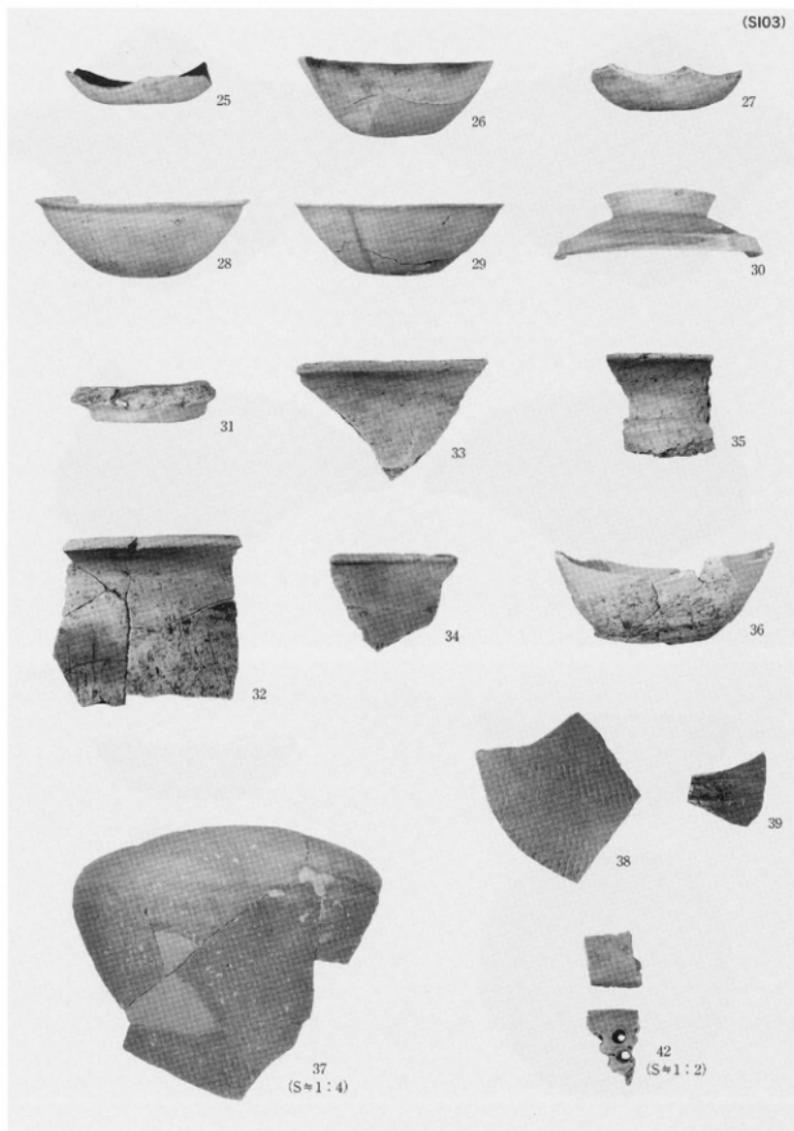


写真図版44 SI01 竪穴住居跡出土遺物



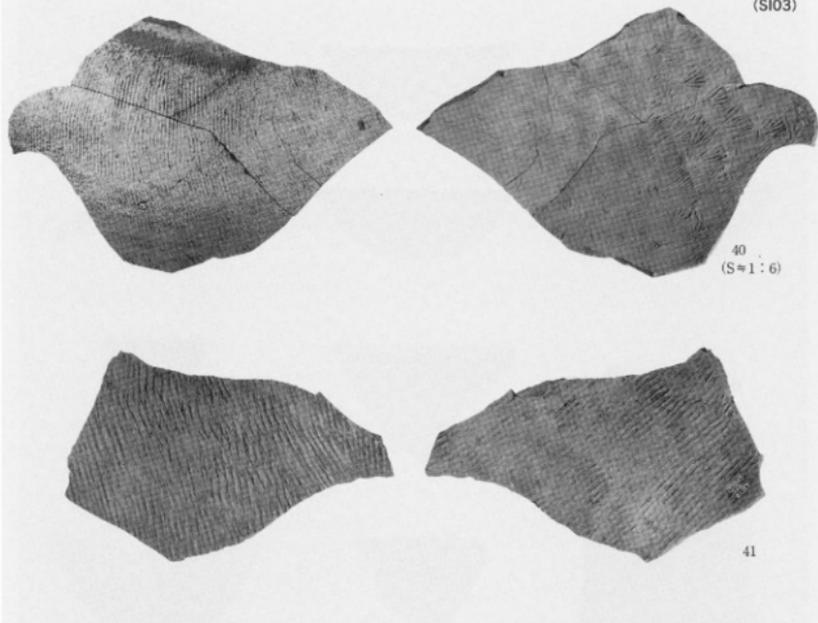
写真図版45 SI02・SI03竪穴住居跡出土遺物(1)

(SI03)

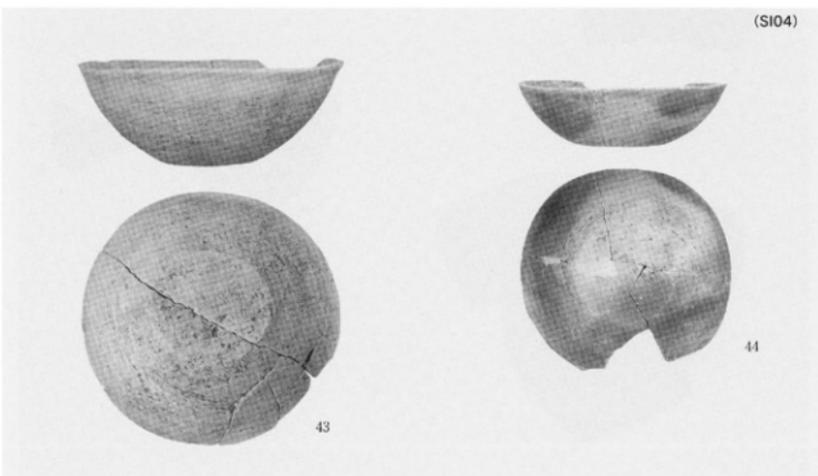


写真図版46 SI03竪穴住居跡出土遺物(2)

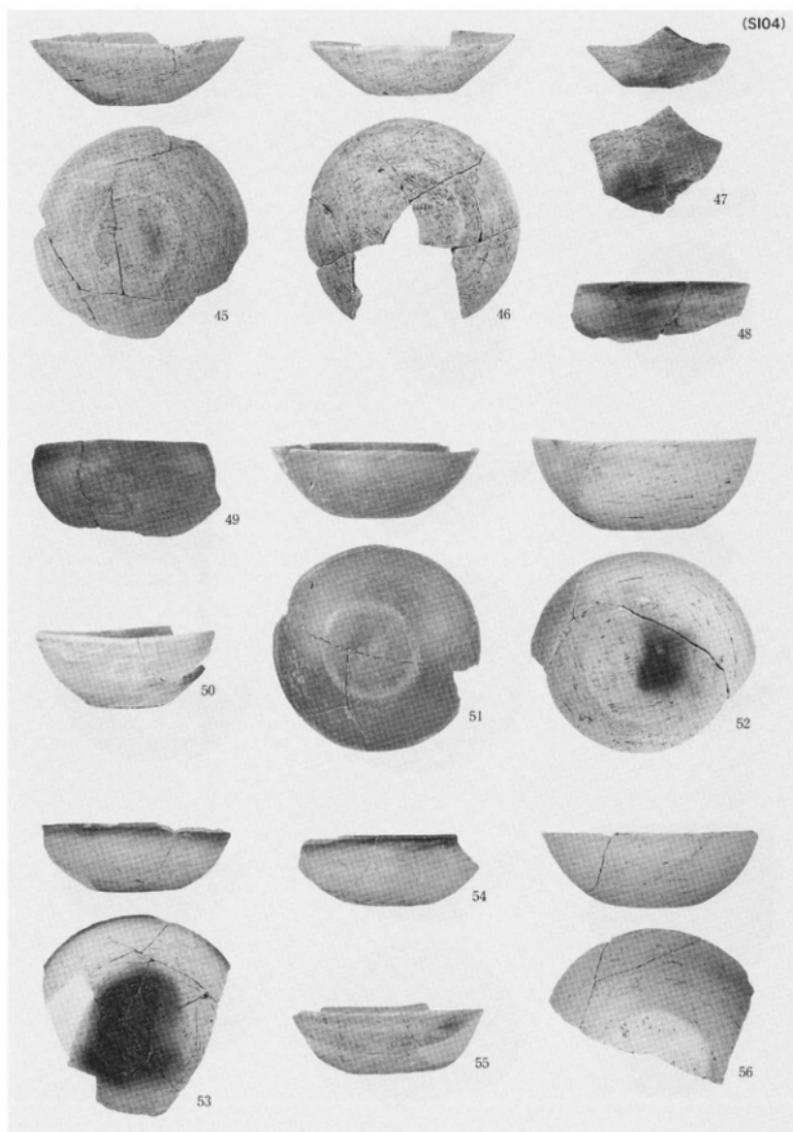
(SI03)



(SI04)

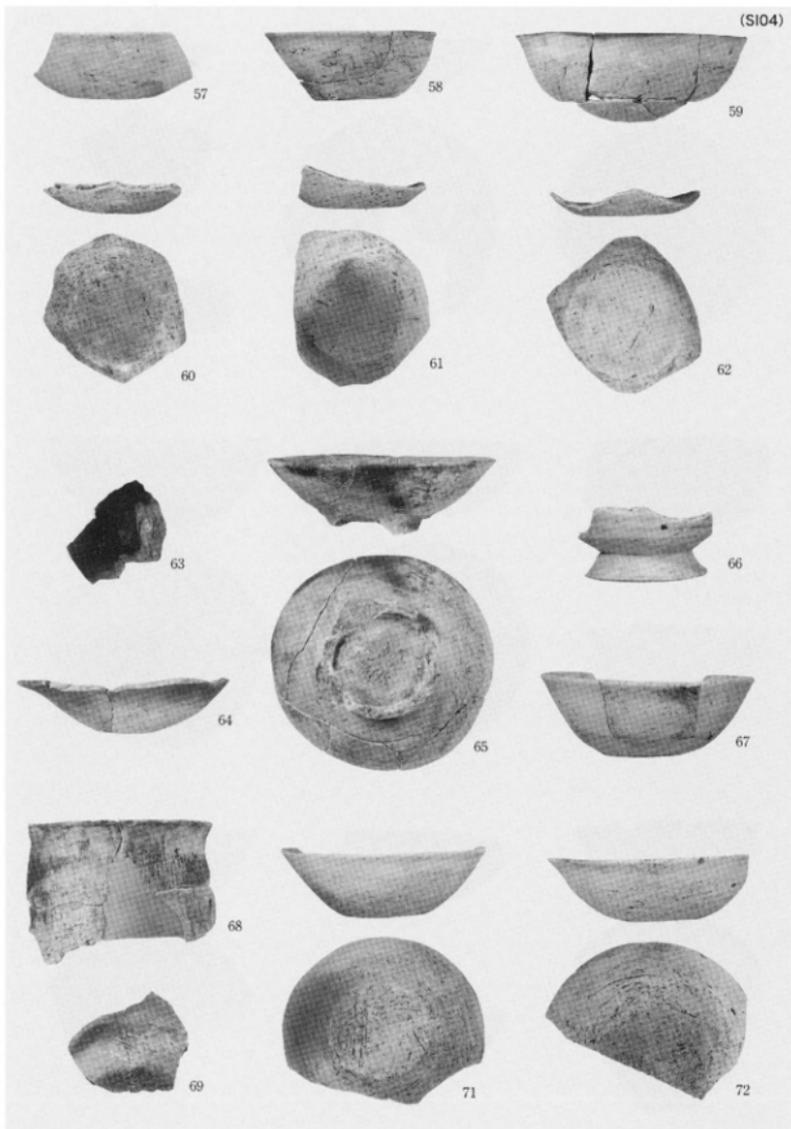


写真図版47 SI03・SI04竪穴住居跡出土遺物(1)



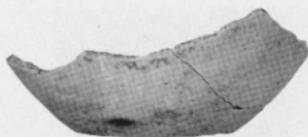
写真図版48 S104竪穴住居跡出土遺物(2)

(SI04)

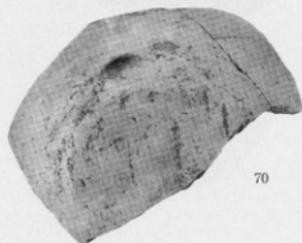


写真図版49 SI04竪穴住居跡出土遺物(3)

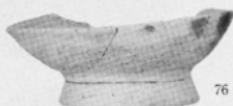
(SI04)



70



74



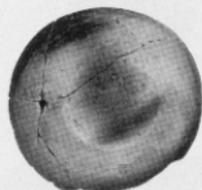
76



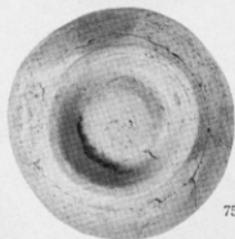
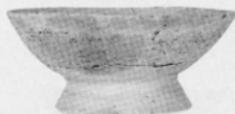
77



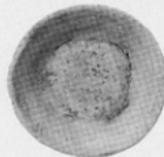
79



73



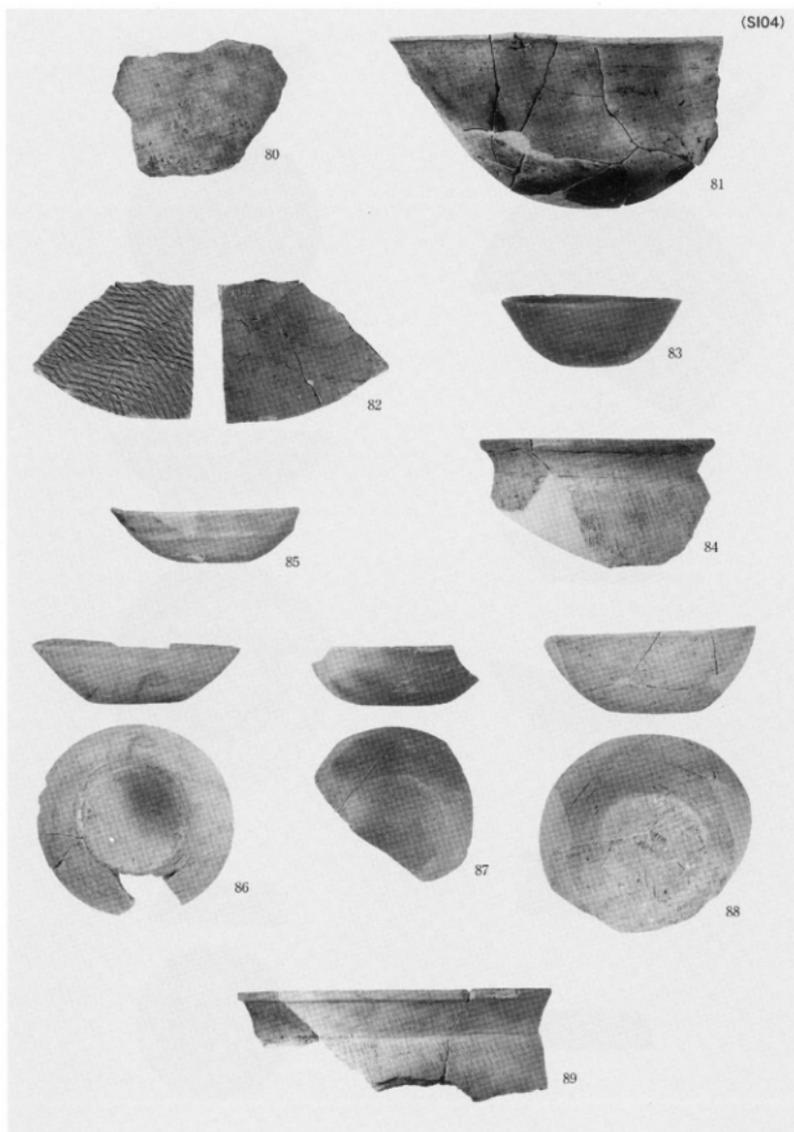
75



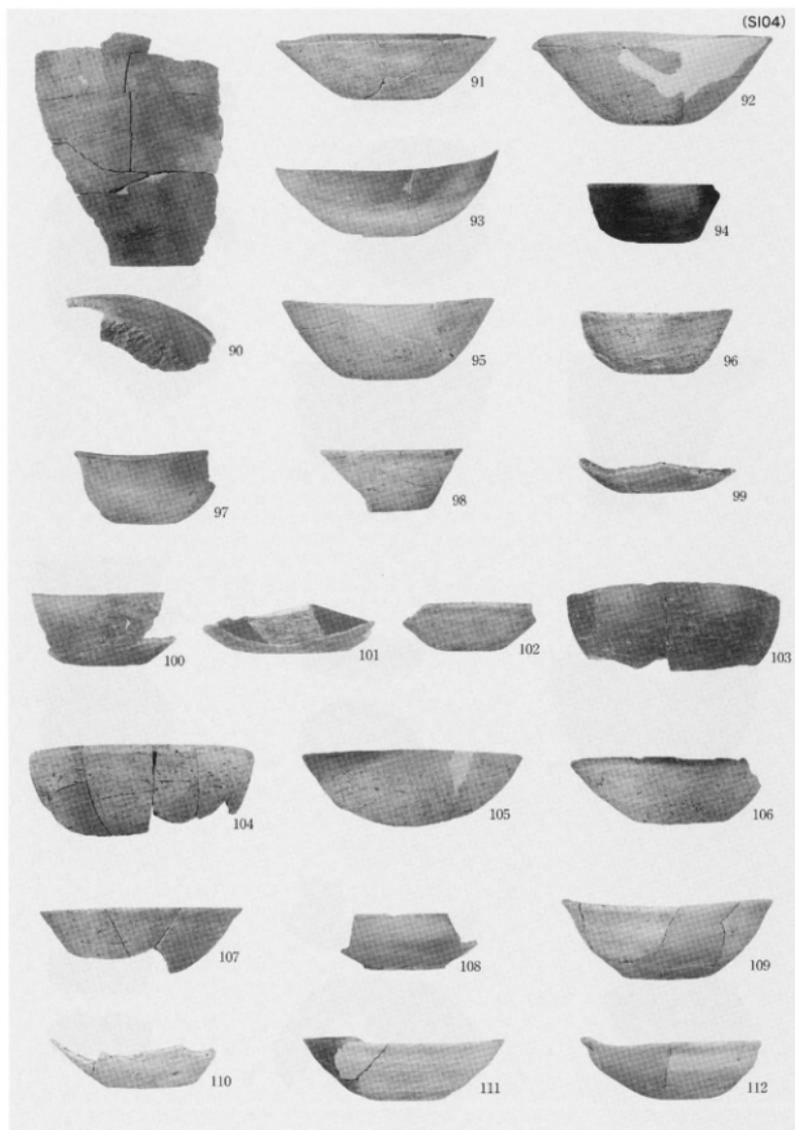
78

写真図版50 SI04竪穴住居跡出土遺物(4)

(S104)



写真図版51 S104竪穴住居跡出土遺物 (5)



写真図版52 SI04竪穴住居跡出土遺物 (6)

(SI04)



113



114



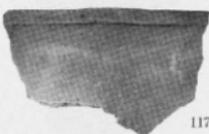
118



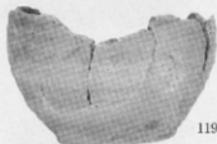
115



116



117



119



121



120



122



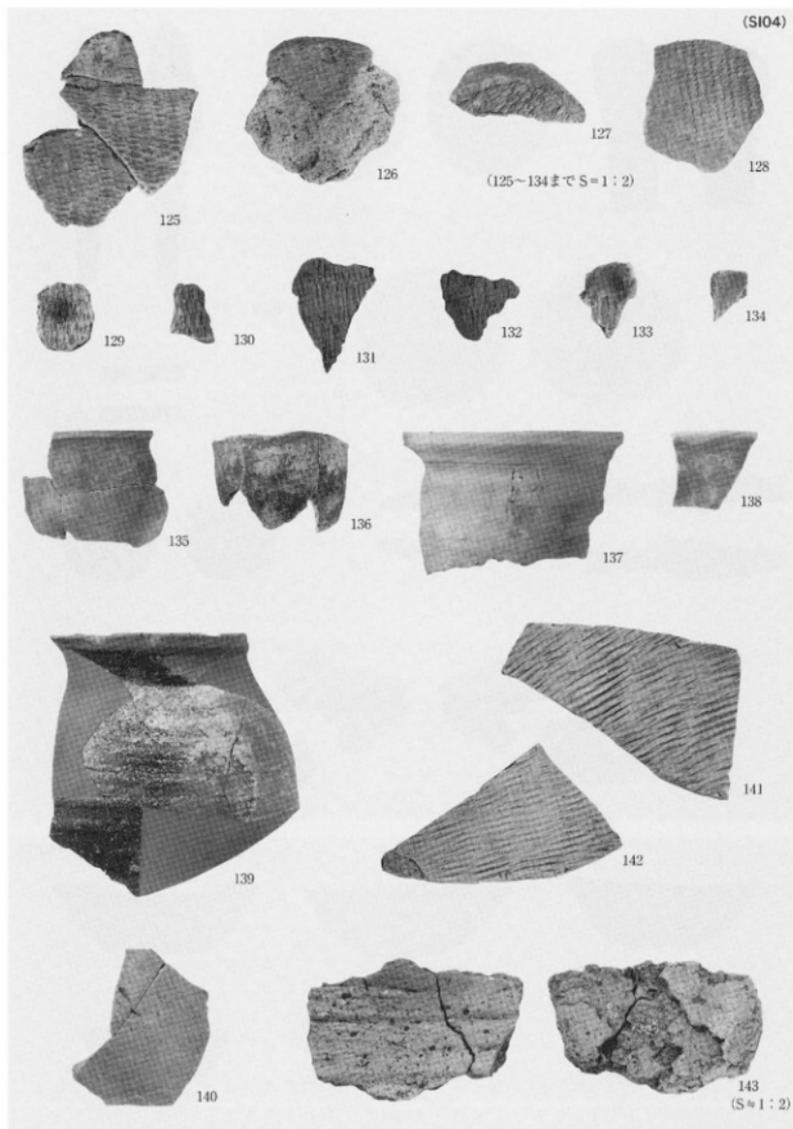
123



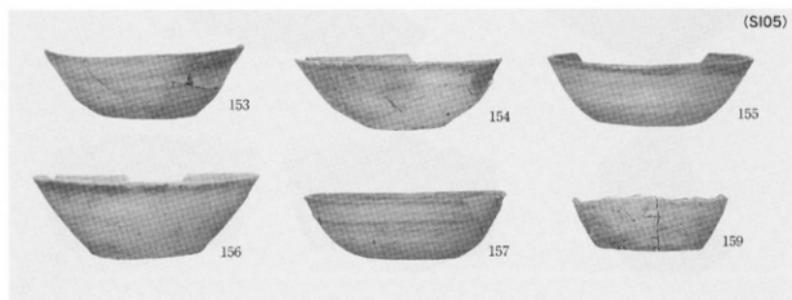
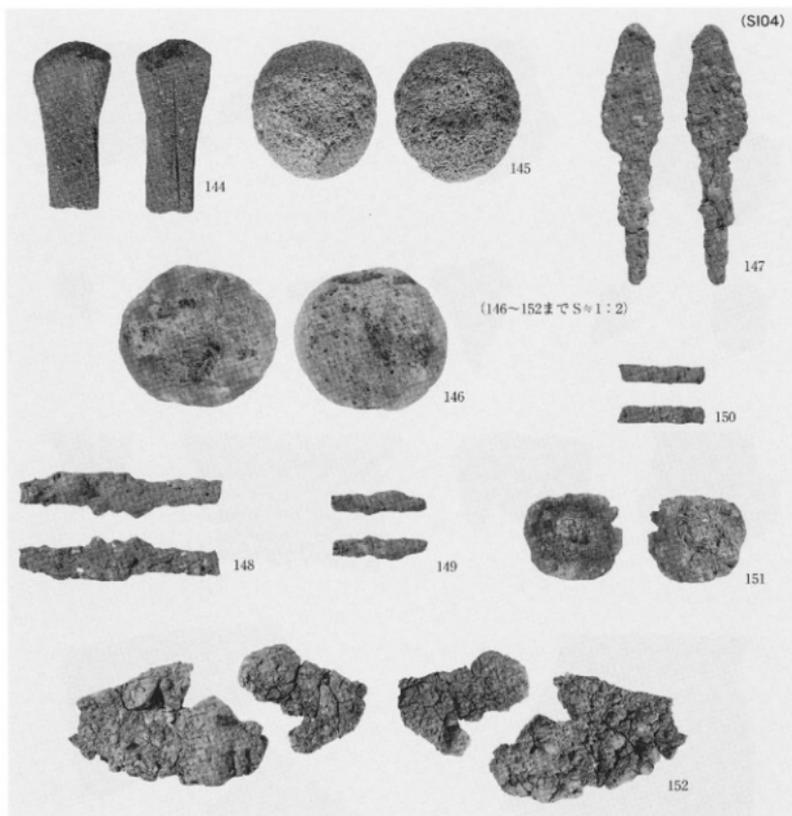
124



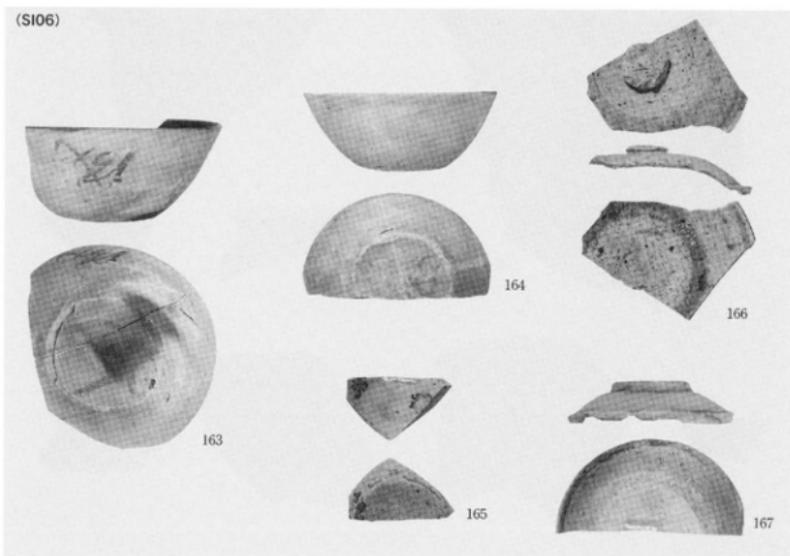
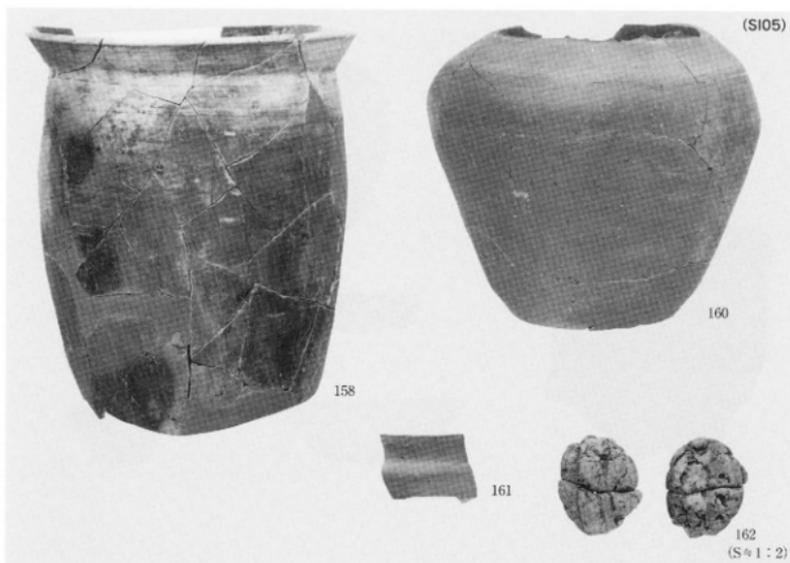
写真図版53 SI04竪穴住居跡出土遺物(7)



写真図版54 SI04竪穴住居跡出土遺物(8)

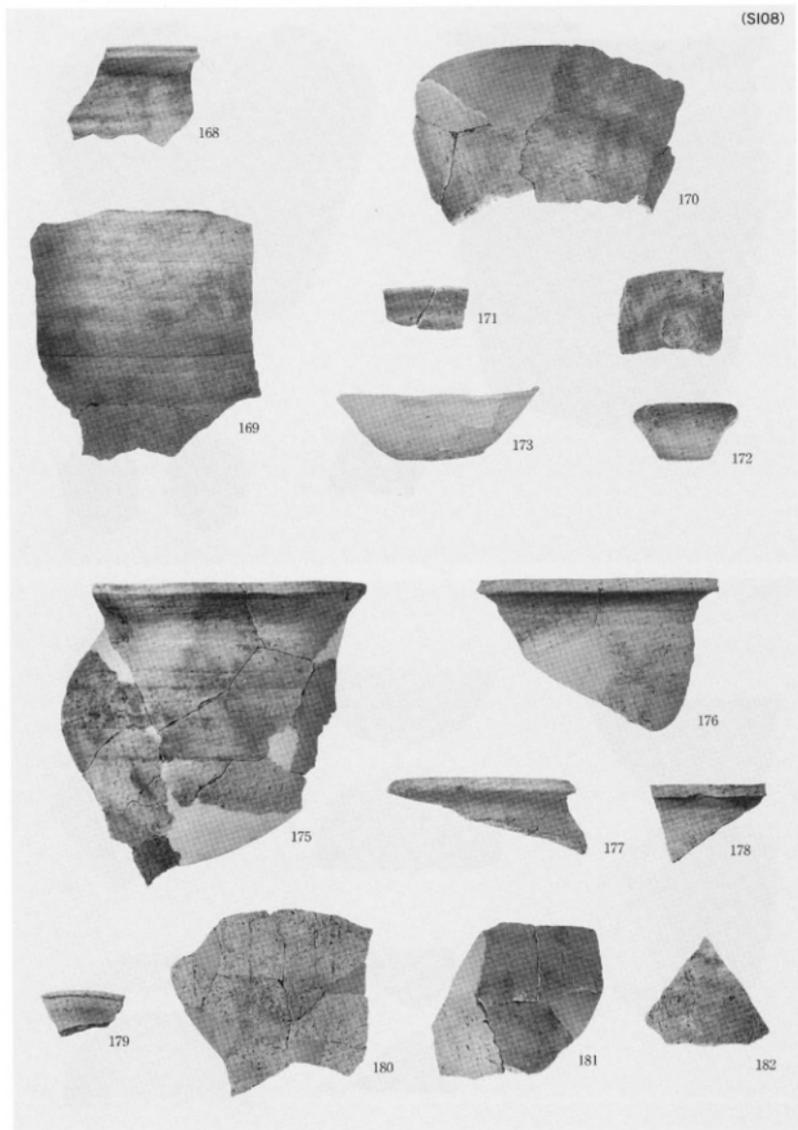


写真図版55 S104・05竪穴住居跡出土遺物

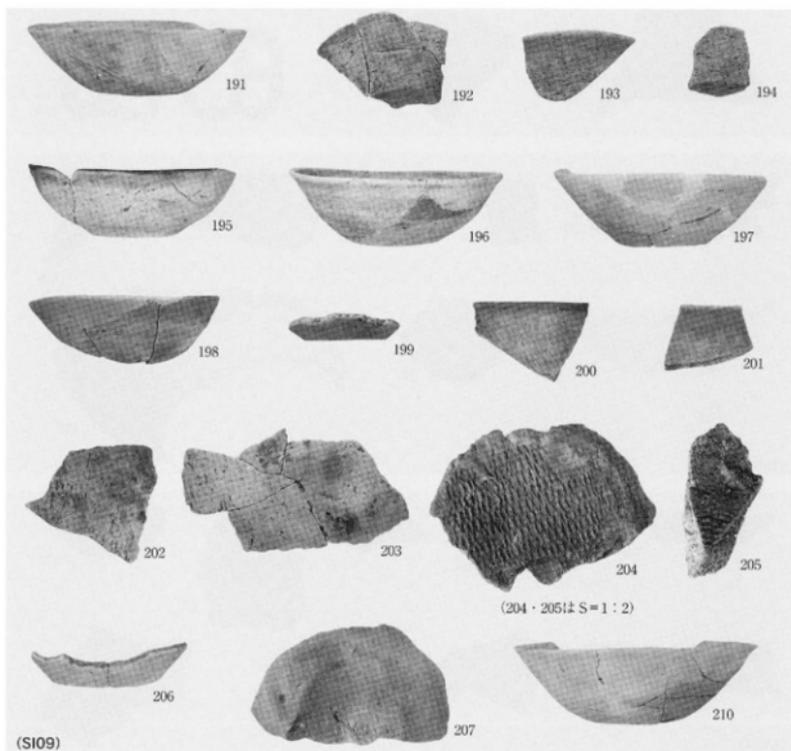
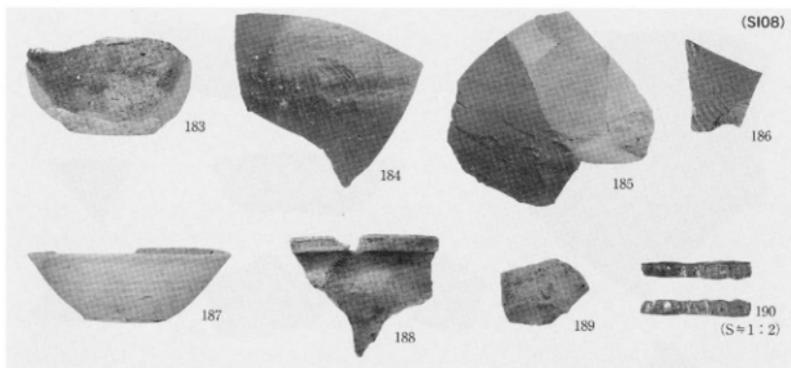


写真図版56 S105・06竪穴住居跡出土遺物

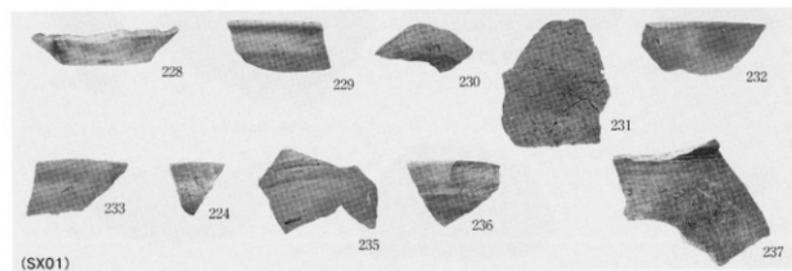
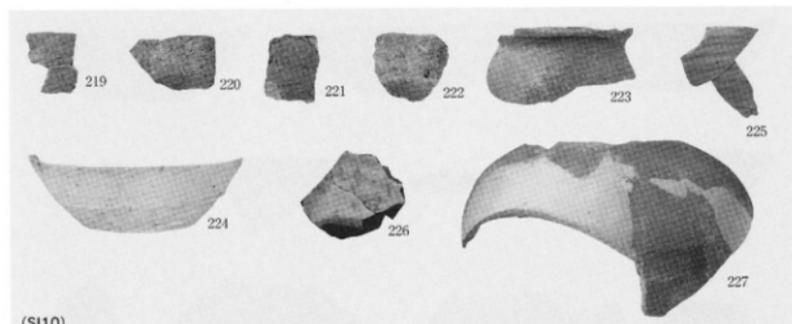
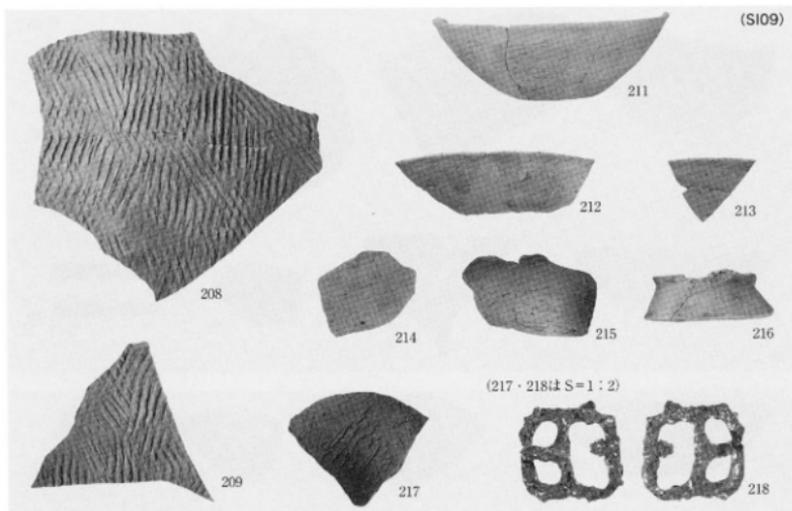
(SI08)



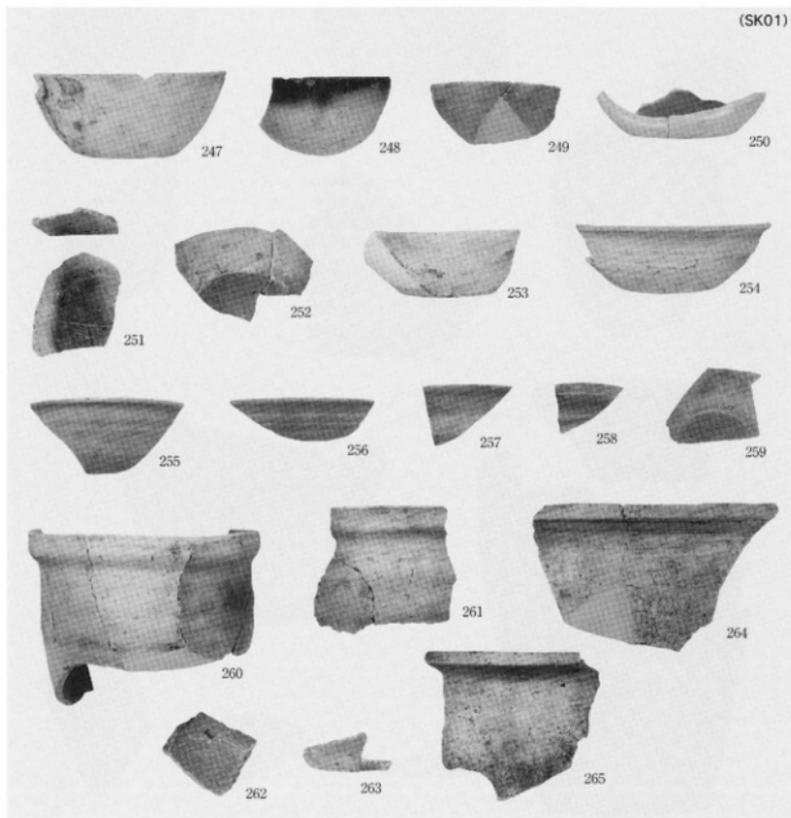
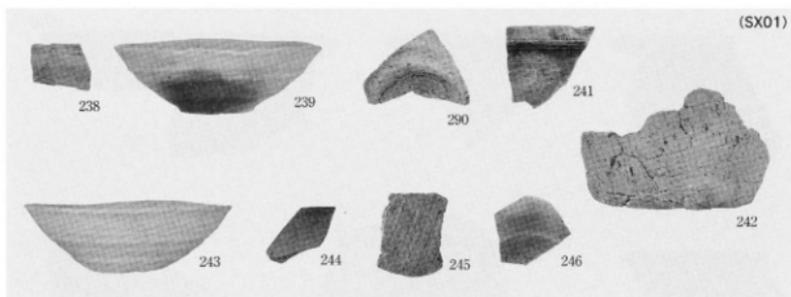
写真図版57 SI08竪穴住居跡出土遺物



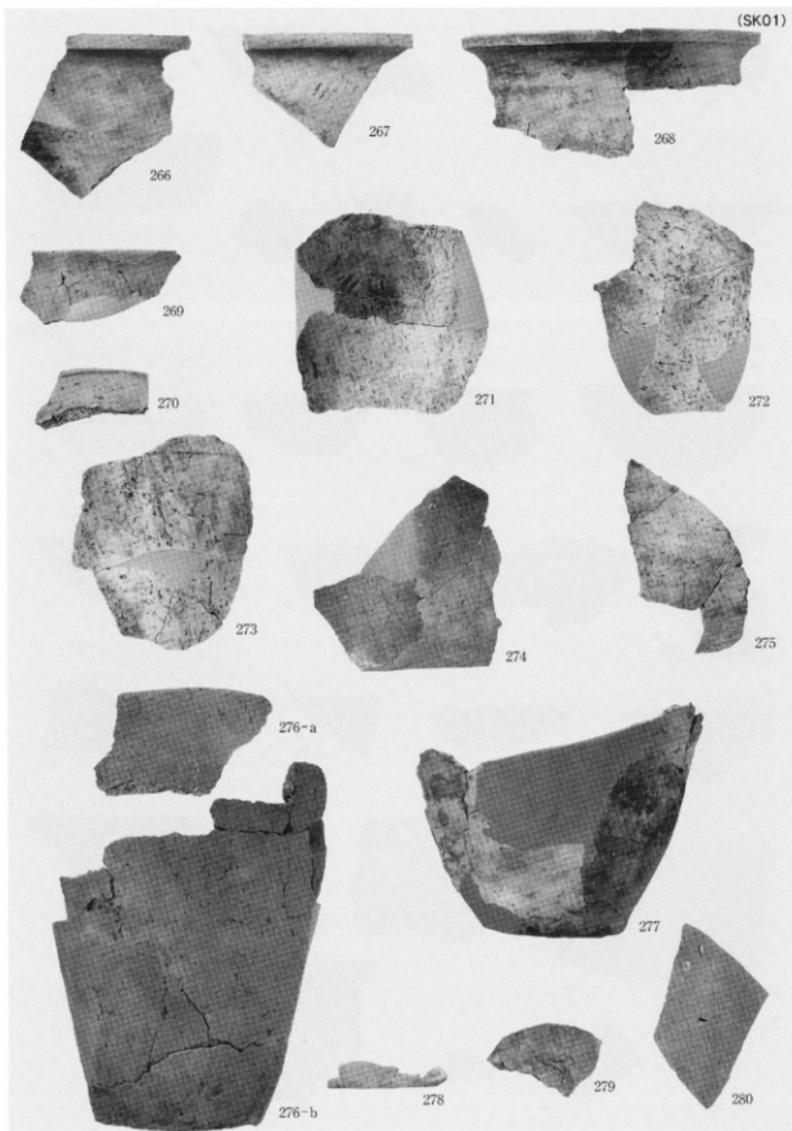
写真図版58 SI08・09竪穴住居跡出土遺物



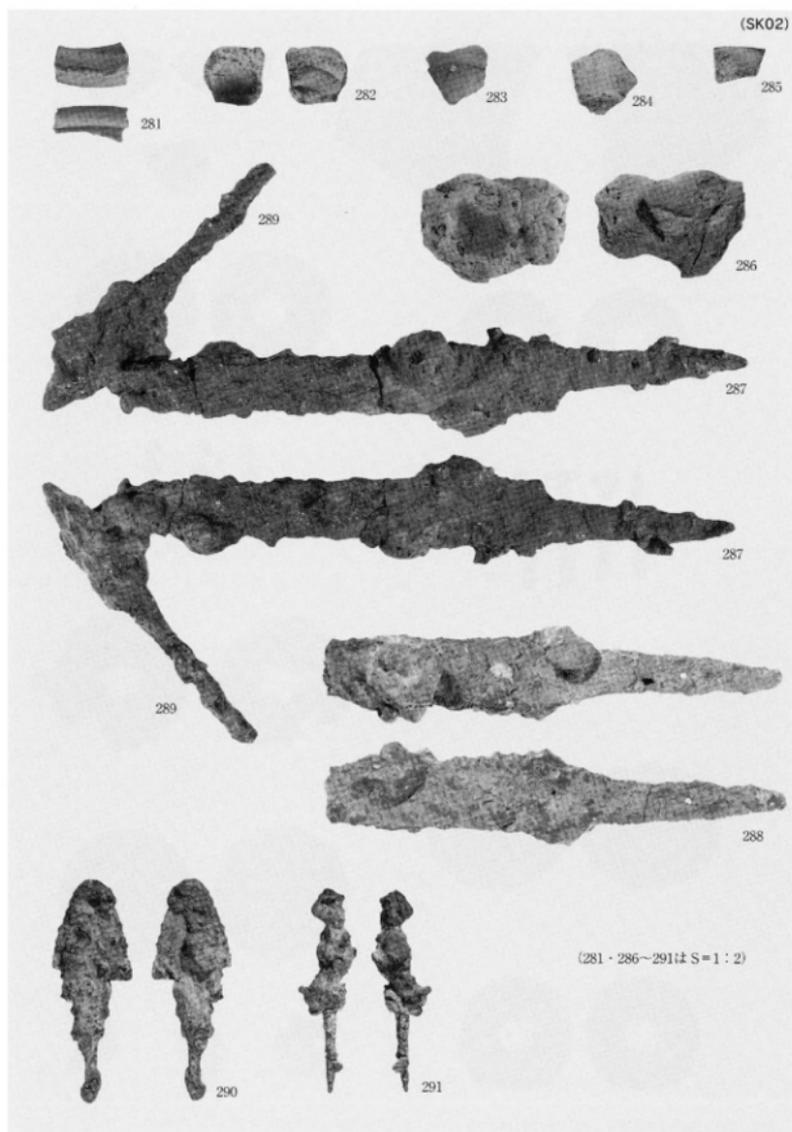
写真図版59 SI09～10竪穴住居跡・SX01竪穴住居跡状遺構出土遺物



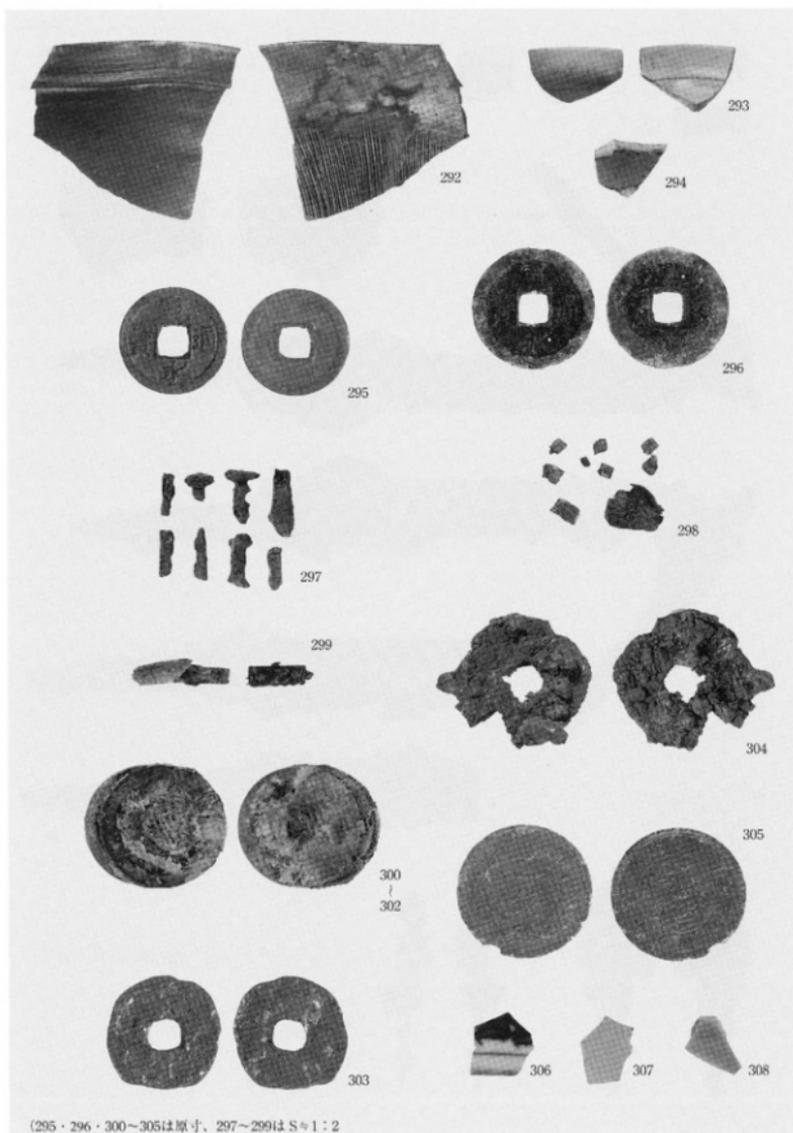
写真図版60 SX01竪穴住居状遺構・SK01土坑出土遺物(1)



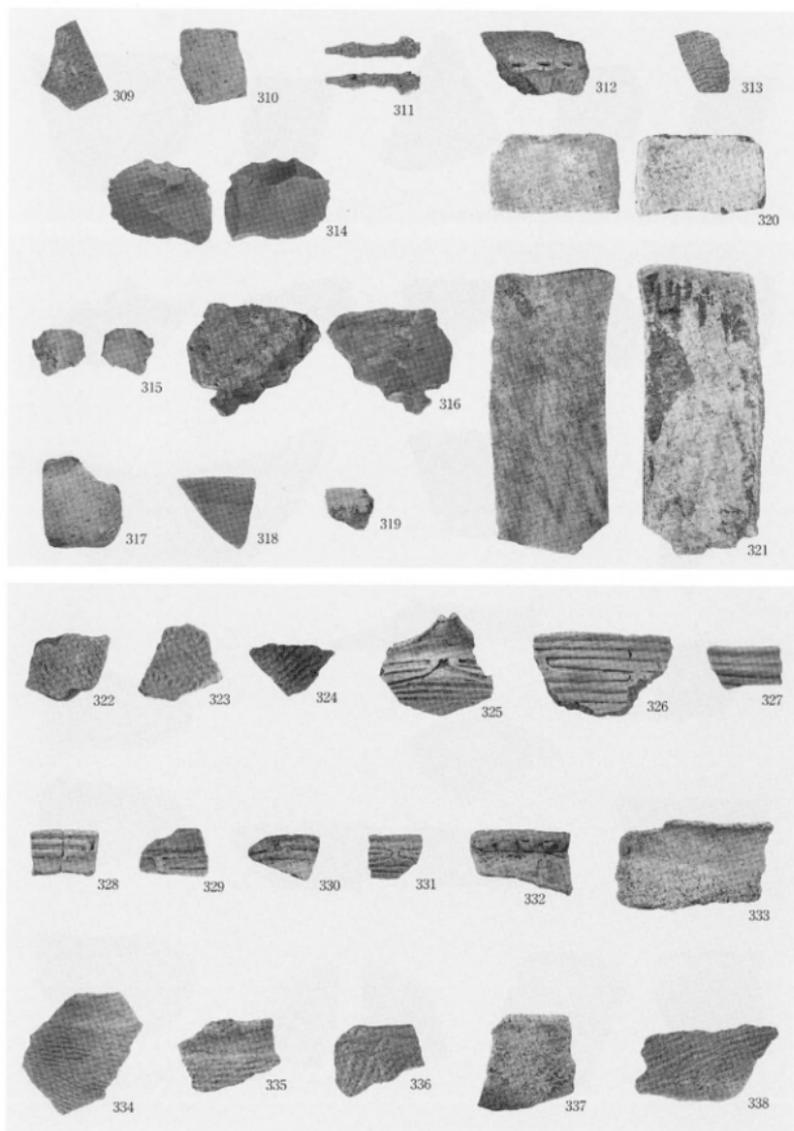
写真図版61 SK01土坑出土遺物(2)



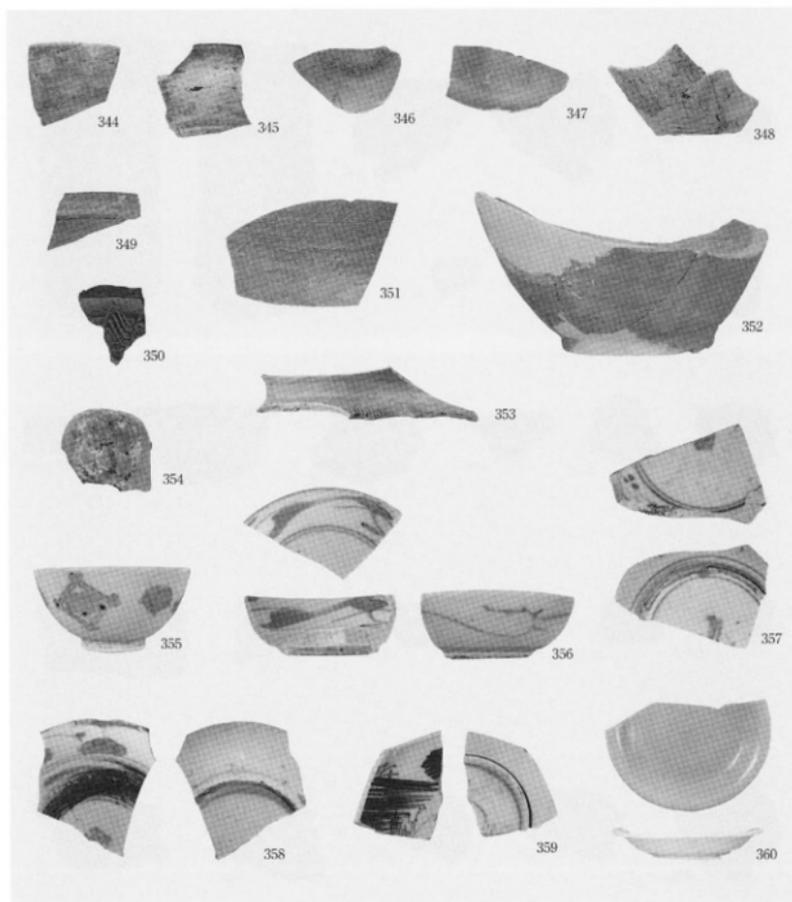
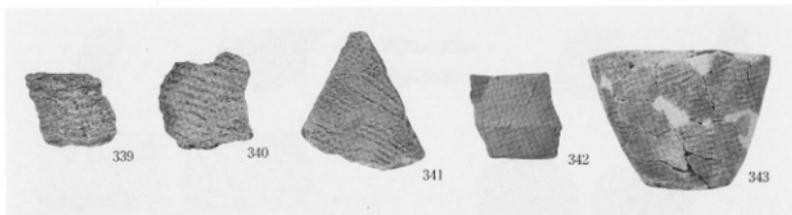
写真図版62 SK02土坑出土遺物



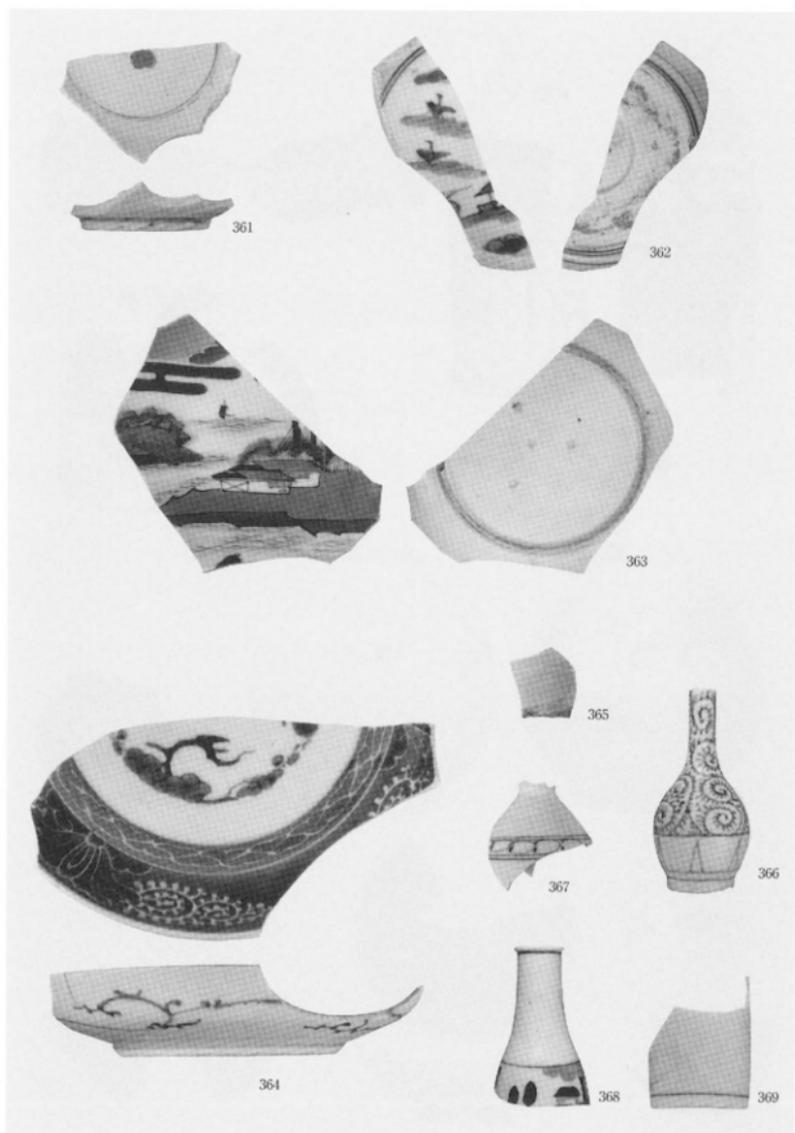
写真図版63 SB05掘立柱建物跡、SZ01～02墓坑、SK27～30土坑出土遺物



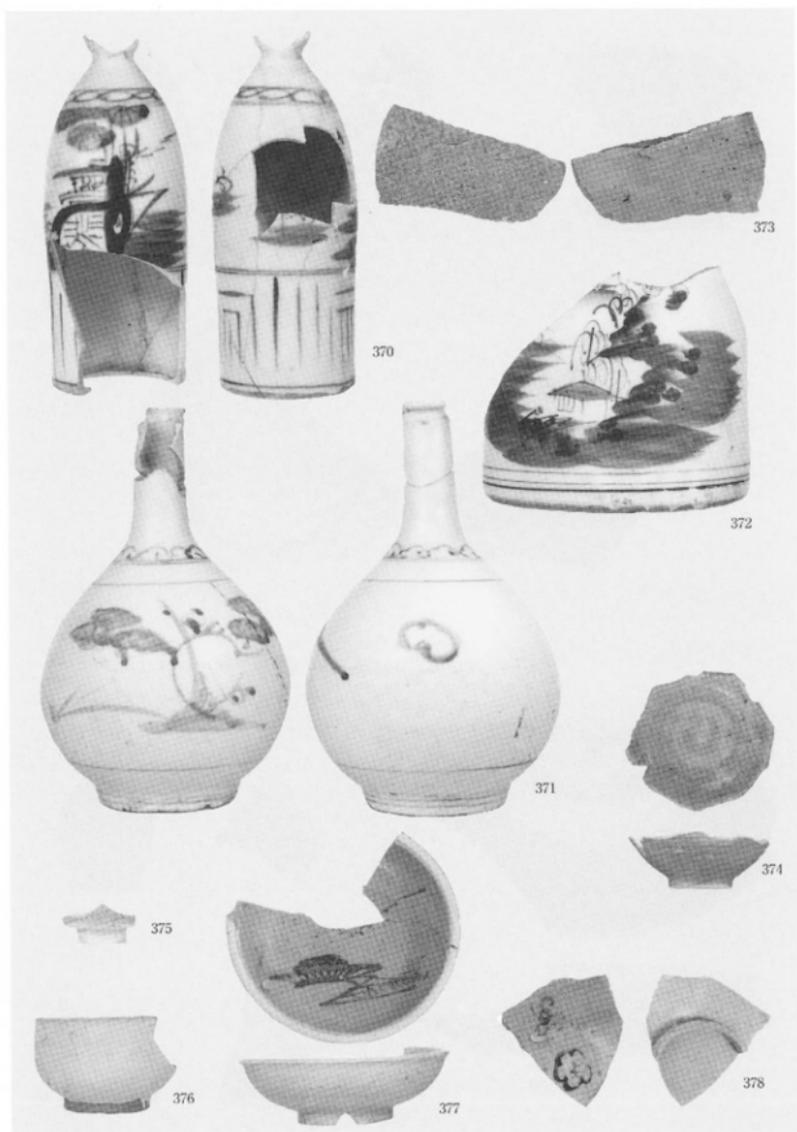
写真図版64 SK31~38土坑、PP20柱穴状小ビット出土遺物、遺構外出土遺物（1）



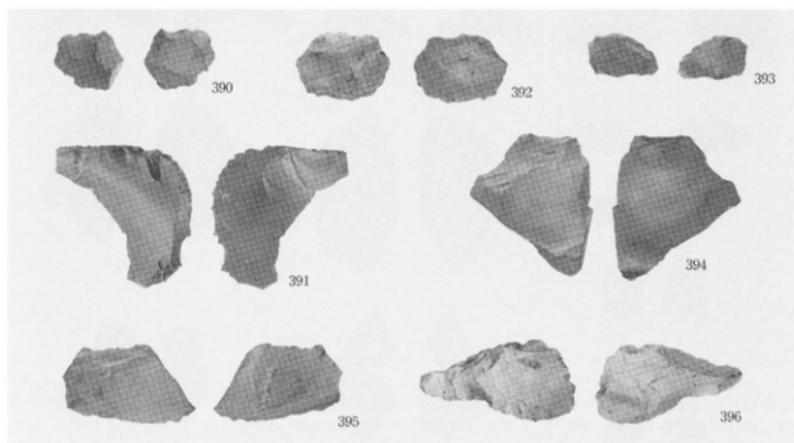
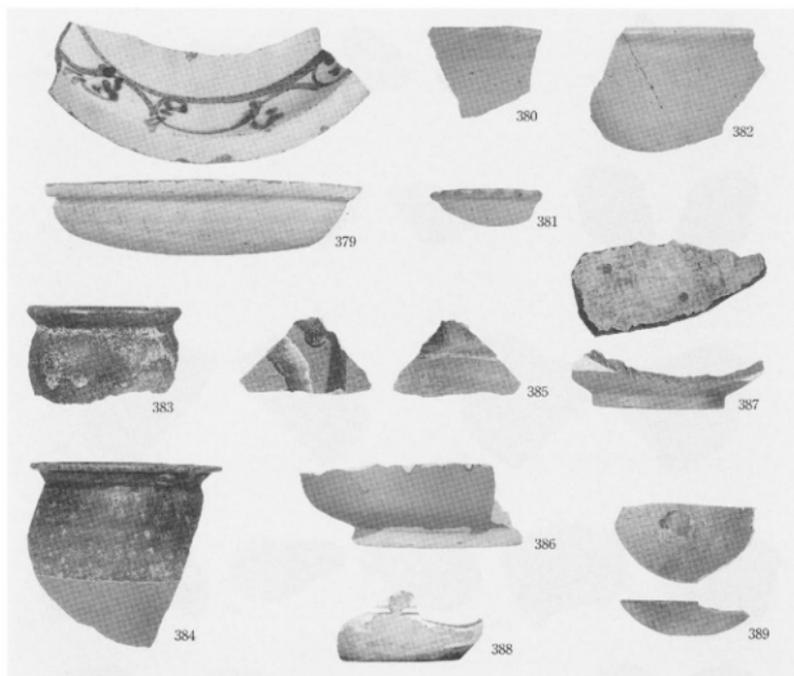
写真図版65 遺構外出土遺物(2)



写真图版66 遗構外出土遺物(3)



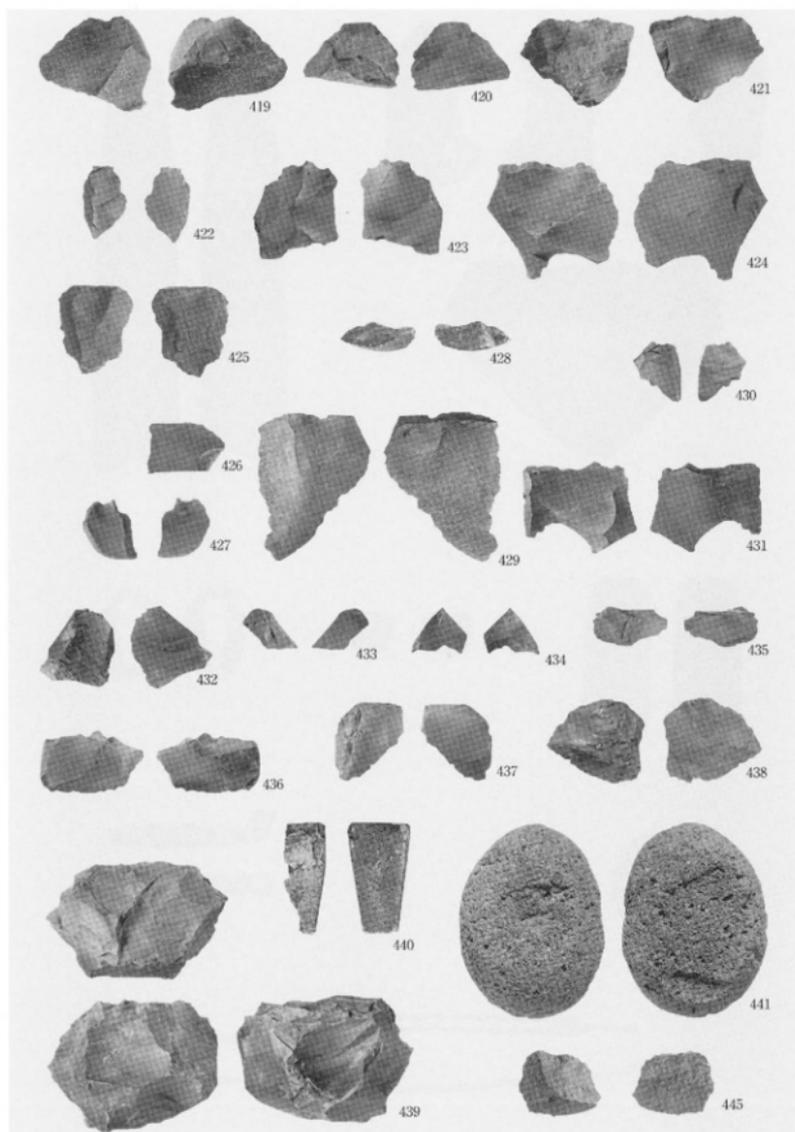
写真図版67 遼州外出土遺物(4)



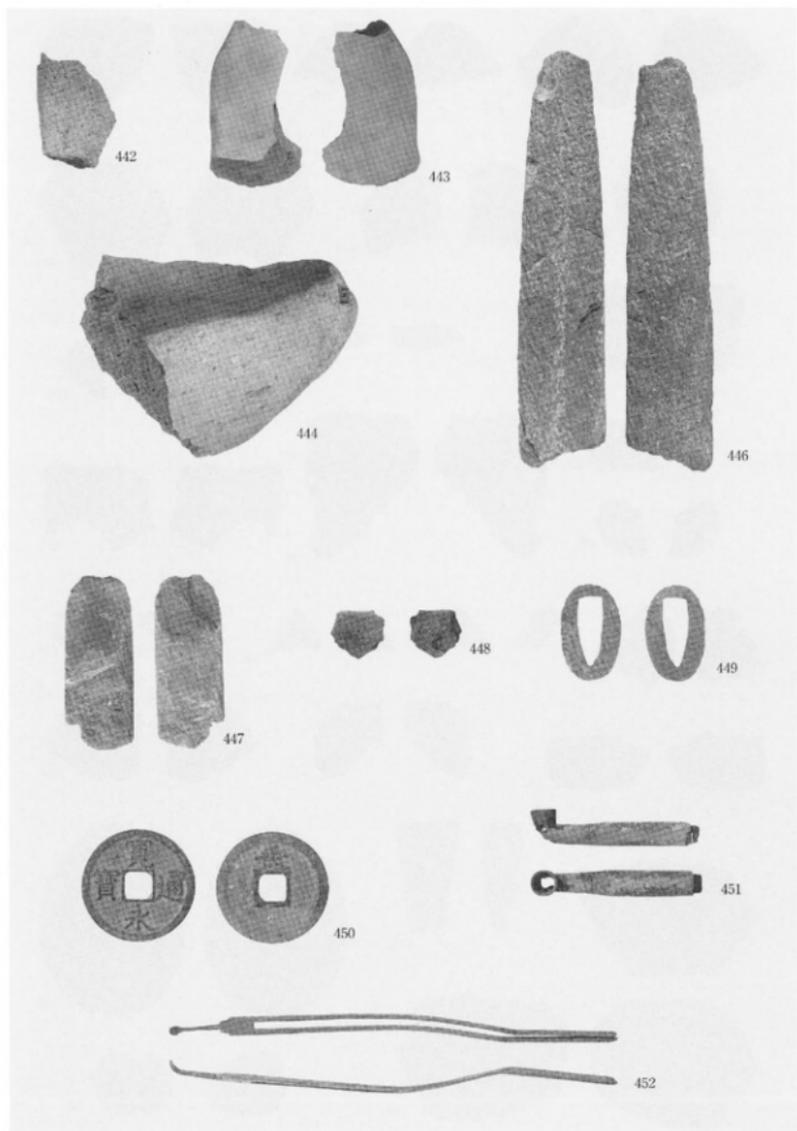
写真図版68 遺構外出土遺物 (5)



写真図版69 遺構外出土遺物（6）



写真図版70 遺構外出土遺物 (7)



写真図版71 遺構外出土遺物(8)

# 下 通 遺 跡

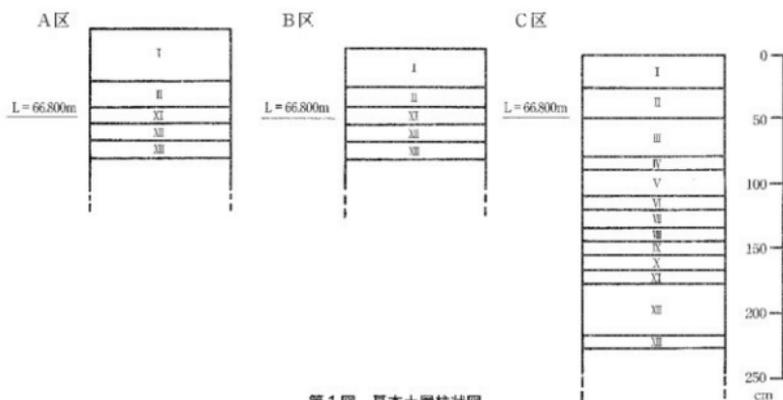


### Ⅲ 下 通 遺 跡

#### 1 基 本 層 序

本遺跡の土層はⅠ～Ⅻ層に区分される。

- Ⅰ層 10YR 4/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性・しまり共弱 層厚30～60cm (現水田耕作土)
- Ⅱ層 10YR 3/2 黒褐色砂質シルト 粘性・しまり共弱 炭化物粒1%混入 層厚25～30cm (旧水田耕作土、床土)
- Ⅲ層 10YR 3/4 暗褐色砂質シルト 粘性・しまり共弱 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂10%混入 層厚25～30cm
- Ⅳ層 2.5Y 6/4 にぶい黄砂と2.5Y 3/1 黒褐色砂の互層 (ラミナ) 粘性なし しまり弱 層厚10cm 水成堆積
- Ⅴ層 2.5Y 5/4 黄褐色砂質シルト粘性・しまり共弱 層厚20cm <第1検出面>  
(C区SX01・02・03畑跡畝耕作土相当)
- Ⅵ層 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性・しまり共弱 層厚10cm
- Ⅶ層 Ⅵ層と2.5Y 5/2 暗黄褐色砂質シルトの混合土 粘性・しまり共弱 酸化鉄顕著 層厚10～12cm
- Ⅷ層 2.5Y 5/3 黄褐色砂 粘性なし しまり弱 層厚10cm <第2検出面>  
(C区SX04畑跡畝耕作土相当)
- Ⅸ層 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂質シルト 粘性・しまり共弱 局所的に2.5Y 3/1 黒褐色砂のラミナが認められる。層厚10cm 水成堆積<第3検出面> (C区SX09畑跡畝耕作土)
- Ⅹ層 2.5Y 3/1 黒褐色砂と10YR 5/3 にぶい黄褐色砂質シルトの互層 (ラミナ) 粘性殆どなし しまり弱 層厚10cm 水成堆積
- Ⅺ層 10YR 3/4 暗褐色シルト 粘性・しまり共中 炭化物粒1%以下 層厚10～50cm <第4検出面> (A区SX05、B区SX07・08、C区SX06・10・11畑跡畝耕作土相当)
- Ⅻ層 10YR 4/4 褐色シルト 粘性・しまり共中 層厚10～35cm
- Ⅼ層 10YR/5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性強・しまり中 層厚10～12cm



第1図 基本土層柱状図

## 2 検出された遺構と遺物

### SX01烟跡

#### 遺 構 (第2・6・8図、写真図版2)

[位置・検出状況] C区西側、ⅥA3cグリッドに位置する。検出面は黄褐色砂質シルト(V層)上位第1検出面で、北西-南東方向に連続する筋状プランとして確認した。

[面積・埋土] 検出面積は約103.9m<sup>2</sup>を測る。V層黄褐色砂質シルトを畑耕作土とする畝間に交互に堆積した鈍い黄~黒褐色砂が筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。畝の長軸方向は(N-18°-W)で、畝幅76.3cm、畝の高さは13.0cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[時期] 遺物は出土していない。時期はAMS放射性炭素年代測定法(以下、AMS年代測定法)による結果から判断して近世以降であると考えられる。

### SX02烟跡

#### 遺 構 (第2・6図、写真図版2)

[位置・検出状況] C区西側、ⅥA1eグリッドに位置する。検出面は黄褐色砂質シルト(V層)上位第1検出面で、南北方向に連続する筋状プランとして確認した。

[面積・埋土] 検出面積は約17.9m<sup>2</sup>を測る。V層黄褐色砂質シルトを畑耕作土とする畝間に堆積した鈍い黄砂が筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。畝の長軸方向は(N-4°-W)で、畝幅は127.7cm、畝の高さは残存値で8.0cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[時期] 遺物は出土していない。時期はAMS年代測定法による結果から判断して、近世以降であると考えられる。

### SX03烟跡

#### 遺 構 (第2・6図、写真図版2)

[位置・検出状況] C区中央部、ⅥA1dグリッドに位置する。検出面は黄褐色砂質シルト(V層)上位第1検出面で、東西方向に連続する筋状プランとして確認した。

[面積・埋土] 検出面積は約33.8m<sup>2</sup>を測る。V層黄褐色砂質シルトを畑耕作土とする畝間に堆積した灰黄褐色砂が筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。畝の長軸方向は(N-79°-E)で、畝幅は65.0cm、畝の高さは残存値で8.0cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[時期] 遺物は出土していない。時期はAMS年代測定法による結果から判断して、近世以降であると考えられる。

### SX04烟跡

#### 遺 構 (第2・6・9図、写真図版3)

[位置・検出状況] C区中央部、ⅥA4oグリッドに位置する。検出面は黄褐色砂質シルト(Ⅷ層)上位第2検出面で、南北方向に連続する筋状プランとして確認した。

[面積・埋土] 検出面積は約264.8m<sup>2</sup>を測る。Ⅷ層黄褐色砂質土を畑耕作土とする畝間に堆積した鈍い黄砂と暗灰黄色砂との混合土が筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。畝の長軸方向は(N-49°-E)で、畝幅は72.5cm、畝の高さは10.0cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[時期] 遺物は出土していない。時期はAMS年代測定法による結果から判断して、近世以降であると考えられる。

#### SX05烟跡

遺 構 (第3・7図、写真図版3)

[位置・検出状況] A区南東側、ⅦA6wグリッドに位置する。検出面は鈍い黄褐色砂質シルト (XI層) 上第4検出面で、南北方向に連続する筋状プランとして確認した。

[面積・埋土] 検出面積は約77.2m<sup>2</sup>を測る。XI層鈍い黄褐色砂質シルトを畑耕作土とする畝間に堆積した鈍い黄褐色砂が筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。畝の長軸方向は(N-2°-W)で、畝幅は56.2cm、畝の高さは残存値で9.0cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[時期] 遺物は出土していない。時期はAMS年代測定法による結果から判断して、近世以降であると考えられる。

#### SX06烟跡

遺 構 (第4・7・9図、写真図版4～6)

[位置・検出状況] C区東側、ⅦA3nグリッドに位置する。検出面は暗褐色土質シルト (XI層) 上第4検出面で、南北方向に連続する筋状プランとして確認した。

[面積・埋土] 検出面積は約930.0m<sup>2</sup>を測る。XI層暗褐色土を畑耕作土とする畝間に交互に堆積した鈍い黄砂と黒褐色砂が筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。畝の長軸方向は(N-54°-E)で、畝幅は54.2cm、畝の高さは11.0cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[時期] 遺物は出土していない。時期はAMS年代測定法による結果から判断して、近世以降であると考えられる。

#### SX07烟跡

遺 構 (第3・7図、写真図版4)

[位置・検出状況] B区南側、ⅥA18nグリッドに位置する。検出面は鈍い黄褐色シルト (XI層) 上第4検出面で、東西方向に連続する筋状プランとして確認した。

[面積・埋土] 検出面積は約64.8m<sup>2</sup>を測る。XI層鈍い黄褐色シルトを畑耕作土とする畝間に堆積した鈍い黄褐色砂質シルトが筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。畝の長軸方向は(N-88°-E)で、畝幅は86.7cm、畝の高さは残存値で5.0cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[時期] 遺物は出土していない。時期はAMS年代測定法による結果から判断して、近世以降であると考えられる。

#### SX08烟跡

遺 構 (第3・7図、写真図版4)

[位置・検出状況] B区南側、ⅥA19qグリッドに位置する。検出面は鈍い黄褐色シルト (XI層) 上第4検出面で、東西方向に連続する筋状プランとして確認した。

[面積・埋土] 検出面積は約46.4m<sup>2</sup>を測る。XI層鈍い黄褐色シルトを畑耕作土とする畝間に堆積した鈍い黄褐色砂が筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。畝の長軸方向は(N-8°-W)で、畝幅は70.0cm、畝の高さは残存値で6.0cmを測る。断面形は皿形を呈する。

[時期] 遺物は出土していない。時期はAMS年代測定法による結果から判断して、近世以降であると考えられる。

### SX09烟跡

遺 構 (2・6図、写真図版3)

[位置・検出状況] C区西側、ⅦA5aグリッドに位置する。検出面は黄褐色砂質シルト (IX～X層) 上第3検出面で、南北方向に連続する筋状プランとして確認した。

[面積・埋土] 検出面積は約247.0m<sup>2</sup>を測る。IX～X層相当の黄褐色砂質シルトを畑耕作土とする畝間に堆積した灰黄褐色砂が筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。畝の長軸方向は(N-13°-W)で、畝幅は53.8cm、畝の高さは12.0cmを測る。断面形は圓形を呈する。

[時期] 遺物は出土していない。時期はAMS年代測定法による結果から判断して、近世以降であると考えられる。

### SX10烟跡

遺 構 (第4図、写真図版5)

[位置・検出状況] C区中央部、ⅧA1kグリッドに位置する。検出面は暗褐色砂質シルト (XI層) 上第4検出面で、南北方向に連続する筋状プランとして確認した。

[面積・埋土] 検出面積は約838.1m<sup>2</sup>を測る。XI層暗褐色砂質シルトを畑耕作土とする畝間に互層に堆積した鈍い黄砂と黒褐色砂が筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。畝の長軸方向は(N-10°-W)で、畝幅は55.1cmを測る。

[時期] 遺物は出土していない。時期はAMS年代測定法による結果から判断して、近世以降であると考えられる。

### SX11烟跡

遺 構 (第4図)

[位置・検出状況] C区西側、ⅧA3bグリッドに位置する。検出面は暗褐色砂質シルト (XI層) 上第4検出面で、南北方向に連続する筋状プランとして確認した。

[面積・埋土] 検出面積は約189.6m<sup>2</sup>を測る。XI層暗褐色砂質シルトを畑耕作土とする畝間に互層に堆積した鈍い黄砂と黒褐色砂が筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。畝の長軸方向は(N-28°-W)で、畝幅は55.1cmを測る。

[時期] 遺物は出土していない。時期はAMS年代測定法による結果から判断して、近世以降であると考えられる。

### SD01溝跡

遺 構 (第10・12図、写真図版7)

[位置・検出状況] A区北東側、VB24fグリッドに位置する。検出面はXI層で、暗褐色の溝状プランとして確認した。南端部は調査区域外(南東)へ延びる。

[規模・形状] 平面形は直線状に長い溝状を呈する。規模は長さ約9m、溝幅28～55cm前後、深さ7～15cm前後を測る。

[埋土] 暗褐色シルトの単層である。

**遺 物**

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

**SD02溝跡**

**遺 構**（第10・12図、写真図版7）

〔位置・検出状況〕C区中央部南側、ⅧA6jグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、にぶい黄褐色の溝状プランとして確認した。

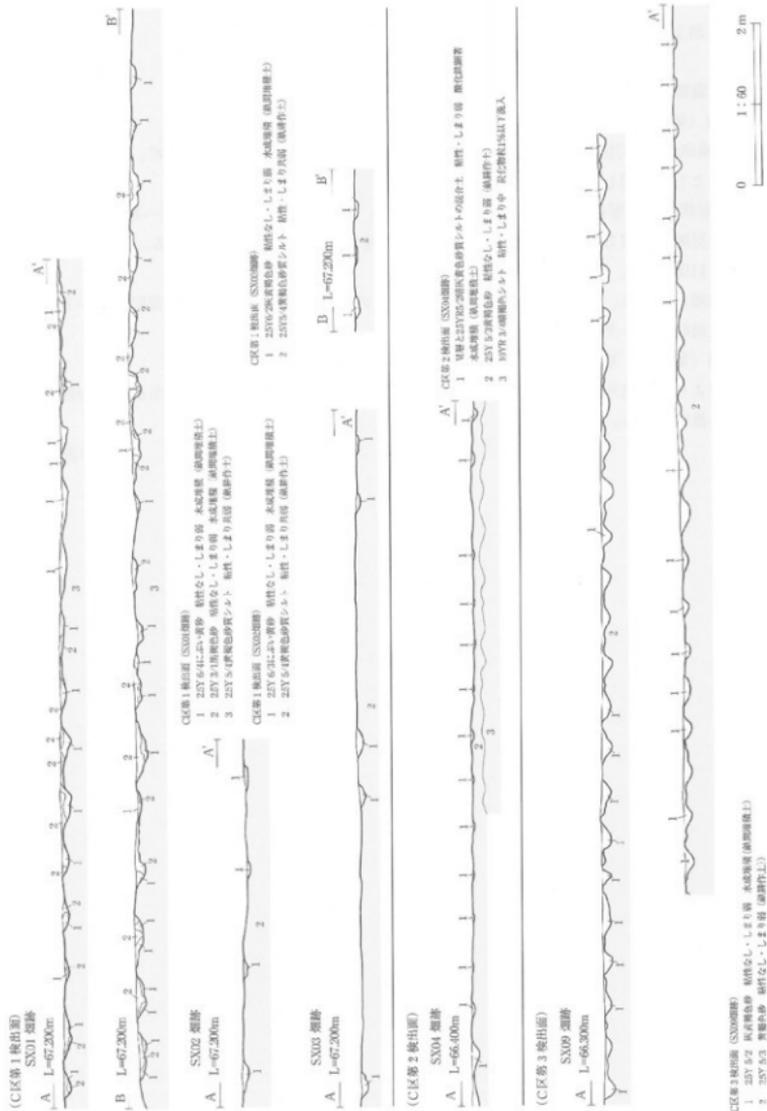
〔規模・形状〕平面形は直線状に長い溝状を呈する。ⅧA1mグリッドから南西へ延び、ⅧA4iグリッドで直角気味に南東方向へ向きを変えている。その後東端部は調査区外へ延びる。規模は全長約23m、溝幅90～110cm前後、深さ8～22cm前後を測る。

〔埋土〕2層からなる。上位は褐色ブロックと灰白色ブロック少量を含むにぶい黄褐色シルト、下位はにぶい黄褐色ブロックを含む褐色シルトである。

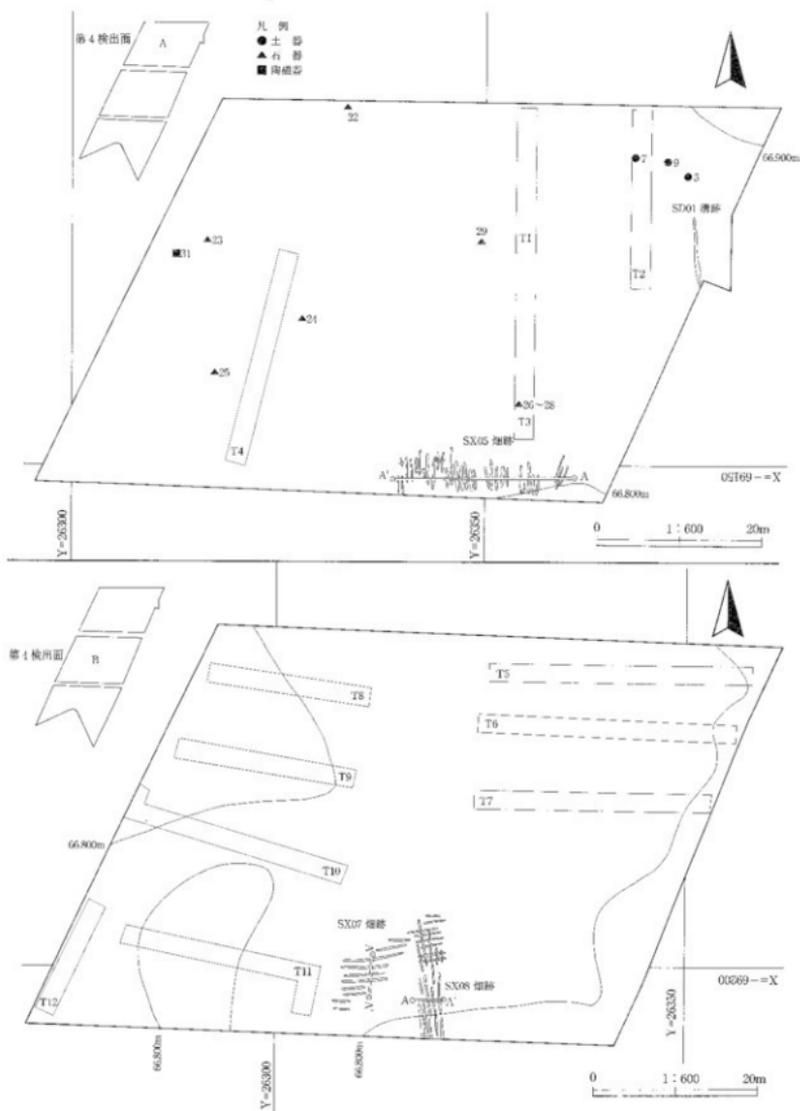
**遺 構**（第11図、写真図版2）

埋土中より磁器皿片1点と棒状鉄製品1点が出土した。磁器の製作年代から、本遺構は19世紀以降に属すると推察される。

（窓岩 伸吾）



第2図 C区第1～3検出面検出遺構 (SX01-04・09)



第3図 A・B区第4検出面検出遺構



第4図 C区第4検出面検出遺構

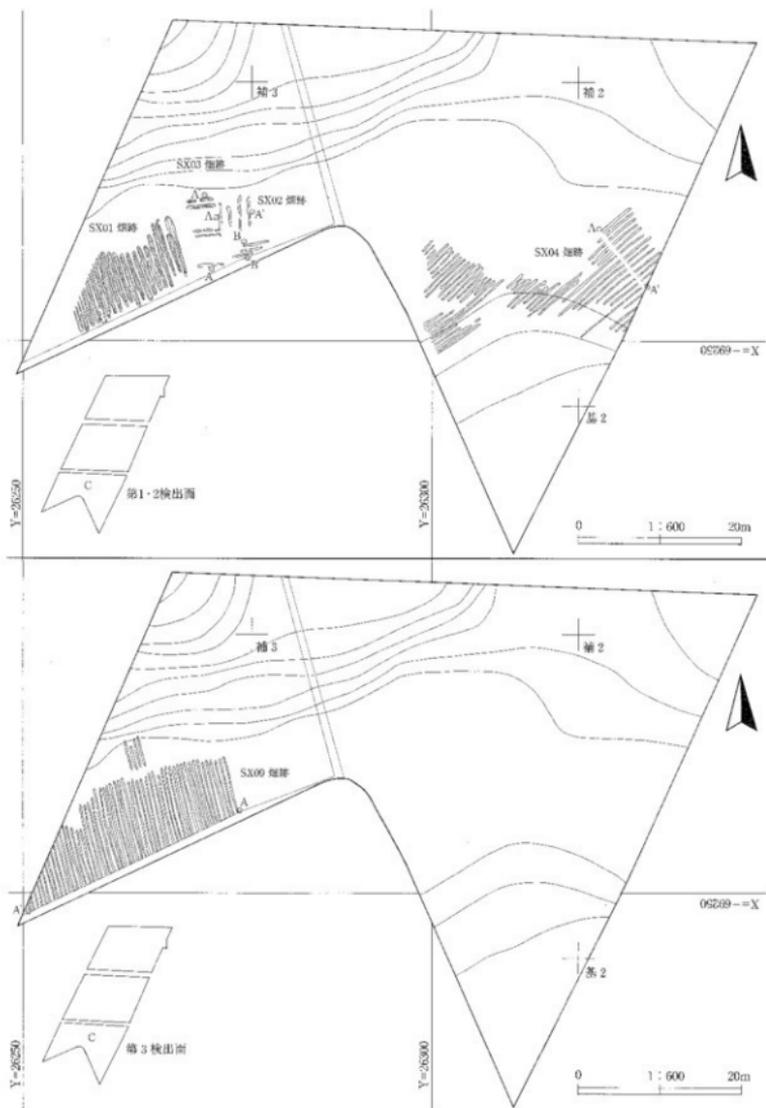


第5図 超音波計測部位模式図

第1表 燧跡計測値一覧

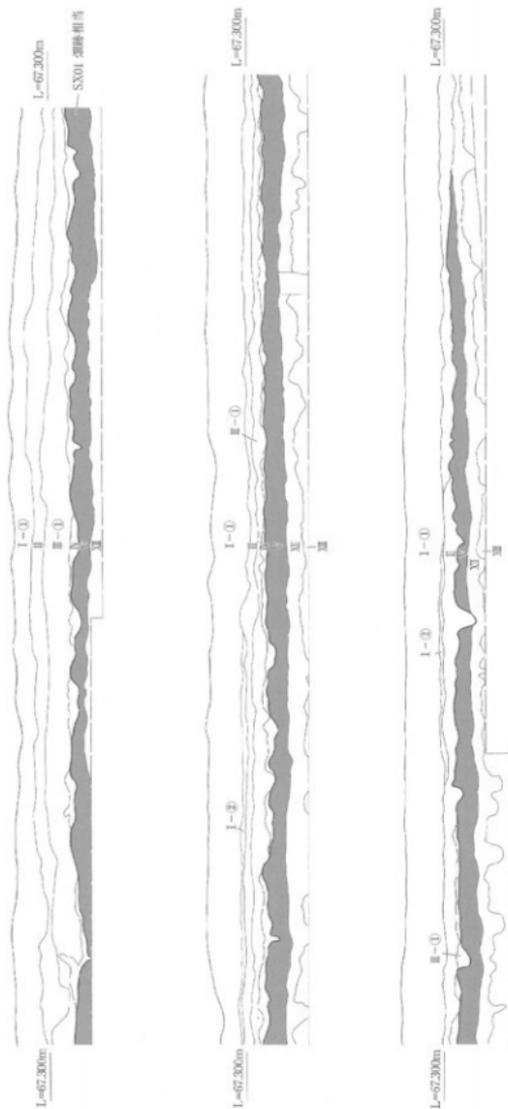
遺構名	区域	検出面	波の反転方向	波の幅 (cm)	波の高さ (cm)	面積 (m <sup>2</sup> )
SX01燧跡	C区西側	第1検出面 (V層)	N - 18° - W	76.3	13.0	103.9
SX02燧跡	C区西側	第1検出面 (V層)	N - 4° - W	127.7	-8.0	17.9
SX03燧跡	C区中央部	第1検出面 (V層)	N - 79° - E	63.0	-8.0	33.8
SX04燧跡	C区中央部	第2検出面 (VII層)	N - 49° - E	72.5	10.0	261.8
SX05燧跡	A区南東側	第4検出面 (XI層)	N - 2° - W	56.2	-9.0	77.2
SX06燧跡	C区東側	第4検出面 (XI層)	N - 54° - E	54.2	11.0	930.0
SX07燧跡	B区南側	第1検出面 (XI層)	N - 88° - E	86.7	-5.0	64.8
SX08燧跡	B区南側	第4検出面 (XI層)	N - 8° - W	70.0	-6.0	46.4
SX09燧跡	C区西側	第3検出面 (IX-X層)	N - 13° - W	53.8	12.0	247.0
SX10燧跡	C区中央部	第4検出面 (XI層)	N - 10° - W	55.7	-	838.1
SX11燧跡	C区西側	第4検出面 (XI層)	N - 28° - W	55.1	-	189.6

※ -記号は残存値を表す



第6圖 C區第1~3檢出面檢出道構





- IV 107R5に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無
- V 107R4に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無
- VI 107R3に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無
- VII 107R2に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無
- VIII 107R1に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無
- IX 107R0に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無
- X 107R5に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無
- XI 107R4に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無
- XII 107R3に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無
- XIII 107R2に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無
- XIV 107R1に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無
- XV 107R0に於いて深褐色砂質シルト、粘性・しまり共無

第8図 C区西側メインセクション

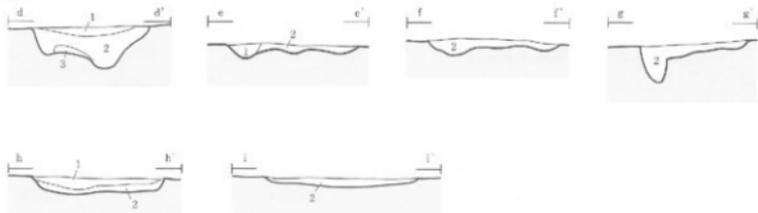


SD01



SD01 (a-a' b-b' c-c' 共通)  
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや強・しまりやや弱

SD02



SD02 (d-d' e-e' f-f' g-g' h-h' i-i' 共通)

- 1 10YR4/3に多い黄褐色シルト 粘性・しまり共中 10YR4/4褐色ブロック30%  
10YR8/1灰白色ブロック10%  
2 10YR4/4褐色シルト 粘性やや強・しまり中 10YR4/3に多い黄褐色ブロック30%  
3 10YR4/4褐色シルト 粘性やや強・しまり中



第10図 SD01・02溝跡

### 3 遺構外の出土遺物

下通遺跡の調査で出土した遺物の全量は32×42cm、深さ10cmのコンテナで1箱に満たない。また、その殆どが遺構外からの出土であり、遺構内のものとしてはSD02溝跡埋土より陶磁器片が1点と、SX03畑跡の畝間堆積土より棒状鉄製品が2点出土したに過ぎない。

土師器・須恵器（第11図、写真図版8・9）

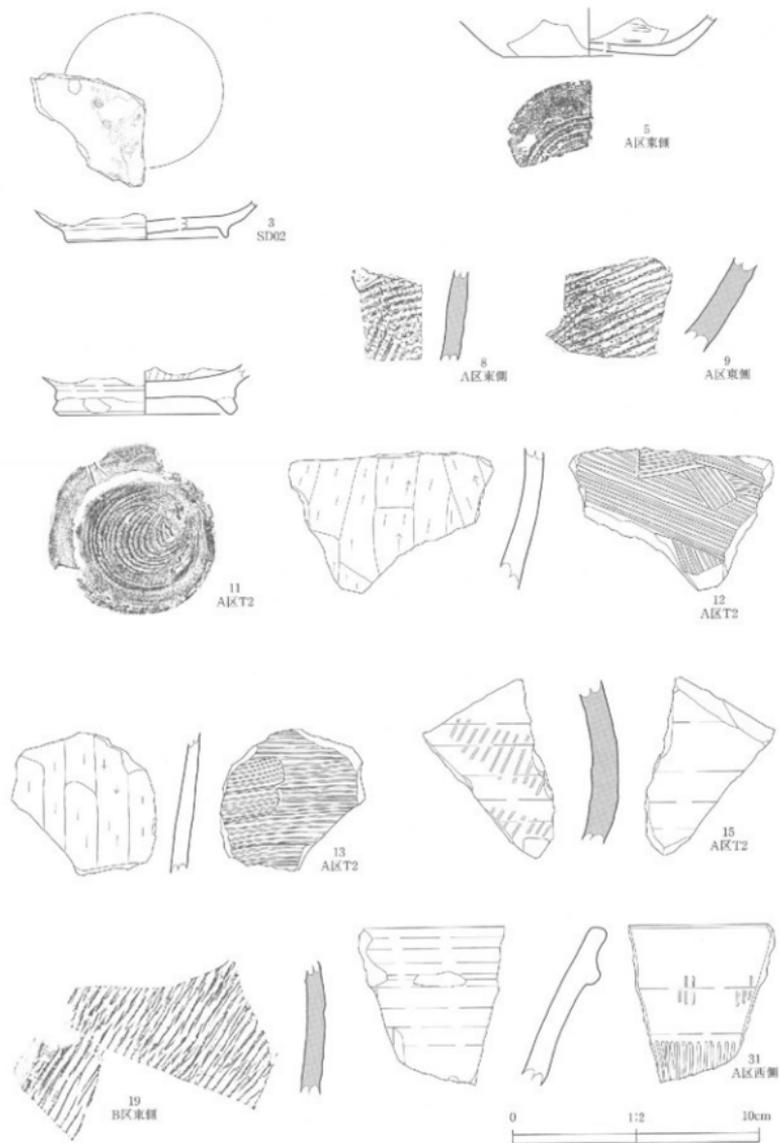
17点を掲載した。5は土師器坏片で、内外共にロクロナデ調整される。11は土師器の高台付坏の底部片で、外面はロクロナデ調整、内面はミガキ+黒色処理される。7、12～14は土師器甕である。12、13は外面ケズリ、内面ハケメ調整される。15は須恵器甕壺類の体部片で、タタキ成形の後ロクロナデ調整、その後ナデ～ケズリ調整されるものと思われる。19は大甕片で、外面平行タタキ、内面アテグ痕を持つ。陶磁器（第11図、写真図版8・9）

7点を掲載した。31は19世紀以降の陶器の播鉢である。32、34は陶器の碗で、33は磁器碗である。これらはいずれも18世紀代の肥前産のものと推測される。35は磁器の型打皿、36は磁器の湯飲みである。製作年代および産地は18～19世紀代の肥前産と推測される。

石器（第11図、写真図版8・9）

A区3層を中心として9点が出土した。いずれも剥片である。石材として使用されているのは頁岩が最も多く（6点）、次いで赤色頁岩（2点）、玉ずい（1点）となっている。産地は奥羽山脈である。その他（第11図、写真図版8・9）

37はA区西側3層より出土した土製品で、体部に渦巻き状の線刻を持つものである。38はA区西側3層より出土した1銭硬貨である。



第11図 遺構内・遺構外出土遺物





## 4 分析・鑑定

## (1) 下通遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

## 1. 試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	Ⅲ層(黄褐色粘土質シルト)	炭化物	酸-7#処理 酸処理	AMS

※1) AMSは加速器質量分析法: Accelerator Mass Spectrometry

## 2. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代(西暦)
No.1	197410	250 ± 40	-27.3	210 ± 40	交点: cal AD 1660 1σ: cal AD 1650 ~ 1680, cal AD 1770 ~ 1800, cal AD 1940 ~ 1950 2σ: cal AD 1640 ~ 1690, cal AD 1730 ~ 1810, cal AD 1920 ~ 1950

1) <sup>14</sup>C年代測定値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2)  $\delta^{13}C$ 測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)を表す。

3) 補正<sup>14</sup>C年代値

$\delta^{13}C$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

## 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動を校正することにより算出した年代(西暦)。calはcalibrationした年代値であることを示す。校正には、年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正<sup>14</sup>C年代値と暦年代校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ(68%確率)と2σ(95%確率)は、補正<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

## (2) 植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水出跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

ここでは、下通遺跡において検出された畑跡における農耕について、植物珪酸体分析より検討を行う。

### 2) 試料

分析試料は、SX04畑跡畝間堆積土 (暗灰黄色砂質シルト, VI層) とSX06畑跡耕作土及び畝間堆積土 (暗褐色シルト, X~XI層) において採取された堆積物 6点である。SX04畑跡覆土では試料 6の1点SX06畑跡では南側より試料 1 (畝部)、試料 2 (畝間部)、試料 3 (畝部)、試料 4 (畝間部)、試料 5 (畝部) の 5点である。

### 3) 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- ① 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- ② 試料約 1gに直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加  
(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- ③ 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- ④ 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- ⑤ 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- ⑥ 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- ⑦ 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞 (葉身にのみ形成される) に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料 1g中の植物珪酸体個数 (試料 1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める) に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1個あたりの植物体乾重, 単位: 10<sup>-5</sup>g) を乗じて、単位面積で層厚 1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ススキ属 (ススキ) は1.24、ネザサ節は0.48である。

### 4) 結果

分析試料から検出された植物珪酸体は、イネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、シバ属、タケ亜科 (ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、その他) および未分類である。これらの分類群にっ

いて定量を行い、その結果を表1と図1に示す。以下に、植物珪酸体の検出状況を記す。

イネは試料2と試料3で検出されているが、植物珪酸体密度は低い値である。ヒエ属型は試料2(畝間)のみで検出されているが、これも低い密度である。ヨシ属は試料1～試料5で検出されているが、いずれも低い密度である。ススキ属型はすべての試料より検出されている。試料1と試料2で比較的高い密度である。シバ属は試料1～試料5で検出されている。いずれも低い密度である。タケ亜科ではクマザサ属型がすべての試料で検出されている。試料5では比較的高い密度である。ネザサ節型は試料1、試料2、試料4および試料5で、ミヤコザサ節型は試料1、試料2、試料4、試料5および試料6でそれぞれ検出されている。植物珪酸体密度はいずれも低い値である。

#### 5) 下通遺跡における農耕

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジユズグマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型(モロコシが含まれる)、トウモロコシ属型(トウモロコシが含まれる)などがある。当該遺構ではこのうちのイネとヒエ属型の2分類群が検出された。イネは畝間部の試料2と畝部の試料3で、ヒエ属型は畝間部の試料2で検出されている。植物珪酸体密度はいずれも1,000個/g未満と低い値である。ただし、畑作物としてイネやヒエを栽培する場合、連作障害を回避するために同じ圃場において数年間は同一作物の栽培は行われない。したがって、耕作土中の植物珪酸体密度は水田のように高密度とならないのが通例である。こうしたことから、当該遺構においてイネおよびヒエが栽培されていた可能性を完全に否定することはできない。

これら以外では栽培植物に由来する植物珪酸体は確認できなかった。よって、イネやヒエ以外の作物が栽培された可能性については不明である。ただし、イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

2 面目畑跡覆土については、ススキ属型、クマザサ属型およびミヤコザサ節型が検出されたものの、いずれも密度は高くなく、これといった特徴は認められない。

#### 6) まとめ

下通遺跡において検出された畑跡において植物珪酸体分析を行った。その結果、3 面目の畝間と畝の一部でイネとヒエ属型の植物珪酸体が検出されたが低密度であり、両作物がここで栽培されていたことを積極的に支持することはできなかった。また、これら以外の作物が栽培された痕跡は認められなかった。

#### 文献

- 杉山貞二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.  
 杉山貞二 (2000) 植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学, 同成社, p.189-213.  
 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学, 9, p.15-29.  
 藤原宏志・杉山貞二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田地の探索―。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

### (3) 下通遺跡における花粉分析

#### 1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

ここでは、下通遺跡における農耕と植生の復元を目的に花粉分析を行う。

#### 2) 試料

分析試料は、3面日畑跡より採取された堆積物で、試料2（飲間部）と試料5（畝部）の計2点である。

#### 3) 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- ① 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- ② 水洗した後、0.5mmの篩で糞などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- ③ 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- ④ 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- ⑤ 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。
- ⑥ 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

#### 4) 結果

##### ① 分類群

出現した分類群は、樹木花粉1、草本花粉1、シダ植物胞子2形態の計4である。これらの学名と和名および粒数を表1に示す。検出された分類群は写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

ハンノキ属

〔草本花粉〕

ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、二条溝胞子

② 花粉群集の特徴

- ・試料2では樹木花粉のハンノキ属、草本花粉のヨモギ属、シダ植物胞子のシダ植物単条溝胞子、シダ植物二条溝胞子がわずかに検出された。
- ・試料5ではシダ植物胞子のシダ植物単条溝胞子だけがわずかに検出された。

5) 花粉分析から推定される植生と環境

分析の結果、花粉はほとんど検出されず、栽培種を示唆するような花粉も検出されなかった。よって、花粉分析からは農耕について言及することはできない。下位の層層で検出された炭化物の放射性炭素年代測定結果によると最も古いところでA.D.1640~1690 (2 $\sigma$ )の暦年代が得られており(前項(1)参照)、近世以降の痕跡と考えられる。よって、乾燥あるいは乾湿を繰り返すことで花粉などの有機質遺体が分解されるような堆積環境であったと考えられる。わずかに検出されたヨモギ属は、日当たりの良い乾燥地に生育する人里雑草で、シダ植物胞子とともに畑の周辺に生育していたと思われる。なお、寄生虫卵も検出されなかったが、花粉よりも分解されやすいことから、人糞施肥等の可能性については不明である。

参考文献

- 中村純 (1973) 花粉分析, 古今書院, p.82-110.  
金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.  
鳥倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.  
中村純 (1980) 日本産花粉の標識, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.  
中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究, 13, p.187-193.  
中村純 (1977) 稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

表1 岩手県、下通遺跡の植物珪酸体分析結果

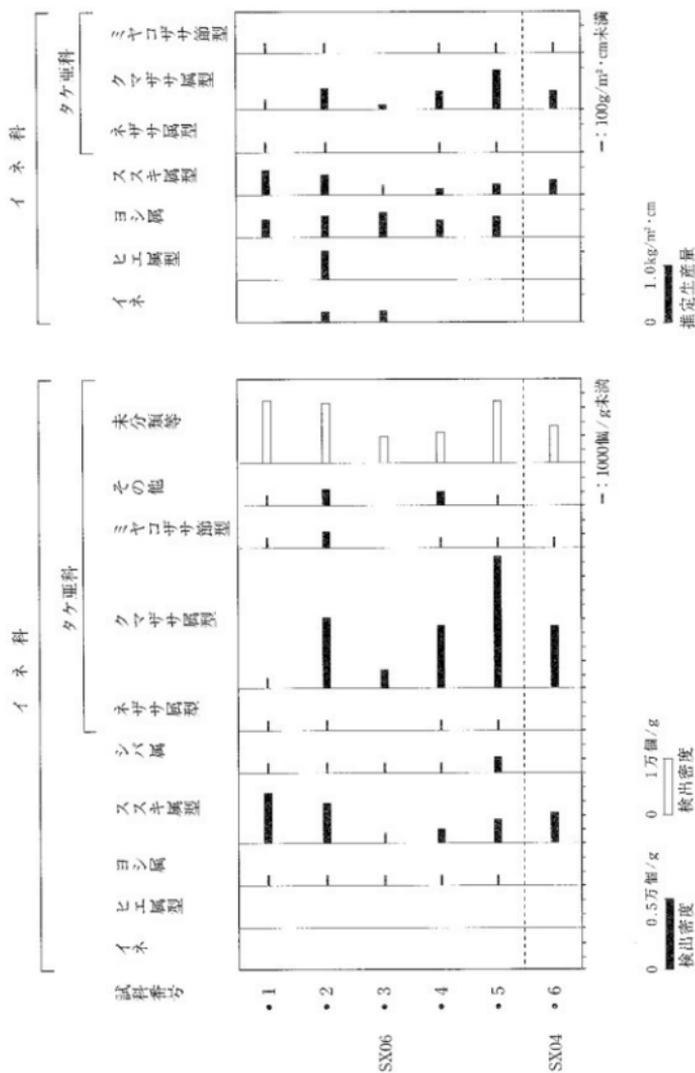
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 (和名・学名)	属 位	SX06				SX04	
		1	2	3	4	5	6
イネ科	<i>Gramineae (Grasses)</i>						
イネ	<i>Oryza sativa (domestic rice)</i>		6	7			
ヒエ属型	<i>Echinochloa type</i>		6				
ヨシ属	<i>Phragmites (reed)</i>	5	6	7	5	6	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	35	28	7	10	17	22
シバ属	<i>Zoysia</i>	5	6	7	5	11	
タケ亜科	<i>Bambusoideae (Bamboo)</i>						
ネザサ節型	<i>Sasa (except Miyakozasa) type</i>	5	6		5	6	
クマザサ属型	<i>Sasa (except Miyakozasa) type</i>	5	50	13	45	94	45
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Miyakozasa</i>	5	11		5	6	7
その他	<i>Others</i>	5	11		10	6	
未分類等	<i>Unknown</i>	110	105	47	55	111	67
植物珪酸体総数		175	231	87	140	255	142

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

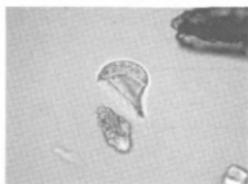
イネ	<i>Oryza sativa (domestic rice)</i>	0.16	0.20				
ヒエ属型	<i>Echinochloa type</i>		0.46				
ヨシ属	<i>Phragmites (reed)</i>	0.32	0.35	0.42	0.32	0.35	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.43	0.34	0.08	0.12	0.21	0.28
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa type</i>	0.02	0.03				
クマザサ属型	<i>Sasa (except Miyakozasa) type</i>	0.04	0.37	0.10	0.34	0.71	0.34
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Miyakozasa</i>	0.02	0.03		0.02	0.02	0.02

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

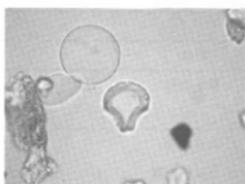


図版 1 3面・2面における植物珪酸体分析結果

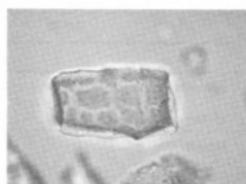
下通遺跡の植物珪酸体の顕微鏡写真



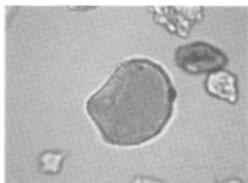
イネ



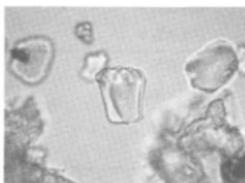
イネ



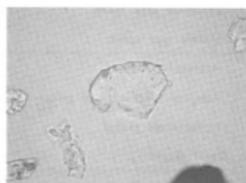
ヒエ属



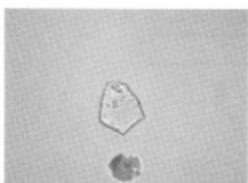
ヨシ属



ネザサ節型



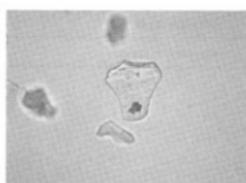
クマザサ属型



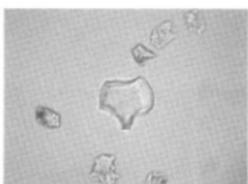
ミヤコザサ節型



ススキ属型



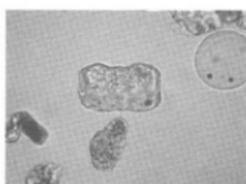
ススキ属型



シバ属



シバ属



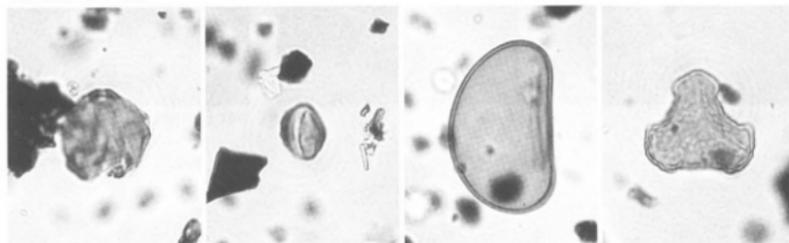
不明 (アワ類似)

— 50 μm

表1 花巻市、下通遺跡における花粉分析結果

分類群		数	
学名	和名	2	5
Arboreal pollen	樹木花粉		
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	
-----			
Nonarboreal pollen	草本花粉		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	4	
-----			
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	8	2
Trilate type spore	三条溝胞子	1	
-----			
Arboreal pollen	樹木花粉	1	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	4	0
Total pollen	花粉総数	5	0
-----			
Unknown pollen	未同定花粉	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	9	2
-----			
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)
Digestion remnants	明らかな消化残渣	(-)	(-)

下通遺跡の花粉・胞子



1 ハンノキ属

2 ヨモギ属

3 シダ植物単条溝胞子

4 シダ植物三条溝胞子

— 10 μm

## 5 ま と め

今回の調査で、下通遺跡が近世の生産域であることが判明した。遺跡は北上川東岸の沖積地、および沖積地内の微高地上に立地する。標高は67m前後、現北上川との比高は4.5m（年間平均水位より算出）で、洪水による増水時には容易に冠水した環境にあったといえる。調査区の現況は水田造成による地形改変により一様に平坦な景観を呈すが、旧地形は北側が高く、中央部から南側にかけて低く傾斜している。南側C区に観察されるⅢ～Ⅹ層は北側A区・中央部B区では削平により消失しており、Ⅱ層の下位にⅪ層以下が堆積する。また、堆積土壌はすべて川砂による水成堆積層で、各層でラミナが発達している様子が認められた。これは本遺跡が洪水の常襲地帯に位置するからに他ならず、「高木村の歴史」（佐藤昭孝著）によると、当該地区の大洪水の記録は18世紀代の宝暦4年に遡り、近年では昭和22年、翌23年のキャサリン・アイオン台風に至るまで、実に頻繁に見受けられる。

調査区に遺構の作られた時期は3期あり、C区第1～3検出面（A・B区においては未確認）、ABC区第4検出面から同一方向に連続する筋状プランが合計11箇所検出されている。これらは洪水砂で覆われており、規模・形状から判断して畑の畝もしくは畝間ではないかと推測された。遺構の範囲は、残存状況にもよるが1区画が17.9～93.0m<sup>2</sup>ほどの大きさを呈し、連続する筋の方向にはほぼ南-北を軸とするものと、東-西（南西-北東）を軸とするものがある。畝間・畝間距離は54～128cm前後を測るもので、54～56cm前後、70～73cm前後に集中が見られるなど一定の規格性が見受けられる。

本遺構の性格を明らかにする為に、SX04・SX06の耕作上及び畝間堆積上に相当するⅢ層・Ⅹ層・Ⅺ層を対象に土壌の理科学分析（プラントオパール分析、花粉分析）を実施した。その結果、プラントオパール分析においてはSX06畑跡の畝間と耕作土の一部に相当する部分でイネとヒエ属型の植物珪酸体が検出された。しかし密度は低く、両作物の栽培を積極的に支持する内容と言えるものではなかった。また、これ以外の作物が栽培された痕跡も認められず、同じく良好な結果は得られていない。花粉分析の結果においても、花粉がほとんど検出されず、栽培種を示唆するような花粉も未検出となっている。しかしながら本遺構の性格を決定する上では理科学的根拠にはやや乏しいものの、考古学的見地からは規模や形状、堆積物の状況、これまでの調査事例などから畑跡とみなして大過ないと判断できるものである。更に畑跡の帰属年代を明らかにするため、これと併せて下位のⅣ層の上層中より採取した炭化物によるAMS法による放射性炭素年代測定を実施している。その結果、A.D1660（交点）の暦年代が得られており、このことから近世の畑跡と考えられる。

## 文献から見た畑

分析の結果、畑跡の年代が17世紀の江戸時代に相当する可能性が最も高いことが判明した。これよりやや時代が下がるが江戸末期の盛岡藩統治下、花巻城下の庶民の生活の様子を記した文献が残されているので引用する。

高木村は田に比べて畑が多く、その面積は大保14年（1843）の検地によると総面積八十八町九反歩（畑の一反歩は九百坪）の内、畑は五十六町三反四畝二十五歩で、内訳は上畑二十八町九反六畝五分、中畑十町六反二畝五分、下畑十三町九反二十分、下々畑二町八反五畝二十五歩であったが、北上川と猿ヶ石川の流域という地味の肥えた畑地に恵まれ、雑穀を始め野菜の産地であった。なかでも作付けの多かったのは年貢の関係もあって雑穀が大部分で、オオムギ、コムギ、大豆、小豆、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、陸稲等は「岡物」と称して多く作付けられており、その総収穫高は四百十三石一斗一升八合で、田の収穫高三百九十石二斗四升九合を上回っており、主食ともなっていた。

また、畑にはこれらの雑穀以外に「高木村年代記」「仁八家年代記」等の資料によると、野菜、果物として瓜、胡瓜、西瓜、南瓜、夕顔、大根、人参、牛蒡、芋、葱、茄子、ササゲ、胡麻、油菜、かぶ、南蛮、リンゴ、梨、桃、柿等の作物が見られ、変わったものでは紅花、薬莖、茜、大麻、煙草等も作付けられていたことがわかり、近代になって外国から入ってきた野菜以外のものは殆ど収穫していたものと考えられる。

江戸中期頃、盛岡藩では財政力を強める為、開田に力を注ぎ、藩内各地で大々的な開田が行われている。高木村でも元禄年間の開田があり、開田可能な地として残っているのは高木舟場から東十二丁目村境に至る素川原と久田野野福あたりにすぎなかったという。しかし、この時代は開田すると一反一石三斗の収穫をみられ、年貢も七割四分と厳しく取り立てられていた時代であった。しかも稲作は三年に1度は不作に見舞われ、収益性も不安定であった。これに対して畑であれば年貢も現物で四斗弱であり、米よりも負担が軽かった。このことからわかるように、当時の人々にとっては畑こそが実質的な生活の糧であり、これを失うことは死活問題であったと思われる。今回調査した畑跡の、繰り返し耕作された畑の痕跡から、洪水に見舞われながらも懸命に畑を耕した村人たちの姿が遠く偲ばれる。

(丸山 直美)

#### 引用・参考文献

- 佐藤昭孝 1987 『高木村の歴史』北上  
 徳登 健 2002 考古学による日本の雑作研究『東アジアと日本の考古学Ⅳ 牛蒡』：119～150、同成社  
 日本考古学研究会 2000年度産見島大会実行委員編 2000 『はたけの考古学』  
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 『三ッ木風沼遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第261集  
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横塚中村遺跡』  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第319集  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1992  
 『上鬼舞Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第160集  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000  
 『大向上平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第335集  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
 『大向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第337集  
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
 『本町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第410集

# 写 真 图 版



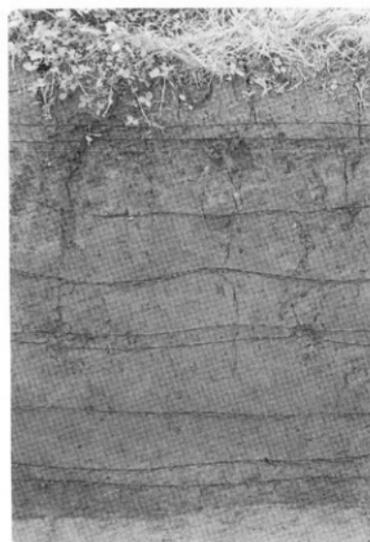
基本土層 (A区)



A区西側第1横出面



A区東側第1横出面



基本土層 (B区)

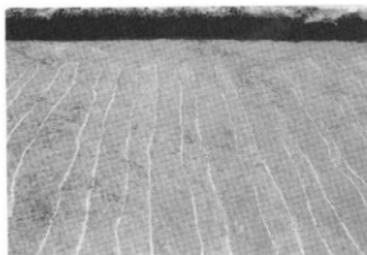


トレンチ掘削状況 (A区)



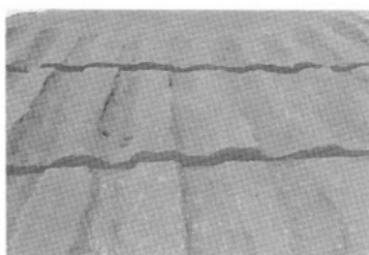
トレンチ掘削状況 (B区)

写真図版 1 基本土層・トレンチ掘削状況



SX01烟跡

横出

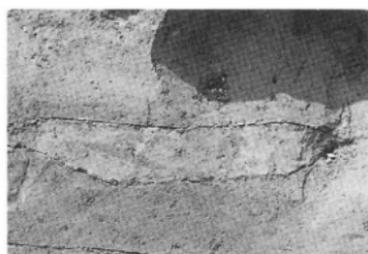


完照



SX01烟跡

断面



段間ラミナ確認状況

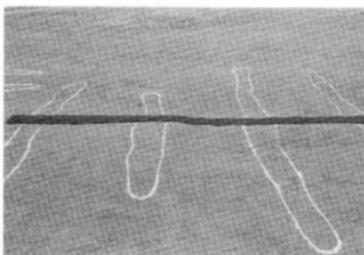


SX02・03烟跡

横出



完照



SX02烟跡

断面



SX03烟跡

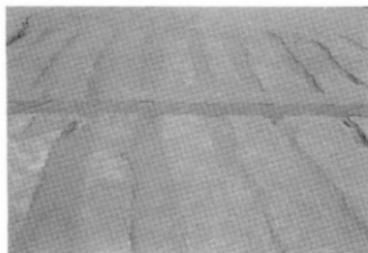
断面

写真図版2 SX01~03烟跡 (C区第1検出面)

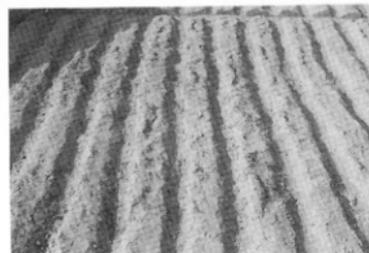


SX04畑跡

横出



断面

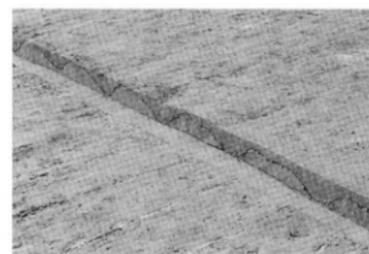


SX09畑跡

完掘



作業風景



SX09畑跡

断面①



断面②



SX05畑跡

横出



断面

写真図版3 SX04・09・05畑跡(第2~4横出面)



SX07・08烟跡

横出①



横出②



SX07・08烟跡

断面①



断面②



SX06烟跡

横出

写真図版4 SX07・08・06烟跡（第4横出面）



SX10・06畑跡

完撮①



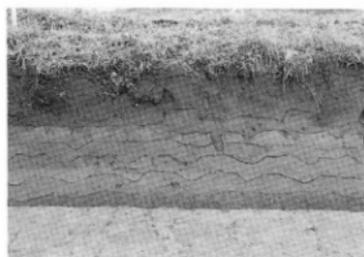
SX10・06畑跡

完撮②

写真図版5 SX10・06畑跡 (第4検出面)



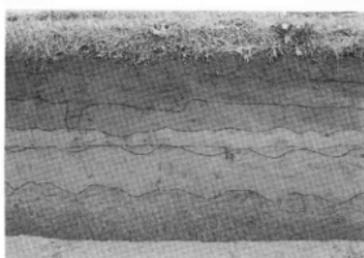
断面① (東から)



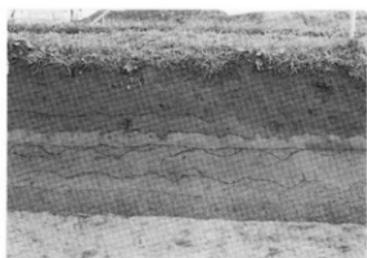
断面② (東から)



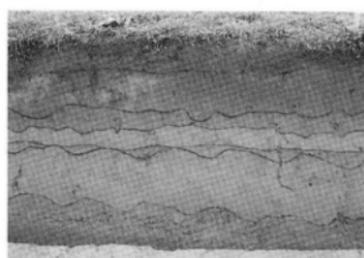
断面③ (東から)



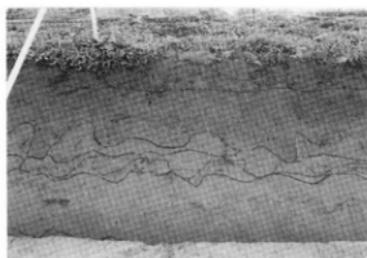
断面④ (東から)



断面⑤ (東から)



断面⑥ (東から)



断面⑦ (東から)



土壌分析サンプリング状況

写真図版6 SX04・06畑跡、サンプリング状況



SD01溝跡

平面



断面①

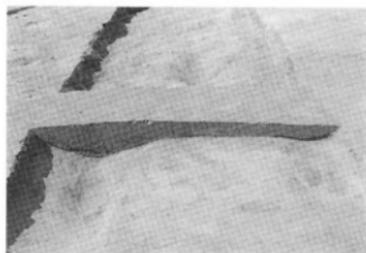


断面②

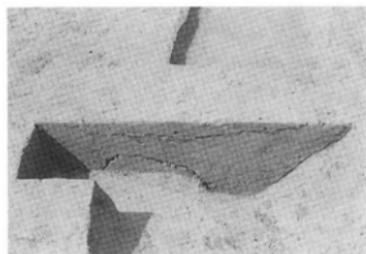


SD02溝跡

平面

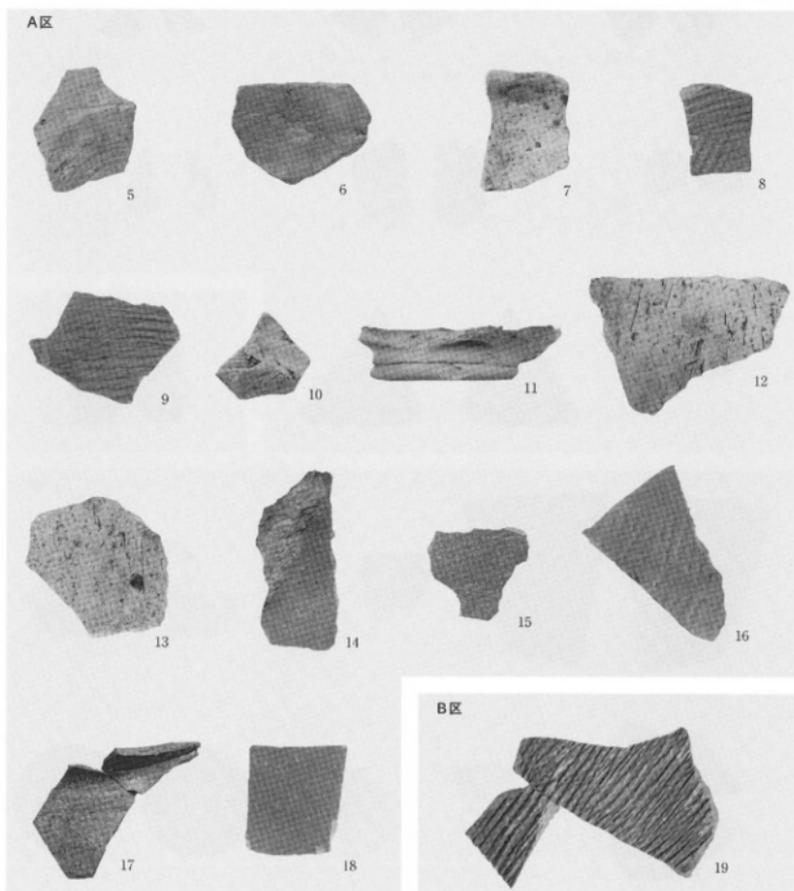
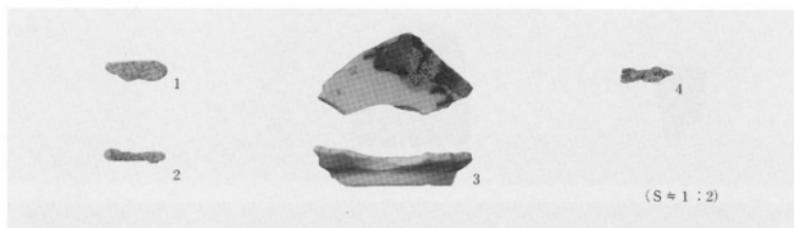


断面①

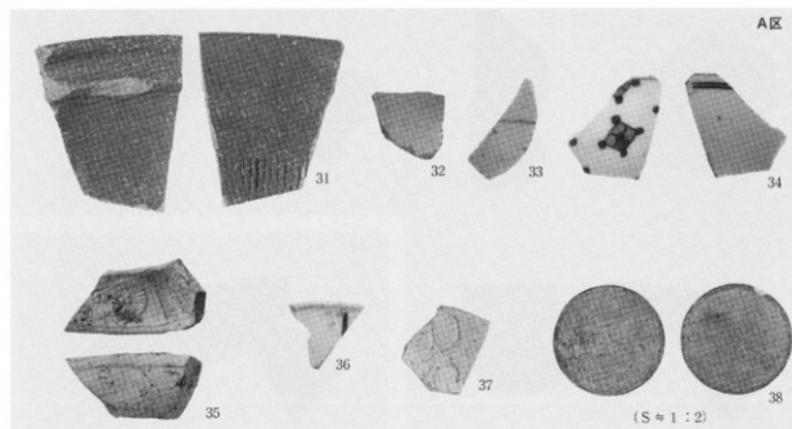
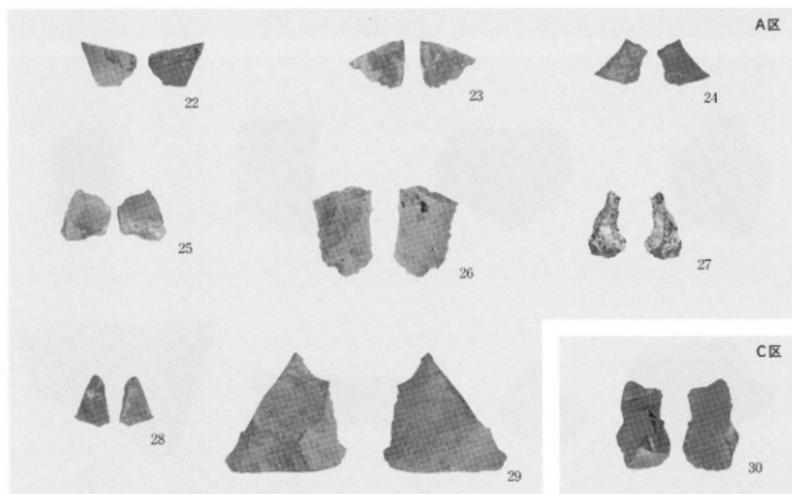
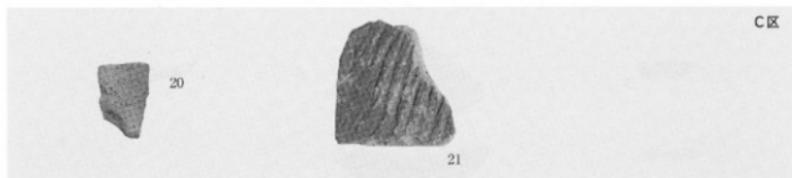


断面②

写真図版7 SD01・02溝跡



写真図版8 遺構内出土遺物・遺構外出土遺物1



写真図版9 遺構外出土遺物2

## 報告書抄録

ふりがな	たかぎなかだていせき・したどおりいせきはくつちょうさほうこくしよ							
書名	高木中館遺跡・下通遺跡発掘調査報告書							
副書名	国道4号花巻東バイパス建設関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第471集							
編著者名	丸山直美・窓岩伸吾							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2006年3月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高木中館遺跡	岩手県花巻市 高木第23地割	03205	ME36-0218	39度 22分 58秒	141度 08分 15秒	2003.08.18 ~ 2003.10.31 2004.04.13 ~ 2004.07.30	8,342m <sup>2</sup>  13,668m <sup>2</sup>	国道4号花巻 東バイパス建 設事業に伴う 緊急発掘調査
下通遺跡	岩手県花巻市 高木第26地割 86ほか	03205	MF36-0225	39度 22分 36秒	141度 08分 22秒	2004.07.16 ~ 2004.10.01	11,400m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高木中館遺跡	集落跡	平安時代  中世以降  時期不明	竪穴住居跡10棟 竪穴住居状遺構1棟 土坑2基 掘立柱建物跡7棟 溝跡12条 カマド状遺構1基 獣骨出土土坑1基 土坑55基 柱穴状小ピット54個		土師器 須恵器 鉄製品(小刀、鉄鏝) 陶磁器(白磁片) 石器・石製品 古銭 炭化種子		* 底部に繊維痕を有する土師器が多数出土(S104竪穴住居跡) * 炭化種子が纏まって出土(SX01竪穴住居状遺構) * 白磁四耳瓷片と焼骨片鉄製品などが出土(SK02土坑)	
下通遺跡	散布地 (耕地)	近代	畑跡11区画 溝跡2条		土師器・須恵器 陶磁器 鉄製品・古銭			

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第471集

## 高木中館遺跡・下通遺跡発掘調査報告書

国道4号花巻東バイパス建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成18年3月8日

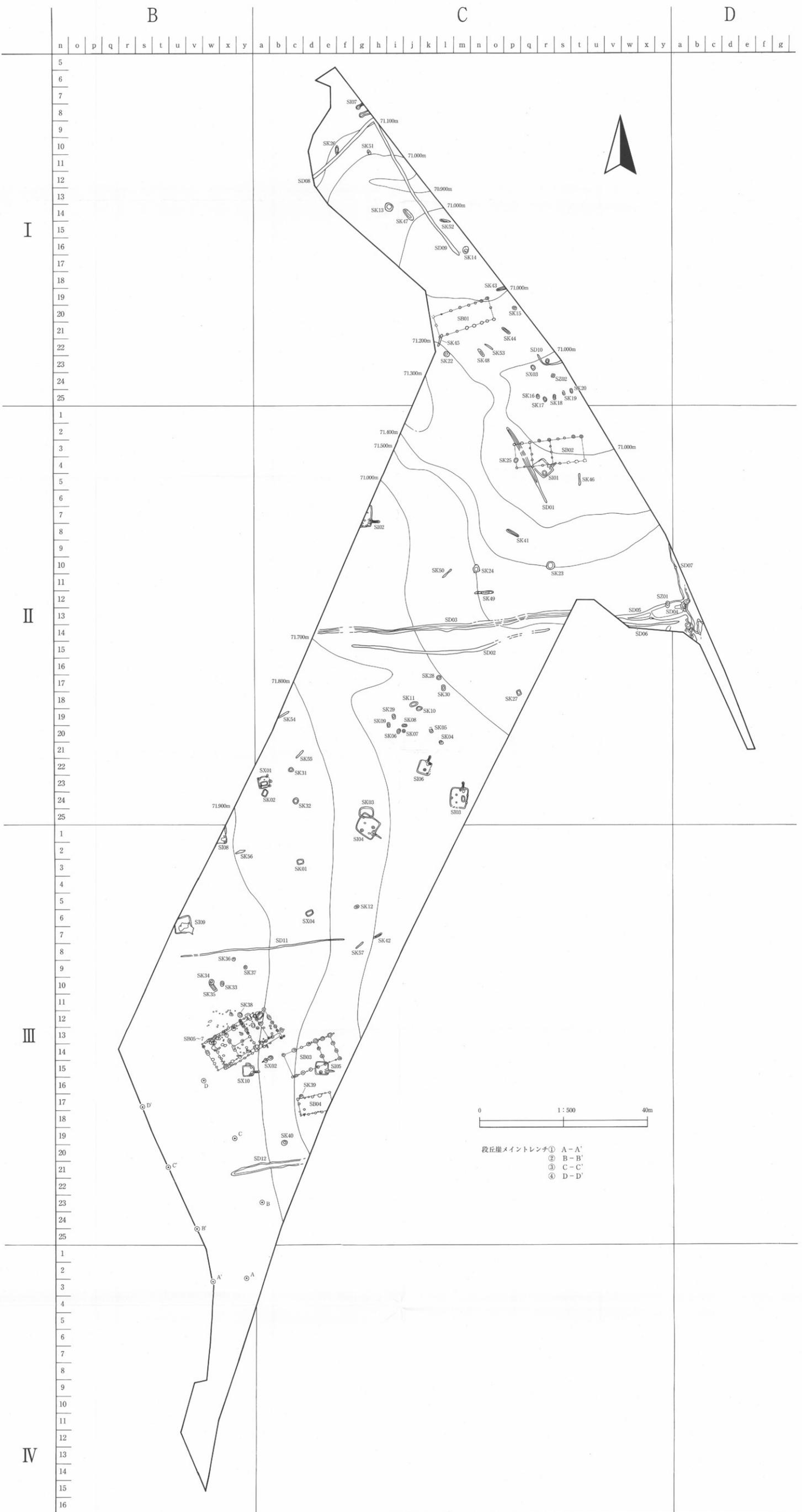
発行 平成18年3月14日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地  
電話 (019) 638-9001  
FAX (019) 638-8563

印刷 川口印刷工業株式会社  
〒020-0841 岩手県盛岡市羽場10-1-2  
電話 (019) 632-2211

---

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006



付図 高木中館遺跡遺構配置図

